

智慧と王冠の大禁書

垂平生野

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紀元前10世紀、魔術王ソロモンが存命していた頃、彼の知恵を試す為に南の果てより赴いた女王がいた。

数多の財を携えてやって来たその者は、謎掛けにて魔術王の真実を垣間見こう告げる。

——貴方に心を教えましょう、と。

※『オリ主』のタグに違和感を感じられた方は、お手数ですが私の活動報告を参照してもらえればと思います。

目次

序章 幻想女王

プロローグ

第一話 魔術王と幻想女王 I

第二話 魔術王と幻想女王 II

第三話 魔術王と幻想女王 III

第四話 魔術王と幻想女王 IV

第一章 人理継続保証機関フィニス・カルデア

第五話 カルデアにて I

第六話 カルデアにて II

第七話 カルデアにて III

第二章 永続狂気帝国セプテム

第八話 中央管制室 I

第九話 中央管制室 II

第十話 魔神フラウロス I

第十一話 魔神フラウロス II

第十二話 第二特異点、決戦

第三章 封鎖終局四海オケアノス+ α

第十三話 月見に向けて I

第十四話 月見に向けて II

第十五話 オケアノス冒険譚 I

第十六話 オケアノス冒険譚 II

第十七話 オケアノス冒険譚 III

第十八話 オケアノス冒険譚 IV

第十九話 最強の試練

168 159 151 144 136 127 118 111 103 95 88 78 69 61 53 46 27 17 9 1

第二十話 第三特異点、決着 | 179

第四章 死界魔霧都市ロンドン+α

第二十一話 ハロウィン I | 188

第二十二話 ハロウィン II | 197

第二十三話 ハロウィン III | 206

第二十四話 霧のロンディニウム | 216

第二十五話 霧中の探索 | 227

第二十六話 魔術王、降臨 | 236

第二十七話 三千年越しの運命 | 247

第五章 人理修復の旅

第二十八話 穏やかな日々 | 257

第二十九話 バレンタイン | 267

第三十話 第五特異点 | 277

第三十一話 第六特異点 | 285

第三十二話 その日の夜 | 295

最終章 冠位時間神殿ソロモン

第三十三話 獣の玉座 I | 305

第三十四話 獣の玉座 II | 313

第三十五話 獣の玉座 III | 322

第三十六話 獣の玉座 IV | 332

第三十七話 失恋 | 339

最終話 智慧と王冠の大禁書（ケブラ・ネガスト） | 347

後日談

番外編 あの日の続き | 357

マテリアル | 366

序章 幻想女王 プロローグ

——気が付いた時、意識は豪華な王宮の中に居た。美の限りを尽くした意匠と、絢爛さを表す金銀細工の調度品が数限りなく設えられたそこには、様々な姿をした家臣達らしき人々の姿がある。

そして自分は彼らを高みの玉座から見下ろす格好をしていて、そこでようやくこれが自分の過去の夢だと確信した。

「ソロモン王、もうあと少しでシバの女王がお着きになります。こちらに直接お通ししてよろしいので？」

「ああ、そこは来訪する方に任せよう。直接来るならそれも良し、こちらはいつでも準備は出来ている」

夢だというのに、嫌にはつきりと記憶に残る。だからだろうか、この時に関する思い出がありありと蘇ってきた。まずは確認とばかりに、自らの意識が宿っている男へと注意を向けた。

朗らかに喋っているのはかつて自分だった男。まるでこれから来る人物を楽しみにしているようだが、なんてことは無い。ただのフリだ。他者から自身の内面を知られないよう、また国の統治に影響が出ない様に最低限人の心を観察し、反応できるように調節していた頃。人間になった今から思えば笑い種としか思えない努力だが、この頃の自分は大真面目だったのはうつつすら覚えている。

それにしても、シバの女王か。伝承においては旧約聖書の列王記にしか記載がなく、それ故に女王の治めるシバ王国と合わせて虚構、幻想の国と主ともされている存在。

曰く、絶世の美と知恵を持ち、かのソロモン王と知恵比べやラブロマンスを繰り広げたとも言われる女性。なるほど、確かに嘘らしい伝承だ。だけど彼女は確かに存在した。その証が、これから鑑賞できる。世の歴史学者からすれば垂涎ものの夢だろう。

なんて、もう見る気満々になっている自分に辟易するが、まあ当事者ではなく傍観者としてみる分には悪くないだろう。

「シバの女王、お着きになりました！」

と、位の高い家臣が声高に告げ、神殿の扉が開け放たれた。それと同時に楽器が鳴らされ、歓迎の嵐が沸き起こる。

やって来た集団は相当な数、まず先頭に居るのは左右を護衛に守られた二十歳ほどの美女。黒いドレスの上に今でいうケープの様なものを羽織り、腰には魔術礼装らしき黒の剣を帯びている。背中の中ほどまで伸ばされた髪は波打つ亜麻色、目は炎のように赤い。

——そうだ、彼女こそはシバの女王マーキダ。その興りはある地方を騒がせていた竜の退治、そこから王に担ぎ上げられ、今で言えばエチオピアからイエメンまでの広い範囲をたった数年で国土として見せた賢王だ。その噂はかつてのソロモンも聞き及ぶもので、優れた武勇と知恵、美貌を兼ね備えた女王が居ると家臣たちの中でも専らの話題だった。

「お初にお目にかかります、ソロモン王。私はシバの女王マーキダ、ここより遠い南の地であるシバを治めております。この度はまず、我らを受け入れてくださった感謝を申し上げます」

まずは社交辞令から入った彼女の後ろには、途轍もない数の臣下と財宝が山と連なっている。金銀財宝はもちろんの事、当時は金にも勝ると言われた乳香だとか、あるいは貴重な木材の白檀だとか、他にもいろいろな荷物があつた。そのどれもが当時のシバ王国の隆盛ぶりを物語るもので、同時にそれだけの国をたったの数年足らずで築き上げて見せた女王の辣腕を知らしめる。

「遠路はるばるよく来た、良い、楽しみに下さい。私に求める知恵があるのだろうか？ 欲する何かがあるのだろうか？ 思うまま、好きに述べてみなさい。その全てに答えてみせよう」

うわあ、そんな変な声が心の中で漏れ出た。我ながら、とんだ強気態度である。いや、まあ、別に本当に強気だったのではなく、ただ空気が読めなかっただけの事だが。他人から見れば強気に過ぎると思われる発言も、ソロモンからすればただ当たり前の事実を述べているだけにすぎないのだから。

「……なるほど、私の浅慮なぞすべてお見通しでございましたか。で

は早速、本題に入らせてもらいましょう。僭越ながら、シバの女王が貴方様の知恵を試させていただきます」

王宮がざわめき、次いで静かになった。張り詰めた糸の様な緊張感が場を支配する。これより先は智者と謳われた王と女王の一騎打ち、何人たりとも立ち入ることは許されぬ知恵の決戦。夢と理解して傍観しているボクでも息が詰まりそうなほどだ。鼓動を刻む心拍音さえ大音量として聞こえそうな中で、まずは女王マーキダが一問目を投げた。

「地から湧くでも、天から降るでもない雨はなんでございましょうか？」

「それは汗だ。どのような者であろうとも、生きるために必要な所作である。次の問いを出しなさい」

「彼はあらゆる全てを破壊します。人も、心も、土地も、建物も、星々すら喰らう魔性の存在。しかし彼は見えぬ、万物は彼に囚われ、また彼を追い越せない」

「それは時間だ。誰にとつても時間とは有限で、金貨にも勝る資源である。これを上手く扱えてこそ、賢者たる者の所以だろう」

「お見事でございます」

この後も数問ばかり問いが続き、ソロモンはその全てに難なく答えを見せた。見ているこつちが緊張でどうかしそうなのに、どちらか一歩として引きはしない。というか、幾つか今の自分には分からない問題もあった。やっぱりソロモンと自分は別の存在なのだとはつきり自覚し直す。

「見事なお知恵、感服いたしました。しかし問いはまだ一つありますれば、これが最後となりましょう」

「よろしい、出してみなさい」

とうとう、最後の問いになった。シバの女王は赤い瞳で真正面からソロモンを見据え、凜とした声で問いを出した。

「ではこれが最後の問いかけです。ソロモン王、愛とは何でしょうか？」

「——愛、か」

明確にソロモンが答えに詰まった。これまで瞬時に答えを導いていた王のまさかの停滞に、周囲で固唾を飲んで見守る観衆達に僅かなどよめきが生じる。ソロモンが答えられないのも当然だ、彼は人の心を持たない。愛多き王と呼ばれ多数の妃や妾を囲ったが、真に愛した者など一人もない。自身に愛を向けられてすら何も感じないろくでなしの非人間だ。そんな男が、この質問に答えられる道理はない。無いのだが、

「……これは少々無粋な質問でしたか。申し訳ありません、問いとしてはあまりに無作法なものでした。非礼を詫びましょう」

先にマーキダの方が問いを下げた。無論の事、ソロモンは無感動で内心を動かさない。けれどそれでも、今思えば安堵したようにも思える。賢者と名高く愛多き王が愛について答えられないと周囲に知られば、信用の失墜を招く。それを思えば女王の詫びはむしろ称賛してしかるべしだ。

「……？ どうされましたかな、マーキダ女王」

何故か彼女はソロモンを見ている。まるで心の中を見透かされているかのようで、反射的にソロモンが問いを投げかけた。

「……いえ、なんでもありません。ソロモン王の見事な知恵と見識にしばし圧倒されておりました。これだけの神殿を築き上げ、民から慕われ、そのうえ比類なき知恵をお持ちになられるとは。エルサレムの民は心底幸福な方たちなのですね」

その賞賛の言葉と同時に、周囲の張り詰めた空気がほぐれた。喝采が至る所から湧き上がり、誰も彼もがこの名勝負を演出したソロモンとマーキダを褒めたたえる。ボクとしても、これが自分の過去話でなければ一緒になって叫んでいたかもしれないくらい、見事な知恵比べだった。

いいや、だけど。当人たちは薄い笑みを浮かべながら、互いを見ている。ソロモンはただ、そうするのが自然だからそうしているだけ。そこに心の動きは無い。ではマーキダは？ 彼女もまた顔は笑っているが、けれどその瞳は笑っていない。先ほどと同じ、まるでソロモンの内面を見ているかのような深謀な視線。しばらく目線を動かさ

ず、何やら考え込んでいるように思える。

——思い返せば、きつと、この時彼女は気づいていたのだ。気づいてしまったのだ。ソロモンの中に愛という感情は一切無いと。だからこの場ではソロモンを立てて、自身から問いを引き下げた。

改めてその機転と知恵、洞察力に感服するほかない。確かに今回の問答に於いて、言わずともソロモンとマーキダの格付けは決まった。けれど間違いなくこの女王もソロモンに追従するだけの知恵者、少なくとも今の自分では全く敵いそうにない相手だ。

すると、未だ歓声がエルサレムの神殿を木霊する中で、マーキダが口を開いた。その瞬間に周囲はシンと鎮まりかえり、元の静寂を取り戻す。

「非礼の詫びに、私の思う愛について答えてもよろしいでしょうか？」
「私は非礼とは思っていない。が、なんなりと述べるがいい」

「では、私は愛とは人に不可欠の感情だと定義します。この感情こそ人を人たらしめ、あるいは不可能を可能にする原動力ともなる。時には人を傷つけ、時には人を護る武器にもなる。最も不思議で矛盾して、けれど素晴らしい心の動きだと私は思っております」

「——なるほど。これで終いか？」

「ええ、知恵比べは私の完敗でございます。つきましては貴方の勝利を祝い、ここにある品物は全てソロモン王とイスラエル王国に献上させていただきます」

これだけのやり取りの後、またもや神殿内は歓喜の声に包まれた。音に聞こえたシバ王国の財宝がどつきり贈られたのだ。これは確かに喜ばしくもなる。まあソロモン自身はあまり興味が無いのだが、それでも礼に対しては礼を返すのが道理だとも知っていた。

「ならば私からも、それだけの財に負けないだけの贈り物をさせていただけよう。そして他に求めるものがあれば、望むままに与えよう」

「それなら、私もまた知恵を望みましょうか。偉大なる先達にあやかるとために」

上品に女王が笑い、つられて周囲の人々も笑いだす。賑やかにして華やかな光景、例え歴史には残っていないとしてもなお色褪せない美

しいひと時。こうして人の心を得てから見れば、それだけの感想が胸を過った。

◇

『おーい、D r. ロマン。ロマニ・アーキマン、聞こえているかい？ 聞こえているなら返事をしてくれ』

「う、うーん……その声はレオナルドかい……？　せつかく人が気持ちよく眠っていたところを」

言いながら、ロマニ・アーキマン、通称D r. ロマンはベッドの上に身を起こした。若干寝ぐせのついた栗色のポニーテールが揺れて、しわになった白衣が空調に揺らされる。寝起きの頭をどうにか起こしながら、彼は自分の腕に付けた機器に視線をやった。

『寝てたつて、忘れたのかいロマニ。今日はファースト・オーダー、記念すべき最初のレイシフト実験の日だ。それなのに医療部門のトップである君が惰眠を貪ってどうするんだい？』

「いやあ、これがボクの性分なものでね。そのあたりは君も良く知っているだろう？」

『そりゃあそうだけどき。で、そのまま二度寝としゃれこむのかな？ 所長に実験から外されたとはいえ、裏方には裏方の仕事があるんじゃないかなー？』

言われて、ロマンは腕を組んだ。今更本来の仕事場に向かったところで場の空気が緩くなると追い出されるのがオチだろうし、それならいっそのままサボり続けるのも一興だろう。幸いにして、今自分が居る部屋はしばらく空き部屋、サボるには絶好のスポットである。

これだけの事を考えるのに僅か一秒。大抵の出来事には緩く当たる癖に、楽をする方に関しては結構頭が回る。別にそれだけが本性という訳でもないのだが、ロマニ・アーキマンという男の大体の基礎はそんな感じである。

「まあ、もうひとサボりしてから行くとするよ。ボクは今回お呼びじゃないみたいだからね」

『くくっ、君のことだからそう言うと思っていたよ。よろしい、存分に惰眠を貪りたまえ。良き夢を、ロマニ君』

「……もう夢は見た後なんだけどなー」

ピツ、という短い電子音と共に通信が切れた。思えば彼、レオナルド・ダ・ヴィンチだつて色々忙しいのに、その中でわざわざ自分に時間を割いてくれたのだ。自他ともに認める天才である彼は途轍もない変人だが、同じくらい面倒見が良い所もある。

苦笑したロマンは立ち上がり、脇に置いてあるコーヒーポットのスイッチを押した。お湯が沸騰するまでの間に持ち込んでいたお菓子やケーキの類をベッドに載せて、快適なサボり時間を演出するための準備を整えていく。

その間は割と考えることが少ない。だからだろうか、気が付けば思考は先の夢に向かつていた。

「シバの女王か……今じゃ実在すら怪しまれてるけど、確かに彼女は居た。うん、懐かしいな」

今ではもう、ソロモンという男とロマニ・アーキマンという男は何の関係もない。真正銘の別人、精々がソロモン王の記憶を持った一般人と言ったところか。現状ではその記憶すらだいたい消えているのだが。

とはいえ、たまに夢で昔の光景を見ることがある。そうした記憶は今見ると中々思う所が多く、言うなれば黒歴史と栄光を同時に見せられている感じだ。やはり人間が非人間の動きを見ればツツコミどころも大量である。

その中で、今度の夢は悪くなかった。シバの女王マーキダ。今のご時世ならきつとアイドルとして頂点に立てそうな白皙の容貌は見事なものだったし、文武両道の才は伝承に語られる女王の逸話に見劣りしない。エチオピアの人間に先の光景を見せたら、きつと感激してしまいそうな気すらする。

「そう言えば、シバの女王はソロモン王の子供を孕んだんだっけか……」

思わず思い出したロマンは、なんとも言えない顔をしながら出来上がったコーヒーを手を取った。零さない様にベッドに座り、一口すする。安物とはいえ酸味と苦みが調和して心地よい。今度はコーヒー

をサイドテーブルに置いて、ケーキを一口。得も言われぬ甘味が広がり口内を包み込む。かつては味わえなかった贅沢、これだけでも生きている価値はあるものだ。

「まあ、うん、もう思い出すのはやめだやめ。彼女はボクとは何の関係も無いんだし、気にするだけ時間の無駄だ」

割り切って、だけど最後に少しだけ思考の奥に手を伸ばす。先の夢の最後、マーキダの語る愛についてだ。今生のロマンもそういったことに縁は無いが、それでも人並にどういうものかは知ることができた。だからこそ、今なら彼女をこう評せる。

「随分、ロマンチストな女王様だったんだな」

呟いたその声は、少しばかり楽しそうに弾んでいた。

第一話 魔術王と幻想女王 I

英雄には二つの種類がある。

古今東西、天に煌く星の様に存在する英雄たち。彼らは様々な無理難題を越え、偉業を成し、人類史にその業績を残した。ある者は万軍を単騎で相手し、ある者は人類史に残る発明をし、またある者は華々しく散ることで自らを示した。誰も彼も、万人が頷くにたるだけの行いを成し遂げて、その名を刻んだのだ。

けれど、これらの中で更に英雄は二つに分類できる。

一つ目、それは運命に射止められた者たち。もしくは世界、神に見初められたと言い換えても良い。こういった人物は最初から英雄として生きることが結論付けられている。人生において起こり得る難題を、様々な存在の手を借りて乗り越えていくのだ。無論の事、ただ流され任せきりではない。下地を与えられた後、更に自身の手で道を切り開く天賦の才覚と運がこれらの英雄には求められる。

二つ目、こちらはもつと単純で、様々な偶然や思惑が絡んだ末に英雄となった者だ。中には英雄となるべくしてなった者もいるだろうし、本当に意図せずして英雄と呼ばれることになった者もいるかもしれない。一つ目の例と比べれば千差万別、些細な切っ掛けが名を長しえに残す礎となるのだ。

——そういう意味で言えば、シバの女王マーキダは後者の分類であつた。

◇ 月の綺麗な夜だつた。エルサレムの宮殿は白い月明かりに照らされ、昼間の活気が嘘のように鎮まっている。けれどその絢爛さは些かも衰えず、むしろ荘厳さはいや増しているようにも思える。

その宮殿の奥、中庭にて。風を切る音が響いていた。規則正しく、また爽快に空を切るそれは剣を振る音に相違ない。微かな息遣いが^{ひとけ}人気のない中庭に響き、ただ一人剣を振るう女の姿が月光の下に浮かび上がる。

黒の長剣で素振りをしているのは誰であろう、シバ王国からの賓客で

あるシバの女王マーキダその人であった。数日前にソロモン王と知恵比べをした際の黒いドレスは無く、動きやすい簡単な服装に代わっている。うっすらと滲んだ汗によって亜麻色の髪が顔にしつとりと張り付くが、見苦しさよりもむしろ凜々しいといった印象が先立つ。彼女は一切姿勢をぶらさないまま、ひたすらに剣を揮い続ける。その細腕からは信じられないような勢いの単純な上からの斬り込みを始め、斜めからの一撃や鋭い突きまで多種多様。もし誰か見ているならば、その静謐な緊張感と相まって身が締まるような思いだろう。「……誰でしょうか？」

ここで、マーキダが剣を止めた。見つめる先は中庭の一角、月の影となっている位置だ。仮にもソロモン王の居城に不埒な者はやってこないだろうが、黙って見られるのもそれはそれで嫌だった。「ああ、すまない。別に悪意があつてやったわけじゃないんだ。ただ何となく、魅入ってしまった」

「貴方は……これは失礼しました。ソロモン王」
「いいや、構わないさ。先に見ていたのはこつちだからね」

陰から現れたのは褐色の肌、白髪、青年、ソロモン王である。たった一人しかいなかったはずの静かな中庭に、二人の人間が並び立った。周囲の木々や花々は変わらず、ただ月に照らされそこにある。

「このような夜更けにどうされましたか？ 王が一人で外に出られるなど——」

「それは君も同じだろう。私は単に、ここで剣を握る女王の姿を寝室で見たから来てみただけさ。いつも夜はこうしているのかな？」

「眠れない日はそうですね。つて、寝室から見た……？ もしやここから見れるのですか？」

「私の千里眼ならば、この程度の距離と遮蔽物なら無いも同然だからね」

笑ったソロモン王に、マーキダは若干顔を顰めた。一体今の対応のどこが不味かったのか、ソロモンは内心で不可思議に思いながらも特には聞かない。こつそり陰で見ていたように、表面的な性格は内気でもあるのだ。

それを察したのか、マーキダは顰め面をやめてソロモンに向き直った。

「いえ、それじゃ女性の諸々を見放題ではないかと思ひまして。愛多き王とも呼び名の高い貴方ですから、ちよつと不安になりました」

「……驚いた、まさかそのような事を言われるとは。心配せずとも、そんなくだらないことに千里眼は使わないさ」

「どうやらこのうら若き女王は男女関係についてはかなり初心であるらしい。あからさまに安堵した様子を見て、さしものソロモンも何となく察する。」

苦笑した——ように見せた——ソロモンは、ふと彼女が今だに握る黒の剣に目を留めた。そもそもここまで来たのも、なんとなく直接この女王と話してみたかったから。深い理由は無いが、別段やめる理由もなかった。

「その剣は？ 中々凝った魔術礼装のようだけど」

「ああ、これですか。これは私がかつて討伐した竜のねぐらに有った剣ですよ」

言いながら、ゆつくりと長剣が月光の下に晒される。刀身は黒、至る所に呪言が刻まれ、また黄金と宝石で装飾がされている。見るに、魔術と呪術を扱うための礼装でもあるのか。華美な見た目に反してかなりの業物にも見えるが、それだけに先の言葉が気になった。

「竜を討伐した？」

「ええ、そうです——ああいや、そうですね。この話はやや長くなるので、よければこの美しい庭を眺めながら話すのはどうでしょう？」

「なるほど、それはいい提案だ」

同意したソロモンはマーキダに手を伸ばす。その白い顔を僅かばかり赤らめながら手を取った彼女は剣を腰に帯びた鞆に仕舞うと、静かに語りだした。

「もともとはシバの王国はただの諸民族の集まりでして。私も正統な血統だとか神に愛されたとかのような背景は何もない一人の村娘でした。それで、一地方の内ですれぞれの村や民族が集まって平和に暮らしていたのですが、ある時強大な竜が地下より現れたのです。その

竜はひたすらに巨大で強くて賢くて、そして人を殺すことに何の躊躇いもない災害の様な存在でした。私たちは竜に脅され、毎日たくさんの家畜や生贄の娘を差し出す羽目になってしまったのです」

「酷い話だ」

“世界にありふれた話であり、今更思う所は無い”——その本音を押し込んで形だけの同意をソロモンが示すと、今度は彼の内心に気づいた様子もなくマーキダは話を続ける。

「けれどアクスムの村の人たちも当然そのままなんて認められず、少しずつその竜を退治するための策を練りました。生贄の家畜に僅かに毒を混ぜて、徐々に徐々に弱らせていく。けどあまり毒を盛りすぎてはきつと気付かれるから、引き際を見極めて直接殺さなければならぬ」

“そこで指名されたのがこの私です。”、そういったマーキダの顔は微かに誇らしげだった。

「ちよつとだけ自慢になってしまいましたが、実のところ私は結構剣や魔術、呪術に秀でています。他の村民の方たちと比べても抜きんできていました。だから私が竜退治の主役兼生贄に選ばれ、かの竜が弱った所を討伐しに行ったのです」

「それはだいたい何年前の話だったのかい？」

「五年前といったところでしょうか。今が数え年でおそらく二十なので、まだまだ若かった頃ですね」

くすくす笑うマーキダを脇目に、ふとソロモンは自身の千里眼を用いてしまうか迷った。具体的な時間すら分かったのだから、過去を見通す目にかかればその竜退治の様子を見るなど造作もない。しかし、「それで、その続きはどうなったのだい？」

そのような無粋な真似をわざわざする理由も見つけられなかった。せつかく横で楽しそうに話しているように見える女性が居るのだから、王として付き合うのが自然な態度だろう。幸いにしてソロモンには受動的なところもあるから、聞き手に回るのはそれほど苦でもなかった。

「これがもう大苦戦でした。毒で多少弱っていたはずではあったんで

すが、むしろ嵌められたことへの怒りで大暴走。あればかりは本当に死ぬかと思いましたが、どうにか三日三晩くらいの激戦の末に首を断ち切って見せました。もう何と言うか、物理的にも精神的にも燃え尽きるかと思いましたよ」

「竜が相手だからね。幻想種の中でも最良の種族、例えどんなに与しやすいように見えても油断できないのが彼らだ」

「お詳しいですね。やはり戦ったことがあるのですか?」

「いいや、無いよ。ただの知識の受け売りさ」

“ 悪魔はたくさんいるけどね ” と冗談っぽく付け加えれば、マークダは目を輝かせて “ どんな悪魔が居るのですか!?” と聞いてくる。好奇心旺盛なその姿はとても知恵者の女王には見えず、どことなく愛らしい姿だ。知恵比べの際の約束もあるから話すのは吝かでもないのだが、その前にまずはシバの女王の竜退治譚の顛末だ。目線で促すと、はっとした顔で慌てたように結びを話し始めた。

「それでどうにか討伐した証として首を持ち帰って、その後はお祭り騒ぎです。みんなで竜の死を祝って、その勢いで私は地方をまとめ上げる王様にされました。ちよつと自分でもどうかと思うのですが、本当に満場一致で断るに断れない雰囲気でした」

「それでたった五年でここまで評判が届くような大王国を打ち建てたのだから大したものだ」

「それはまあ、運が良かったと言いますか。ここで先ほどの剣の話に戻りますが、竜のねぐらにはこれまで数百年とか千年くらいの間に溜め込んだたくさんの財宝があったのです。私はそれを元手にして、国を栄えさせることに成功したからです。すごいんですよ、本当に山積みの金銀宝石に、古の名剣や鎧、それに武具はもちろん魔力砲台とか果ては空飛ぶ乗り物まで盛りだくさんで」

「ああ、それらはきつと中東の蔵から流れてきた物だろうね。私も幾つかお目にかかったことがあるが、どれも素晴らしい品だ」

かつて世界が一つだった頃に君臨した半神半人の英雄王。彼の蔵から散逸した品は今や世界中に巡っている事だろうが、かの地に近いだけあってイスラエルやシバ王国には比較的それらの財宝や二次的

複製品が多いのだ。これらの品を強大な竜が宝として死蔵していたとしても決して不思議ではない。

「私のこの“呪魔の剣”もそこから取り出したものなんです。私は剣術、魔術、呪術を主に扱うのですがこれがもう詭えたかのように私にちょうど良くて。なので愛用させてもらっているのです」

「物は全て使い様だ。例え元手があったとしても使いこなしてこまで国を栄えさせたのは君の実力だろうし、その剣を振るう姿も見事だった。うん、やはり君はこれからもっと素晴らしい王になる事だろう」

「……そう直球で言われると中々恥ずかしいですね」

俯いて顔を隠してしまったマーキダは、照れ隠しをするように視線を中庭の花々へ向けた。色鮮やかな花々が美しく、芳香が胸いっぱい広がる。話しているうちに明確に月は動いており、いつの間にか沈みそうにまでなっている。

そろそろ寝室に戻らないとマズイか。明日はシバ王国との交易についての話し合いもあるのだから、互いに万全の状態で臨みたい。なのでそれとなくソロモンが話を切り上げようかと考えたところで、マーキダが不意に彼を見た。

「ですが、私はやはり貴方こそ最も素晴らしい王だと思います。その知恵も勿論ですが、このイスラエルの国は凄く豊かで落ち着いている。まだ私の国はせわしなくて、全然落ち着いてもいられません」

それに何より、とシバの女王は続ける。

「私は、神に欲しいものを授けると言われて“知恵”を願うその謙虚さと勇気が羨ましいです。私はきつと、同じ状況下ならば“誰もを納得させるにたる武威”を求めてしまう事でしょう。知恵ではなく力で他者を制する暴君の道、おそらくはそちらに流れてしまいそうです」

「さて、どうか。君は十分に賢明だと私が保証しよう。それに私が本当に謙虚で勇気があるのか、もしや君のしているものは虚像かもしれないけどね」

「だとしても、この思いは変わりません。例え貴方の中に何も無いの

だとしても、私は貴方の成した偉業と勇気を賞賛し続けますから」
「……そうか」

思わず一言つぶやいて、隣を歩くマーキダを見やる。その顔は先の好奇心に満ち溢れた少女のそれではなく、才覚に溢れ若くして辣腕を振るう女王の顔だ。真正面から赤い瞳がソロモンを見つめ、その圧力に彼は咄嗟に目を逸らそうとしてしまう。

しかし、逃れることは出来なかった。その前にマーキダの手が伸ばされ、ソロモンの頬に手のひらが当てられる。白魚のような指は、可憐というよりも刻まれた傷の印象が目には焼きつく。

「ですがそうですね。もしよろしければ、こういうのはどうでしょう？」

「何かな？」

「貴方は私に、求めるものは何でも与えると仰ってくださいました。故に私は貴方の持つ知恵の恩恵に預かろうと考えました。ですがそれでは私の方がつり合いがとれません。与えられたからには与える、魔術の基本でもある等価交換です」

“ 魔術王ともあろう方が、この法則を忘れてはいませんか？ ”、
そう悪戯っぽく聞かれたソロモンは真顔で頷く。

「だから、私からは心を教えます。何があつて貴方が今のようになったているかは知りません。ですが、ほんの一端でもいい、もつと貴方という素晴らしい方に心という感情の動きを知ってもらいたいから」

——その提案は、あまりに衝撃的だった。

——その提案は、あまりに不可思議だった。

——その提案は、あまりに言われるのが遅かった。

どうしようもない感情、否、感情とも呼べはしない正体不明の思考がソロモンの脳内を駆けまわる。支離滅裂な思考ばかりが表に出て、今の自分が果たしてどのような表情をしているのかすら判然としない。真正面の女王は一体何を考えているのだ、思わずそこまで考えて、けれど何一つ答えは浮かばない。

当たり前だ。ソロモンに人の心は分からないのだから。

「おそらくはとても困っている事でしょう。まだ出会って数日程度の

女が、一体何を言っているのかと呆れておられることでしょう。ですが、私はもう決めました。今日からここを去るまでの二か月の間、先達として出来得るすべてを持って貴方に心を教えましょう。心から生じる美しい情動を知らずにこの世を去るなんて、そのような悲劇はとでも見過ごすことは出来ません」

晴れやかな顔でマーキダは言う。その彼女の横顔に、ついに帰還した陽光が差し込んだ。明るく照らされるその顔は笑っているのか、引き締められているのか、はたまた両方なのか。ただ一つ言えるのは、間違いなくこの女王はやる気になっているという事。本気でソロモンに、心を持たぬ非人間に心を授けようとしている。

だからこそ、

「ああ、それは期待できるかもしれないね」

この言葉にはもしかしたら、ほんの少しだけ、本当に“楽しみ”という感情が混じっていたのかもしれない。

——これがイスラエルの魔術王ソロモンと、シバの幻想女王マーキダによる曙光の誓いであった。

第二話 魔術王と幻想女王 II

考古学の観点において、シバ王国が歴史上存在したか否かは大きく議論が分かれている。

シバの女王がソロモン王との謁見の際に持ち込んだ数々の贈り物には、乳香やエメラルド、上質な白檀といった内容がある。しかしこれらはどれも原産地がバラバラで、その所為でシバ王国があったであろう場所が正確に分からないことがまず一つ。

そして二つ目に、あらゆる歴史書、または石碑を紐解いても、シバ王国の記述が一つしか書かれていないことに起因する。そのたった一つ書かれた列王記ですら、ソロモンとシバの女王の知恵比べを載せるのみ。詳しい情報は殆ど無く、唯一南の果てより来た女王とされるだけだ。

極め付けに最も大事な資料、シバの女王本人が記したとされる“智慧の歴史書”はとうの昔に紛失してしまっている。こちらに至ってはそもそも一地域における口伝による伝承であり、本当にその歴史書があったのかすら判然としない。故に一般においてシバ王国は幻想の国、“シバの幻想女王が居たかもしれないからあったのだろう”と考えられるのだ。

しかし魔術世界においては少しばかり違う解釈がある。それというのも、シバの女王と王国は確かに存在したと唱えるものだ。かの国は確かに地上にて栄え、そして唐突に歴史から消え去った。いや、正確に言い直そう。シバ王国は、人々の記憶以外からあらゆる面で消滅した。

これらを説明する理由で最も有力なのは、“シバ王国という概念の消失”。特に概念の半分、積み上げた歴史が何処かへと消えてしまい、それ故にあらゆる記録から抹消されているのではという説である。では消え去った概念は何処へ向かったのか、またそもそも原因は何なのか、これらの理由は魔術世界においても未だ明確な答えはない。



来賓に対して用いられる格調高い部屋、そこにソロモンはやって来ていた。勿論ただ何となくやって来たのではなく、この部屋の現主に招かれたのことだ。

「心を定義する言葉は星の数だけあると言いますが、つまりそれだけ情動というのは複雑怪奇で表すのが難しい題材でもあります。けれどどんな人にも必ず嬉しいや悲しいと思う気持ちは備わっていて、その究極として愛や憎悪が位置します」

「確かにそうらしいね。私もそういった感情が織り成すものを見たりする機会はあった」

言葉を交わす両者。その間の空間に、少しずつ艶やかな香りが漂い始める。マーキダが魔術を用い、小香炉の上に乗せられたある物に点火したからだ。

「しかしそうでなくとも、存外簡単なことで人は幸福感を得たりする事も可能です」

「それが、君が焚いているその乳香とどう関係があるのかな？」

「とても良い香りがするでしょう？ これは私が個人的に持参した物ですが、人の心を落ち着けて微弱ながら幸福感をもたらす作用があるのです。これを嗅いでみた感想をお聞かせください」

「……悪くないね。何となく心が暖かくなる気がするよ」

「それは良かったです。……今、私は貴方がそう言ってくださりとて嬉しいと感じました。他人が喜ぶ姿を見て、何か感じたことはありますか？」

「いいや、何にも」

「はあ、これも駄目ですか……というか即答ですな」

気落ちした様子でマーキダは乳香を机の隅に置いた。芳しい香りが室内に漂い美しく演出するが、神々の食料とも例えられる程の高級品にこの場での価値はもはや無かった。

この光景、すなわちマーキダがソロモンと心についての話し合いをするのは一体何度目になるのか。あの曙光の中での誓いから既に一月あまり、幾度となくあの手この手を駆使してソロモンの心を動かさうとするマーキダだが、未だ明確な成果は挙げられていない。笑わせ

ようとしても、驚かせようとしても、楽しませようとしても、どう足掻いても彼は非人間のままであった。

「一応、これでもどうして貴方がそうだったかについては見当がついているのですが……」

「ほう、それは本当かい？ いや、これまで誰も気付かなかった私の真実をただ一人、即座に見抜いた君のことだ。きっとその推論は正しいはずさ」

「そうですね、さすがに一ヶ月も過ぎせば自ずとそれらしい答えは出ますとも。まず最初に考えたのは世の中を嫌っている線、ですがこれではエルサレムを能く統治する行動とは合いません。かといって女性嫌いかといえ、少なくとも表面上は妃や妾の方を大事にしていますし、私のことも邪険には扱わなくてくれます。となれば、後はもう一つしかないでしょう」

「それは？」

問うたソロモンの瞳が、マーキダの瞳と真正面から交わった。

「貴方の保有する規格外の千里眼。私も魔術に携わる身ですから、それがどれだけ大変なものか知識だけでも知っているつもりです。そんなものを産まれた時から所持し、世界のあらゆる事象を見つめた。そのような事が続けばちっぽけな自身が分からなくなり、無感動となる事も可笑しくはありません」

「中々鋭い考察だと思うよ。故に、半分は正解といったところかな。だけど直接の原因ではない」

「あー……となると、もうこれは貴方の出生に関する話ですか。調べた限り——」

言いながら、マーキダは膝の上に置いていた革張りの本を軽く叩いた。それは彼女がシバの国より持ち込んだ記録帳兼魔術礼装、そしてかの国の歴史書を担う重要な書物である。恐らくそこにはこの一月の間にソロモンから学んだ七十二柱の悪魔を含む多くの知恵、そしてイスラエル王国について調べた内容が書き加えられているのだろう。「ダビデ王の息子ソロモンは、優れた王である彼さえ越えた王になるように定められた者であると。そのため神に捧げられ、他者を超越す

る王になったとの記載がありました。先の私の推論が半分正解だというならば、残りの半分はこちらでしょう」

「まあ、客観的に見れば私もそう考えるかな。お見事と言っておこう。前に君のことを賢明といったが、どうやら訂正が必要なようだ。そのうえ勉強熱心でもあるらしい」

「当然のことです。そうでなければただの担ぎ上げられた小娘ごときに女王など務まるはずがありませんので」

その言葉には、常にはあまり感じさせない確かな自負と誇りがあつた。彼女もまた一国の女王として、才覚に驕らず努力をしてきた人間なのだ。華やかな風貌と経歴に反し、その骨子はどこまでも泥臭い。「さて、次はそちらの番ですよ。貴方の考えた状況を一つ、私に教えてください。未熟なれど、一例として答えてみせましょう」

これもいつもしていること、マーキダがまずは行動を起こし、その後でソロモンの想定した状況に対しての一例を答える。面白いことにそれだけのことで二人には大きな意見の差異が発生する。

「ではそうだね……もし、これから先で起こる多くの悲劇を予見できたとしよう。そして努力すればその全てを回避できる。このような時、人はどうする?」

「うーむ、まず貴方ならばどう思われますか?」

「何も思わないさ。目の前で起きる悲劇ならば、善き王として解決するのが務めだろう。だが、それから先の出来事については一切の感慨が持てない。悲劇は起こるべくして起こるのだから、行動を起こす必要性は無いだろう」

“ 例えそれがどれだけの悲劇だとしても —— そうして締めくくられた言葉は、端的にソロモンの内情を示すもの。彼は何があらうと共感しないし出来ない。故にこそ、七十二柱ちゅうは怒り嘆くのだが、それすらもソロモンの理解の範疇にない。

だから、マーキダの答えも予測はつく。わざわざ千里眼で覗くまでもない。そう考えたソロモンだけに、笑い声が返って来たことは何より意外だった。

「ふふふ、これは驚きました。まさかソロモン王ともあろう方からこ

の様な問いが来るとは。ええ、安心してください。それが普通です」
「普通……？」

「そうですね。だって私たちは人間なのですから。例えどれだけの力があるうと、悲劇を回避したいと願おうと、途方もなく無力です。あらゆる悲劇は私たちの指先から零れ落ちて、取り返すことは叶いません」

それはまるで、ソロモンの在り方を肯定するかのよう。心を教えると言った彼女にはそぐわない答えだ。それに何より、

「その言い方だと、私も人間なのかい？ この私が？」

自他共に認める非人間だという自覚はある。ただそれに対して何の手も打つ気が無いだけ。なのにマーキダはソロモンを人間と評した。それが何より不思議だった。

「何を当たり前の事を聞かれるのですか。貴方は紛れも無い人間です。私が保証しますとも。そしてだからこそ、完全ではありません。あらゆる悲劇を防ぐ事は能わず、けれどそれで良いのです。もしそれが出来る存在がいるとすれば、それは貴方がたの信仰する唯一絶対の神に他ならない。なのにそれだけの事を人間に望むなど——」

まただ、また彼女はあの深淵を覗く瞳をしている。一体目の前の女には何が見えている？ 千里眼も読心の術も持たない女性なのに、まるで内面まで丸裸にされているようなこの気持ちは何なのだ？

「——悪魔の如き厚顔無恥な願いではありませんか？」

はつきりと、そう言った。まるで全て見透かしたかのように、しかし彼女には悪魔の説明はしても彼に憑く者達の紹介はしていない。なのはどうしてここまで核心を突けるのだ。

分からない。ソロモンにはそれが分からない。彼は知らないのだ。目の前の女王がどのような想いを込めて彼に向き直っているのかを。「さて、少しばかりお説教のようになってしまいました。私も別に大した人間ではありません。ですから今の意見は一つの言葉として覚えておいてください。それより、もっと悲しい事を悲しいと思えるようにしましょう。そっちの方が私の個人的な言葉よりよほど大切です！」

そうは言っても、ソロモンにはどうしても人間という言葉が脳裏から離れず、故にマーキダに頬を抓られて強制的に泣かされたりするのだった。

◇

夜、客室にて。マーキダは開いていた革張りの本を閉じると、寝台に向かおうと椅子から立ち上がる。部屋に灯されている蠟燭の火を魔術によって吹き消そうとして、外からやって来る気配に気が付いた。

はて、誰だろうか？ 彼女が疑問に思いながら扉に近寄ると同時に、戸が叩かれる音が室内に響いた。

「このような夜更けにどうされましたか？」

外に立っているのは美しい女性、そしてその後ろにはローブで姿を隠した人影だ。

「突然の訪問まことに申し訳ございません。しかしどうしても貴女様に会いたいという方がおりまして……」

「はあ……」

女性が示したのは後ろの誰だか分からない人影。いったい誰が来たのかと考えて、ふと思いついたことがあった。もし本当に彼ならば、あまり大事にならない内に収めてしまうのが良いだろう。

「……ひとまずお入りください。私は気にしませんので」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げた女性とその後ろの人影を部屋に招き入れ、ひとまず椅子に座らせる。蠟燭の火によって影が生まれ、二人の人影を怪しく照らす。その様はまるで不審者か暗殺者の如きだが、しかしそうではないだろう。

まず口火を切ったのはマーキダであった。

「まさか貴方がやって来るとは思いませんでした、ダビデ王」

「おや、バレていたかい？ これでもしっかり姿を隠していたつもりなのだが」

「この国で敢えて姿を隠して、しかも仕立ての良い服を着た女性を侍らす人など一人しかいないでしょう」

「なるほど、道理だ」

苦笑したような人影の声は年老いている。だがその喋りは非常に若々しく、まるで年を感じさせない。

そうしてローブを脱いだ下に居たのは、このイスラエル王国の前王、ダビデその人であった。その顔には老齡の証たるしわが刻まれ、髪の毛は元の緑に多く白が混じっている。けれど理性を保った鋭い視線は些かも衰えていない。

「まずはこのような時間に訊ねた非礼を詫びよう。だけど僕が動くかどうかしてもいろんな手続きが嵩んで面倒でね」

「お察しします。念のために防音措置と人払いの魔術をかけておきました。それで良いですか？」

「全く気が利くね。これは不肖の息子にはもったいない女性だ。どうだい、今からでも僕の妃に——」

「お断りします」

「ははは……冗談だよ」

一刀の下に両断されて乾いた笑いを上げたダビデは一つ咳払いをすると、今度は真面目な顔つきに戻った。

「改めて、僕はダビデ、今は王じゃ無いからソロモンの父親と紹介させてもらおうか。それでこっちはアビシヤグ、そろそろ僕の身体も弱くなってるから重宝してる女性だよ」

「その割には随分と元気なようにも見えますが」

「それはそれさ。で、今回訪ねて来たのは他でもない、君とソロモンについてだよ」

はつきり言えば、マーキダからすれば何を言われるか気が気でない。そもそもソロモン王は最初から王として生まれた存在であり、あるいは本当の心など不要であるとさえいえるかもしれない。それなのに彼女は突然余所の国からやって来て、彼に心を教えると宣言しているのだ。周囲はそもそもソロモン王の内面について全く知らないというのが実情だが、それでも何かしら察せることもあるだろう。

「私たちが何をしているのかご存知なのですか？」

「だいたいのはね。これでも僕はアレの父親だからさ。なんて

言っても大して親らしいことはしていないけど」

「えっ」

「いやあ、若い女の子を口説いたりしてたらいつの間にかすぐ成長してたからね、アレ。正直手間が省けたというか」

「端的に言つて屑じゃないですかそれ」

「まあ、自覚はあるさ」

ダビデが肩を竦め、アビシヤグが白い目で彼を見つめる。この時点でマーキダとしては目の前の男がかなり人間としてアレなのだろうと当たりを付け、少しばかり警戒度を上げて丁寧な対応を取り下げることが決意する。

「とはいえだ。さつきも言っただけどこれでも僕はアレの父親だからさ。あれが実は内面で何も感じていない事くらいとつくにお見通しさ。彼はそのことに気が付いていないようだけどね。いやはや、身内の動向は近すぎて千里眼じゃ分からないか」

「……なら、どうして彼をこのままにしているのですか？ 貴方が行動すれば彼は変わるかもしれないのに」

「いや、ダメだね。僕は親としては君の言った通り割と屑だから、何を言っても響かないさ。かといって他の人間に伝えたところで信じはくれないだろう。アビシヤグだってほら、信じられないなんて目をしているだろう？」

確かに、先ほどから黙って話を聞いている彼女はあまり信じられないといった顔をしている。常のソロモンは能く人の話を聞き、公平に務め、そして国を治める賢君なのだ。それが人の心を解さぬ者と言われたところで俄かには信じがたい。それがエルサレムに生きる、ダビデ以外の人物の感想である。

「だから僕としては君にちよつとばかり期待してるんだよね。まさか余所から来た女性が——いや、余所から来たからこそか。瞬時にソロモンの真実を見抜くなんて思ってもみなかったから。いったいどうして気が付いたのやら」

「それはその、私も彼と似たような時期がありましたし、何より彼が私の好みというかすぐく——ってこれは恥ずかしいから言いません！

それより！ 貴方は私の行動に賛成されるのですか？」

そもそも優れた王となるようソロモンを神に捧げたのはダビデ王だ。なのにソロモンの中身を作り変えるような事をするのは本末転倒ではあるまいか。そう疑問に感じたマーキダに、ダビデは至極真つ当な顔でこう答えた。

「そりやあまあ、アレはろくでなしだけど一応は僕の息子だからね。お節介だし柄じゃないという自覚はあるが、少しくらいは人としての幸せを見させても主の天罰は当たらないだろう」

「それは、」

「意外かい？」

「当たり前じゃないですか。さつきまでただの育児放棄の屑だと思っていたのに、急にそんな真つ当な事を言い出すなんて」

「酷い言い草だなあ。でも事実だから怒りはしないよ」

結局のところ、彼にも多少なりとも親としての情が残っていたという事だろう。その意識が今夜、マーキダの部屋に彼の足を運ばせた。既に年老いていつ死ぬかも分からぬ身で、それでもそれくらいの事はしてみようと思いついたのだ。

「そういう事だから、君がアレ相手に努力してくれるのは大賛成だ。好きだけやってくれたまえ。何か起こっても僕は責任を持たないけど、何をして咎めるつもりもない」

「せっかく見直したのに、そこでさりげなく保身に走らないでくださいよ……」

「こればかりは性分だからね。つと、そうだそうだ。忘れるところだったが、今夜は君と話してみる以外にこれを渡そうと思つて来たんだよ」

そう言つて彼が取り出したのは、小さな小瓶であった。中には何やら透明の液体が入つていて、炎に照らされ橙色に色づいている。それをマーキダに渡したダビデはアビシヤグの手を借りながら立ち上がると、思いのほかしやんとした姿勢のままローブを着こみなおした。

「もしどうしても滞在期間中に彼を動かすことが叶わなければ、二人きりの時にそれを飲んでみるといい。たぶんだけ彼もそれなりの

反応を示すだろう」

「……本当ですか？ それにこれはいったい何が——」

「さて、使ってみてのお楽しみさ。ああ、勿論毒じゃない。ただ賢い割に分かりやすい君にとってはむしろ手助けになるはずだ」

華麗に片目を瞑って見せたダビデは、「わ、分かりやすいって何ですか！」という憤慨の声を背に受けそのまま部屋から出て行こうとする。が、途中で立ち止まると小瓶を見つめるマーキダにとっておきの爆弾を投げつけた。

「最後に一つ。君はどうしてあんなのを好きになったんだい？ アレは僕から見ても割と本当かどうかと思うというか——」

「そ、それはですね！ ええつとその……ああもうバレているようなので白状しますが、私は賢い人が好きなんです！ だからあの知恵比べに負けた時点でだいぶ彼の事が気になってました！ それにほら、声とか容姿とかも私の好みですし！ だから本心から好いてもらいたかったんです！ 何か文句ありますか!？」

「いいや、無いとも。というかそこまで聞く気は無かったってくらい大胆な告白だ。それが僕に向けてだったらなお良かったのだけど仕方ない。——まだ、その想いを彼に伝えてはいけないよ。なまじ彼の内心を分かっている君だからこそ、きつと悲惨なことになる」

「分かっていますよ、それくらい……」

「なら良いさ。それじゃ、夜分遅くに失礼したね。君の幸福を願っているよ」

そうして、ダビデはアビシヤグを伴い去って行った。部屋に残されたのは、真っ赤になりながら小瓶を握りしめ、どうして自棄を起こしてしまったのかと深く反省している若き女王だけであった。

第三話 魔術王と幻想女王 III

魔術史の観点からみれば、ソロモン王の時代は未だ神代ということになる。世界には神秘と不思議が溢れ、魔術はまだ特別なものではなかった。特にソロモン王が魔術を生み出してからは只人の手にも神秘が扱えるようになったのだから。

これは後の話となるが、魔術王の死をもって世界からは神秘が加速度的に失われる事となり、最期には神の子とされる者の生誕によって神秘の時代は幕を閉じる事となる。こうして魔術最盛期は終わりを告げられ、根源へと至る魔術師たちの探求は始まったのだ。

◇

共に国を治める者として、魔術王とシバの女王がよく席を同じくするのは自然な成り行きといえた。それはもちろん王としての責務からくるものもあるだろうし、マーキダが宣言した『心を教える』といった題材もある。反対にソロモンの方が魔術を生み出した者としてシバの女王へと教授することだつてあるわけで。

今日はまさにそのような日であり、マーキダは魔術を生み出した者からの直々に薫陶を賜ったところであつた。

「これまで特にもせず用いてきた呪まじない術ではありましたが……これも源流を辿れば貴方の下へと至るのですよね？」

「そういう事になるかな。かつては神々に連なる者たちの特権であつた神秘の操作は、既にして我ら只人の手中にまで降りてきた。君の操る術もそのうちの一つで、私はその事実を——あえて言わせてもらえば——嬉しく思うよ」

既にして魔術は生みの親たるソロモンの手元を離れて、ゆつくりと世界の隅々へ広まってきている。これから先で魔術を扱える者、扱えない者による差異はきつと浮かび上がるだろうが、それでも今この瞬間は魔術によって救われる者が居るのだからそれで良い。そこから先に関してまで干渉する気は、ソロモンには無いのだが。

ともあれソロモン王が魔術という存在を生み出していなければ、少なくとも目の前の麗しい女王はここにはいなかったと断言できるだ

ろう。先日自ら語ってくれた通り、竜退治の折に死んでいたとみて間違いない。この時代の魔術とは、それくらいには大きな要素なのだ。

「なら貴方は私の命の恩人となるのでしよう。心からの感謝を貴方に。ありがとうございます」

「そう畏まる必要もないさ。私はただ主の御心に従ったまで、それが偶然君を助ける一翼を担っただけの話だ。礼を言うならば私ではなく我らが主に申されるが良いだろう」

「もう、そういう問題ではないのですよ」

理屈としては最もなソロモンの言葉だが、マーキダはちよつと不満そうだ。腰に手を当てて、「私怒ってますよ」と見せつけるように頬を膨らませている。せつかくの目を見張るような美貌もこれでは形無しだ。

いったい何がいけなかったのか、知恵者として知られるはずのソロモンにはてんで理解できない。これまた理的なはずのシバの女王が、こうも子供っぽく怒るほどのことを自分にしたのだろうか？ かなり本気で考え込んでしまう。

そんなソロモンの様子を見て、マーキダはいよいよ立腹だ。

「礼を言われたならば、素直に受け取れば良いのです。貴方だって普段から臣民や民草の前で行っていることではないか？」

「それは『王としてそう振舞う必要がある』からこそだ。こう言っては憚られるかもしれないが、君の前ではそう取り繕う必要もないと思っているからね。これが本来の私というわけさ」

「むむむ……地金を見せてくれているのは信用の証だと受けとっておきましょう。ですが！ それとこれとは話が別です。一筋縄ではないかと思うていましたが、やっぱり中々のものですね」

「……今のは褒め言葉として受け取っておけば良いのかな？」

「違いますー！」

これはまだまだ先は遠そうだ。すっかり市井の元氣娘のようになつてしまったシバの女王を前に、ソロモンは客観的な評価を下した。果たしてマーキダがここに滞在している内に目的を果たすこと

はできるのだろうか？ さしものソロモンでも、純粹に疑問に思ってしまうところではある。

だけでもっとソロモンが疑問に感じてしまうのは。この途方もなく無為な作業をしているはずなのに、何故だか楽しそうにもみえるマーキダの姿であろう。さつきまで怒っていたのに楽しそうなど食い違いもいとこだが、事実笑っているのだから間違っている訳でもないだろう。

「どうして君はそうも楽しそうなのかい？ はっきり言おうか、これは無為だ。無益だ。どれだけ努力しようと毛ほどの利益も君にはなく、また成功する保証もない。女王である君ならば、こんな私に構うよりももっと先に成すべきことがあるのではないかね？」

仮にも善意の行動を前にこのような事を言えば、きつと彼女は怒るだろう。事実を基にした推測としてソロモンはそう考えていたし、別にそれは一般常識に照らし合わせても間違いではない。

だから、

「いいえ、それは違いますよ。私はこうしてお話をしていること自体がとても楽しいのです。笑ったり、呆れたり、時には怒ってみたり。それら全てが貴方といれば楽しいからこそ、貴方の指摘に頷くことはできません」

——予想に反してふわり、花が咲いたような笑みをマーキダは零したのである。

「それはいったい——」

どういうことだ、とソロモンが続けようとした時であった。扉が三度、丁寧に叩かれた。

「ご歓談のところ申し訳ありません！ 緊急の報告でございます！」、扉の外からソロモンの臣下の声が聞こえてきた。なにやら焦りを孕んだような調子である。明らかにただ事ではない。

ソロモンが目線でマーキダに問いかければ、彼女は一も二もなく頷いてくれる。よって客人の同意を得たうえで、彼は臣下入室の許可を下した。

転がるように入ってきたのは伝令役の者だ。即座に膝を着く格好

となったが、どうにも姿に余裕がない。まるで長旅から帰ってきたかのような——いや、それで間違いないのだろう。伝令兵の疲れたような雰囲気や、解れて破れた服装が両者の予想を裏付けてくれている。「シバの女王におかれましてはご機嫌麗しく。このような礼節に反する態度を取ってしまう事、まことに申し訳なく思う次第であります」「いえ、私のことはお気になさらず。それよりも貴方の務めを果たす方が先なのでは？」

「その通りだ。女王もこのように仰ってくれている。まずはそなたの話を聞かせてもらおうか」「はっ！」

それから伝令兵はゆっくりと、しかし確実に内容を二人へと伝えた。最初は突然の事態に訝し気だった両者も、話が進むごとにあまり良くない表情が浮かび始める。確実に報告を咀嚼して、その危険性を理解した。

時間にすればそうは経っていないだろう。だが先ほどまでの穏やかな雰囲気はいつの間にか消え去り、緊迫した空気が流れだす。

全ての報告を聴き終えたソロモンは、座っていた豪華な椅子から立ち上がった。その動きに迷いはない。

「すぐに玉座へ向かおう。あまり喜ばしい事態ではないらしいからね。そなたも大儀であった、今はよく休むと良い」

「寛大なるお言葉、ありがとうございます」

「シバの女王、すまないが今日はこれまでだ。客人である貴女を関わらせるわけにはいかない」

「いえ、申し出はありがたい限りですが、そういう訳にもいかないはずです」

玉座へと向かおうとするソロモンの視線が、まっすぐマーキダを貫いた。全てを見通す規格外の瞳を前に、彼女は微動だにせずその赤い瞳で受け止めた。この程度のことかなんだと言わんばかりに、小動もしない。

だってそうだ、彼女はもつと直接的に恐ろしい相手と相對したことだったあるのだから。

「此度の話が竜退治だというのなら、私シバの女王マーキダはその専門家でございますよ？　この巡り合わせ、よもや偶然とは言わないでしょう？」

王として客人を問題に巻き込まない判断は非常に合理的である。

しかし不敵に笑ったシバの女王の発言もまた、確かに理に適っている言葉であったのだ。

◇

イスラエル王国をソロモン王が治めるこの時代、神秘の名のもとに人知の及ばぬ怪物は至る所にのさばっている。幻想種と呼ばれる彼らは格の低い魔獣から始まり、幻獣、神獣と次第に強大な存在となっていく。これらはただの人間ではとうてい太刀打ちできない存在ばかりだ。

そして幻想種の中でも例外なく最優とされるのが『竜種』である。かつてはマーキダも退治したとされるその竜種とて、珍しくはあっても決して貴重なものではない。

「ふむ、なるほどな。イスラエル軍による竜の討伐は失敗に終わったか」

「……口惜しい限りではございますが、その通りです。なんとお詫びをすればよろしいか」

玉座に腰を下ろしたソロモンの眼下で膝まずいているのは、傷だらけの身体に鞭打って礼節を尽くそうとしている兵士長だ。今にも崩れ落ちそうな苦悶の表情をしているのに、気合一つで押しとどめている有様だ。

そんな兵士長に近寄ったマーキダは、手にしている器を彼に差し出した。ほのかに湯気を立てているその中身からは、どこか良い香りが漂っている。玉座へ向かう途中に、彼女が臣下に命じて作らせていたものである。

「気休め程度ですが、ひとまずこれをどうぞ。薬草を煎じた薬湯を乳香で香りづけしたものです」

「女王の手ずから渡されるとはかたじけない……この恩は忘れませぬぞ」

一息に薬湯を飲み干した彼は、最後の力が抜けたように静かに倒れ込む。気の緩みと、薬湯に混ぜ込まれていた睡眠導入の魔術が効いたのだろう。それを意外にもしつかり抱き留めたマーキダは、すぐに駆け寄ってきた臣下に預けるとソロモンへ向き直った。

「さて、これで彼は大丈夫でしょう。あまり無理をされて倒れられても困りますからね」

「女王の気遣いに感謝を。貴重な民の喪失はなるべく避けるべきだろう」

他国の来賓の手を煩わせたというのもこの際気にはしない。他の者たちは恐れ多いと気をやっているようだが、彼女がこの程度で気を悪くする狭量な者でないとは知っているからだ。

だからソロモンはさっさと話題を本題へと切り替えてしまう。議題はシバの女王が来訪するしばらく前からイスラエル王国を騒がせている、貪欲なる竜についてだ。

「客人の手前、あまり表沙汰になる前に済ませてしまいたかったのだが……こうなつては是非もあるまい。良ければその知恵をお貸しいただけるだろうか、シバの女王よ」

「私などで良ければ喜んで。むしろ偉大なる王に恥じぬよう、精一杯務めさせていただくばかりです」

かくして、竜討伐の議論は進められた。

まず前提として、この竜は既に近隣の森や山を破壊し尽し、最近では村すら襲うようになったという。そこで五千からなる討伐軍を編成し、シバからの客人に事が露見する前に終わらせようとしたのだが失敗。今に至るといふ訳だ。

「そのうえ鱗は固く、火を吹き、狡猾で知恵も回ると。空を飛べないのは救いでしょうが、これではどれだけの人員がいようと太刀打ちは難しいでしょうね」

「経験者は語るといふやつだな。では訊ねるが、我らはどのように竜を制すればよいと考える?」

「そうですね……」

少々考え込むような仕草をしてから、マーキダは驚くべき結論を下

した。

「一番迅速にことを済ますには、この私を派遣してしまう事かと。竜との戦闘経験も、鱗を貫く剣も、なんとなれば空を飛ぶ手段もありま

す故。おそらくは最も確実かと思いますが、いかがでしょうか？」
「論ずるまでもないだろう。見てみなさい、君の臣下たちが驚いておられるよ」

この場にはソロモンの臣下だけでなく、マーキダが連れてきた者たちも幾名か混じっている。その者たちは皆一様に驚きと不安の色を目に浮かべていた。さもありません、彼らにとつてマーキダとはシバの国を治める女王である。例え本人の提案といえども、大切な御身を危険に晒すなどもつての外という訳だ。

「申し出はありがたいが、大切な客人にそのような苦勞をさせるわけにもいかないのですね。貴女には知恵をお借りいただき以上のことは要求しない」

「しかし、それではどれだけの民が犠牲になるとお思いですか？ 五千では駄目でした、ならば一万でしょうか？ いいえ、それで成功する保証などどこにもありませんよ。果たして竜を討伐するまでの間に、この王国の民がどれほど血を流す羽目になると思うのです？」

まるで糾弾するかのよう強い語調だ。もちろん、その程度のこと

が分からぬソロモンではない。
故に諭すように言葉を重ねる。この場はまず彼女を説得しなければならぬと理解したからだ。

「誤解を恐れず言わせてもらおうが、貴女はシバの女王であつてこのイスラエル王国の女王ではない。それほどまでにこの国を想つてもらえるのは誇らしい事だが、同時に部外者でもある貴女がそれほど肩入れする理由は——」

「ないと仰いますか？ ならば、私は違うと言わせてもらいましょう。肩入れする理由は確かに存在するのです」

マーキダは腕を大きく広げてから、芝居がかった大仰な動きで周囲を見渡した。差し込んだ陽光が、あたかも彼女の独壇場であるかのよう

に照らし出す。困惑や驚き、期待や呆れといった諸々の視線を全て

集めてから、歌うように高らかに語りだしたのだ。

「私は、この王国が好きです。笑顔溢れる優しい人々も、美しいこの玉座も、荘厳な神殿も、美味しい食事も、豪勢な調度品も、そして偉大なる王もまた。この滞在の間に、全てが好きになったのです。なればこそ、好きなものを守りたいと願うのは、人として当たり前のことではないでしょうか？」

それに何より、と女王は謳う。

「この国には恐怖など似合いません。暗闇も影も、全て全て似つかわしくくない。ソロモン王、貴方の偉大なる王国がたかが竜のせいだ、嘆きと恐れに満たされる様など見たくはないのです」

「机上論、と言いたいところだがな……」

どれだけ他人が悲しもうが、まず己に実害がなければそれでよいと感じるのが人間であると、ソロモンは考えている。その千里眼を用いて数多の嘆きを見てきた彼だからこそ持ちえた結論、それもまた覆しようのない一つの真理であるのだろう。

だが、それとは対極の考えを抱いた女王が目の前にいる。竜なんて危険なもの、無視したって構わないというのに。どれだけ他国の民が苦しもうが関係はないはずなのに。彼女は悲劇など嫌だからという理由だけで、自ら危機へと飛び込もうというのだ。

果たしてマーキダとソロモン、どちらが賢いのか。その是非はここで問うべきではない。どちらの意見も一面は正しく、また一面では間違っているのだから。

よってこの場で一つ言えるのは。

「いいだろう。シバの女王よ、貴女させ良ければ竜退治に協力してはもらえないだろうか」

「ええ、喜んでお供いたしましょう」

誰よりも知恵を持つとされる魔術王は、この時はつきりと根負けしたということなのだろう。

ソロモンからのまさかの提案と、躊躇いもせずに首を縦に振ったマーキダに周囲が大きくどよめいた。口々に囁きを交わし合い、今の判断の是非を相談しようと躍起になっている。

「ただし」、ソロモンだった。彼の一言に再び場は静寂に包まれる。「私もシバの女王と共に行こう。同意の上とはいえども、他国の王を竜退治に駆り出そうというのだ。その程度しなければ釣り合いが採れない」

再びざわつきが大きくなる。魔術王もシバの女王も、これ以上なく竜退治には適任なのかもしれないが、よりにもよって王を二人も竜の前に送るなど正気の沙汰ではない。

思いとどまりください、誰かが叫んだ。しかし聞く耳持たない。どちらも既に決まった事として、準備を始めようとしているのだ。もはやこの二人を思いとどまらせることは難しいだろう。

かくして、魔術王とシバの女王による突発的な竜退治がここに成立したのである。

◇

イスラエル王国の空を矢のように駆けるは、マーキダが保有する銀に輝く舟である。簡素な造りではあるが、確かな造形美を感じさせる芸術的なもの。だというのに機能性も損なわれていないのだから感服するばかりだ。

おそらく十名は軽く乗れるであろうその銀舟は、たった二人だけを乗せて竜を目指し進んでいた。

「これも竜のねぐらから回収したという品かい？」

「ええ、その通りです。見つけた当初は壊れて使い物にならなかったのですが、頭の回る方が弄り倒した挙句に修理してしまいました。それ以来シバの女王の足として愛用させてもらってるのですよ」

「ここに来るときも、多くの荷物を載せたものです」と、銀舟を操るマーキダは朗らかに笑った。女王の舟を積み荷船のごとく扱って良いのかという謎はあるが、本人が気にしていないなら良いのだろう。女王として気取らない態度もまた、彼女の魅力の一つなのだから。

「……我がことながら、随分と肩入れしているものだな」

「何か言いましたか？」

「いいや、なんでもないさ」

首を振って誤魔化した。今までの人生において、こうも他者に肩入

れた事などあっただろうか。それも王としての責務ではなく、一個人としてだ。心を持たぬはずの非人間が、そのような情動を感じることも有り得るのか。

それともこれがマーキダの言う『心』なのか。いや、分からない。勘違いかもしれないし、ただ観察した上で出た評価なだけかもしれない。はつきりとはしていないのだから、決めつけるのは浅慮だろう。「失礼ですがソロモン王、貴方の千里眼によれば竜はあとどれ程の距離でしょうか？」

「この調子ならば、もう間もなくだろう。覚悟を決めた方がいい」「そうですね」

いよいよ剣を引き抜いて、来るべき敵に向けて臨戦態勢を整える。その姿は常日頃にみせる智慧の女王というよりも、むしろ戦いの為の戦女神とでも呼ぶべきだろうか。凜と引き締まった横顔が鮮烈だった。

彼女はまだ見ぬ敵を睥睨するかのように眼下を見ながら、ふと問うた。

「ふふ、もしもこの舟旅を逢瀬のようと言ったら、多数の女性を妻に迎えたという貴方は怒りますか？」

「まさか。そもそも私には怒る自由もないからね。君も一々私に気を遣わなくとも結構だよ」

「……そんな寂しい事、言わないでくださいよ」

一瞬だけ、寂しそうな横顔がちらりと覗いた。けどそれは刹那の間のことで、気が付いた時にはすでに彼女の意識は他にあった。

目標が、すぐ間近にいたからだ。

「なるほど、あれですか」

「どうやらそのようだね」

問題の竜は、砂漠の只中に陣取っていた。見た目は巨大すぎる蛇のようで、胴体がやけに長い。手足もあるが小さめで、翼に至っては取って付けたような適当さを感じさせるほど。この小ささでは到底空は飛べまい。

竜は空を飛んでやって来た闖入者に気が付くと、苛立たし気に唸り

声を上げて舟に向かって大口を向けた。ズラリと並んだ鋭い牙が凄まじい。だが本命は牙ではない。牙の奥、喉元から赤い光が吹きあがり――

「おっと」

放たれた灼熱の業火を危なげなく舟は避けた。滑らかに横移動し、天を焦がすほどの火炎は掠りもしない。

「この舟、攻撃は出来ないのかい？」

「もちろんできませんよ。とはいえ、これほどの相手に通用するかと言われれば怪しいのですが……」

魔力で構成された弾丸が四つほど、急速に生成されて竜へとぶつかった。轟音、ついで白煙があがる。だが竜の鱗は今の攻撃を欠片も通していないらしく、傷の一つもついていない。むしろ攻撃を受けたと認識した竜は怒りの咆哮を上げると、狂ったように銀舟めがけて灼熱を吐き続ける。

そのすべてを舟は優雅に回避するが、さりとて有効打もまた存在しない。舟体を舐めるように擦過する灼熱がなんとも心臓に悪い限りだ。

「状況は膠着化してしまったね。このままでは避け続けるだけでは、互いに千日手のように思えるけど」

「むしろ好都合です。このまま挑発し続けて相手の疲労を待ちましよう。それまでは世間話でもしていればよろしいかと」

「……へえ、意外と肝が据わっているんだね」

冷や汗が一滴垂れたのをこっそり拭いつつ、やや震え声になっているのを自覚した。

さすがの魔術王であろうと、怒り狂う竜を前にして呑気に世間話をする気になれない。それだけの度胸があるなら、たぶんマーキダだつてこどもも苦労してないはず。

果たして、このような状況の中で普段の威厳ある魔術王らしくいられるのか――周囲を業火で炙られ続ける中、気がつけば呑気なことを考えてしまうのだった。

◇

「……攻撃が止まりましたね」

「どうやらそうみたいだ。狙いに気が付いたとみて間違いないだろう」

上空を自在に旋回する舟を前にして、竜は観察するかのような様子を見せ始めた。むやみやたらと炎を吐かず、体力を温存する動きだ。

抜け目のないこの竜は、頭が冷えた途端にマーキダ達の目論見に気が付いてしまったらしい。これは厄介な手合いだと二人は世間話を止めて気を引き締めなおした。

「次はどうするつもりだい？ 私にできることがあるなら好きに頼ってもらって良いけども」

「いえ、貴方の手を煩わせる必要もないかと。ここからは本領の発揮と言えますからね」

腰に提げていた『呪魔の剣』をもう一度手に取って、慣れた手つきで左手の人差し指をわずかに切った。ソロモンが止める暇もない早業によって滲み出た血を、彼女は自身の剣へと塗り始めたのだ。

「見るに、それは魔術の媒介ということかな？」

「はい、その通りです。どうやら私の扱まじなう呪まじない術は血を介すと格段に効力が上昇するので、極力血を用いるようにしてます。……少々見た目が悪いのは玉に瑕ですが」

苦笑してから、見事な早口で二言三言の呪文を唱える。すると黒塗りにであった『呪魔の剣』が、ほのかに赤く輝き始めたではないか。血を代償にした、その禍々しくも鮮烈な赤にソロモンもしばし魅入られる。

魔術に通じるソロモンだから、一目見ればその効果も読み取れた。おそらくその効果は剣の鋭さを増し、また傷口の修復を阻害するもの。竜の硬い鱗を貫き、強靱な生命力による回復すら阻害するその術は悪辣で効率的という他ない。

「では、行ってきますね。舟の操作方法は先ほど教えたとおりです。で、危なくなったら適当に動かしてくださいって結構です」

「ああ、吉報を期待させてもらおう」

頷いて、マーキダは躊躇いなく舟から飛び降りた。地上までの距離

は相当なもの、普通ならばまず命はないはずだが、ソロモンは特に心配などしていなかった。

下を覗き込めば、落下する彼女の速度はかなり遅い。魔術による落下制御なのだろう。よく慣れた鮮やかな手際は、きつと何度となく舟から飛び降りているのだと想像させる。

「だが竜もこの隙を見逃してくれるとは思えないが……どうするのかな？」

ソロモンの呟きに応えるかのように、竜が唸り声をあげて落下するマークダへと襲い掛かった。この時を待っていたとばかりに、自身の誇る巨躯の射程に入った瞬間、牙の並ぶ口で彼女を引き裂かんと突貫する。

けれど彼女もまたそれは予測済みだったのだろう。空中で、なんの支えもないのに急に身体が横へと動いた。まるで見えない何かに押されたかのような不自然な挙動に、竜も対応しきれない。

噛み合わされた顎はむなしく宙を捕らえただけ。代わりにマークダは竜の長い胴体に危なげなく着地すると、お返しとばかりに逆手に握った剣を思い切り突き立ててみせたのだ。

「ふっ——」

即座に剣が引き抜かれ、返り血を浴びる前にマークダは胴体から飛び降りた。次の瞬間、不愉快な竜の呻き声が響き渡る。その大音声に顔を顰めつつ、ソロモンは今の動きを冷静に分析していた。予想通りなら、なんてことはない仕掛けだ。

「魔力をあらかじめ身体に蓄積させて、必要に応じて噴射させることで勢いを得たのかな。これなら空中で軌道を変えることも、逆に剣を振る際に勢いをつける事だって出来る。なんとも汎用性の高い魔力の使い方だね」

相応しい言葉を見繕うなら、『魔力放出』といったところか。マークダの場合は少しづつ貯めこんだ魔力を要所要所で用いることで、戦局を有利に運ぼうとしている。しかしもしこれが無尽蔵の魔力を持つ者なら、いつそう凄まじいことになるだろう。なにせ全ての行動に途轍もない勢いが乗るのだ、戦闘においてその利点は計り知れない。

そのようなことを考えている内にも、マーキダは華麗に地面へと着地して剣を握りなおす。過去には彼女が素振りをしている姿もみたが、竜と対峙している今は、あの時と比べていつそう清廉さを感じさせる佇まいだ。

痛みに呻く竜も、眼前のちっぽけな存在が手傷を負わせた犯人だと気が付いたのだろう。ありったけの憎悪を視線に注いでマーキダを射抜いた。鮮血のように赤い竜の瞳は、常人ならばそれだけで卒倒してしまうほどの圧が籠っている。

女王は、涼やかにその視線を流していた。同じ赤い瞳に宿る闘志は些かも衰えてはいない。

「ソロモン王の手前、あまり時間をかけても申し訳ないですし。手早く終わらせてしまおうとしましょう」

「——ッ!!」

先に仕掛けたのはマーキダの方だ。大地へと勢いよく踏み込み、放たれた矢のように竜へと接近した。咄嗟に目で追えないほどの足の速さだ。軽々と長剣を振るえる膂力といい、華奢な見た目にそぐわずかなり肉体を鍛えているらしい。

とはいえ竜の動体視力ならば余裕をもって追いきれる。竜は身体を振らせると、マーキダの進行方向へと尾を勢いよく薙いだ。触れる者すべてを粉碎する城壁の如き大質量を前に、しかし彼女は動じない。引き付けて引き付けて、紙一重を冷静に見極め跳躍を行うことで回避、さらにはすれ違い様に再び竜の肉体を斬ってさえみせたのだ。

「これはまた……」

無意識に、感嘆の声が漏れていた。まるで剣舞でも見ているかのような鮮やかさに、目が奪われてしまうががない。端的に言って、その美しさに見惚れていたのだ。

ある時は繊細に動きを予測し、ある時は大胆にも攻め込んで手痛い傷を竜に負わせる。まるで羽毛のように軽やかに身体を操って、舞い踊るように邪悪を圧倒する。単純な実力では話にならない差があるはずなのに、痛烈ほどにマーキダは竜を翻弄しているのだ。

——これは自ら竜退治を行うと言い出す訳だ、空から眺めていたソ

ロモンはそのように感じた。並の者では恐怖で動く事さえままならない相手を前に、生と死の境界を見極めて着実に剣戟を重ねている。このような事は誰にだつて出来る事ではない。戦いに戦いを重ねた生粋の武人か、それとも恐怖の麻痺した蛮勇があつて初めて到達できる境地に他ならない。

なら、戦いをこうも美しく行ふシバの女王はいつたいどちらなのだろうか。ふと気になってしまい、過去をも見通す千里眼を用いようとして……

「いや、それは無粋というものか」

止めた。それよりもむしろ、眼下に広がる剣舞を心ゆくまで眺めていたかつた。別に彼は剣に通じているとかそういう訳でもないのに、下手に過去を覗き見るよりも遥かに良いと感じたからだ。

気がつけば戦闘も佳境に入っていた。どちらが優勢かは一目で分かる。多少攻撃が掠つたらしいマーキダではあるが、致命傷は一つも貰っていない。逆に竜は全身を鱗の上から切り刻まれ、血を流して荒い息を吐いていたからだ。

「とはいえ、怖いのはここからです。手負いの獣ほど恐ろしいものはないので」

「その通り、竜を相手に油断など愚者のすることだ」
ずっと遠くにいるはずのマーキダの眩きが、ソロモンには確かに理解できた。

格下相手にいいように翻弄され、簡単には癒えぬ傷を無数に刻まれた竜はもはや正気を失っているようにも見えた。遮二無二身体を動かし、炎を吐き、牙を突き立てようと腐心する。これまでと比べれば単調な攻撃だが、そこにはこれまでになかった必死さがあった。生き残るために、目の前の敵を打ち倒すために、なりふり構わぬ体勢だ。

——そしてこれが、これまでと違い思わぬ展開を生み出す事となる。

「つつ……」

「……！ これはいけないな」

その一撃はなんの理屈も読み合いもない、ただの苦し紛れだった。

それが偶然にもマーキダを捉え、その細い身体に打ち付けられる。彼女は反射的に剣を盾にしたものの、しかし衝撃はいつさい殺せず、吹き飛ばされて無残にも大地に叩きつけられてしまったのだ。

即座に立ち上がったマーキダだが、右腕が明らかに不自然な方向に曲がっている。今の衝撃で折れてしまったのだろう。残った左腕一本で『呪魔の剣』を握るが、そんな状態で竜を倒すことなど不可能だ。これこそが竜という、生まれからの強者にのみ許された特権なのだ。どれだけ劣勢であろうとも、ほんの少し自分の有利を生み出せば途端に形成を逆転させてしまう。理不尽にもほどがあるが、現にマーキダはたかが一撃で劣勢に追い込まれたのだから是非もない。人間と竜の間には、かくも巨大な埋めがたい溝が横たわっているのだから。

であれば、今自分がするべきことは如何なることか。自問してから、即座に答えは出た。

シバの女王を助ける。それがこの瞬間における自分が出来る最善であり、力を乞うた王として正しいことだ。だけどそんな理屈などすべてすっ飛ばして、ここで彼女に死なれるのは嫌だったから。

「これはちよつとまずいですね……！ 少々勝ちを急ぎすぎましたか」

一方で、先ほどまでと違い肩で息をしながら、マーキダは自嘲した。反省点はいくらでもあるが、それはまず生き残ってからだ。

女王を弑すべく竜が迫る。勝ちを確信したのか、それとも憎き敵を喰らってやりたかったのか、大口を開けてマーキダへと迫る。即座に躲したが、まだまだ。次の瞬間には尾が迫る。だがそれすらも奇跡的に回避した彼女に、次の瞬間には天すら焦がすような豪火が吹きつけた。

まともに受ければ骨すら残らず灰になるような地獄の火炎に、せめてもの抵抗。咄嗟の判断で呪い術まじなを介して炎を避けようと試みる。だけど所詮はその場しのぎ、万一生き残れても重傷は免れないと覚悟して――

「だから言ったじゃないか。少しくらい私を頼ってもらっても良い

と」

「あ……」

目の前に、魔術王が降臨していた。

いつの間に船から降りたのだろうか。マーキダの前に堂々と姿をさらした彼は、右手を前に突き出していた。たったそれだけの動作で炎は二つに割れて、二人の横を通り過ぎていく。身体には火傷一つついてはいなかった。

「ソロモン王……別に貴方の手を煩わせる必要はないと言ったはずですが」

「まず前提として、君はイスラエル王国にとつての大事な客に他ならない。だというのに客にばかり苦勞を押し付けて、王が何もしないなど失礼にもほどがあるだろう?」

「それとも、こうして手伝うこと自体が失礼にあたるかな?」と問えば、女王は嬉しそうに「いいえ」と答えた。だからソロモンは誰に憚ることなく竜と対峙する。これより竜は彼の獲物だ。もはや女王といえども譲る気はない。

「君は特等席で見ていると良い。なに、そう時間は取らせないさ。君の剣舞には些か劣るだろうけど、それなりに美しいものを見せると約束しよう」

「ふふつ、では期待させてもらいますね。またも助けてくれて、本当にありがとうございます」

「……なるほど。なら、その気持ちは受け取っておこう」

「……! ええ、そうですよ、その調子です!」

姿は見えないが、きつと今の彼女は満面の笑みを浮かべているのだろう。千里眼を用いなくたってそれくらい容易に想像できる。そんな彼女に、魔術王として格好のつかない真似は見せられない。

「さてと、では続きといこうか。あいにくと私もそう簡単には倒れられないのでね、君にはここで死んでもらおう」

魔術王の異名は、魔術を使わないでこそ保たれた異名であるのだが……やはりそう、シバの女王の前では気にする必要はないだろう。彼女の前でだけならば賢王としての自分ではなく、素の自分を見せても

良いのだから。

だから彼は心地よい解放感のままに、竜へと啖呵を切ったのだ。た。

◇

結局、ソロモンが出張ったことで竜退治はつつがなく終わってしまった。魔術王に相応しい強大な魔術と召喚術による猛攻に、竜もたまらず打倒されたからだ。かくしてイスラエル王国を襲った脅威は過ぎ去った。

その死骸はどうか舟で引つ張ることにして、エルサレムの方で有効活用できないか考える所存である。竜はいうなれば神秘の塊であるわけだから、その死骸も多くの使い道が存在するのである。

「ソロモン王」

「おや、なんだい？」

夕暮れの鮮やかな色が空を染め上げる頃。帰路の途中の事だった。振り向いた表情はどこまでも華やかで、夕焼けの色がついたそれは何よりも美しいと感じるほど。

ちなみに、彼女の右腕は既にほとんど治っている。魔術による治療のおかげだ。

「竜退治という華のないものではありませんが、それでも私は非常に楽しかったです。貴方はどうでしたか？」

「そうだね……」

楽しかったか？ 怖かったか？ 辛かったか？ 面白かったか？

感情を表す様々な言葉を自分に当てはめてみて、もつとも適していると思しき答えをはじめ出す。いや、きつと最初から答えなど決まっていたのだらう。そうでなければ、こうも簡単に答える事などきつとできなかったらうから。

「普段よりも少しばかり違う気分になれた——ような気がするよ。竜退治という滅多にない大業に、もしかすれば昂っていたのかもしれないね」

「ええ、そうだと良いですね。だって私は、とても楽しかったから。貴方もそのように感じてくだされば、これほど嬉しい事はございません

ん」

「……そうか」

竜退治なんて辛い事を楽しいというその精神が、ソロモンには理解できない。そんなこと、誰だって嫌で嫌でたまらないはずなのに。

だけど他ならぬソロモン自身が、別段嫌だったと感じていないのだ。それは感情を介さない故に起きた事象かもしれないが、それでも露程だって嫌とは思わなかった。

ああ、本当にそうであるならば、きっとこの身はシバの女王によって魔術を掛けられていたのだろう。甘くて蠱惑的な、逃れようのない幸せの魔術に。思いも知らぬところから、それはやって来ていたのだ。

「君が楽しんでくれていたなら、それで良いさ。私としても安心したよ」

そう言ってからマーキダの頭を撫でてみれば、彼女は嬉しそうに喉を鳴らしたのであった。

第四話 魔術王と幻想女王 IV

シバの女王マーキダがイスラエル王国にやって来てからいよいよ二か月余り、あと二、三日も経てばイスラエル王国より出立し故国へと帰還するという段階にまでやって来た。それ故にエルサレムの民たちは女王の送別式ともいえる事柄に大忙しであり、またシバ王国側も段々と帰還に向けた準備で忙しくなっていた。

もちろんこれらの事にはソロモン並びにマーキダもまた関わっており、連日指示を出したり予定を取り決めたりと忙しくなってくる。そうなれば互いだけの秘密としている“心に関する講義”の時間が取れなくなってしまう。

「ああ、どうしようどうしよう……こういう時に何かいい知恵思い付いてよ私……！」

故に、マーキダは非常に焦っているのだった。

場所は変わらずマーキダに与えられた客室。品の良い部屋の大机に二人して向かい合う。

「何をそう焦る必要がある。これまで通り、あらゆる手を試してみればいいじゃないか」

「それはそうですね……時間が無いんですよ本当に。そもそもなんでどうの本人がそんなに他人事みたいな態度なんですか。これを逃せば心を知らないまま終わる可能性が出て来てしまうのに」

「それこそ焦る必要は無い。元から私には心といった機能が備わっていないのだから、例えば君が失敗したとしても大した痛手には感じないさ」

事実、ソロモンはここまで来てもお変わらなかつた。いや、それでも多少は変わったのかもしれないが、少なくとも表面上は何一つ変化が無い。さすがのマーキダもこれはマズイと焦っているのだが、そういう時に限って良い知恵は浮かばない。実に八方塞がりであり、その顔はいつそ悲痛ですらあつた。

「痛手には感じないなんて、そのような悲しい事を言わないでください。このまま行けば貴方は人並の幸福すら得ることなく死ぬのです

よ？ それではあまりに哀れでなりません。人は、心あつてのものなのですから」

「……難しい命題だ。人に心が無ければならないというなら、では私は何だ？ 確かに私は心を解さぬ非人間、客観的に見てそうだという自覚はある。しかし私は間違いなく種別として人でもある。この差は一体奈辺にあるというのだ」

「差などありませんよ、間違いなく。私が断言しますが、貴方は人間です。ただ、人らしい事を何一つ出来なかったただけのこと。それさえどうにか出来れば誰に恥じることもない人間ですとも」

「まただ。またもやマーキダはソロモンは人間だと言う。しかしその言葉にはただの酔狂でも気休めでもない、奇妙な説得力があった。まるで自身が同じ事を体験したかの様な口ぶりだ。」

「もしや経験があるのかい、そういったことに？」

「まあ、貴方とはあまりに度合いが違います。が似たようなことは。私はずっと親に先立たれて、おそろく四歳くらいから孤児でした。運よく私には戦う才能と知恵が有って、そのおかげでどうにか山中で生き延び育つことは出来たのですが、しかし長らく人の営みから外れて生きていたせいで情緒も弱く、はつきり言つて不格好な人間となっていました」

人々の中ではなく野生に生き、厳しい時間を過ごした。何度も痛い目に遭つて、死に掛けたりもした。それは何と言う壮絶な経験だろう。それでも、彼女には転機があったのだ。機会があったのだ。

「おそろく十歳くらいのある日、私はアクスムの心ある方に拾われました。それ以降は人々の暮らしの中で過ごしたのですが、そこでようやく私は人らしい情緒を得ることができたのです。そして感銘を受けました。『心とは何と不思議で、素晴らしいものなのだ』と。そのための勉強も苦ではありませんでしたし、とりわけ愛についての数多の話は私の心を豊かにしてくれました。だからこそ、最初の知恵比べで賢者たる貴方にも訊ねてみたかった」

「まあ結局はダメでしたが、そう苦笑するマーキダに、ソロモンは何も言葉を返せなかった。確かに程度は違うだろう。彼女は生ま

れた時から王として定められたわけでもないし、心ある人間に拾われ呆気なく人となった。しかしそれでも、元非人間が言う言葉にどうしようもなく思う所があった。共感という機能が初めからないソロモンをして、それなりに感じるものがある。

——それはもしかしたら、同族意識なのだろうか。

「だから、貴方は絶対に人間です。人間になれるのです。私はそれを誰よりも知っています。諦めません、最後の一秒まで貴方を人間にする努力を続けます。それが、唯一私が貴方の先達に成れる事だから。先を行く者としての責任です」

「なるほど、よく分かった。うん、それなら君が私の真実に気づいた理由も納得できる。これ以上ない程にだ」

「あ、いや、別にこれだけが理由でもなくてですね……」

「どどん尻すばみになるマーキダの声。しかも顔が湯だったように赤くなる。」

「と、とにかく！ こうなったらなりふり構ってはいられません！ まずは基本に立ち返りましょう。笑顔は何より原始的で、かつ基本です。こればかりは私も最初から備えていましたとも。はい、笑って笑ってー！」

伸ばされた指がソロモンの口角を捕らえ、強引に吊り上げる。そして半ば強制的に笑みを浮かべさせたところで指が離れ、彼女の方へと戻って行く。そしてマーキダと言えば、何故だかその笑みが引き攣っていた。

「け、けっこう口開きますね……なんとというか禍々しい、いえつ、なんでもありません、十分素敵ですとも。そうですソロモン王、その笑みを忘れなければまずは人間への第一歩です。絶対に忘れないでくださいよ」

「まあ、善処しよう。この顔の形だな」

「や、やっぱりもう少しだけ控えめでも良いかもしれません。きつと妃方たちが怯えてしまいますので」

「いや、結局どっちなんだい」

「あ、その顔ですその顔です。今のは結構自然な笑いでした」

そうして、和やかな時間が過ぎていく。片や人間となった幻想女王、片や非人間の魔術王。しかし彼らは間違いなく、今この時を享受できていた。

と、しばらく時間が経過したところでマーキダが懐から一本の小瓶を取り出した。それは前にお忍びでやって来たダビデ王より預かった物、“時間が無くなりどうしようもなくなった時に扱え”と言われた液体であった。

「それは？」

「とある人間の屑様から預かったものでして。詳細は不明ですが、なんでも二人きりの時にこれを私が飲めば、貴方の心を動かせるかもしれないと」

「……そのようなものが存在するとは思えないが」

「同感です。しかし今の私は一縷の望みにも継りたいのです。もう時間が無い以上、いい加減これの使い時でしょう」

そういったマーキダは何の躊躇いもなく小瓶の中身を飲み干した。珍しくソロモンも次に何が起きるのか見物していたが、しかしいつこうに何も起こらない。ただ気まずい沈黙が両者の間に横たわる。こうなればいつそ千里眼で未来を見てみるか、ソロモンがそう考えたところようやくマーキダが反応を示した。

「あのー……やけに体が熱いのですが、これはお酒なのでしょうか？」

「いやでも私は結構お酒には強い体質のはずなのに……」

「——その薬、私の父から貰った物か」

「あ、はいそうです。規格外の千里眼の前に隠し事は出来ませんね」

素直に称賛するマーキダだが、さすがにソロモンは例の小瓶の中身の見当がついた。一応は愛多き王と呼ばれる身、数百人の妃に妾が居るといふのは伊達ではない。悲しいかな、愛は一切ないのだが。

「間違いない、おそらくそれは性的興奮を昂らせて行為を円滑に進めるための——」

「いやちよつと待ってください真面目な顔で解説とかこっちが恥ずかしいですからー」

「そうか？ 恥ずかしいと言われても全くそう思えないが」

「こんなところで非人間芸されても困りますよ……」

呆れたように嘆息する彼女だが、既にその顔は紅潮している。一瓶丸々飲み干したのだから、薬の回りも当然早いのだろう。あるいはあのダビデ王の事だから、余程強力な物を持ってきたのか。どちらかと言えば後者の方が可能性は高い。

しかし今は目の前の女性の事だろう。哀れにも男の前で飲み干してしまった訳だが、幸いにしてソロモンはそうだったことで我を忘れる程人間をやっていない。すぐにも解毒薬を持ってくれば終わらだろう。

ただ、

「こうなれば、この状態を解決するために貴方のお知恵をお借りしたいのですが、よろしいでしょうか……?」

逆

◇

とうとうシバからの賓客たちが帰還する日がやって来た。イスラエル王国の首都エルサレムのやや郊外にはシバからやって来た大勢の家臣たちが、ソロモン王より授けられた色とりどりの財宝と共に肅々と待機している。彼らの大部分はラクダや魔術的な荷車を用いた徒歩の者だが、その背後には銀に輝く巨大な舟が一隻鎮座している。いつか竜退治にも用いたこの舟は、今度こそ女王の足としての本懐を果たすことだろう。

エルサレムの民も興味と惜別の念の入り混じった様子で見学に来ており、遠巻きに見つめている。そんな彼らの前にはソロモン王を先頭にいたイスラエル王国の重鎮たちが立っており、最後の別れを女王に告げていた。

「では今日でお別れだ。君たちの来訪は中々興味深いし愉快だった。礼を言おう、そしてまた何時でも来るが良い」

「こちらこそ、大変有意義かつ素晴らしい時間でした。我らシバの民にとって、このイスラエル王国は永久に盟友として記憶されることでしょう。我々はあなた方をいつだって歓迎いたします」

互いに微笑みながら美辞麗句を並べていく。しかしそこには本心

が無い。いや、マーキダは本気で言っている。だがソロモンは対外用の言葉を話すのみ、二人きりの時の様な本音は断じて漏らしていない。これもまた良き王と一般には知られるソロモン王の技術なのだろう。

女王の方は未だに痛みの残滓が残る体を誤魔化し鞭打ちながら、そしてソロモンの方は文字通り心にもない言葉を並べる。その姿はある意味異様でもあった。

「あの、最後に一つよろしいでしょうか？」

「構わないよ。未だ私の出した約束は続いている」

「では一つだけ。こちらに耳を御貸しただけですか？」

ソロモンはマーキダに近づき、背を曲げて耳を口元に近づけた。

「これまでの事を、本心から楽しかったとお思いですか？ 貴方は今、どう感じていますか？」

いきなり核心に触れる言葉にも、ソロモンは動じない。ただ普段通り、泰然とした態度だ。

「別段、何も——と言いたいところだが……何故だろうか、少しばかり知らない感覚が混じっている。これをなんと形容すればよいかは分からないが、ああ、悪い気はしないとも」

「ふふ、そうですね。ならば貴方は一步人間に近づきました。どうやら今の私ではこれが限度のようですが、それでも貴方にとっては大きな一歩です」

確かに態度はいつも通り、けれど答えの内容がほんの僅か、さほど致命的に違っていた。それはもしかしたらあり得るかもしれない、感情の萌芽なのか。現時点ではほぼほぼ非人間のままなのは間違いないが、それでもこれまでとは明らかに異なるあり方だ。

「それはきつと、楽しかったと形容するのですよ。そしてその気持ちを忘れないでください。たぶん、世界には貴方の知らないこともたくさんあるでしょう。千里眼だけじゃ決して見えないものが。そういった事物を目にした時に、今の気持ちを思い出してください」

「私にそれが出来るのならば」

「出来ますとも、大丈夫ですよ。そしてそうですね、その時こそ私は貴

方に言いたいことがあります。きつとその時が来ると信じていますから」

囁くように、祈るように紡がれるその言葉を以て、最後の二人きりの会話は幕を下ろした。魔術王はイスラエル側に立ち、幻想女王は銀舟へと乗り込む。たった二ヶ月、けれどどこまでも濃密だった一時は終わりを告げる。

「それではイスラエル王国の皆さま、暖かい歓迎をありがとうございます！」

そうして、魔術王ソロモンと幻想女王マーキダの道は分かれた。風を起こし浮かびあがる銀の舟を見つめるソロモンの瞳には、一体何が映っていたのだろうか。

◇

こうしてシバの女王は無事に自らの王国に帰還し、その後一人の男の子を出産したとされる。この長子こそが後に三千年もの長い間存続した大帝国たるアクスム王国を打ち建てた、かのメネリク一世とされる。彼の父親は偉大なる賢者ソロモン王ともされており、また伝承においては彼の下に赴き『契約の箱』をアクスムにまで運んできたとすら語られる。その他多数のユダヤ人を帝国に招き善政を敷いた彼は賢君として名高い。

反して、彼の母親であるシバの女王の伝承は極端に少ない。かの時代に於いてどのように国を治めたか、どのように生きたのか、どのような思いを抱いていたのか、確証のある物語は殆ど残っていない。彼女はただ唐突に、シバ王国の歴史ごと世界からその姿を消した。故にシバ王国は一代にして名を変え、アクスム王国と名を改める。

果たしてこの時何が起きたのか、それを語る資料は何一つない。一説にはソロモン王もまた事態に気づいたが、彼は何一つ語ることなくこの世を去ったとされている。彼すらも見通せぬ何かが起きたのか、それとも彼自身知りながらも認められなかったのか。理由は定かではないが、一つだけ言えるのは、この両者は二度と再び会いまみえることは無かったという事だけだ。

第一章 人理継続保証機関フィニス・カルデア

第五話 カルデアにて I

無機質な電子音が室内に響く。簡素な机の上にはこれでもかと思われに様々な資料が散乱し、電源の点いたパソコンが光を放っている。また周囲には食べ掛け、ないし食べる前の菓子類がそこかしこに置かれている。

そしてこの部屋の主、ロマニ・アーキマンは目覚ましの立てる音で目を覚ました。ベッドから身を起こし、立ち上がる。時間を確認すれば、彼が寝てから既に二時間も経っている。途轍もない損失だと彼は内心で嘆き、急いで身支度を整える。

——人理継続保障機関フィニス・カルデア。人理焼却を防ぐ最後の砦たる組織であり、最後の希望でもある。既にこの組織は第一の特異点、人理焼却の一翼を担うオルレアン^①の聖杯を回収するという成果を挙げている。命を懸けて危険に飛び込み見事解決に導いたのは若き少年のマスターだが、その快拳の裏には多くの目に見えない支援が存在する。

故にこそ、目に見えない支援をこなす代表たる所長代理Dr. ロマンは一秒一秒が何より惜しかった。彼は天才ではない。あくまでも凡庸な人間だ。やれる事には常識的な制限がかかるし、どれだけの時間があるかと足りないくらい成すべきことが山積みとなっている。

しかしそれでもやらねばならない。そうでなければ人類は跡形もなく滅びるのだから。あらゆる物事をこなせる天才で無いのなら、ただひたすらに走り続けたいだけの事。今のロマニ・アーキマンの精神はまさにこのような思考を取っていた。

そうは言っても限界はある。なので薬などで誤魔化していた身体をひとまず休めるために休息を取ったが、それにしても二時間は寝すぎである。故にロマンは大慌てで支度を終わらせると部屋を飛び出そうとして、不意に自身の携帯端末に連絡があることに気が付いた。

「藤丸君からか……ああ、そういえばこれくらいの時間に」英霊召喚

“をするって言つてたっけか”

内容は英霊召喚を実行するため、よければ来ないかというお誘いだ。彼が休憩を取っていることも考慮してか強く勧めてはいない。だから行かなくても無論良いのだが、何故だかこの時ばかりは彼も行ってみようかという気になっていた。

別段ただの息抜きではない。最初に顔を合わせておけば組織の仮トップとして円滑な関係が築けるし、そうなればいざという時も融通が利く。それにロマン自身、白状すれば英霊達を見るのは嫌いではない。

「さて、行先変更かな。それとお供え物でも持つて行ってみようか」

一人ごちて笑いながら、置いてあつた饅頭の箱を小脇に抱える。せつかくだからとマスターである彼とそのサーヴァント達へのお土産を持参するつもりなのだ。勿論、彼自身食べる気はあるのだが。

そうして若干足取りも軽く清潔な白い廊下を進んで行く。途中で職員とすれ違うことは無い。広大な内部構造に対し、職員の数は一時的に不足しているのだ。

およそ五分ほど歩き、目的地に到着する。扉を開ければそこは広い空間、いわばトレーニングルームとも言ふべき環境であつた。体育館より少し狭い程度の大きさを持つその中央には、果たして五人の人影があつた。

「先輩、ドクターが来ましたよ。メールを送つてから二十分ほど経っています、ちょうど良いタイミングです」

まず彼に気が付いたのは眼鏡に白衣がトレードマークなマッシュだ。特異点であるデミ・サーヴァントとしての格好は鳴りを潜めているが、床には彼女の用いる盾がセットされている。簡易的な召喚陣として用いているのだろう。カルデア側にも召喚サークルはあるが、別段どちらを使おうと差異は無い。

「いやー、確かにちょうど良かったけど、少しばかり遅れてますよ。もう一人召喚しちゃいましたから」

「おや、それは残念というべきなのかな。まあボクの事は気にしないでくれ」

「すみません、気を遣わせて。それよりあっち、早速すごいことになってますよ」

人類最後の希望、四十八人目のマスターである藤丸立香と談笑しながら、示された残りの三人の方へと目をやる。そこに居るのは全員が英霊、人類史にその名を残した偉大なる者たちだ。

「ほう、まさかお前が召喚されるとは。この俺を最初に呼び出すどうしよくもない不運といい、つくづくウチのマスターはサーヴァント運がないらしいと見える」

「あら、それはもしかして私に言っているのかしら？」

「当然だろう、鉄拳聖女め。あれか、その杖は飾りか？ 拘束具か？

こいつは素晴らしいな、師より貰った装備がまさかハンデになるとは。まあお前らしいと言えばその通りだが、中々に肉体派な聖女な事で」

「誰が肉体派聖女よこのガ——んんっ、いえ、なんでもありませんよ。この程度で怒るようでは聖女など務まりませんから」

「聖女ならばせめてもっとマシな服を着てこい、この痴女め！ 聖職者というのはどいつもこいつも変態でなきやいけない法則でもあるのか？ その辺り是非俺に語って見せてくれ、面白おかしく童話にしたためてやる」

「いい加減にしなさいよこの似非作家——！」

間違いなく偉大な存在達、使い魔の枠に収まらぬ強大なサーヴァント。ではあるのだが、如何せん頭の悪いやり取りをしているのが見て取れる。両者、ハンス・クリスチャン・アンデルセンと聖女マルタはそのまま取っ組み合いに入り、一瞬でアンデルセンが組み伏せられていた。彼は自他ともに認める最弱のサーヴァントゆえ仕方ない。

「各人、そこまでだ。それ以上の無軌道は悪手だろう。マスターの手を煩わせることになる」

そして止めに入ったのは黒い甲冑を纏った薄すぎる金髪の少女、立香達からはセイバーオルタと呼称されている黒き聖剣の担い手だった。普段の鎧は脱いでおり、その下のドレスにも似た服装が露出してあるので愛らしい。だがその実態は完全なる暴君であり、けれどどこ

となくマスター相手には気を遣わない事もない存在である。

彼ら三人に加えてシールダーのマッシュ・キリエライトの四名が、現状このカルデアで戦うサーヴァント達だ。正確にはマルタはたった今召喚されたのだが、彼女は既に先の特異点で知った相手だ。本人にその時の記憶はないだろうが、あの様子を見るにおそらくはすぐに馴染むことだろう。

「あはは、あつちはまた楽しそうなことになってるね……それで藤丸君、すぐにでも二人目を呼び出すのかい？」

「ええ、早めに来てもらった方がここに馴染むのも早いでしょうし。たくさん一気に呼ぶのは危険だから無しにしても、二人までなら安全だと言ったのはドクターじゃないですか」

「ああ、そうだったね。よし、それじゃあ早速召喚しようじゃないか！ボクもぶつちやけ殆ど召喚とか見たことないからね、結構楽しみなんだ」

言いながら彼は持参して来た饅頭の箱を召喚サークルの前に置く。完全にお供え物の様相を呈している事に立香とマッシュが苦笑し、セイバーオルタが敏感に食べ物の気配を感じ取って振り向いた。

「ロマン、それは何個入りだ？ まさか召喚された奴に全部渡すとは言うまいな？」

「全部で十二個、ちゃんと一人一個ずつは最低でも配るから安心してくれ。それよりも——」

振り返った先で光が溢れ、その眩しさに思わず目を^{すが}眺める。立香が置いた三つの聖晶石が召喚サークルと反応し、英霊の座にアクセスする鍵となっているのだ。などという事をロマンが考えているうちに石が完全に魔力となって融け去り、いよいよ白い光が臨界点に達する。英霊召喚、本来なら人の身に余る奇跡が実演されるのだ。

「ふん、人類の希望を守る為の光か……俺には少々眩しすぎるな」

アンデルセンがそう吐き捨てたと同時、召喚サークルの光が収まった。そして代わりに人ならざる者がそこには立っている。目立つのはドレスにも似た黒い服装、亜麻色の長い髪、そして赤い瞳。女性にしてはやや長身なその姿を認識して、ロマンはしばらく思考が停止し

た。

「サーヴァント、キャスターです。微力ながら人理修復の手伝いに参りました。よろしく願います」

「ええっと、オレは藤丸立香と言います。縁あって人理修復をしている駆け出しマスターですが、どうぞよろしく願います」

「丁寧な対応感謝します、マスター。それと、別に私に敬語は使わなくても良いですよ」

上品に笑ったその姿はひどく整っていて、そしてロマンからすれば見覚えのありすぎる姿だった。止まっていた思考が動き出し、次いで大声を出しそうになるのを必死に堪える。そのまま立香がマッシュや他のサーヴァントを一通り紹介し終えたところで、いよいよロマンの番が回って来た。が、彼はその前に既にさりげなく部屋の出口まで歩いていて、逃亡する準備を整えてしまっていた。

「で、最後にドクターロマン……ってアレ、どうしたんですドクター？

なんでさりげなく部屋から出ようとしているんですかー？」

「ああいや、ちよつと用事を思い出してね。その饅頭は君たちで食べてくれ！」

そこまで言っただけでひとまず部屋から脱出を企てる。彼としてもこれは想定外だ。ちよつと前に夢で見ただけの、ソロモン自に多大な影響を与えた女性に対して向かい合う心の準備が出来ていない。果たして何を話すべきか、そもそも自分の正体をどうするのか、彼女はこちらをどう見て来るのか。あらゆる面で心が混乱をきたしている。

なのでチキンな彼は不要なリスクを抑えるべく外に向かおうとして、その前に腕を掴まれた。思わずゆっくりと振り向けば、微笑を浮かべた幻想女王の顔がある。

「まだ私は貴方の事を聞いていません。せめて名前だけでも教えてはもらえませんか？」

「あ、あー……ボクはロマニ・アーキマン、このカルデアの所長代理をしている者だ」

「なるほど、そうでしたか。なんとなく頼りなさそうに見えたのです……が……」

と、急に浮かべていた微笑が表情から消え去った。今度はいったい何なのだ、ロマンの思考が諦めの境地に入りそうになる。それを楽しく見物していた五人も召喚直後のまだ真名も分からぬ女性の反応を見て首を傾げていた。

「……似ている、だけど似ていない。気のせいでしょうかね？」

「な、何がだい？」

「私にとっての大切な人ですよ。そうですね……十戒に曰く、神は人が人を裁いてはならないと言いました。何故だと思えますか？」

「人が人を裁くときは情が移ることが多々ある。だからこそ裁けるのは人の情を解きぬ神か、それに準ずる者だけである……って事かい？」

「その言い回し、やっぱり似てますね……でも彼のわけがありませんし……」

マズイ、墓穴を掘った。ロマンが冷汗を流している真正面でキャスターとして呼ばれた彼女はしげしげとロマンを見つめ観察してくる。間違いなくロマンとソロモンは別人のはずなのに、どうしていきなり注目したのか。その思考回路が分からない。まあバレても実害はないはずなのだが、彼の個人的な心象としては出来るだけバレたくないのだ。何せ気恥ずかしいしどんな事を言われるか分かったものではない。

——そもそも、聖杯に願うまで結局非人間だったという負い目もあるのだから。

「うーむ、すみません、今のは忘れてください。私の勘違いのようです。申し訳ありませんでした」

「あ、ああ、気にしないでくれ。それより、君の真名を聞いてもいいかな？　大まかな事は分かっているだろうけど、今のボクらは聖杯戦争をしている訳じゃない。だから真名を秘匿するメリットはほとんど無いし、明かしてくれとありがたいのだけど」

どの口がそれを言うのだと思わずロマンは自嘲してしまふ。だが彼の言が正しいのも事実で、彼女はすぐに後ろに向き直ると非礼の詫びに優雅に一礼をする。

「そう言えばそうでしたね。すみません、自己紹介が遅れてしまいました。私はマーキダ、キャスターのクラスで参上致しました。シバの女王といった方が通りが良いでしょうか？」

「シバの女王？」

「旧約聖書は列王記に記されている女王のことよ。私達キリスト教の信者にとつてもある程度聞き覚えのある名前です。特にソロモン王とのラブロマンスが有名だとか」

「シバの国は実在が疑われており、故にその女王は『幻想女王』などと呼ばれたりもしています。先輩にとつてはいきなり二人目の王様系サーヴァントですね」

立香の疑問に順にマルタ、マシユが答えていく。彼からすれば確かに二人目の王様系だが、まあ何とかなるだろうと考える。そして話題の本人であるマーキダと言えば、すぐそこに居たアンデルセンに関心を奪われている。

「それにしても、やっぱり随分と小さな子ですね。こんな子もサーヴァントとして戦うなんて難しい世の中です」

「はっ、何を言うかと思えばそんな事か。音に聞こえたシバの女王の知恵も衰えたか？ 生憎だが、俺は大人だ。世の中の難しさなんざとつくの昔に学んでいる」

「なっ……ず、随分と個性的な声ですね……いや、その、すみませんでした……」

「詫びなど要らん。その代わりに、お前の価値を存分にコキおろし明かしてやろう。お前があの子キンで人畜無害な男に何を見たのかも、な」

「なんで僕の扱ってこんなにひどいんだろうね……」

ロマンが天を仰ぐようにして零し、けれど上にあるのは無機質なトレーニングルームの天井だけだ。やっていられないとばかりに先の饅頭を探せば、既にセイバーオルタが開封している。どうやら彼の気遣いは腹を空かせた獅子の胃袋にすっぽり収まる運命らしい。もうそちらはどうしようもないので、ひとまずこの場を収めにいく。

「とにかく、人類最後の砦たるカルデアによろこそ。ボクらは君たち

を歓迎し、そして君らの力を以て人理修復に臨む者だ。だから当てにしたい、大丈夫だね？」

——返ってきたのは、力強い頷きだった。

第六話 カルデアにて Ⅱ

特異点の発生は人理焼却に起因するものであり、歴史上に発生した染みの様なものだ。いわば泡沫の夢、触れば消える儚いものであり、同時に残しても異物を抱えたまま消してもいけない危険物。ではこれの原因を排除し解決した後に、その特異点は綺麗さっぱり無くなるのか。

実はそうではないらしい。

『あー、テストス。そっちの様子は大丈夫かなー？ 良ければ返事をしてくれたまえ』

「問題ない。肉体、精神ともに良好だ。世界の状態にも異変は無い」
カルデアから届いた軽い調子の通信に、慣れた様子でセイバーオルタが返答する。中天に輝く陽の光を受けた彼女は既に剣を抜いて黒の鎧を着こんでおり、臨戦態勢を整えていた。そしてその横に立っている聖女もまた杖を握り、幻想女王は鎖に縛られた本を小脇に抱えている。

ここは第一特異点の残骸、いわばオルレアンの残滓である。人理修復は確かに完了した。現状ではこの特異点が人理焼却の原因となることはあり得ない。しかしすべての特異点を修復し、人理焼却の阻止が出来るまではこうして一部の要素がそのまま残留するらしい。まだ新参者のマーキダには詳しいことは分からないが、ここに来る前にこのような説明を万能の天才を名乗る者から受けていた。

「ここが特異点ですか……現実と何ら変わることは無いのですね」

『それはそうだとも。そこは人類史のIF、こうだったかもしれないという記録の残滓だ。むしろ現実から大幅に乖離している方が大問題さ』

「確か私はここで敵として立ちはだかったとか……なんだか気が重いわ」

「気にするな。あの時は私がお前の竜ごと聖剣で薙ぎ払ったからな、大した障害ではなかった」

「……それはそれで弱いつて言われているみたいで複雑ね」

『まあまあ、あの騎士王が相手なのだからあまり気にしないことだ。むしろカルデアの魔力供給があるとはいえ躊躇なく聖剣をぶっ飛ばす方が余程おかし』

うんうんと相槌を入れて来るのは、カルデアの誇る天才にして変人、英霊召喚第三号たるレオナルド・ダ・ヴィンチその人であった。今はカルデアからの通信は音声しか届いていないが、仮に映像も追加すればその整いすぎた絵画の様な美貌が晒されることだろう。

「えーと、それで今回の目的はワイバーンから？ぎ取れる素材の回収でしたか。何に使うのですか？」

ダ・ヴィンチちゃんに問いかけながら、マーキダは手に持った袋を見る。それは中に入れた物をカルデアに持ち帰ることを可能とする特別な袋だ。

『それはもちろん、私の趣味の為だ。本来なら自分で採りに行くのも吝かけちじゃないが、それでもカルデアのリソースの一角を任されている故、気軽にレイシフトするわけにもいなくてね。簡単なお使いクエストだと思って諦めてくれ』

「ふん、これに戦力確認という明確な利点が無ければ一も二もなく断った所なのだがな」

『いいじゃないか、せっかくカルデアで集った女性英霊同士、ここは女子会としゃれ込むのが筋じゃないかな？ マシユはあいにく立香君との英霊勉強会で来れてないが、まあ悪くはないだろうさ』

「……えっと、貴方は本来男性なのですよ？ 男性が女性の肉体……これは主の許しに入るのでしようか……？ そもそもその状態で姦淫を行った場合は男色？ それとも普遍的な営み？ これは一体どちらなのか——」

「あー、ストップストップ。なんだかソドムとゴモラな方向に思考が走ってますよマルタさん。私もちよつと変人すぎてついて行けません、あの人はもうそういう物と諦めた方がいいんじゃないかと思えます。そもそもアーサー王だって女性なのですから今更じゃないですか」

「はあ、それもそうね。見かけの情報に踊らされるだけじゃ見えるも

のも見えなくなるか」

男性なのに女性。誇張でもなんでもなくこの矛盾を両立する希代の変人については深く考えた方が負けだ。そもそもロマンは彼と呼ぶし、マシユは彼女と呼ぶしで定まっていけない説すらある。特異点一つ分先輩のセイバーオルタはもはや気にしていないが、新参の二人はまだ慣れていないらしい。

ともかく今回の目的はそのダ・ヴィンチちゃんの依頼、ちよつとしたお使いと戦力確認を主にしている。本来ならばマスターが居なければレイシフトも不可能なのだが、こういった特異点の残滓には英霊だけで干渉することも可能らしい。故にこの場に居るのは人外の三人のみ、いくら派手に暴れようと問題はない。

『さてと、そんな馬鹿話をしている内にワイバーンの群れを発見した。ここから北東にしばらく行った先に複数の反応がある。たぶん三十はいるだろうが、それくらい君らならばどうという事はないだろう？ 竜退治の逸話を持つ英霊達よ』

ダ・ヴィンチちゃんの問いかけは揶揄するように、けれど確信を持って持っている。

「無論だ。総て我が剣の錆にしてくれよう」

黒の騎士王が獰猛に笑った。

「それでも山で生き延びていた間は亜竜を狩って食い繋いでましたし、割とワイバーン狩りは得意分野です」

幻想女王が静かに微笑した。

「はあ、たまには娑婆で暴れるのも悪くない……かしら？ 足を引く張らない程度に頑張るわよ」

聖女が憂鬱そうに苦笑する。

女子会とはあまりにかけ離れた内容だが、誰もそのことに突っ込まない。もはや語るに及ばず、こうなればやるだけやるのが得だと思いなおしたのだった。

◇ 「フツ——」

黒の剣閃が翻る。神速で振るわれた一撃は容易くワイバーンの首

を刈り取り、血しぶきを巻き起こす。更にその剣圧だけですぐ近くのワイバーンの翼が挽げ、次の瞬間具足によって地に堕ちた頭を潰され絶命した。

それは暴虐。殺戮の意志だ。セイバーオルタが通った後には何も残らない。あらゆるものは破壊され、その命を終わらせる。さあ、見るがいい。雑多なワイバーンなどどれだけの儂い存在に足らず。剣の一振りで容易く殺されていくだけの儂い存在。何人たりとも騎士王の歩みを妨げることは出来ない。

「行くわよタラスク、あんまり破壊しすぎないようにね！」

爆炎が宙を舞った。鉄甲竜の一撃がワイバーンを襲い、あっけなく燃やし尽くす。太陽にも例えられる炎を掻い潜り近づいて来たワイバーンは、竜の鋭い爪の一撃で紙切れのように引き裂かれるか、マルタの一撃の前に粉々に粉碎された。それはまさに圧倒的な力であり、同時に聖女の手綱に置かれたかのタラスクの脅威を何より強く伝えていた。

幻想種の中で最も優良とされる種族は竜だ。ワイバーンも確かに亜竜の分類であり、それはつまり竜種の系譜に掠る事にはなる。だが本物の竜ではない。なればこそ、リヴァイアサンの落とし子たるタラスクを前にして敵う事などありえない。砥がれた爪も牙も一切悉く無益なり。あらゆるものを弾く鉄甲の前にはあまりに無力だ。

「こういう時は相手に反撃の暇を与えず、広範囲の一撃でまとめて刈り取るのが早いでしたか。久しぶりにやるので体が鈍っていきませんね」

ぼやきながら書物を抱え、剣を引き抜いているのはマーキダである。彼女は少しばかり剣で自身の指に傷をつけると、滲み出た血を鎖の書物、『智慧と王冠の大禁書』の表紙に押し付けた。

その効果は明白、かつ絶大だった。空中を飛翔するワイバーン達が突如として首や翼を落とされ、呆気なく墜ちていく。反撃の機会など絶無、接近する前に事は終わっている。剣を振るう必要すらありはしない。宝具によって増幅された呪術の一撃。それはもはや不条理と

呼ぶほかなく、引き起こされた風の一撃は死を招き寄せて憚らない。

三者が暴れる様はワイバーンからすれば理不尽というほかなく、逆に三人からすれば特別な事など何もない。それでもワイバーン達もまた生き抜くために仲間を引き寄せ、当初の三十はとうに狩りつくされた後ですら膨大な数が空を舞っている。

「そう言えばマーキダよ。先ほどワイバーンの肉を食ってたと言っていたが、アレを調理出来るのか？」

まさに剣で一体斬り落としたセイバーオルタの口元には、微かな笑みと期待が浮かんでいる。何処までも余裕を感じさせる佇まいだが、実際のこの騎士王からすれば今の状況は半分寝ていようとどうにでもなるだろう。

「それなりの料理には出来ますよ。すっかり火を通せば安全ですし、見た目も味もそんなに普通の肉と変わりませんから。せつかくですからこの肉を少しばかり持ち帰って、カルデアで調理しましょうか。私、これでも料理は得意なんですよ」

「……あなた達、仮にも戦闘中でしかも蹂躪してるようなものなのに、よくそんな話題でできるわね……」

『食生活や過剰してきた環境もあるだろうけど、これにはちよつと天才たるダ・ヴィンチちゃんもドン引きかなーって。でもワイバーンの肉料理は少しばかり興味があるのも事実だ。帰ってきたらぜひ振舞ってくれたまえ。ロマンも泣いて喜ぶだろう』

「それはますます張り切ってきますね。是非とも頑張って、彼を喜ばせてあげましょう」

用いる呪術が切り替わる。代わりに台頭するのは魔術だ。ひたすら他者への攻撃だった性質が入れ替わり、自身への強化魔術となる。そのまま携えていた剣を正眼に構えると、セイバーオルタが暴れるワイバーンの群れの中に直接飛び込んだ。

「いい機会だ。貴様の剣の腕も見てやろう」

「それはまた緊張させるような事を」

軽口を叩きあいながら背中合わせに剣を振るう。どちらもその色は黒、しかし正道に則った剣閃が宙に閃く。マーキダが翼を落とした

ワイバーンを魔力放出に任せてセイバーオルタが粉碎し、その上を飛び越えてマーキダがさらにワイバーンの首を断ち切る。互いの一撃を利用し利用され、即席の連携を成していく。そうしてより効率的な戦い方に戦略がシフトする。

——そして戦うこと数分、いよいよワイバーンの群れも打ち止めに入った。ひっきりなしにやって来ていたワイバーンもすっかり鳴りを潜め、今や残っているのは両の手の指で数えられるほど。それでも彼らは最後に一矢報いるために空を舞って機会を窺っていたのだが、それも低出力に抑えられた『約束された勝利の剣』エクスカリバー・モルガンによって灰燼と化す。

これにてお使いクエストは終了した。後に残ったのは英霊の戦闘の余波によつて破壊された大地と、山のように積み重なったワイバーンの死骸だけである。

「うっわ……なんて有様よこれ。こんなんじゃ本当に私たちが正義の側なのか自信が無くなってくるじゃない」

「戦いとはそういうものだ。とりわけ完全な勝利を目指すならば敵対者は根絶やしにして然るべし。下手な温情は我が身を滅ぼす因となりかねん」

「やるからには徹底的にやってことですね。ちよつと夢は足りませんが、合理的ではありません」

『いやはや、騎士王がこと戦いにおいてシビアな考えを持っているのは当然だろうが、まさかシバの女王までこうとは恐れ入った。なんだい、山つていうのはそんなに厳しい環境なのかい?』

からかうような口調で聞いて来るダ・ヴィンチちゃんだが、聞かれた本人はやや遠い目をしている。

「右を向けば幻想種、左を向けば絶壁、前を向けば幻想種で後ろには迷路のように広がる木々、空はほとんど常に荒れ模様。そのうえ地面は歩き辛くて、気温も寒暖の差がありすぎる。ありとあらゆる艱難辛苦が詰め込まれたかのような環境でしたね」

『……ごめん、それはちよつと無理かな。恐るべし、紀元前の山々だ』
「あなた本当に生者ですか? 実は地獄から甦った亡者じゃないです

よね？ もしそうなら教義上すぐにでも拳を解禁することになるのですが」

「拳の解禁など、お前は何を今更な事を言っているのだ。それにその程度の事、ブリテンでも日常茶飯事だった。世界の殺意を迎え撃つ羽目になった我らブリテンは食べれるならば人以外何でも食べた。その中でもワイバーンは比較的マシな部類だ。ああ、その果ての山盛りマッシュポテトも今思えば悪くなかった。褒めて遣わずぞガウエイン」

もはや和気藹々とした過去話になっているが、状況はワイバーンが死屍累々と積み上げられているところだ。はつきり言って女子会には程遠い。一陣の風が吹き、立ち昇る血臭が遠くに飛ばされ彼女たちの髪を揺らす。そこでようやく次にやるべきことを思い出した。

『さあさあ、気を取り直してワイバーンの解体といこう！ 私が欲しいのは牙と皮を少々だから、残りは好きなようにしておくれ』

「あ、なら血と心臓は私の方に渡してください。呪術を扱う際の良い媒体となるので」

「あー、私は悪いけど解体はパスで。魚の腑分けならいいけど流石にワイバーンは門外漢よ」

そうしてマルタが念のための見張りに立ち、マーキダとセイバーオルタで手際よく解体してダ・ヴィンチちゃん特製の袋へと必要な物を詰め込んでいく。解体が終わった物から順に焼かれ、次第に積みあがっていたワイバーンの死骸も少なくなる。およそ二時間ほど経った頃には既に解体作業はほぼ終わっていた。

「これでよし、だ。今日の夜は期待させてもらおう」

「料理なら私も得意だし手伝うわよ。なんだかこの王様、明らかに大食いな気配が凄いもの」

「じゃあお願いしますね。それにしても聖女と一緒に料理とは、サーヴァントにもなってみるものです」

「それを言うなら私だってあのシバの女王がこんな血腥いとは思わなかったけどね。ソロモン王とのロマン스에ドキドキしてたあの時の私に現実を教えてあげたいくらいよ」

その言葉に当事者たるマーキダが苦笑いをした。確かにまあ、普通予想されるような嫺やかな女性と言った物からは外れている自覚はある。かといって今更染みついた習慣だとか考え方を改める気も無いのだが。

『そういえば、その話題ついでにどうしてもシバの女王に聞いてみたいことがあるがいいかな?』

「? なんでしょうか?」

“ 大したことではないのだが ” と前置きが入る。

『ちよつと失礼かもしれないが、君は本当にソロモン王を愛していたのかい? どうにも列王記以外の描写は伝承を膨らませたところが多くてね。シバの国も気になるが、今はその辺りだけでも聞いてみたいんだ』

「なんだ、そんな事ですか——」

少しだけ間が空く。けれどマーキダの心は考えるまでもなく最初から決まっている。

「間違いなく愛していましたよ。たったの二か月ほどの縁でしたが、それでもとても大切な時間でしたから。だからこそ、二度と会えなかったのは本当に辛いです。きっと、これから会うこともまた出来ないでしょうからね」

『……そうか。だがそれでも君が愛していると言うのなら、きっとソロモンも喜ぶだろうさ』

「ふふ、ならいいのですが。結局私は彼を変えることが出来ませんでしたから。果たして彼は私の愛を喜んでくれるでしょうかね」

——どこことなく寂しそうな声が、夕暮れの空に微か響いた。

第七話 カルデアにて Ⅲ

人理修復の唯一の希望である藤丸立香。彼に求められる役割は非常にシンプル、特異点への介入とその原因の排除だ。しかし言うは容易いがその難易度は想像を絶する。魔術世界の極限の中で英霊の力を借りて、現地での状況を鑑みて、そして自力で思考し行動する。最低限これらが最後のマスターである彼に求められるのだ。

故に現状でただ一つの安全地帯であるカルデアでも、ただのんびりと休息をとるわけにはいかない。特異点で長時間活動できるように体力は付けなければならぬし、あるいは出会う可能性のある英霊や事象についても学んでおかなければならない。魔術についても礼装の力を借りれるとはいえ、どのように扱うべきか習熟しておく必要はある。やるべきことは多岐に渡るのだ。

「お疲れ様です、先輩。本日はここまでにしましょう」

「はあ……はあ……分かった。マッシュもお疲れ……」

「フオウ、フオウー！」

トレーニングルームにて。息も絶え絶えになりながら、それでも男の意地でマッシュへと笑いかけるのは動きやすい服装に着替えた藤丸立香だった。彼は近くに置いてあったボトルの中身を一気に飲み干すと、持ち込んでいたタオルで額の汗を拭う。そのすぐ横では白い愛くるしい生き物、猫の様なリスの様な割と謎生命体なフオウ君が相槌らしきモノを打っている。

「やっぱりマッシュはすごいなあ。オレと同じかそれ以上に運動してるのに、全然堪えた様子がないもん」

「今の私はデミ・サーヴァントとして高い身体能力を確保していますからね。ですがまだまだ未熟者、先輩のサーヴァントに相応しくなるように日々精進していくつもりですのぞ」

「はは、ありがとう。オレももつと頑張らないとな」

白状すれば、彼にとって人理修復の使命は重過ぎる。だけどそれでも、マッシュが隣にいるから彼は頑張れる。それに他のサーヴァント、まだセイバーオルタとアンデルセンしか共に戦ってはいないが、どち

らも何だかんだ言つて面倒見は良い。

セイバーオルタはスパルタ教育を良しとする。しかしそれに耐え抜きマスターとして心を強く持つ限り、共に戦う頼もしい仲間となつてくれる。

アンデルセンは男のツンデレだ。呆れる程の毒舌だが、注意して聞けば決して他者の否定はしていないのが分かる。

そして新たに召喚した二人のサーヴァントも、これまた性格的には非常に難が少ない。故に立香は必要以上のストレスを抱え込むまでは行かず、どうにか持ちこたえることが出来ている。

そうしていったんマッシュと別れた立香はフォウ君と共に自室に戻り——マッシュの方に行かせるのは何となく気が咎めた——服装を替えてから食堂へと向かう。そこでふとため息が零れた。現状ではカ ルデアの食事システムはお世辞にも整っているとは言えず、専ら保存食や簡単な料理が出て来ることが多い。そうは言っても食べなければどうしようもないし、文句を言うのは筋違いだと理解しているのだが。

「——ん？」

しかし、今日は何かが違う。いや、何が違うかは明白だった。食堂の方から非常に良い香りが漂ってくるのだ。一体何が起きたのかと訝しみ、次いでちょうど普段着の制服と白衣を纏ったマッシュがやって来た。彼女もまた不思議そうな顔をしており、けれど同時に好奇心でいっぱい表情をしている。

「なんの匂いでしょうか？ とても良い香りですが……」

「全く分からないなあ、とりあえず入ってみようか。フォウ君もウズウズしてるし」

「はいー。」

クールな見た目に反して相変わらず元気で満ち満ちているマッシュを笑顔で眺めながら、フォウ君を肩に乗せて食堂への扉を開ける。それなりに広いそこは長机が複数と椅子が大量に設置されており、集団生活における正しい食堂と言った様相だ。既に職員達もほとんどがやって来ていて活気があり、その中にもはや見慣れた青髪と金髪の姿

も認められる。

ひとまず立香はそのアンデルセンとセイバーオルタの二人が座っている席にマシユと共に腰を下ろした。

「いつもと雰囲気が違うけど、どうしたのこれ？」

「喜ぶが良い、今日はお前が召喚したサーヴァント達が腕によりをかけた夕食を提供してくれるらしいぞ。まあ詳しいことはその腹ペコ王様にでも聞くんだな」

「そうなのですか、オルタさん？」

マシユから話を振られた彼女は飲んでいた茶を静かに置いた。妙に様になっている。

「今日はお前たちがマスターとそのサーヴァントとしてあるべき鍛錬を積んでいる間に、その物書きを除いたサーヴァント三人で“買い出し”に行ってきた。肉はまあ……だが、味は保証しよう」

「いや待って、その変な無言は何さ。なんでそこで目を逸らすんだ不安になるでしょ」

「ま、ドーせこいつら脳筋女の事だからゲテモノ肉でも持ってきたんだろうよ。おそらくそうだな……ゾンビは食べたものじゃないだろうし、貴様の服に付いた鱗の欠片からしてワイバーンといったところか？」

「見事な観察力だと言っておこう。しかし、その前にまず後方注意だ」

「はっ、何を言うかと思えガハッ!!」

「ア、アンデルセー・ンツ!？」

厨房から勢いよく飛んできた皿がアンデルセンの後頭部に突き刺さり、そのまま彼は頭を押さえながらテーブルに物言わず突っ伏した。食堂にて突如起きた殺人事件に一瞬辺りが静まるが、すぐに“まあアンデルセンだからいいか”といった空気になって元の賑やかさを取り戻す。

どうやら、先の脳筋発言に厨房に詰める二人のうちどちらかがキレたらしい。まあどっちが投げたのかはおおよそ予想がつくのだが。そう思った立香は同じような事を考えたらしいマシユと顔を見合わせて堪えきれず忍び笑いした。

「すみませーん、そつちに皿が飛んできませんでしたかー？」

と、マーキダが厨房から姿を現した。どうやら支給されたらしいエプロンをあの黒いドレスの上から着ている。妙な格好だが、不思議と違和感は感じない。彼女は見た限り普段通りにこやかにしていて、やはり皿を投げたのはマルタかと一同の意見が一致する。どうやら彼女は怒っていないらしい。

「ああ、これですね。どうぞ」

「すみませんマシユさん。いやまあ、そこで倒れている人に謝る気は毛頭ないのですが」

訂正、割と根に持っているようだ。触らぬ神に祟りなし、これ以上この話をするのは止した方が良さだろう。そうして何やら二言三言セイバーオルタと会話をしてから去って行く彼女を見送って、立香は軽く苦笑した。既に復帰して起き上がっているアンデルセンに向けて一言、

「口は禍の元っていう諺が日本にはあるんだけど、アンデルセンは知ってる？」

「そんなもの知るわけないだろう……が、今度のはさすがに推測できるぞ。だが敢えて言わせてもらおう。筋力Dの剛腕で耐久Eの打たれ弱い奴を虐めるなど大人げないと思わんのか」

「などという大人が言っているがな。ああ、こういう時のこいつの言葉はあまりまともに耳を傾けない事だ。余計な知識まで吹き込まれるぞ」

非常にマトモな暴君の意見に大いに立香とマシユが頷き、アンデルセンが不貞腐れたような表情で後頭部を擦っている。どうやらまだ痛むらしい。

すると、ちようどどこかで料理が出来たようだ。なんと厨房の方から皿が宙を舞って飛んできた。その派手な配膳に一同が驚きながらも経緯を見守れば、すぐにテーブルの上は多くの料理で埋め尽くされた。そして厨房からは最後に今回の料理人である二人が出て来る。マーキダはそのまま立香達の方へやって来るが、マルタだけは前に残った。

「皆さんどうぞ召し上がってください……と言いたいところですが、やはり私としてはこれをやるしかないわね。はい皆さん、今回だけですでにご唱和ください！ 父と子と聖霊のみ名によって、アーメン」

そうしてキリスト教の聖女らしい食前の祈りをどうにか——時計塔と聖堂教会ゆえんの柵しがらみもあつたりする——済ませ、いよいよカルデアにおける久方振り、ないし初めてのマトモな食事が始まった。食堂に集った二十人程度のカルデアスタッフたちも待望である。フオウ君には既に特別製としてうどんが用意されていた。彼は麺類が好きらしいのはこれまでの調査でマッシュがもう確認済みである。

「先輩、この料理は何でしょうか？ 見た目はすごく野生的ですが味付けはとつても美味です！ ワイバーンのモノとはとても思えません！」

「えーと、それは確か山賊焼きとか言ったつげな？ マーキダ、合ってる？」

「正解ですよマスター、それは私が作った物です。シバ王国は比較的多くの香辛料を手に入れることが出来ましたから、そういった料理は定番でした。とはいえ昔は香辛料はシバやイスラエルといった大国の厨房にしか無いようなものだったのに、今はどこにでも香辛料があるなんて本当に良い時代になったものです」

「まあそれとか野菜炒めは美味しくできたし別にいいんだけどね……ねえ王様？ あなた本当にそれでいいの？ 作った私が言うのもなんだけど、それ、どう見てもジャンクの類よね？」

言いながらマルタが示したのは、もつきゆもつきゆとひたすら無言で食事を続けるセイバーオルタの姿である。彼女の前だけはいわばハンバーガーの様な食事が山のように積まれていて、他の料理と比べても明らかに手抜きのように思える。しかし彼女は一切文句を言わない、どころか満足げな表情で食している。

「もつきゆ……んくつ、構わん。元より私はこちらの方が性に合っている。それにしてもこれはいいな。まさしく私が求める味だ」

「作る側としてはすごい複雑な気持ちかつ面倒なんですけどねそれ……私もマルタさんも大勢に対して作るタイプの料理が得意なので、

こういった近代以降の個人向けの料理が得意な方が居れば良いのですが」

「ま、中々難しいわよねそういうの。ここの研究者みたいな人種って、自分の食生活とか疎かにしがちだし。ほら、その作家なんてその極みに見えない？」

「さて、どうだかな。それより、あの男はどうした？　ここには呼んでいないのか？　はは、もしや仲間はずれという奴か？」

にやついたアンデルセンの顔を見ながら、そういえば、とばかりに立香は辺りを見渡す。確かにドクターロマンが来ていない。もしや彼は一人で作業を続けているのだろうか。だとすればさすがにそれは寂しい。急いで呼びに行こうかと席を立香が立とうとして、その前に食堂の扉が開いた。

「やあやあ皆さんお待ちせう。ダ・ヴィンチちゃんだよ」

「げえ、ダ・ヴィンチ！　それにドクターまで！　遅いじゃないですか！」

「おや、誰だいそんなつれない呼び方をするのは？　私の事はぜひダ・ヴィンチちゃんと呼びたまえ」

「女男ー！　変態ー！　モナ・リザーー！」

「ありがとう、最高の褒め言葉さ」

……のっけからインパクトのある職員のヤジと共に入場して来たのは、ダ・ヴィンチちゃんと彼女に腕を引かれたドクターであった。彼らはちようど席の空いていたマスター達の方へとやって来ると、当然のように腰を落ち着ける。

「約束通り、君たちの料理をいただきに来た。そのついでに一人で寂しく資料を整理している馬鹿を見つけたから引っ張ってきたよ」

「いやついでって君の工房はボクのいたところの反対——」

「なんです、あなたそんな事をしていたのですか？　駄目ですよ、人間なのですからちゃんと休める時は休まなくては」

「ドクター、シバの女王からのありがたいお言葉です。ここは従っておくべきなのでは？」

「はあ……分かったよ。じゃあボクで良ければお相伴に預らせても

らおう」

疲れたような顔は一瞬、すぐにドクターはいつもの軟弱とすら言われるような柔らかい笑みを取り戻す。その姿に心配そうに見ていたマシユやマーキダもほっと一息つき、食事を再開する。しばらくの間はカチャカチャと食器を鳴らす音と、飲み込む音、そして他愛のない雑談が響き渡る。

「それにしても、これが天然物の黄金律な体か。うんうん、是非とも参考にさせてくれ。私は自身の美しさを微塵たりとも疑っていないが、それでも本物は一つ目にしておきたい。えーと、確かシバの女王は特に足が綺麗だという話だったか」

「え、ちよ、なんですか急に体触りだして……」

ある程度食べ終えて手持ち無沙汰になったのだろうか、不意にダ・ヴィンチちゃんグマーキダの顔やら胸やらに手を伸ばし始める。ふにふにと触り、指をつぷりと沈める。されている側は驚きはしても大して気にしていないようだが、これには一つ大きな問題があった。

「分かるかい、立香君。今そこで繰り広げられている光景はあまりにマズイ。同じ男として理解できるだろう？」

「分かっていますよドクター。皆からはダ・ヴィンチちゃんって呼ばれていて、しかも傍から見ればとんでもない美女がとんでもない美女にスキンシップをかけているようにしか見えない。だけどこの人の中身は間違いなくおっさんだ。つまり——」

「間違いなく事案物だなあこれは！　だがよく考えて見ろ、こいつは自身の迫及する芸術と美しさのために自己の性別という絶対的なものまで簡単に放り投げたまごうことなき変態、大馬鹿者にして正直者だぞ。そんな奴が今更女に触れて欲情するかいやするまい！」

「うーん、やはり君は狂言回しのようで誰より人の事を真摯に見ている。よく分かっているじゃないか——つて痛い！　やめたまえフォウ君！　あつ、ちよつとホントにシャレにならないから噛むのは止してくれ！」

「フォウ、アフオーウ！」

我が意を得たりとばかりに頷くダ・ヴィンチちゃんかと思えば、

割って入ったフォウ君に文字通り噛み付かれていた。ドクターから始まり立香に繋げられ、そしてアンデルセンにパスされた議題は結局彼女の肯定で終わってしまったが、果たしてこの様なオチで良いのか。これには横で聞いていたマシユとマルタもどうしてこうなつたと頭を抱えてしまう。やはり天才と破綻者は手を付けられないらしい。セイバーオルタは委細気にせずもつきゆもつきゆと食べ続けている。フォウ君はひとしきりツツコミを入れて満足したのか、伸びるうどんとの仁義なき闘いへと帰っていった。

妙な空気が場を支配する。なんとなく誰もが黙ってしまった、会話が続かない。だからこそだろう。次は遅れてやって来たもう一人に話が振られるのは必然といえた。

「で、ドクター。私たちの作った食事は美味しいですか？ せっかくだすから感想の一つや二つは聞かせてくださいな」

「ああ、そうだね……うん、上手い表現が見つからないがとても美味しいよ。それにどこか懐かしい味わいだ」

ちようどロマンが食べているのは、サイコロ状に肉を切つて焼いたものに香料と野菜を添えたものだ。非常に素朴な味わいだ、それ故に奥深い。シンプルイズベストというべきか。

「おや、そうでしたか。ふふふ、それはですね——」

何やらもつたいぶつたような笑みを深めるマーキダ。果たしてその意味深な表情に何があるのか。誰もが何となく訝しんだところで、その答えを告げた。

「昔、機会があつてソロモン王に作った料理なんですよ。確かその時は宮廷の料理人が病気で寝込んで、それでたまには私も料理を作りたいと無理言つて作らせてもらったのです。調味料とかもまさにその時エルサレムに有つた物を使っています」

「つまり思い出の料理という訳なんです！ すごく素敵です！」

乙女思考の強いマシユが感激したように笑顔になり、列王記を読んだことのあるマルタが感心したように頷く。セイバーオルタはやはり食べ続ける。その中でダ・ヴィンチちゃんだけはなぜか思い切り大笑いしていて、ロマンの背中をバシバシ叩いていた。

「くっ、はははははっ！ これはこれは一本取られたんじゃないかロ
マニ！ いいじゃないか、君の舌はかの魔術王と同じらしいぞ！」
「よしてくれよレオナルド……これが美味しいと思うのは事実だけ
ど、そんな大それた因果は必要ないさ」

困ったようにロマンが笑う。けれどその顔は少しばかり楽しそう
で、やはりどこか懐かしそうな顔だった。そしてマーキダの方は、な
んだかんだ遠慮のない関係の二人を見てどこことなく妙な心持になる
のだった。

第二章 永続狂気帝国セプテム 第八話 中央管制室 I

カルデアが消去すべき特異点は全部で七つある。そのうちの一つ、オルレアンは既に人理焼却の機能を失い、現状では残る特異点は六つとなっている。そして今回は第二の特異点、紀元六十年のローマへとマスターとそのサーヴァント達はレイシフトすることになっていたのだが――

「まさか居残りを食らわされるとは……」

「ははは、そう気を落とさないことだ。ボクだって一番最初の重要な実験で妙な理由でメンバーから外されていたくらいだし」

気落ちしたようなマーキダを慰めるのは、カルデアにてマスター達のサポートをするロマニ・アーキマンであった。本来ならありえないはずの光景、しかしそれも特異点でなくカルデアの指令室でならむしろ道理だ。

そう、マーキダは今回のローマへのレイシフトに参加していない。正確には、参加できなかった。その原因はひとえに黒の騎士王、セイバーオルタが関わっている。

「盤石を廃し、あえて苦境の中でマスターを戦わせて成長を促す。全く、相当に厳しいやり口ですね。しかも理に適っているから性質が悪い」

ぼやきながら彼女はロマンの座る椅子の横に持ってきた折り畳みの椅子を置くと、優雅に腰を下ろした。そうして目の前のモニターを見れば、特異点に向かった組がローマ近辺にレイシフトしている映像が確認できる。他にも様々な計器が動き出し、中央管制室に詰める職員たちの観測の下、マスター達を補佐すべくカルデアの頭脳は稼働を始めていた。

しばらくマーキダはロマンたちが一丸となってレイシフト後の微調整を済ませているのを眺め、手に持った手帳にメモをいくつか書き取っていたのだが、じきに彼らが少しずつ落ち着いてくると隣に座つ

ているロマンへ話しかけた。

「貴方は良かったのですか？ セイバーオルタさんの言う事は理に適ってはいますが、同時にリスクの高い物です。カルデアの所長代理たる貴方が許可を出したのは正直意外でしたが」

セイバーオルタは暴君であり、同時に王ではなくマスターの剣であろうと務めるサーヴァントだ。故になんだかんだ言いつつもマスターの成長を促すために導かんとする。だがその手段はかなり厳しいものでもあり、今回で言えば最初から最高戦力で特異点に当たるのではなく敢えてマーキダを残すという刃落ちの状態で臨ませた。それは慢心を無くし心を鍛え、手段の足りない状況でどのように立ち回るかを養うには良い手段ではあるのだが、同時に特異点で追いつめられて死ぬ確率も上昇する諸刃の剣だ。

「まあそうだね。確かにボクも反対という気持ちはあった。だけどこれに関してはボクの一存じゃ決められない。それに厳しいことを言えば、立香君はこれから先で起こるありとあらゆる危機を乗り越える為に強くなつてもらわなくてはならないんだ。だからこそ、彼女の騎士王としての経験と直感に頼ることにした。その方が最後の勝ち目が高いと踏んだからね」

“ 第三特異点まではほぼ我らだけでどうにかなる ” ——それが騎士王の直感による言葉だった。その時の彼女は第一特異点において山盛りの食料を前にしていた為、普段『直感』スキルを代償に抑えていた凶暴性を遺憾なく発揮し、代わりに未来予知にも匹敵する強力な『直感』を一時的に取り戻していた。故にその精度は折り紙付き、信用に値する情報となっている。

だからこそ、ロマンもこの難しい判断において許諾を出した。幸いなことに、メンタル管理的な意味でも他者の本音を正確に見抜くアンデルセンや、頼りがいのある聖女であるマルタが居る。それになによりマッシュが居るのだ。彼女が隣に居る限り藤丸立香が折れることは無い。これら諸々を総合した結果、本来勝ち目のない戦いに出ることはない彼をして利はこちらにあると踏んだのだ。

「ま、そういう訳だから君も出番があるまでこっちで待機だ。なんな

らボクの椅子に座るかい？ 女王様が座る方がよほど絵になると思うけど」

冗談めかして笑うロマンに、マーキダは静かに首を横に振った。「私よりも貴方の方が余程その席に相応しいですよ。只人の身でありながら責任を背負い走り続ける、それはある意味特異点で戦う立香君と同じくらい苦しくて大変な使命ですから。それを受け止めることが出来る貴方にこそ、その席は相応しい」

「……あはは、逆にボクの方が気を遣われるとは思わなかったよ。割とボクの事を扱き下ろすサーヴァントって多いし」

「私は割かしお節介ですからね。それになんとなく、貴方の事を悪く言うを取り返しのつかないような気がするので」

「それはいったいどういう理由で？」

「女の勘、ですかね」

何とも不確かで夢見がちで、けれどらしい考えだ。そしてそれを表にはおくびにも出さず、代わりに「ありがとう」とだけ零し、一瞬だけ見慣れたはずの幻想女王の顔を見る。その顔はやはりロマンの内面を見抜くかのように侮れない。それを振り払うように再びコンソールへと視線を戻すと、そこに映っている映像は既に進んでおり、ローマ近辺で戦う二つの軍に介入するマスター達の姿があった。

「さて、ここからはボクからも本格的にサポートに回らなきゃならない。悪いけどあんまり構ってあげることが出来ないが許してくれ」

その言葉にマーキダが頷く。そうして、第二特異点の人理修復作業がスタートした。

◇ 「……ふー。さてと、今日はこんなものか。向こうはローマ首都で無事就寝、しばらく問題は無さそうだね」

ロマンのその言葉に張り詰めていた中央管制室の空気が若干緩み、大きく伸びをする職員が続出する。実際それも無理はなく、今日だけでも半日以上ほぼ交代無しで特異点の観測とマスター達の存在証明を行っていたのだ。深夜でも同じくそれらの行為を行う必要はあるが、それでもアクティブに動き回る昼間に比べればいくぶん負担は少

ない。

なので職員の上半分が管制室から退出し、束の間の休息をとるべく部屋へと戻った。残ったのは最低限の人員、その中には勿論ロマンの姿もある。

と、部屋から出て行く職員達と入れ替わるようにして入って来た人影が有った。両手でお盆を抱えていて、その上には多数のマグカップと一つの大きなポットがある。

「お疲れ様です、皆さん。コーヒーなる飲み物を作ってきましたが飲みますか？」

やって来たのは果たしてマーキダであった。しばらく前に唐突に部屋から出て行ったのだが、どうやら差し入れを作りに行っていたらしい。その気遣いにやや活気の落ちていた管制室が俄かに沸き立ち、我先にとコーヒーを貰って行く。その様子を片目に見ながら、ロマンはひとまずキリの良い所まで作業を続けていたのだが。

「ほらドクター、貴方も飲んでください。ダ・ヴィンチちゃんから聞いたのですが、これには意識の覚醒作用もあるみたいじゃないですか。飲んでおいた方がお得ですよ？」

不意に横からコーヒーが並々と注がれたカップが差し出された。咄嗟にのけぞるようにして躲してしまい、次いで目の前でシユガーが一袋入れられていく。それを付属のマドラーでマーキダがかき混ぜると、ロマンの口元に押し付けにかかって来た。

「ちよ、待った待った！ それはさすがに火傷するから！ そこまでしてくれなくても飲むから心配しないでくれ！」

「ならいいですけど。むしろここまでしなれば飲まないような気がしたので」

頬を膨らませてそう言う彼女だが、さすがに今度はロマンもコーヒーを貰うつもりだった。なのですぐにコーヒーのカップを貰うと、なみなみと注がれた黒い液体に口を付ける。今度はいつか飲んだのとは違う、仄かな甘みを感じさせるものだ。

その隣でマーキダがシユガーの袋を七本以上コーヒーに空けているのを眺めながら、ちびちびとコーヒーを飲み進めていく。カフェイ

ンが脳を刺激し、徹夜するための主要なエネルギーとなっていく。それでも完全に睡魔から逃れることは難しく、一、二時間も経った頃には職員達も少しずつ舟を漕ぎ始めた。ここらが潮時か。

「よし、本日はいったんここで解散としよう。残りはボクが見ておくから、君たちも自室で休息だ」

ロマンが手を鳴らして手早くそう告げると、彼に感謝しながら続々と職員達も部屋から出て行く。皆去り際に一様に「ドクターも早く休んでくださいよ」というのを忘れない。

結局、管制室に残ったのは居残りのロマンと、休息を必要としないマーキダの二人だけとなった。現在時刻が午前二時だから、次に休息後の職員達がやって来る午前四時まで二時間ほど時間がある。

「いい人達じゃないですか。魔術師たちの集まりとはとても思えないくらいです」

「そうだね、ボクとしても良い仲間に恵まれたと思っっているよ」

これはロマンの本心だ。ここに来て、間違いなく彼らの結束は強くなっている。ただその中で、どうしても明かすべきではない“秘密”があるだけの話。もはやそれは信用のあるなしでは無く、単純に言わないほうが良い事象なのだ。

静まり返った管制室に二人分の息遣いが木霊する。と、ここでコンソールが不意に光った。示しているのは特異点からの連絡だ。どちらともなく顔を見合わせ、次いで通話許可のボタンをONにする。

『あーあー、カルデアの方、聞こえるかしらー！ マーキダか誰か起きてないー？』

「ああ、ちゃんと聞こえているよ。こんな時間にどうしたんだい？」
『あら、ドクターですか。ええ、少しばかりそういう気分になったものでして』

通信機から聞こえてきたのはここ数日で聞きなれた聖女マルタの声である。サーヴァントである彼女は特異点だろうと睡眠や食事を摂る必要が無いため、この時間に起きていても決して不思議ではない。しかしその用件が不明だった。

「何か問題があった……という訳でもないみたいですね。アンデルセ

ンたちはどうしたのです?」

『アンデルセンはマスター達と一緒に爆睡、オルタは辺りの哨戒に出てるわ。ホント、同じサーヴァントなのにどうしてここまで意識の差が出るのかしら?』

「そりゃあ人間だからね。人には誰しも個性がある。心がある。当然の事さ」

『うぐつ、そこで正論言われると辛いですね……まあそれはともかく――』

「ローマについて、ですね?」

確信をもったマーキダの問いかけにマルタが押し黙り、肯定を示した。そう、これはある意味当然の予想。この時代のローマ皇帝はマルタが信じるキリスト教の教徒をひたすら弾圧していた主犯なのだ。加えて言えばマルタが生前生きていた時代と非常に近い。かつて自分らを迫害した者を助けるといふ行為に、思う所が無い方がむしろおかしいだろう。

『先に言つとくけど、サーヴァントとしての力やタラスクを用いてローマに殴り込みをかける、なんて馬鹿な真似をする気は無いわよ。人類の為にローマを救う事にも否は無いし、あの皇帝様も思った以上に面白い人だったから。ただ、それでもちよつとだけ気になってしまったのよ』

「ふう、聖女が実に理性的で助かった。もし復讐に走るとか言い出したらどうしようかと思つたよ」

『お生憎様、偉くなつたつもりは無いけど、そこまで低俗になつたつもりも無いわ。それでまあ、同じユダヤの民に縁のあるマーキダに参考意見でも聞いてみようかと思つてね。あなたはローマをどう思っているのかしら?』

問われ、しばし考え込む。彼女にしてみれば、シバ王国がローマに直接の被害を受けたわけではない。だけと思ふ所がないこともない。「……ソロモン王のイスラエル王国を潰したのは正直不快ですが、それを言っても詮無い事でしょう。ことは私達の死んだ後、ないし生まれる前に起きていたのですから。それに私としては、芸術の文化を多

数生み出した文明に興味があります。そういった方面から好きになれれば良いかなと思っている感じですね」

『ふうん、無関心よりも好きになる努力をするべきってことね。なるほど、なんとなくあなたらしいわ。ええ、ありがとう、ちよつと愚痴っぽくなっちゃったけど、聞いてもらえてすつきりしたわ』

「意外だ、聖書に謳われる聖女でも迷うことはあるんだね」

『もちろんですよ。それこそ私たちはあなたの言うように人間なのですから、とても完璧ではありません。そのうえでどれだけ主の御心を理解し、また他者に慈しみを持って世界を好きでいられるかこそ重要なのです。……なんて説法臭くなったけど、今夜はここまでにしとくわ。じゃ、おやすみなさい、ドクターも早く寝ておきなさいよ！』

最後まで聖女らしいような、そうでないような人柄を見せつけて、マルタからの通信は切れた。しばし管制室に残った二人はその名残を楽しむように無言で佇み、それから示したかのように顔を見合わせた。その顔には当然笑みが浮かんでいる。

「楽しいものですね」

「本当にね。ちなみに、君が好きになったローマゆかりに所縁のあるものは何だい？ 良ければ聞かせてくれ」

「……これをあなたの前で言うとは誤解されそうですが——」

不思議な前置きが入った。

「浪漫という言葉が私は好きですよ。私の時代にはこのような言葉は有りませんでしたし、理想を追って感情的になるなんてまさしく心そのものを示すような言葉じゃないですか」

「……ああ、そうだね。ボクもまったく以て同意見だ。こればかりはローマも侮れないよ」

やはり目の前の女王はロマンチストだ。そのことをロマンは再確認する。そしてどうやら思考形態も意外と似ている所があるらしい。そのことがどこことなくすぐつたい。

反して何気なく零したロマンの言葉に、僅かにマーキダの眉が顰められた。しかしそれも即座に消えて、代わりにどこことなく心配するよきな顔つきになる。

「まあそれはそれとして、あなたは早く寝た方が良いと思いますが」
「悪いけど、ここにいてカルデアを動かせるのは現状ボクだけだ。役目を放棄して眠るわけにはいかないよ」

「理屈は分かりますが……見かけに反して強情な人です。私は貴方が心配で言ってるんですよ?」

どうやらロマンは職員やマルタから散々寝ろと言われて尚寝る気は無いらしい。自身の職務を全うする腹積もりなのだろう。それをロマンの無言の抵抗から理解したマーキダが溜息と共に立ち上がり、管制室の外へ去ろうとする。

「そこまで言うなら止めませんよ。代わりに、何か温かい夜食でも持ってきます」

「ああ、適当に保存食でも取って来てくれると——って行っちゃったか」

背中で聞き流すようにマーキダは部屋から出て行き、ロマンだけがぼつんと取り残される。しかしこれも、第一特異点攻略時の夜は頻繁に見られた光景だ。他の局員たちはさすがにロマンも休息を取っていると考えているからこそ笑って退出できるが、もし真実を知れば血相を変えて居残ろうとするだろう。

——それはダメだ。

「ボクは所長代理だからね。少しくらい他の人より踏ん張らなきゃ示しがつかない」

嘔きながら机の下より小瓶を取り出す。中に入っているのは脳を強制的に覚醒させる作用を持った薬だ。これを飲めば徹夜程度どうという事はなくなるが、代わりに体や脳に大きな負担がのしかかる。

当然、彼は医者としてそのリスクを十分承知している。そしてそのうえで、躊躇いなく飲み干した。お世辞にも美味しいとは言えない感触が喉を通り過ぎ、眠気で曇った思考をクリアにしていく。飲み干した小瓶は机の下に隠しておいた。マーキダの事だ、こういった薬品に對してはあまりいい顔をしないだろう。

これで睡眠問題については解決、後は特異点の観測だが、現状それもほぼやることが無い。なのでコンソールの空きスペースにノート

パソコンを置くと、嬉々として電源を付けた。見るのは当然、「マギ☆マリ」……これはいわゆるアイドルの類ですか？」

「うわっと！ いつの間!?」

ちやうどパソコンを立ち上げてマギ☆マリのサイトを開いたところだった。背後から唐突に声を掛けられて大いに驚いたロマンが電光石火の速度で後ろを振り向き、さっきまで出ていたはずのマーキダの姿を確認する。その手にはまたもや盆が乗っていて、白いパンと湯気の立った野菜スープが乗っている。

「随分と早いじゃないか……それに、わざわざそんな物を作って来てくれるとは。別に手抜きで良かったのに」

「一応これも作り置きですよ。温めればいいだけで楽ですし、夜に食べるものは気を遣わなければ体に悪いですからね。それにしても、そのサイトはドクターのお気に入りですか?」

ポップなホーム画面のサイトをまじまじと眺める彼女に、どう説明したものかとロマンが頭を抱えること数秒。結局いい誤魔化し方は思いつかないので、料理を受け取りながら簡単に答えておいた。

「ボクが鼻屑にしているネットアイドルだよ。今は当然人理焼却の影響で更新を止めているけど、そこはボクだからね。自動文章作成プログラムを作って勝手に更新するようにしてるんだ」

「……なんという無駄に洗練された無駄な技術。なまじプログラムとは思えないほど文章が活き活きしているから恐ろしいですね」

「だろう? ボクもちよつと予想外なくらい成長してるけど、こういう予想外なら大歓迎さ」

誇らしげに笑うロマンの姿は、先ほどまでの責任ある男とは似ても似つかない、とても所長代理に見えない冴えない男性と言った有様だ。彼はパンとスープに手を付け始め、しばしの間食事の音だけが響き渡る。マーキダはそれをニコニコしながら眺めていた。

そんな彼女を見て、ふとロマンは思うところが出来た。

「……暇そうだけど、君は何か趣味が無いのかい? せっかくこの時代に召喚されたんだ、やれる事は限りなく少ないとは言え、趣味の一つや二つ見つけてもバチは当たらないと思うよ?」

「貴方を見ているので暇ではないのですが。趣味ですか……料理を作るのは趣味じゃ駄目ですかね？」

「それは人の為にすることでもある。そうじゃなくて、自分だけが満足できるような何かだ。趣味っていうのは、きつと人生に潤いを与えてくれるような事だよ」

——或いはそれは、自身の為の行動を何一つ出来なかった男からの忠告なのか。ロマン自身、その心は分からない。

「ならそうですね、私は一つ気に掛けていることがあるのです。どうしても似ていて、だけどあの人ははずが無い。なのに何故だか無性にその人が気になってしょうがない。こんな感情を抱いてしまう原因は奈辺にあるのか、この謎を解明してみたいですね」

「面白そうじゃないか。まるで探偵みたいだね。ボクにできる事なら手伝おう」

特に考えのない安請け合い。ロマンらしく、そしてロマニらしくない反射的な言葉だ。けれどマーキダはまるでその言葉を待っていたとばかりに妖艶に微笑む。その笑みにロマンが反射的にこれはマズイと思うも、時すでに遅し。

「なら、貴方をしばらく観察させてください。悪いようには致しません、ただ仕事中的あなたの様子や、こうして二人で話す時間を用いて済ませますので」

「えっ、えー……」

クスクス笑うマーキダと、呆気にとられた風のロマン。時間は既に午前三時三十分、明け方も程近い。けれど二人きりの夜は、まだまだ深々と更けていった。

第九話 中央管制室 II

「前方の両翼より低級の幻想種、おそらくはワイバーンとゴブリンの群れがやって来ています。数はおよそ二十ずつ、接敵は一分後でしょうか。左にゴブリンが多いですね」

「えーと、どれどれ……うん、大丈夫だ。よーし聞いていたね立香君？」

『大丈夫ですよドクター。マシユとマルタさんでまずは左翼の足止め、タラスクはローマ兵の皆さんに配慮して必要最低限で。オルタは右翼を蹴散らして、ただしエクスカリバーは未使用でどうにかお願い。それでアンデルセンは……何か適当にやっついて！』

『おいおい俺だけやけに適当じゃないかいぞもつとやれ！ 肉体労働など他の者にやらせればいいだろうさ』

カルデアからの敵襲の報に合わせて立香がテキパキと指示を出す。まだその指示には迷いがあるが、それでも芯は通っている。彼の言葉に合わせてマルタとマシユが敵の足止めに入り、セイバーオルタが単騎で敵群に乗り込み蹂躪する。

敵が弱いという因もあるが、それでもしつかり適材適所と言える配置によって瞬く間にワイバーンとゴブリンの群れは駆逐された。アンデルセンだけは何もしていないが、彼とていざとなればその観察力で敵の綻びを見つけたりするのだから侮れない。

こうしてサーヴァントの超常の力によってほんの一分二分ほどで戦闘は終了し、現在ガリアに向けて進軍を続けている正統なるローマ帝国軍は憂いなく足を進めることが出来るのだった。

「お見事、立香君。君も随分マスターとして様になって来ていて安心するよ」

『ありがとうございますドクター……ただここに来るまでに結構オルタのスパルタ教育が有ったと思うと気分が……』

『何を言う。マスター、貴様に必要な能力はまだまだ足りていない。先の戦いにおける指示は及第点だが、その言葉には迷いが見える。それではダメだ、マスターとして揺るぎなく振舞えるよう努々戦う事を

忘れるな』

『しよ、精進します……』

『大丈夫です先輩、間違はなく成長は出来ています。私もそのおかげで戦えているのですから』

『よっし、これから頑張るぞー！』

セイバーオルタの容赦ない批評が入り、それに落ち込んだ立香をマシユが励まし、その甲斐あつてか立香が簡単に意気を取り戻した。男とは単純なもので、気になる相手からの言葉は何にも勝る復活の呪文となるらしい。

『ふむ、それにしても改めて言うがそなたらカルデアの力は見事だ。どうだ、余の宮廷魔術師とならぬか？ 今ならシモン・マグスにとて文句は言わせぬが』

そう提案して来たのは第五代ローマ皇帝、ネロ・クラウディウスその人であった。その史実とかけ離れた愛らしい声音とセイバーオルタに似た容貌には誰もが度肝を抜かれたが、慣れとは恐ろしいもので現在は皆慣れてしまった。

唯一その胸部に納得のいかない者もいるらしいが、それは余談だろう。彼女は戦闘後の興奮と自棄を晴らすかのようにマルタから貰った果物と、保存食として持ち込んだワイバーンのジャーキーに齧り付いていた。

「私は生憎マスターと既に契約を交わした身ですからね。そういう訳にもいきません」

ロマン観察の影響でいつの間にかカルデアの機器の扱い方を一部学んでいたマーキダだが、その本質は契約を交わし特異点で戦う者である。そしてロマンの方はと言えば――

「ボクはほら、今更どの面提げて宮廷に戻れるかって話だからね。すみませんが、遠慮させてもらいましよう」

『むう、そうなるか……惜しい。実に惜しい！ そなたらが居れば余のローマはより盤石になると思うだけに惜しいな！ どうしてもダメか？ 対応は相談に乗るぞ!?!』

意外と食いついてくるネロに、ロマンの苦笑が重なる。しかしネロ

もすぐにローマ軍の方で用件があるらしく連れていかれ、カルデア側の通信は一時的に静かになった。

「なるほど、貴方は元宮廷勤めですか。のほほんとしているのに、観察すればするほど不思議なところが出て来る人です」

「そ、そうかな……？ いや、だってほら、ミステリアスな男性って意外とモテるなんて話を聞いたからね、あはは……」

「それで、モテましたか……？」

「いいや、全然。ボクにはマジ☆マリがあるわけだから、その気も全然無かったのさ」

溜息を吐いて笑ったロマンに呆れ顔のマーキダは手に抱えていた『智慧と王冠の大禁書』を開くと、その中の白紙ページに持っていたペンで書き込みを始めていく。これもロマンの観察を始めてからやり始めたことで、今ではすっかり見慣れた光景となっていた。彼としては正体がバレるのではないかと気が気でないが、幸いこれまでの所そこまで行きついた様子はない。

「その宝具、そんな使い方も出来るんだね。てつきり封印されているから絶対に開けない類の宝具だと思っていたけど」

「開けないのは機能が封じられているからではなく、別の理由です。なので記録を取るといった用途ならこの書を開くことは可能なのです」

鎖で封じられた書物というどうしようもない見た目の割に、融通は利くらしい。なんでもマーキダ曰く、この書物に書かれた内容は彼女の知識として吸収され引き出されるようになるとか。それがEX規格外という特異な評価の原因とも思えないが、外付けのハードディスクの様な宝具と考えれば中々異質だ。あるいはその種別が『記録／証明宝具』という類を見ない分類と考えればそれも妥当か。

そこまで考えたところで、一つ疑問がロマンの中に生まれた。

「ん？ 証明？ 一体それは何を証明するための宝具なんだい？」

確かに見た目からして記録宝具なのは間違いないが、では何を証明するのか。これが実は一切不明である。召喚された当初、サーヴァントマテリアルを記録する際にマーキダは裏側より映し出された王

国の影”という評価が最も適当と言っていたが、それは果たしてどういう意味なのか。三つある宝具の内その他二つは詳しく聞き及んでい
るが、これだけは未だ詳しいことは解説されていない。

それを問えば、マーキダはひしと『智慧と王冠の大禁書』を抱きし
めた。まるでそれだけが、最後に縋るべき希望のように。

「勿論、これで証明するのは一つだけです。歴史より抹消されたか
の国、裏側に落とされた幻想をこの世界に証明するための唯一の扉で
すから」

「——それはもしや」

彼はもうかつて見えたはずのシバの国の顛末を覚えていないが、一
つの仮定がその脳裏に思い浮かぶ。それは荒唐無稽なようで、けれど
この宝具ともう一つの特異なスキルがあれば可能なのかもしれぬ。

しかしそうなれば、つまりシバの国が消えた先は——

「さて、この話はここまでです！ せっかくの切り札ですから、肝心な
時まで秘匿しておくのが聖杯戦争の常じゃないですかね？」

「ま、まあ間違っではないけど……そうだね、もったいぶるならそう
いうことにしておこう」

秘密は女性を美しくする。それは誰の言葉だったろうか。マーキ
ダは意識している訳ではないだろうが、それでも男性のロマンがやる
よりは余程それらしい気もする。

ともかく誤魔化すように遮られた彼女の言葉によってこの話題は
終了した。ロマンとしてもうっかり藪蛇を突いて余計な事を彼女に
言いたくはない。あまりボロを出しすぎればきつとその正体に迫っ
て来るだろうから。

「さてと、ともかく立香君たちのサポートに戻るとしよう。数日後に
はガリア戦線も始まるだろうし、上手くやらないとね」

第二特異点の攻略は、まだまだ続いて行く。

◇

ガリア戦線は非常に苦しい戦いとなった。連合ローマ帝国に所属
する天才的な戦術家であるガイウス・ユリウス・カエサルの手腕は驚

異的な物であり、恐ろしいことにシャドウサーヴァントを除けば彼しかサーヴァントがいない状況でカルデアとローマの戦力に拮抗して見せた。

そのうえセイバーオルタはこれも試練の一角として切り札である『約束された勝利の剣』を意図的に封印、横合いから大火力で吹き飛ばすという手段すら取れない状況に立香は叩き落とされた。他にも多くの英霊の助けがあるとはいえ、これはかなり厳しい条件だ。

それでもどうにか前進して戦う事だけは諦めず、その果てにカエサルエクスカリバー・モルガンの撃破をこなしガリア戦役に於いて勝利を収めたのだから見事という他ないだろう。

「よし、良くやった立香君！ 力業だろうと何だろうと、君はあのカエサルを打倒したんだ！ 胸を張って勝利の美酒を楽しむべきだよ」

『いやあの、オレ飲酒は出来ないんですが……』

『そう硬いことを言うな我がマスターよ。俺だって酒は嗜むんだ、お前が飲んだところで問題はあまるまい？』

『そのちんちくりんの言う通り、楽しむときは楽しむのが宴の華だ。今は戦地故僅かな酒しか用意できぬが、ローマに凱旋した暁には派手に飲もうとしようではないか！』

『いいえ大問題ですミスターアンデルセンにネロ皇帝！ お酒は二十歳になってから、多少差はありますがこれは世界でも普遍的な常識です。そもそもお二人の姿自体、大人にはとても見えないのですが……』

『それを言ったら余も流石に怒るぞ！』

若干無責任な二人の発言を咎めるようなマシユに両者が肩を竦めたり怒ったりして、その後ろでさりげなくマルタがマスターに飲酒について語っている。彼女はあまり飲むタイプではないのだろうか。キリスト教圏の伝説である『アーサー王物語』にその原点を有するセイバーオルタは、たぶん何であれ飲むだろうが。

そんなこんなで談笑をしたりふざけたりしながら帰路につき、海路を巡ってローマへと出発した。その途中では“形ある島”なる孤島にて本物の神霊と出会って試練を吹っ掛けられたり、属性てんこ盛り

の二人のサーヴァントを相手にアンデルセンが珍しく言葉を失ったりと色々あったが、往々にして平和であった。

だがローマに帰還する直前、一つの巨大な障害が立ちはだかる。炎門の守護者であるレオニダス王の待ち伏せ、しかしこれは彼自身まったく乗り気ではなかったのか、殆ど手を抜かれた状態で戦闘に突入し呆気なく終わってしまったが。

『今のサーヴァントもやっぱり……』

「間違いなく、レフ・ライノール・フラウロスの召喚したサーヴァントだろう。根本として聖杯が向こうの手元にある以上、こういった脅威は常に警戒しなければならぬ」

『それでもまだマシな方ではあるがな。いかんせん守護の為の者を、攻める為や滅ぼす為に扱う時点でその男の底は見える』

「聞く限り他者を見下す性格という話ですから、きつと呼び出すサーヴァントも無軌道かつ適材適所という事を考えないのでしょう。数多くのサーヴァントを自在に呼び出せる事も踏まえて、現状のマスターとは対極の存在ですね。まあ私としてはどうしても気になることはありますが……」

フラウロス。その名は中世の悪魔召喚術を記した書に詳しい。それはソロモンの使役する七十二柱の悪魔の一柱の名だ。序列第六十四位、悪魔フラウロス。その名を冠するという事はつまり、黒幕にかの王が控えている可能性があるということ。

カルデアに召喚された彼女は、いったいその事をどのように考えるのか。ロマンとしては気になるが、しかしどうしても聞くことが出来ないというのが本音だ。ロマンソロモンからすれば、感情を解さない魔術王が人理焼却を行うなど考え難い。それにフラウロスの名前とて、ただその名を借りているだけという見方も出来るのだ。

だからこの可能性はまだまだ低いし、とても信頼できるものではない。むしろありえないと言い切る方が自然だろう。しかしそれでも、もしかしたらという思いはある。何かの間違いで召喚された己が世界を滅ぼす。なんと恐ろしい事か。

だけど何より恐ろしいのは、魔術王を人間と最後まで言い続けた幻

想女王がその可能性を疑っているかもしれないこと——

「いいや、ボクも何を考えているんだか」

「? どうしましたドクター?」

「なんでもないよ。ちよつとした気の迷いさ」

首を傾げるマーキダに軽く答えて、無益な思考を振り払う。そう、別に彼女にどう思われていようと究極的にはロマンに関係の無い事だ。彼女が愛した“かもしれない”のは別の存在であり、その者への考えがどれだけ疑惑に渦巻いていようと気にする方がむしろおかしい。だからこの考えもこれまでだ。

ともかく、カルデアでどれだけ複雑な考えを弄していようと特異点の状況は変わらない。ローマに凱旋後はネロ主導の下で大宴会が開かれ、その日の夜は盛大な騒ぎとなった。カルデアでもちよつとだけマーキダが奮発して作った料理を肴にプチ祝勝会をしたりと密かに盛り上がり、ダ・ヴィンチちゃんも珍しく工房から出てきたりする。

その後は単純明快だった。破竹の勢いで連合ローマ帝国首都に向かい進軍、ただそれだけである。形ある島にて出会った女神ステンノの授かりものより判明した首都へと向かい、特異点の元凶に終止符を打つ。その過程で強敵と遭遇して味方が囚われたりといった不祥事は有ったが、それでもはやガリアにおける勝利を収めたローマ帝国軍を止めることは能わず。道中の全ては蹴散らされ、華の軍勢はただ眼前を見据え邁進する。

——こうして、カルデアは第二特異点の元凶たる連合ローマ帝国首都にまで到達した。

第十話 魔神フラウロス I

『ここらが潮時か』

『え?』

連合ローマ帝国の首都に聳え立つ王城。敵の首魁たる神祖ロムルスを追いつめて敵を蹴散らしながら進んで行く最中で、不意にセイバーオルタが小声で洩らした。その声音は硬い。普段の何処か気怠いような調子は鳴りを潜め、これより先に起きる何かを案じているかのようなのである。

「潮時? それはいつたい何が?」

『分からぬか? これより先に我らが本来標的と定めた者がいる。おそらくは今ここにいる面子だけでは勝利を拾えまい』

『それは……穏やかではないわね』

セイバーオルタが見渡す先に居るのは、立香にマシユ、アンデルセンにマルタ、そして荊軻に皇帝ネロの六人である。これに騎士王自身も含めれば戦力としてはむしろ過剰すぎる程であり、それだけに先の彼女の発言が不気味であった。

これだけの戦力をもってしてなお勝てる事のない相手が潜んでいる。つまりこれの意味するところは――

「いよいよ私の出番という訳ですね」

『そうだ』

椅子に座っていたマーキダがすぐに立ち上がる。彼女の言葉にセイバーオルタが短く肯定を示し、そして再び戦闘に戻って行った。どうやらマーキダを待つつもりは毛頭無いらしく、これまでと何ら変わらぬ速度で行軍を続けている。

逆に言えば、神祖ロムルスがその相手ではないという事なのだろう。

「ドクター、レイシフトの準備をお願いします。サーヴァントとしての本懐を遂げに行きましょう」

「了承した。ただし戦闘中の立香君たちの座標に直接送るのは危険だから、少し離れたところに転送する。多少の戦闘行為が予想されるが

大丈夫だね？」

「勿論。そう簡単にシバの女王は倒れませんよ」

不敵に笑い、剣を帯びて禁書を抱えた幻想女王が中央管制室の出口に向かう。何一つ気負う事のないその背中が堂々としていて、これより先に死地に向かうとは到底思えない気楽さだ。もしこの後で帰ってくる気が無いとしても、どことなく信じられるほどに。

——いいや、彼女は帰ってこなかった。もはやその時の顛末は覚えていなくても、胸に残ったあの感情だけは覚えている。

故にロマンは、思わずその背中に一言かけてしまっていた。

「ちゃんと皆と一緒に戻ってくるんだよ。帰って来るまでがボクらのグランドオーダーだからね」

「分かっていますよ。ふふ、なんですかその言い回しは、まるで子供のようですね」

明るく笑って、マーキダは管制室から出て行った。

◇

レイシフトの感覚はマーキダにとっては二度目だが、何度体験しても慣れることは無いのではないか思う。そんな不思議な感覚と共に、彼女はローマの地に降り立った。

そこは戦争の渦中だ。目の前には立香たちが先行しているであろう王城が立っており、その周囲では熱に浮かされたかのような民衆や兵士たちがローマ軍と戦闘を行っている。

「ふむ、この先ですか」

眩き、抜刀した。『智慧と王冠の大禁書』を小脇に抱えたまま、敵がひしめく前方へと向かいドレスを翻して軽やかに一步を踏み出す。戦争の中においてその優雅な足取りは嫌でも目立つ。唐突に現れた謎の女に周囲の連合ローマ帝国軍兵士は即座に反応し、敵対者を打ち倒すべく徒党を組んで襲い掛かって来た。

それを、マーキダは事もなげに迎撃する。抜いた剣で相手の剣を弾き飛ばし、流れるように『智慧と王冠の大禁書』より発せられる光弾が意識を刈り取る。勢いのままに剣を振るえば、それだけで連合ローマ帝国の兵達は吹き飛ばされて、残った者も怯えたように後ずさつ

た。

「怪我をしたくなければおとなしく下がる事です」

その言葉が切っ掛けとなり、いよいよ彼女の周囲からは敵影が消え去った。そうして一直線に空いた王城への道を今度は優雅さの欠片もなく全力で走り抜けると、一路立香たちが辿った道をトレースして追いつがる。

『マーキダ、聞こえてるかい!?!』

「そんな大声でなくとも聞こえてますよドクター！　向こうの様子はどうですか？」

『あつちは神祖ロムルスとの戦闘に入った。君の足ならばおそらく五分もあれば到着できるだろう。それだけあれば向こうも決着は着いている可能性は高いが、一応意識はしといてくれ』

「分かりました。こちらの敵性反応はどうですか？」

『数えるのも億劫なくらいたくさん来てるよ。だけどまあ、どれも君の敵じゃないさ』

その言葉にマーキダの口元に再び笑みが浮かんだ。それと同時に道を塞ぐかのように兵士とゴーレムが出現し、武器を振り上げ身構えた。その数、およそ十はくだらない。

だがそんな物はなんの障害にもならぬとばかりにマーキダの背中と足から一気に魔力が放出され、弾丸のように突貫する。真正面から受け止めようと立ちはだかったゴーレムは一刀の下に切り伏せられ、その背後のゴーレムごと粉碎された。兵士たちはもはや『魔力放出』の余波だけで藁のように飛ばされて、彼女の敵となることは叶わない。

「やあつ——!」

走る、走る、斬る、駆け抜ける、吹き飛ばし走り、徹底的に蹂躪する。ひたすら突き進むその様はとてもキャスターらしくなく、同時に人型の災害を思わせる怒濤の勢いだ。一秒たりとも一歩だろうと速度を緩めることなく、風のように王城内を突き進む。

そうして最奥の部屋、カルデアの面々が居るであろう部屋までやって来たのは、ドクターの予想通り五分が経過した時の事だった。

部屋に突入しまず目に入るのは、戦闘の余波によって荒れ果てた室内だ。そしてそこにはカルデアのメンバーが全員ほぼ五体満足で立っており、代わりに一人の大男が今まさに消え去ろうとしている時であった。

「忘れるな、ローマは永遠だ。故に世界は、世界は、永遠ローマでなくてはならない。心せよ、我が愛し子よ……」

「忘れはせぬとも、偉大なる神祖よ。ローマ皇帝として、その責務を見事果たして見せようぞ」

ネロとその大男、おそらくは神祖ロムルスが僅かに言葉を交わし、そしてロムルスはどこか満足げに消え去った。そうして連合ローマ帝国の首魁はこの特異点より消え去り、間違いないこの地には安寧が訪れる。それは確かに事態の終わりとみなしてよいだろう。だがもう一つ、カルデアが為すべき使命がある。

「聖杯がまだ見つかっていませんね。早く宮廷魔術師とやらを探さなくてはなりませんか」

「あ、マーキダ。久しぶり、それにいつの間」

「ついさつきですよマスター。なんだかい雰囲気だったので空気を読んで黙ってました」

マスター達と合流し、束の間安息が訪れる。しかしそれはまやかしの物、本当の脅威はすぐそこにまで迫っている。

「む、そこに誰かいるぞ。人間ではない、おそらくは魔性の類だ」
「!？」

荊軻の言葉に全員が彼女の示した一角に注目した。そこには先ほどまでいなかったはずの緑のスーツと帽子の男、この時代においては宮廷魔術師を名乗っていたらしいレフ・ライノールの姿があった。彼の手には黄金に輝く杯が握られており、すなわちそれが本来の回収目標である聖杯であることを如実に語っていた。

「全く、ロムルスの奴め。この程度の人間どもに倒されるとは使えぬ奴だ。わざわざ私が聖杯をくれてやろうと言っても聞かず、それでこのザマとは笑わせてくれるな」

「貴様……！ その言葉、取り消すがいい！ 神祖への侮辱は我ら

ローマへの侮辱とみなすが良いか!」

そのあまりに侮蔑の籠った言葉に、ネロが滅多に見せない気炎を吐いた。その様は確かに皇帝に相応しい威厳であり、只人ならばその気迫だけであるいは委縮し、己が命を投げ出そうとするだろう。

されど、忘れるなかれ。レフ・ライノールは真つ当な人ではない。故にネロの憤怒に対してもなんら思う所はなく、ただの嘲りの笑いだけで済ませてしまった。

「ははははッ！　これは愉快だ痛快だな！　あの役にも立たぬ男を指して侮辱だの取り消せだの、何をふざけたことを言うのやら!!　いやはや、やはり人間とは度し難い愚か者にして屑の集まりだな」

『……随分と活き活きしてるじゃないかレフ・ライノール。すっかり裏切りが板についたようだけど、それがもしかして素なのかな？　全く、一時とはいえ君と共に競い合った身としては悲しい限りだよ』

「誰かと思えば、君かロマニ・アーキマン。ああ、つくづく君を殺せなかつたことは惜しいよ。ふざけた態度の癖に、無駄に頭の回るその在り方。その無能な思惑ごと消し去ればどれだけ良かったか」

「あまり彼を侮辱しない事ですよ、レフとやら。彼は貴方の様な性根から腐った者とは何もかもが違う。勝手に人類に愛想を尽かしましたか？　ならばそれは早計だと言っておきましょう」

マーキダが一步前に出た。それを補うようにセイバーオルタとマルタが隣に並び立つ。サーヴァントの誰もが臨戦態勢。もはやほんの一瞬の間隙がレフの命を奪う引き金となるだろう。それは彼も分かっているはず。

しかしそれでも、その傲岸不遜な態度は崩れない。否、マーキダを見たことはいよいよレフの顔に映る嘲りの色はいっそう濃くなった。その面貌を嘲笑と侮蔑で彩り、ただひたすらに一人の女を罵倒する。

「ほう、お前は……ああ！　幻想女王マーキダか！　これは驚いた、まさか国ごと世界の裏側に消えた貴様がこうして人理修復を行う馬鹿者どもに加担するとは。はつきり言ってやろう、そのような行いは全て無駄！　無意味だ！　たった一人の男すら変えられぬ貴様に、一体人類の何が救えるという!?!　大言壮語を吐きながら何一つ成せな

かった人類一の愚か者め！ シバの女王よ、貴様は特に念入りに殺してやるぞ！」

『……!? 霊基が変質してるぞ！ これは、まさか——』

「抵抗してもどうにもならない、その足掻きは須らく結論として無為になる。さあ、我らが王の寵愛を、消え行く貴様らに見せてやろう！」
レフ・ライノールが叫んだ。それと共に彼の姿が変貌する。高く、巨大に、密度を増して悍ましく。もはやレフ・ライノールとしての面影はどこにもない。ほんの一秒前まで男性が居たはずの箇所には、ただ一柱のあまりに醜い怪物が居ただけだった。

そうして城を突き抜け聳え立ったかの者は、高らかに自身の存在を謳いあげる。それこそが至上命題であるかのように、誇らしく、そして傲慢に。

「改めて名乗るとしよう。私はレフ・ライノール・フラウロス。七十二柱の魔神が一柱！ 魔神フラウロス、これこそが王の寵愛そのものである！」

『魔神、いやこの反応は悪魔か!? そんな馬鹿な、伝説上の存在がどうしてこんなところに——!?』

そのあまりの醜さに、そして圧倒的な存在感に、誰もが言葉を失った。決して怯えている訳ではない。しかしこの尋常でない手合いの前に、常の平常心でいるというのはどれほど難しい事だろうか。悪魔という存在を実際に目にしたことが無い者にとって、その醜悪さと悍ましさは思考を停止させるに相応しい異様であった。

だからこそ、最初に反応出来たのはやはりこの者以外にはあり得ない。

「ふざけたことを言うじゃないですか、魔神フラウロス」

常には無い激怒を面貌に浮かばせて、マーキダは更に一步前に出た。フラウロスは巨大だ。ただ踏み出すというそれだけで、間違いないフラウロスの攻撃範囲に入るだろう。

しかし一切頓着しない。その心を支配するのは先のネロにも劣らぬ怒りの情。ただそれだけが魔神を名乗る者への躊躇も戸惑いも投げ捨てさせる。

常道ならばここで様子見をする？ 怒りを堪えて耐えるのか？
いいや違う、それは断じて違うだろう。言いたいことがあるならば、
そこで足を止めるなどありえない。

つまらぬ道理は知った事かとばかりに、彼女はもう一步前へと踏み
込んだ。

「王の寵愛？ 七十二柱の魔神？ 寝ぼけたことを言うのも大概にし
なさい。あの方が、ソロモン王がこのような事態を引き起こすはずが
ありません。貴方がその名を騙るだけの愚か者なのか、あるいは本当
に彼に仕えた悪魔なのか。どちらでも構いません。けれど貴方は、真
意はどうあれ間違いなく彼を、私が愛したあの方を侮辱しました。な
にやら私のことを随分と恨んでいるようですが、それはこちらとて同
じこと」

『——君は、どうしてそこまで』

『智慧と王冠の大禁書』の鎖が緩む。そこから溢れ出すのはいずこ
かより汲み上げられた無尽蔵の魔力の渦だ。確かに聖杯には劣るだ
ろう。だが個人で使う分にはそれこそ莫大と評せるだけの量がそこ
にはある。それらが全て魔術と呪術の燃料へと置き換わり、あらゆる
怒りを体現するかのように荒れ狂う。

「貴方は必ずここで殺します。不屈きにもその名を名乗り悪事を成し
た報い、シバの女王が死を以て償わせましょう」

「ほぎけ、人間風情が……！ 我らが魔神の力、とくと味わい無残に死
に絶えるがよい!!」

あまりに濃密な魔力に空間が歪み、揺れた。湧きあがる呪殺の炎が
空を埋め、魔神の放つ見えざる一撃が波となつて広がる。巨大な力と
力の衝突は轟音を撒き散らしながら上へと逃げ去り、それによって城
の天井が瓦礫と化して吹き飛んだ。この場には似つかわしくない青
空が戦場を照らし、魔神へ挑む者どもを祝福するかの如く浮かびあげ
る。

故にこそ、この一撃を以て魔神柱との決戦の幕が開かれた。すなわ
ちそれは——

“魔神柱出現”

——第二特異点の行く末を決める戦いの合図でもあった。

第十一話 魔神フラウロス II

魔神フラウロスは、まさしくその傲慢にして人間すべてを見下す態度に相応しいだけの強さを持っている。それは確かに強大無比な実力であり、彼の言を借りれば雑多なサーヴァントが幾ら寄り集まった所で敵いはしない程だろう。

だがしかし、この現状は何なのだ。確かに初撃は戯れにも近い一撃だった。しかしそれでも、目の前の愚かにして哀れな人類どもを滅ぼすには十分すぎるはず。だというのに、その一撃は容易く防がれた。寄りにもよって、フラウロス“達”が最も見下す女の手によってだ。故に魔神はほんの一瞬停滞した。ありえざる現象、ありえざる人選。それら全てが彼に怒りを抱かせ、それ以外の行動も思考も許さない。

そして――

「令呪を以て命じる！ オルタ、目の前の怪物を消し飛ばせ！」

――その隙を見逃すほど、成長を重ねた人類最後のマスターは甘くはない。

「承知した。醜悪なる怪物を奈落へと叩き落とそう」

光が生まれ、暗黒が台頭を開始する。強く強く、更に強く。限界など知らぬとばかりに闇の極光が刀身に収束した。ありとあらゆる全てを破壊する一撃がこの地上に生まれ出る。研ぎ澄まされた騎士王の牙が、眼前の敵対者を滅ぼす為に唸りをあげた。ゆっくりと、威厳をもって振り上げられたその魔剣は、魔性を以て魔神を絶たんという意志に満ち満ちている。

「卑王鉄槌、極光は反転する――光を呑め！ 『エクスカリバー約束された――』」

さあ、括目せよ。これより降り注ぐは暗黒の光だ。その果てに残るものは何も無い。ただただ破壊と絶望を齎すヴォーテイガンの息吹が此処に顕現する。

しかしだ。例え滅ぼす為の一撃であろうとも、それでもこの魔神とは決定的にあり方が違うのだ。闇に堕ちてなお人類を救うために稼働する最強の幻想は、どうであれ人理を破壊する者を許容するなどあ

りえない。

『——勝利の剣』——ーンツ!!』

謳いあげられ讃えられた真名と共に、極光が剣より放たれる。振りぬかれた一撃が波濤の如くフラウロスへと襲い掛かり、その受肉した悍ましい肉体を一片の容赦なく消し飛ばす。そうして漆黒の光が駆け抜けた後には、あらゆるモノは己が敗北を認めただ消し飛ばされる未来がある、

はずであった。

「ふっ、ハハハハッ！ どうした、人類最強の光はその程度のものか!?! これは拍子抜けだなあ！ ああ、お前たちに相応しい滑稽さだとも!!」

『な、魔神柱の肉体の三割も消し飛ばせてないだつて……? いやだけど、例え魔神と言えどあの一撃を受けてその程度の被害で済むものなのか!?!』

カルデアの通信からはロマンの驚愕に包まれた声が送られる。しかしそれも無理はない事だ。何せ今の一撃をもつてしても、フラウロスは大した損壊を受けていない。破壊され消し飛ばされた肉塊は即座に超速の再生を始め、またそそり立つ根本からは黒い瘴気の如き何かが溢れ出る。

対城宝具を受けてなお余裕を醸し出すこの存在。その圧倒的な再生能力は類を見ないものであり、また攻撃力は通常のサーヴァントなぞ藁屑のように吹き飛ばして余りある。

確かにそれは、魔神と形容されるに相応しい存在なのだろう。

「いいや、この俗物がそんな高尚なものであるか。見えているぞ、貴様のその存在のタネは。大方先の一撃を『約束された勝利の剣』にブチ当て相殺したな。そしてその再生速度、おそらくは膨大な質量と密度、加えて魔力に依るごり押し of 回復と見た。つまりこれならば——」

「私は貴方に問いをかけましょう。この世の果て、追い求めても追いかめても届かぬ最後の光明。彼方にこそ映えるその一筋は何やらん？」

「決まっている、地平線だ。さあ、お前の『呪術』を貰うぞ」

歌うように問いが投げられ、アンデルセンがなんの躊躇いもなく即答した。それはマーキダの宝具に因を発するやり取り、互いの協力あつての等価の契約が此処に成立する。

「授けましょう、戴きましょう。互いの知恵を以て、我らは共に祝福されん」

そうして、マーキダの第二宝具『求めよ、さらば与えられん』が発動した。その内容は問いに答えた者との等価交換。互いのスキルを一つずつマーキダが指定し、両者に付与する。相手に依存する故に一概に強力とは言い難いが、しかしその対価に大きなメリットが存在する。

「ほう、なるほどこれが呪術を扱う際の感覚か。経験はない、使い方も漠然としている、しかし何をすれば良いかは分かる。全く以て気味が悪い、だが今はこれこそが必要とあらば仕方あるまい。読者の求める展開を書くのも作家としての仕事の内だ」

「あまり余計な事言ってる暇は無いわよアンデルセン。見たところ私の拳でもアレを退治するのは難しそうだし、高火力を持った二人のサポートがこの戦闘の鍵なのだから」

「言われずとも分かっている、そう作家を急かすな筆が折れるぞ。」木のうろに坐すは銅の犬と銀の犬、そして金の犬だ。その大金のお代は呪いか否か、首を刎ねられた魔法使いだけが知っているぞ！」

メリットとはすなわちスキルの習熟。例えどのようなスキルであれ、付与されたスキルは互いに十全に扱うことが出来る。だからこそアンデルセンに与えられた『呪術A+』は最高効力をもって発揮され、彼お得意の童話になぞらえた詠唱と共に魔神に歯向かう勇氣ある者たちを言祝いだ。

それと同時にフラウロスの一撃が再びやって来る。空間を揺らし広がる一撃は先の衝撃で天上より堕ちて来た瓦礫を悉く粉碎し塵と同化させその威力を物語る。しかしそれは全て無為だ。マーキダの炎がまたも空を覆いつくし、魔神の一撃のほとんどを相殺する。それでも残った余波は存在するが、しかし忘れてはならない。この場には

盾持つ乙女もまたいるのだ。

「先輩、下がってください……！ 仮想宝具、展開します！」

シールダーのマッシュが一気に前に出て、立香とネロ、そして荊軻の防衛手段を持たない耐久力の低いサーヴァント達を一手に引き受け庇った。残りの三人は宝具や己の魔力で耐えきり、ほぼ無傷の様相呈している。

『立香君、あのフラウロスの詳細は未だ不明だけど、ひとまずアレの足元に近寄るのはダメだ！ あそこの瘴気にも似た何かは人体を食い荒らす危険な物質だ。サーヴァントでも耐久力に秀でたサーヴァントじゃなきや話にならない程に！』

「つつ、了解しました！ となるとセイバーオルタだけが接近できるわけか……！ ネロ皇帝と荊軻さんはマッシュの後ろで待機！ マーキダはこのままフラウロスの攻撃を緩和して、アンデルセンはサポート！ マルタさんはこっちでマッシュの傷の手当てを！ それでセイバーオルタは——」

「言われずとも分かっている。いいぞマスター、迷いが少しばかり消え去ったな」

不敵な笑みを浮かべたセイバーオルタが魔神柱の下へ勢いよく突っ込んだ。その根元から立ち昇る黒の瘴気をその身に纏う莫大な魔力だけで相殺する。そのまま『魔力放出』の勢いにより上空へと飛翔した彼女は剣を振り下ろすと、魔神の目玉を一挙に二つ切り裂いた。

「おお、おおおっ——何故だ、何故傷の治りが遅いのだ!? 壊死か、いいやそれには早すぎる！ 貴様たち、一体何をしたのだ!？」
「何をした？ あらゆる問いに答える悪魔の名を冠するくせに、随分と雑な問いかけじゃないですか？ そしてもちろん、種を教える事などありませんが」

動揺した魔神柱の隙を突くかのように、『智慧と王冠の大禁書』により強化された魔力砲が一斉に襲い掛かる。ランクに換算すればおよそBランク。最上とまでは行かずとも十二分に強力な一撃が全部で六本、あらゆる角度から魔神を貫いた。

そしてこの一撃で扱われた傷でも、フラウロスの再生能力は低下している。セイバーオルタが切り裂いた目玉もいまだに光を映しておらず、魔神が誇る超級の再生能力は並のサーヴァントの数倍程度にまで落ちていた。

仕掛けはあまりにも簡単。アンデルセンが用いた『呪術』によつてセイバーオルタとマーキダの一撃に呪いがかけられたのだ。その内容は傷の強力な治癒阻害。あるいは宝具に匹敵するだけの強大な支援だが、それさえアンデルセンの規格外の魔力と豊富なサポート術があれば造作もない事だ。

故にフラウロスは次第に追い詰められていく。たった三人のサーヴァントのいいようにやられる様はどれだけ歯がゆいだろうか。けれど彼はもはや詰んでいる。その一撃は相殺され防ぎきられ、与えられる一撃は当たり前のように致命傷。このまま進めば先に力尽きるのがどちらかはもはや明白だった。

——けれど、魔神を侮つてはいけない。これなるは人理焼却を行つた偉大なる者の末端である。その力、例え窮地であろうといささかも衰えること能わず。まさに自身を打倒せんと猛威を振るう相手に対して、最悪にして最大の牙を突き立てる。

「貴様らの足掻きなど所詮は無駄だつ！　ここで大人しく死に絶えろ、それこそが最も賢い選択だ！　光栄に、特別に、この私が貴様らの引導を直々に渡してやろう！」

「む、これは——マスター、一つ派手な一撃が来るぞ！」

直感でフラウロスから発せられる危険性を察知したセイバーオルタが魔力放出による強引な飛翔でマスターの下へと帰還する。それと同時にマーキダも急いでそちらへと駆け寄り、防衛の態勢をやれるだけ整える。

そうして、フラウロスの誇る最大の一撃が放たれた。

「絶望し、そして消え去るがよい——『焼却式　フラウロス』」

その一撃は、言うなれば個人規模にまで落とされた人理焼却の炎である。人類の滅却という偉業を成し遂げた者の端末として、フラウロスはその一端の力を使用した。

襲い来る炎は凶悪にして猛烈な見た目に反して概念的な攻撃、故に
どれだけ強力な盾を持ち込もうと完全には防げない。そのうえ此度
のこれは威力がこれまでとは段違いに過ぎる。マーキダの呪殺の炎
だけではとても相殺など不可能で、よってこの一撃をもってフラウロ
スが逆転勝利を収める事となるのは想像に難くない。

「いいえ、まだ手だては残っていますとも！　そうでしょう、
『愛知らぬ哀しき竜よ』！」

「——ッ!!」

それに抗う者がいた。聖女マルタがその宝具である
『愛知らぬ哀しき竜よ』を呼び出すと同時に、かの竜は一目散に焼却式の
炎の中に突貫したのだ。例え竜種であろうともただでは済まないそ
の一撃だが、しかし逆を取れば竜種はそう簡単にはやられない。そし
て太陽の灼熱にも匹敵する焰を纏った亀竜は、その身の犠牲と引き換
えに焼却式の大幅な緩和を成功させて見せた。

「よくやったわタラスク、今はゆっくり休んでちょうだい……」

「立香よ！　このチャンス、モノに出来ねば余とて怒るぞ！　千載一
遇の機会、見事勝利への華としてみせよ！」

「分かっています！　二画目の令呪をもってカルデアのマスターが更
に命ず！」

大技を放てばそれに見合うだけの隙が出来る。子供でも分かる理
屈だ。故にこの機会を逃す事などありえない。それをよく分かって
入る立香だからこそ、二画目の令呪の仕様すら惜しまなかった。

「マーキダ、その一撃を以てフラウロスに止めを刺せ！」

「よくぞ言ってくれました！　あの忌々しい肉柱に終焉を見せてやり
ましょう！」

戦闘の興奮なのか上気した声音で答えたマーキダの手元には、既に
ワイバーンの血で塗れた『智慧と王冠の大禁書』の姿がある。それは
つまり呪術を扱う上での対価を大量に払い終えた後という事。よっ
てこれより放たれる一撃は先ほどまでとは比べ物にならない一撃で
あることを示している。

「さようなら、フラウロスを名乗る怪物よ。私が何も成せなかった愚

か者だという事など知っていますが、貴方はそれ以上に大馬鹿者です。私の前でその名を名乗るなど、命を投げ出すような事だと知りなさい」

「ぐっ、おのれ……貴様に我らの何が分かるというのだ！ 我らの王の寵愛を理解せぬ愚か者がッ！ 貴様には必ずや絶望を見せてやるぞ！」

「おあいにく様、私を絶望させたければ非道に染まったソロモン王でも連れてくることですね」

積層する魔法陣。重なり合ったそれらを通過するように令呪の後押しを受けた魔力の光線が通過して、更に増幅された一撃は魔神柱の肉体の半分以上を吹き飛ばす。もはや損壊の激しすぎるフラウロスはその肉体を維持できない。悍ましくも破壊されたその姿から、元の人間の姿へと急速に回帰していった。

——よって、これにて魔神柱フラウロス、沈黙。

◇

「まさかこの私が負けるだ……！ 馬鹿な、ありえん!? やはり壊死が始まっていたのか、なにぶん長らく神殿から離れすぎていたからな……！」

まるで負け惜しみのように苛立ちと憎しみを籠めて呟くレフの身体は、今の戦闘の影響かかなり傷ついているように見える。しかしそれでも彼は依然としてその態度を改める事など無く、カルデアに集った面々を罵倒することを忘れない。

「レフ教授、どうであれ貴方の負けです。大人しく私たちに聖杯を渡してください」

「ふん、キリエライトか……だが例えどうであれ、この特異点は滅ばなければならぬ運命なのだ。だからこそ、私は最後の切り札を呼び出すとしようではないか！」

『聖杯の魔力の高まりを確認！ これは——英霊を召喚しようとしているのか!?!』

「させるか——！」

レフの叫びと共に聖杯から魔力が零れ落ちる。それを阻止するた

めに荊軻が電光石火の勢いでレフに詰め寄り、その首を絶たんとヒ首を振るった。しかし、

「出るがいい、戦闘王アツティラよ！ 後世にてローマを滅ぼした貴様こそ、この特異点の終幕に相応しい——！」

彼は召喚を成功させてしまった。首が落ちる直前まで勝ち誇りながら、その生を終えてしまう。そうして残されたのは、聖杯より呼び出された新たな英霊。白きベールを纏った、虚無の大王だ。

「私は、フンヌの戦士である。貴様たちを、この時代を破壊するために参上した」

「おいおい、一難去ってまた一難か？ 勘弁してくれ、そんな少年漫画的なお約束は創作だからこそ面白いのだぞ？」

白い女性の機械的な声と、アンデルセンの呆れた声がやけに響く。そして、

「その命も、文明も、何もかも破壊してみせよう。『フォトン・レイ軍神の剣』」

——破壊の一撃が放たれた。

第十二話 第二特異点、決戦

走る。崩壊した連合ローマ首都から一目散に飛び出したのは、傷だらけになりながらもどうにか生き延びたカルデアのメンバー達。荒野を駆ける彼らは今まさに、特異点崩壊を争う瀬戸際の上をひた走っていた。

「ドクター！ 状況報告をもう一回！」

『分かった、よく聞いてくれ！ 現在召喚された英霊、推定アツティラ大王——いや、アルテラの方が正しいか。彼女は首都ローマを指して行軍中だ。幸い移動速度はそう速くもないから、君たちの足でも十分追いつける。だけど——』

目の前にワイバーンが飛び出してきた。ゴブリンが飛び出してきた。雑多な敵が雲霞のごとく道を塞ぎ、駆ける者たちの足を止めんと立ちほだかる。

しかしその程度では英霊の力を前に話にならない。荊軻が飛び出し、匕首を振るい血路を開いた。間一髪で合流し、マシユと共に破壊の光を防いで見せたブーディカが戦車ごと割り込む。数多の敵がそれによって両者に集中し、マスター達の眼前に細くとも確かな道が生まれた。

「荊軻さん！ ブーディカさん！」

「行け、カルデアのマスターよ。なに、私たちの事は気にするな。元より命を惜しむ気は無い。ここで存分に役目を果たして見せよう」

「そうそう、だから君たちはあの女の子を何としても止めるんだ。せっかくローマとの因縁をいったん忘れてまで協力したのに、その結末が世界の崩壊なんて寝覚めが悪いつたらないよ」

その両者の言葉を背にして、更に走る。確かに、このタイミングでこの二人と別ればもう会えないのは間違いない。だけどそれでも、彼らは進まなければならないのだ。

『アルテラと同化してしまった聖杯からは無数のワイバーンなどの召喚が確認されている。だけどそれらはたった今彼女たちが捨て身で引き受けてくれたから、後はもう追いつくだけだ！ 敵は聖杯と直結

している関係上、間違いなく途轍もない強敵だ、だけど君たちならば、必ずや倒しきれぬ！」

英霊アルテラは、この数百年後に西ローマ帝国を滅ぼしたとされる匈奴の王だ。その正体はどうやら女性だったようだが、ともかくその逸話は無視できない。つまりそれはローマに対する特攻、首都ローマに彼女が到達したが最後、この特異点は基軸を失い完全に消失する。ひいては人理修復の失敗へとつながるのだ。

故にこそ、彼女を止めなくてはならない。先の連合ローマ首都で見せた一撃、その威力は聖杯と直結したからか対城宝具の域に達している。騎士王の振るう聖剣と同等の威力の宝具が、さらに無尽蔵の魔力供給を以て放たれる。それがどれほどの悪夢かは想像に難くないだろう。

だけどそれでも、立ち向かうのがカルデア最後のマスターと、そんな彼に呼ばれた英雄たちなのだ。

「！ 正面にアルテラ大王の姿を確認しました！ もう一息です先輩！」

「そうだ、気張れマスター。ここで貴様が潰ればそれだけで世界が滅びると心得ろ」

「……簡単に言ってくれるなあもう！」

やけくそ気味に叫びながら、けれど決して足は止めないし緩めない。見える白い背中にもうすぐそこ。あとほんの僅かである。召喚されるワイバーン達はもはや数を増やす前にマーキダとオルタの手によって吹き飛ばされる。その障害になる存在は今や無い。

そして、

「追いついたぞ、アルテラよ！ そなたには言っちゃりたいたことが山ほどあるが、今は敢えて問うまい。余のローマを滅ぼすというならば、まず余を滅ぼしてからにしてみせよ！」

「ローマ皇帝が死んでもそれはそれでマズイんだけどね！ とにかく、ようやく追いついた！」

とうとう追いついた。アルテラが向けられた明確な敵意と殺意を前に、ようやく足を止めて振り向く。その瞳に映る色はやはり空虚。

どこまでも無機質で機械的ながら、迸る魔力は並大抵のものではない。

「お前たちは……そうか、私の敵か……いいだろう、ならばお前たちから破壊しよう……」

「ふん、随分とお粗末な思考回路じゃないか。これではまるで人形、あるいはプログラミングされた機械といったところか。なんにせよ、これが破壊の大王の正体とはな」

「人は見かけや伝承によらず、といったところでしようか。どうあれ、ここで倒れてもらいましょう。人の世は、既に無秩序な破壊を必要とする時代を終えていますから」

各々が武器を構えた。暗黒の聖剣が、黒金の呪剣が、赤の剣が、三色に輝く剣が、そして十字の杖と大楯が掲げられる。

これより始められるはこの特異点の行く末を決める戦い。ここでカルデアが敗れば、それだけで人理の崩壊は約束される。だからこそ敗北は許されず、しかしアルテラもまたここで敗北など認めはしないだろう。

故にこそ、ここに最後の戦いが始まった。

◇

まず初撃を獲ったのはセイバーオルタ。『魔力放出』による勢いに任せ砲弾のように突貫した彼女に、アルテラは半歩左にズレることで対処した。

わずかに乱された剣は三色に輝く剣で受け止められ、間髪入れず体制を立て直したセイバーオルタと猛烈な剣戟を交わし始める。

「ハアッ——！」

「——破壊する」

騎士王の剣は獯猛だが、しかしそこには術理がある。牙はただ鋭いだけでは脅威足り得ない、磨かれ最適化されてこそ脅威足り得るのだ。故に有り余る魔力に任せるだけでない剛の剣は間違いない。剣の英霊として相応しいものであり、誰であれ彼女を弱いと評することは不可能だろう。

他方、アルテラの剣はどこまでも冷静沈着だ。機械のように冷徹な

瞳でセイバーオルタの剣を俯瞰し、そして一寸の狂いもなく対応して見せる。その様は戦闘機械と評するほかなく、寧猛さを隠そうともしないセイバーオルタとは対極に位置するあり方だ。

音速を遙か置き去りにして交わされる剣戟の舞踏は余人が入り込む余地など絶無。この剣の英霊達による応酬は、それこそ放っておけば一日を越えてなお続くだろう。暗黒と三色の輝きが入り乱れる様は、いつそ侵してはならぬ貴いものにすら感じられる。

だがしかし、この場に観客は誰一人としていない。いるのはただ、人理の修復を願う者たちだけ。例えばどれだけ美しい光景だろうと、勝つために介入することに否は無いし言わせない。

「拳を解放します！ マーキダとアンデルセンはサポートお願い！」

マルタが一切の躊躇なく杖を投げ捨てた。この局面、もはや出し惜しみは無しだ。唐突な宣言に唾然として、ついで微かに忍び笑いを零したマーキダはすぐにその意志を汲んで宝具を起動した。

「承知しました。ならば問おう、其は空隙を埋めるもの。極点より始まる最初の一手。どこにでもいてどこにもいない、我らがまさに晴らすべきこのものは何ぞや？」

「おおっと、これはさっきの奴より難易度が高いぞ！ ヒントが欲しいか？ いいぞくれてやる、こいつは人間ならば誰もが安心できる最初の温もりだ。ここまで言っただけ分らないなら今日からお前は猪突聖女と呼んでやろう！」

「馬鹿にしないでちょうだい！ 答えは暗闇でしよう!？」

「お見事です」

謎掛けによる両者の合意を得て、宝具が起動する。拳を構えたマルタと『智慧と王冠の大禁書』を携えたマーキダとの間にスキルのやり取りが発生した。

さらにアンデルセンが童話より引用した言葉を早口に唱え、強化魔術が発動する。それによってマルタのステータスが一時的に高められ、近接戦を行うのに耐えうるだけの能力を獲得した。

「低ランクではありませんが、『魔力放出』のスキルです。上手く使ってください」

「ありがたいわね、これならあそこの戦いにもひとまずついて行けるはず！ さあ、タラスクが居なくとも聖女がここに在る事を証明しましょう！」

そうして、拳を構えたマルタが今まさに剣戟を迸らせる二者の間に割り込んだ。横合いから振るわれた拳の一撃をその生来の肉体で受け止めようとしたアルテラはしかし、その拳のあまりの重さに思わず踏躰たたらを踏む。発生した隙を突くようにセイバーオルタの猛攻は止まらず、体勢を崩したアルテラを追い込むようにしてさらに拳の追撃が放たれた。

「そら、どうした破壊の大王？ お得意の破壊はどこにいった？ それしか持ち得ない貴様が、それすら失ってなんとする？」

「……貴様」

「怒ったか？ それは結構、存分に怒るがよい。感情を発露させればさせるだけ、貴様の勝利は遠ざかるのだからな」

太刀筋がさらに乱れた。一合二合と剣戟の音が鳴るほどに乱れはより大きくなり、小さなうねりは瞬く間に巨大な大波となつてセイバーオルタの有利に運ぶ。合わされた剣は先と比べても致命的に噛み合わず、受け身に回つたアルテラは攻め手に回る機会が無い。

だが――

「……それほど破壊を求めるか。ならばくれてやろう……
『軍神の剣』
フォトン・レイ

強引な一撃によってセイバーオルタとマルタとの距離が広がる。それと同時にアルテラの剣が回転を始めた。そこから放たれる虹の輝きは文明を消去し破壊し尽す凶悪な一撃。対城級にも匹敵するこの宝具は聖杯からの魔力供給によつてもはや溜めすら必要とせず、輝きを増した剣がセイバーオルタを捕らえ破壊するのは一秒先に決定付けられた必定の未来のように思われた。

「おっと、余を忘れてもらつてはこまるな！ たかが人間と侮つたか？ いいや、余に不可能は無いのである！」

その一瞬の間に現れたのはローマ皇帝ネロ・クラウディウスだ。確かに彼女は強い、それこそ人の身には収まらぬほどに。だが例え英霊

並みの強さを持っていようと、彼女はどこまでも人間であるのもまた事実。故にここまで、セイバーオルタやマルタが参戦する超常の舞台に参加することが出来なかった。

だからこそ、この瞬間を狙い撃った。どれだけ発動までの時間が短かろうと、ただそれだけを意識していれば割り込むのは容易い。否、本来ならばそれでもなお不可能と呼べるだけの技術だが、それすらも万能の才覚を持つとされるこの皇帝は成し遂げた。

回転し光を収束させた『軍神の剣』フォトン・レイが、ネロの一撃によって僅かに上向く。その代償にネロが操る『隕鉄の鞴』は濃密な神秘に耐え切れず半ばから砕け落ち、剣としての機能を果たさなくなってしまう。得物を無くしたネロはまさしく絶体絶命、だが彼女は一切の絶望をその顔に浮かべてはいない。

逸れた破壊の一撃は先ほどもと比べれば間違いなく防ぎようがあるだろう。そうして武器を失い無防備な姿をさらすネロにマシユが半歩遅れて駆け寄り、滑り込みながらその仮想宝具を展開した。

その直後放たれた虹の破壊光。容易く生命を終わらせ文明を破壊し尽す光はしかし、何者も破壊せず終わってしまう。そしてカルデアスの守りによって皇帝はその身を守られ、不敵な表情通りに当然のごとく生存を遂げてみせたのだ。

「さて、これにて格付けは済んだな。貴様の剣とて破壊できぬものがある。例えどのような状況であったとしても、それがただ一つの真実だ」

黒の聖剣に同じく破壊の魔力が収束する。それは聖杯より魔力を供給されたアルテラの宝具解放にも比するほどの速度だ。それだけの威力を解放せんとする彼女の後ろ、これまで戦闘の成り行きを一秒たりとも見逃さず見守っていた立香の手からは、最後の令呪が消えていた。

「この一撃を手向けと受け取るが良い。『約束された——エクスカリバー勝利の剣』モルガン ツツ!!」

解放された闇の極光。光を呑み、何もかもを破壊せずにはいられない最強の幻想。それはアルテラの一撃と似通っているかのようで、さ

れどこの一撃はどうあれ人類を守る為の一撃であるという点で致命的に異なっている。

アルテラの身体に食い込んだ暗闇の牙はその半身を貪り、『軍神の剣』ごと半身を消し飛ばした。大地には長大な溝が刻まれ、それだけで神造兵器の破壊の凄まじさを物語る。光の駆け抜けた後には致命傷を負ったアルテラだけが残されて、戦う力を失った彼女はゆっくりと地面に倒れ伏した。

「……なんだ、私にも、破壊できぬものはあったのか……それは、喜ばしいことだ……」

最後に微かに笑って、英霊アルテラはローマの大地より消滅した。

黄金に輝く粒子が、戦場の熱が冷めやらぬ土地を駆け抜けた一陣の風に吹き飛ばされる。そこにはもう、ただ聖杯が転がるだけ。誰が居たという根拠も存在しない。間違いなく、この特異点の最後の強敵を排除したのだ。

「これで、終わったのか……」

立香の声が、ポツリと空に響いて消えた。もう、ローマを脅かす存在はどこにもいない。間違いなく、あるべき正しい姿へと立ち戻った。だからこそ、彼らは胸を張ってこう言えるのだ。

第二特異点、人理定礎修復完了

第三章 封鎖終局四海オケアノス+α

第十三話 月見に向けて I

願いととは、誰しもが持つ普遍的かつ多様なものだと思う。

例えば、億万長者になりたい。

例えば、我こそは最強と名を知らしめたい。

例えば、死んでしまった人とまた会いたい。

例えば、例えば、例えば――

挙げ続ければキリがない願いの数々。そのどれもが本人の切実な願いであったり、あるいは欲望から来る願いだったりする。別段その是非を問う気もないしその権利も無いが、それでも願いは千差万別だ。

叶えられない“もし”の願い。それが叶うとすれば、果たしてその対価は如何ほどのものなのか。悪魔との契約にも近い何かなのか、それとも己が命を引き換えにするのか。私には一つを除いて想像もつかない事である。

さて、取り留めもない思考を弄するのはここで止めよう。現実を受け止めて、周囲を認識する。私が立っているこの空間はどこまでも暗くて黒くて、果てしなく続いているように思える。そして目の前には何故だか金色の杯、俗にいう聖杯が鎮座している。

端的に言って訳が分からない。まずこの空間は何なのか、どうして聖杯が目の前にあるのか。因果は全く以て不明だが、それでもなお理解できることがあるとするならば。

目の前の聖杯こそ、私の知っている人の願いを叶える唯一の願望機だという事だけだ。

思わず喉を鳴らした。飲み込んだ唾液が嫌にゆっくりと胃に落ちていく。そうだ、目の前にある聖杯を手を取れば、願いを叶えられるのだ。私だって人間だから、叶えたい願いの一つや二つはある。その欲望は何物にも代えがたく、私は私の赴くままに聖杯を手を取った。感触は軽い。この程度のものが聖杯であり、またこれを奪い合つて

戦争が起きるのかと思うとどことなく拍子抜けな気すらしてしまう。そしてどのような願いを叶えてみたいかを考えて、二つの事柄が思い浮かんだ。

つまりそれは、消え去ったシバ王国を／会えなかったソロモン王に無意識に口に乗せかけて、慌てて口を噤んだ。危ない、もし迂闊に願いを囁いてしまえばその時点で始まってしまおうし終わってしまう。私の願いはどちらも同じくらい切実なのだから、そう簡単には決められない。

だからもう一度聖杯をよく見てみようと思いなおして、ふと先ほどまで無かったはずの液体が満ちていたことに気が付いた。なんだろうか、透き通った爽やかな見た目と香り。もしやこれが神の血なのだろうか？ それとも願望機から出てきたのだから、不老不死の秘薬な可能性も十分にある。

湧きあがった興味に突き動かされて、ゆっくりと中身を零さないようにして聖杯を唇に付けた。そして傾けてみて味わい、感じたことは。

「これ、お酒ですね」

そこで、目が覚めた。

◇

意識が覚醒する。何処か風通しの良い感覚を覚えながら、寝ていたベッドから起き上がる。それと共に体にかかっていたシャツがずり落ち、ボサボサになってしまった亜麻色の髪が後ろに流れた。

寝起きの眼を擦りながら、辺りを見渡す。そこは第二特異点の攻略中——正確には待機中だが——に見慣れた自室の光景だ。飾り気のない部屋は簡素であり、けれどどことなく生活感を感じさせる。例えばそう、床に散らばった衣服などは特に、

「……あれ？」

そこでようやく気が付いた。私、なぜか全裸だ。素肌の上にシーツを羽織るだけの格好でベッドに座っている。道理で風通しがよいわけだ。普通着ているはずの寝間着を身に着けていないのだから。床

をよく見れば、散らばっているのは確かに普段着ている黒のドレスに上着だ。しかもその下に隠している黒のガーターや、カルデアで貰った下着まで散乱してしまっているのだから女性として恥ずかしい限りだ。

だけどもあ、多少驚きはしたが狼狽するには及ばない。生前とて、たまに悪癖が出てしまった時はすっかり裸で寝てしまっている時があった。もう慣れたものである。だからその代わり、どうしてその悪癖が今日ここで起きているのかを探ることにした。

「えー……人理修復、慰労会、聖杯、お酒、御馳走……ああ、そういうこと」

頭の中で符号が繋がった。昨日はそう、第二特異点の攻略祝いという事で慰労会が開かれたのだったか。持ち帰った聖杯はダ・ヴィンチちゃんが責任をもって封印、彼女しか開けられない部屋に押し込められた。けどどうやらその前にちよこつとだけ聖杯の力を借りたらしく、慰労会用の食事と、これから料理で必要になるであろう食材を補充してくれたのである。

それでその後はお祭り騒ぎだった。マスター達はもちろんスタッフ達も一緒になって、皆でお酒を飲んだり食事に舌鼓を打ったり騒いだりとそれはもう。人理焼却に立ち向かっているとは思えない程、ひたすら楽しくて明るい宴会模様だった。逆を言えば、それだけ騒がないとやってられないともいえるが。

ところで、私は自他ともに認める酒豪である。普段はそこまで飲むわけではないが、飲むときは幾ら飲んでも酔わないし、記憶が飛んだり二日酔いを起こすことも無い。ただこれはどうやら他人の前だけでのことらしく、一定以上の量を飲んだ後で自室に戻ると、途端に記憶が途切れてしまうのだ。そして翌朝目覚めた時は決まって服を脱いでおり、こうして頭を抱えているという次第なのである。大方、身体が火照って熱いとかそんな理由なのだろう。

だから今回もそういう事だと予想がつく。ちらっと見た感じ、部屋の鍵はちゃんと閉まっているのでこの姿を万が一にも見られることは無い。いや、正確には少しばかり体型には自信があるから、そつち

を事故で見られる分には気にしない。ただ、もっと見られたくないのは、全身に付いた細かな傷の方である。

私は元は野生児みたいなものだし、その後アクスムにて人の中で生活している時も幻想種などとの戦闘はそれなりに有った。だから身体は常に生傷が絶えなかつたし、特に呪術を扱う際に故意に切っていた指と、単純に露出が多かつた足はたくさん痕が残っている。

見苦しいという程ではないのかもしれない。だけど、女としてどうしても気にしてしまう。だからどうしようもない手は仕方ないにしても、せめて足は隠してしまおうと考えた。その結果があのだレスと、ガーターによる過剰な足の覆い隠しだ。

おそらくはこのせいで、“シバの女王は足が美しい”などという話が伝わったのだろう。実際のところは真逆の理由で足を意識していたのに、それが後世で歪められて一番美しい箇所となつたのはなんとも皮肉なものだ。

どうにもそのことがおかしくなつてくすくすと笑いながら、ようやく頭も目が覚めて来たのでベッドから立ち上がる。時間は午前六時ほど、お酒が回つた次の日は朝が早いという体質もそのままだ。サーヴァントながら呆れてしまう。

とにかくいつもまでも裸体でいる訳にはいかないから、急いで散らばっている服をかき集めて、普段通りに着なおした。最後に絡まつて見ていられない髪の毛を貰い物の櫛で丁寧に梳かして、準備を終えた。ついでに身体全体を見渡して、ほとんどの傷が見えないことも確認する。

……別に、傷のついた体は嫌ではない。むしろこれまで生き抜いてきた証として、大切に思っている節もある。だけどそれでも、見られたくない。

だつて見られれば同情されるから。そのようなつまらない理由で憐れんでなど欲しくないし、もちろん蔑まれたりするのほもつてのほかだ。だからだろう、私が自身の全てを見せたのは一人しかない。そして“彼”は、何も言わなかつた。それはきつと、何も思わなかつたという方が正しいだろう。しかし、そうは分かつていても、何も

言つてこなかったのが嬉しかったのは事実だ。

このような事を自然に考えているあたり、私は本当に末期らしい。けれど仕方ないだろう、どうにも私はそのあたりが上手く調整が利かないらしいから。一度恋を知つて愛を自覚すれば、止まらなくなるのは分かつていた。その上で、あのような関係にまでなつたのだから。……まあ、数割くらい騙されたのはあるが。

身だしなみは整え終わったので、部屋の外に出る。このカルデアは文明の利器、なにやらエアコンというらしき存在が幅を利かせているらしく、そのおかげでどこを歩いても気温は変わらないし過ごしやすい。そもそも裸で寝ていても大して気にならなかつたのはその影響もあるだろう。

まだ朝は早い。今日は昨夜の慰労会の影響もあるのか、全く人とすれ違わない。普段なら廊下を歩いていると数人の職員とすれ違つて、二言三言挨拶を交わしてから共にせわしなく歩いていくのに。

彼らも本当はとても忙しいのだ。特異点の観測に、マスター達の存在証明、そして破壊されたらしいカルデアの修理等々。やるべきことは多岐に渡る。私は大した手伝いが出来ないのが歯がゆいが、せめてやれる事をやって彼らに報いれるようにしたいと思う。

とにかく昨日の影響もあるから、まだ当分起きて来る人はいないだろう。サーヴァントであるセイバーオルタさんやマルタさんはどうするか分からないが、少なくともアンデルセンは間違いなく惰眠を貪ると断言できる。

朝食を作ろうか、いやだけど食べる人が居ない。そう考えて、自然と足が向かつたのは中央管制室だつた。第二特異点の攻略中はほぼこつちに詰めっぱなしで、ずっとドクターの手伝いか彼の観察を行つていたなじみ深い場所だ。

コツコツと足音を静かな廊下に響かせる。およそ五分ほど歩いて到着した管制室の扉を潜る。たぶん誰もいないだろうと考えながら入つただけに、先客が居たことに僅かながら驚いて声をあげてしまった。

「ドクター、もう起きていますのですか？」

「おや、マーキダかい？ あれだけ飲んでたのに、サーヴァントは身体が強いね」

そう言つて柔和に笑つたのは、ドクターロマンとよく呼称されるこのカルデアの所長代理だ。魔術師ではないらしい彼は、それでもこの組織の仮のトップとして身を削り働いている。その様は不眠不休と言つても過言ではなく、只の人間なのに驚くべき時間を仕事に充てている。

どのようなタネがあつてそのような事を可能にしているかはまあ、観察している間におおよその目途は着いている。決して褒められた手段ではないだろう。だが、それを止めるのも彼の努力と意思を否定するかのようで憚られてしまう。

だから私に出来ることは、せいぜいが彼を気遣い、それとなく休むように誘導するくらいだ。

「どうにも私は朝が早い性質なのですが、お酒が回った次の日は特に顕著で。まだ朝ご飯を作るにも時間が早すぎますし、よければ私の話し相手になつてもらえますか？」

「ああ、もちろんいいとも」

複雑な凶形や細かな文字がびっしり並んだ画面から目を離れた彼はこちらに向き直ると、いつも通りの笑顔で見て来た。その顔はなんら気負つたところが無く、共に夜を過ごしていなければとても働きすぎの男とは思えない。

予定通り、彼は一旦仕事を止めてくれた。こちらから真摯に話を振れば、彼は必ず答えてくれる。利用しているようでやや良心が咎めるが、悪いことをしているわけではないので多めに見てほしい。

「何から話そうか。やっぱりローマについてが一番かな？ あそこの街並みは映像越しにもすごかったからね」

「そうですね、活気に溢れて人が笑顔で、これぞ？ 栄を重ねた良き国という印象がありました。それだけに、晩年のネロ皇帝の最後は悲しいものがあります……」

「ボクらは確かに歴史を知っている。だけどそれを変えることは出来ないし許されない。例えばどれだけネロ・クラウディウスという人物に

肩入れしたくとも、それすらできないのが惜しい所だよ」

溜息を吐いて物憂げな表情をするロマンを見て、話題の入り方を完全に失敗したことを悟った。そもそも彼を仕事から遠ざけて緊張状態から解放しようと考えての会話なのに、何が悲しくてこのような重たい話をしているのだ。もっと考えてから発言するべきだったと後悔ばかりが募っていく。

……そもそもどうして、私は彼の事をこうまで気に掛けるのだろうか？ 最初は、なんとなくソロモン王に似ているような似ていないような、不思議な雰囲気を持つているように思えた。だから彼にカマ掛けをして、それでもやっぱりありえないと思ったからこの考えは放り投げた。

それなのに、ありえないと結論付けたはずなのに、やはり彼の事を気にしてしまうのは何故だろう？ この前からこの時代で例えればストーリーまがいのことまで宣言して彼を観察して、その果てに得たものは一体なんだ？ 分からない、全く以て分からない。どうして彼の事を気にしているのか。彼の悪口を言えば取り返しがつかないことになると思っただのか。どの因果も等しく理解できない。

だから、やっぱり私は彼を気にしてしまうのだろう。分からないから知ろうとして、より分からなくなってさらに気にする。堂々巡りの迷宮入り、無限に続く思考の循環の始まりだ。

そのループを断ち切るように、いつそ間抜けな程に明るい声を取り繕って次の話題を展開する。今度はちゃんと考えてだ。

「ネロ皇帝は良い方だった。それが私たちの知る彼女の全てですから、それ以上は努めて考えない様にしましょう。それよりも、何か私について聞きたいことでもあるんじゃないですか？ 今なら何でも答えますよ？」

ひとまず話題をこちらに移す。これならどうあがいても暗い展開にはならない、はずである。

「難しいなあ……じゃあ無難に、シバの王国について話を聞いてみたいな。伝承を紐解いてもかの国の情報はほとんど無いから、聞いてみたいと思ってたんだ」

「それならお安い御用ですよ。私たちの国は新興国家でしたが、運よく手に入れた竜の財宝のおかげで莫大な利益を上げて繁栄した国となりました。当時の特産品はエメラルドや乳香といった貴重品ばかりだったのもそれに拍車をかけましたね」

本当に懐かしい事ばかりだ。今はもう歴史から消え去ってしまったあの国の輝きは、今でも脳裏に焼き付いて色褪せない。それこそローマにも劣らない程の活気もあったし笑顔もあった。私だけの功績でそこまで国を成長できたと驕るつもりは無いが、それでも思い出すだけで胸が熱くなることに変わりない。

「本当はアクスムに築かれた豪華な宮殿や、なぜか魔力砲が付けられて対外敵用に魔改造された太陽の神殿マハラム・ピルキスも紹介したいのですがね。いつか見学させてあげますよ」

「あはは、それは楽しみだ。伝承に謳われるシバ王国の建築物、是非とも期待しよう」

そういう彼の瞳は、だけどちよつとだけ諦観に染まっていた。きつと彼は私の言葉を強がりか、あるいは聖杯に願つての事だと考えているのだろう。それは違う。やろうと思えば特異点でも可能な事だから、きつと彼がそれを見る機会も遠くない……だろう。状況次第でもあるが。

と、ドクターの後ろに控えていたパソコンが急に音を出した。何かと思つて二人して振り返れば、そこには何故だか画面いっぱい満月の画像が映っていた。

「……………これは?」

「ああ、ちょうど探し当てたみたいだね。現在の月日は二〇一五年の九月半ばだ。ボクらの人理修復は二〇一七年に入るまでに完了させないといけないから、実質残り時間はあと一年と数か月。多いように思えるけど、実際は特異点での行動日数や帰還してからの準備や休息を踏まえるとそんなに余裕もないだろう」

「それとこの満月に何の関係があるのですか?」

聞けば、まるでよく聞いてくれたと言わんばかりにドクターが胸を張った。

「そう、本当なら余裕はない。だけどそれは休息期間を考慮しての事で、そして今のボクらはまさにその状況にある。となれば、休み方は自由だろう？　そういう訳だから、時期と照らし合わせて気分だけでもお月見をしようと思つて良さそうな画像を自動検索してたんだ」

「それでこの画像なのですか。そのお月見は、ただ月を愛でて終わりですか？　それはそれで味があるとは思いますが」

「いいやまさか！　お月見と言えば日本だけど、そこではお月見に団子を食べる習慣があつてね。これがまたとっても美味しいんだよ！」
「へえ、そんなものがあるのですね……ちよつと興味が湧いてきましたよ」

世界はやはり広がつた。日本と言えば、確かマスターである藤丸立香の故郷では無かつたか。そのような土地でそのような催し物があるなど、かつては終ぞ知らなかつた。やはりサーヴァントとなつて新たに学ぶことは数限りない。

「そういう訳だから、明日にはお月見をしようと思つていてね。これから合間合間に団子を拵えるつもりだから、のんびり待つてほしいな」

「あ、いや、それなら私も手伝いますから。貴方一人に全員分任せたらそれこそ大変なことになるでしょうし」

「本当かい？　それは助かるよ。内緒にして欲しいんだけど、実はボク、ほとんど料理をしたことが無くてね。内心どうしようかと頭を抱えていたところだったんだ」

「そ、それでよく団子を振る舞おうと思ひ立ちましたね……しかもまるで良家の御子息みたいなことまでおっしやるとは、ますます不思議な方です」

「いやあ、全く以て平凡な一般人生まれだよボクは」

笑つたドクターの声は、間違ひなく楽しそうで嬉しそうで、けれどどこか白々しさの感じるものだった。

第十四話 月見に向けて II

昼過ぎ頃。昼食が終わり大方の職員達も仕事へ向けて出払ったのを見計らって、私はドクターと共に厨房に居た。どうやら彼は職員の方やマスターには秘密にしたいらしい。なのでここからは二人だけの作業となる。

この数日ですっかり勝手知ったると言った風に慣れた厨房には、たくさんのボウルと団子粉というらしき材料が用意されている。更に湯沸かし器にはこれまたたくさんのお湯が入っており、ひとまずの準備は整っていた。

「さて、これらを混ぜ合わせてこねれば良いのですね？」

「ああ、そうみたいだね。このメモに寄ればとりあえず作るだけならこれでいいはずだ」

ドクターが参照しているのは、誰からか貰ったらしい紙のメモだ。それによれば団子粉をぬるま湯で溶かしたものを丸め、それを茹でてしまえばお終いらしい。何とも簡単な話である。これなら手早く大量の団子が作れそうだ。

「それでは早速始めましょう。これを丸く形成して、その皿に積んでください。ある程度できたらまとめて茹でてしましましょう」

「分かった、じゃあどんどん作るとしようか。ボクもこんなことは初めてだからね、楽しみでしようがないんだ」

まるで子供のようににはしやぎながらボウルから団子の素を取り出すのを見て、私も手で軽く掬って丸く球の形に整えていく。手のひらを使い一口大に、およそ五秒もあれば十分すぎるか。そうして手のひらに改めて載せてみた団子はそこそこ整った形をしていて、ひとまず及第点かなと思ひながら皿の上にもまず一つ目を奉納した。

「って、ドクター……まだ丸めているんですか？ そんなに難しくはないと思うのですが……」

「いや、これが中々思うようにいなくてね。上手く丸まってくれないんだよ。困ったな、これでも器用な方だって自負はあったのに」

とほほといった風に笑いながら彼が見せて来た団子は、どうにも不

格好だ。大方最初に素を多く取りすぎたのだろう。そのせいで逆に固まらなくなってしまうっているのだ。

「えーと、そうですね、量が多すぎるので少々削ぎ落してと。これを丸めてください、力加減は適量を加えれば大丈夫です」

「適量ね……ってちよつと待った、その適量ってつまりはどれくらいだい？　そもそもいつも思うのだけど、どうして料理はああも曖昧な量の表示が多いのかな？　もつと的確に書いてくれればこつちとしても楽なんだけども」

「ドクター……それは完全に理屈で動く錬金術師の思考ですよ。確かに料理は錬金術から生まれたとされますが、そこまで彼らを見習わなくとも大丈夫です」

昔、シバの国に居た錬金術師の下にお邪魔した時もこんな調子だったので、仕方なく私が料理を作ったこともあったか。今思えば仮にも国主がどうして夕飯を振舞っていたのだろう。

とにかくどうやら思った以上にドクターは料理慣れしていなさそうなので、彼の手を取って一緒に団子を包み込んだ。ちよつど手をつなぐようにも似た重ね方。私の手よりも大きな手のひらがどうにも暖かい。

「こうして、優しく壊さないようにやってください。手のひらをちよつとくぼませるとより丸くなりますよ」

「なるほど、こうやればよいと。いいね、確かにこれはやり易い。すごく勉強になったよ……ってどうしたの？　何かおかしなところでもあったかな？」

「い、いえ、なんでもありません」

こちらへと今度はすつきりした顔で笑いかけて来た彼の顔が何故だか直視できなくて、目を逸らしてしまった。けれど手に取った彼の手はそのまま、だからか妙にそちらばかり意識してしまつて仕方ない。何となくその手を外すのが惜しく感じられて、でも最後には手を離してしまった。

その後は何事も無かつたかのように二人で黙々と団子を作り、順々に皿の上に積み上げていく。こねて、丸めて、こねて丸めて。どれだ

け繰り返したのやら。いつの間にか団子の素もボウルから消え去っていて、その代わりに山と積まれた団子が出来上がっていた。

今度はその山を用意していた深底の鍋に放り込む。その中には既に用意されていた沸騰したお湯があり、これで団子が浮かび上がって来るまで茹でれば良いらしい。

その間に、なくなってしまった団子の素を再制作する。なにせ今の量では間違いなく足りないのだ。下手をすればあの黒の騎士王一人だけで平らげてしまうだろう。それはまずい。

「ドクターはそつちのボウルに袋の中身を空けてください。それで少量のぬるま湯と混ぜてよく練る形で」

「分かった——つてうわあー!」

「えっ、どうしました!?!」

団子粉の入った袋をボウルに空けている最中に、不意に聞こえた悲鳴に思わず振り向いた。

そこには真っ白になった顔をしたドクターの姿があつて、驚愕ともつかない微妙な顔でこちらを見ている。どうやら、袋を開け損ねてしまったらしい。暴発した粉が顔に降りかかったと予想出来るのだが、「ふふっ、あははははっ! なんですかその顔は! すごいことになつてますよ!?!」

「……だろっうねえ。ボクもこんなのは初めてさ。笑えばいいのか悲しめばいいのか、どうしたものかな」

余りにもその様子がおかしくて、ついつい大笑いしてしまった。そんな私とは対照的に苦笑した様子のドクターは顔に手を当てると、叩くようにしてポンポンと叩いた。けれどそれでは粉が落ちず、中々地肌の色が戻ってこない。さすがにこれ以上笑っているのは可愛そうなので、助け舟を出す。

「ほら、こつちを向いてくださいドクター。濡れタオルですよ」

「ありがとう、助かるよ」

少しだけ背伸びをして、私よりも背の高いドクターの顔を拭いてあげる。どうにも彼の顔が近い。心臓の鼓動の音がやけにうるさく感じる。少しだけドキドキしているのはきつと、異性とこれだけ近づい

たのが久しぶりだからだろう。……断じて、彼に妙な想いを抱いているからではない、はず。きつとそうだ、絶対そうだ。

だって私の好きな人は一人しかいないのだから。もう二度と会えることは無いのだろうが、それでも好きになってしまったのだから仕方ない。惚れた方の負けである。

とにかく雑念を払うように丁寧に拭いて行く。どんどん彼の地肌が見えて来た。これならばもう――

「――おおっと、お二人さん、いい雰囲気になってるところ悪いんだけどちよつといいかな？」

「!?」

いきなり横合いから聞こえてきたのは、カルデア一の天才にして変人の声だ。弾かれるように振り向いた私とドクターのすぐそこに居たのは、やはりというべきかダ・ヴィンチちゃんその人であった。彼女はにやにやとしか言いようのない笑みを浮かべて、私達を見ていた。

「……なんですか。突然藪から棒に」

「おっと、そう怒らないでくれよ。本当はそつとしておいてあげようと思ったのだけど、さすがに二人を待たせるのも申し訳なくてね」

「……別に怒ってはいませんよ」

そう、怒ってはいない。ただ何となくもやもやしてそれが気にかかるだけの事。よくよく見ればダ・ヴィンチちゃんの後ろのはマシユさんとマルタさんが居て、確かに二人だけで厨房を使っていた現状はこちらに声を掛けるのも仕方ないと思う。

思うのだけど……

「まあまあマーキダ、カレの気まぐれはいつもの事だからね。今回はどうやらボクらも悪かったみたいだし、そう気にすることじゃないよ」

「そうですね。怒っていたわけじゃないのですが、すみませんでした」

「い、いえ、私達もなにやらお邪魔をしてみましたよ……」

「謝る事じゃ無いわよマシユ。こういう時はもつと図太くないなきやね」

なんだか頼れる姐御と化している聖女様に背中を叩かれたマシユさんの手には、何やら本が握られている。見るに、お菓子作りの本のようだ。

「ここで二人が団子づくりをしているらしいという情報をこの二人に聞かせたら、ぜひ自分も参加したいと言いついてね。それで連れてきたわけさ。ああ、なぜ知っているかなんて野暮な質問は無しだ。だってロマンのメモを書いたのは私だからね」

「私はその、先輩に団子を作ってあげたくて」

「私は単純に興味があつたからね。知らない料理に挑むのも面白そうじゃない」

「そういう訳だ。お二人の邪魔はしないから、代わりにロマンの面倒をよろしく頼むよ。なにせこの男、碌に調理器具に触つた事すらないらしいからね」

「レオナルドだつて似たようなものだろうに……」

「私はただ、普段は面倒だからあまり作らないだけさ。料理一つ出来ずして何が天才か！ さあ、目にモノ見せてあげましょう！」

最後の方はかなり興奮気味になったダ・ヴィンチちゃんはそのまま厨房の一角に三人で集まると、早速団子づくりに取り掛かり始めた。それを見ながらどうしようもない感情を持って余して、

「とりあえずさっきの団子を入れた鍋が噴いてるんだけど、あれをどうにかした方が良くないかな？」

「!? い、急いで火を止めてください！ 団子が吹き飛びます！」

ひとまずそのことは忘れて、団子作りに戻っていくのだった。

◇

「で、その団子が全部無くなったとはどういうことだ」

「それがその……食糧庫の方に保存していたはずの団子が何者かに持ち去られたようでして」

「しかもレイシフトして特異点に消えたのがボクらの方で観測出来ている。間違いなく今回の事件の犯人は特異点、オルレ안의残滓に居るだろう」

「あい分かった。では行くぞマスター、我らの団子を奪われたままで

たまるか。食べ物の恨みは恐ろしいという事を知らしめにくくしよう」

「ちよ、ちよつと待つてくれえええ……!」

夜、中央管制室にて。満月の映像を一番大きく出せる所という事でここに集合したのだが、団子を回収しにいたマシユさんから告げられたのはとんでもない事だった。すなわち、団子の消失。より正確に言うなら盗難だ。

どうやらオルタさんは団子作りで招集がかからなかったことが不満だったらしく——残念ながら当然である——不機嫌だったのだが、いよいよその一報で堪忍袋の尾がキレたらしい。同じくハブラれた組でもそんなに気にしていなかったマスターを強引に引きずると、レイシフト用のコフィンの部屋へと向かって行った。

「どうしましょう、アレ?」

「私について行きます! そもそも先輩用に作った特選団子すらないのです、取り返さねばなりません!」

「……マシユとオルタの二人だけだどうなるか怖いから、私もついてくわ。それに、せっかく作った団子が消えたままっていうのも嫌なもの」

「念のため言っておくが俺はもちろん待機だ。団子を取り返すのは好きにやってくれ。月見餅、座りしままに食うのが俺の流儀だ」

「流石に凶太いねえ君は。ああ、私もこっちで待つていよう。今回の手合いはどうやら愉快犯らしいからね。そう危険な事態にもならないだろう」

「じゃあそれで決まりだ。レイシフト管理はこっちでやるから、君たちは思うままに団子を取り返して来てくれ。戻り次第月見を再開するでしょう」

ロマンの言葉を聞いて、マシユとマルタも管理室から飛び出していった。そして程なくしてマスターがサーヴァントを連れてレイシフトを終了させ、特異点に降り立ったらしい報告がなされる。

その後はしばらく様子をみていたのだが、どうやら向こうで出会ったエネミーが大量の団子を落とすらしい。しかも概念礼装扱いで全

く汚れておらず、かなり美味しいのだとか。なのでそれらを回収次第こつちに送ってもらおうことにして、向こうは早速犯人捜しの旅に奔走を開始した。

途中サーヴァントと出会って交戦したり、エネミーを見つけ次第速攻で倒したりしているのをカルデア側から実況しながら、いつの間にか待つこと数時間。

「……で、送られて来たのがこの団子山ですか。これじゃ何のために私たちが団子をたくさん作ったのか問いたくなりますね」

「うーん、これはちよつと私にも予想外だなーつて。まさかここまでエネミー産の団子が膨れ上がってしまうとは。処分にはきつと困らないだろうけどさ」

「あの暴食騎士王が居ればどうにでもなるわな、そりゃあ。だがまあ、そう気を落とすな。努力したならその分報いられることはあるだろう。それがいつなのかは知らんがな」

珍しいアンデルセンの慰めを背にしながら見ているのは、山と積み重ねられた団子の数々である。その奥に見えるモニターの向こうは、既に犯人と思しきミス・オリオンと名乗る英霊神霊との交戦に入っており、凄まじい勢いでオルタさんが剣を振るっている。その様はまさに悪鬼の如し、どうやら本当に食い物の恨みを教え込んでいるらしい。可哀想に、女性とそのマスコットらしき熊が若干涙目になっている。

ともかくひたすらエネミー狩りを続けて送られてきた団子の総量はよく分からないことになっていて、現状置き場に困りそうな勢いである。こんなことになるならば、あそこまで張り切つて団子を作らなくても良かったのではないかとさえ思えてしまう。

そんな私を横目にドクター・ロマンはと言えば、感慨深そうに団子の山を眺めていた。

「確かに凄い量だなあこれは。ただどうん、アンデルセンの言う通りだ。確かにボクらが作った分は微々たるものになってしまったけど、作ったこと自体は無駄じゃないからね。このために経験したことはきつと何かに活かせるだろうし、それになにより——」

こちらを真つすぐ見て来た。彼の澄んだ瞳と目線が交わる。

「団子作りは楽しかったからね。ありがとう、マーキダ」

「~~~~っ！ い、いきなりそんなこと言わないでください恥ずかしいですから！」

恥ずかしくなつてすぐに視線を逸らしながら手をぶんぶんと振る。なんて事を言うのだ彼は。なまじ本当に感謝の念しかないから性質が悪い。

「はははっ、もう少し女心を学ぶんだなロマニ。それじゃあ意中の女は射止められないぞ？」

「そういう君はバリバリの男じゃないか。本当に女性の心理が分かっているのかい？」

「さて、その作家よりかは分かっているつもりだがどうだろうね？」
「馬鹿め、俺の前で愛にまつわる話をするなど百年早いぞ。俺ならば必ず意中の相手に想いが百パーセント伝わる恋文を作成してやる。もちろん、やる気が出ればに限定されるが」

「相変わらずミスターアンデルセンはこう、あれほどの名作童話を書いたとは信じられないような方ですね……」

なんだか疲れたような声が背後から聞こえて来た。見れば、そこに居たのはちょうど特異点から戻って来たらしいマッシュさんだった。その後ろには立香君やオルタさん、それにマルタさんもいる。どうやらドクターが私達と会話をしている内に、職員の方が彼らのレイシフトを終わらせていたらしい。

「よし、立香君もお疲れ様だ。まだまだ夜は長いんだし、こっから気を取り直してお月見としゃれ込もうじゃないか。幸い、団子も山ほどあるし昨日みたいに盛り上がれそうだよ」

「そうだ、祭りとはこれでこそだ。食べ物の上に囲まれ過ぎず、これ以上の贅沢はあるまい？」

問いかけるようにしてオルタさんがいきなり団子の山に手を伸ばして、月すら見ないで頬張り始めた。まさに花より団子ならぬ月より団子。鎧すら脱がないその様に呆れながら、けれど誰も敢えて止めることはせず各々画面の月を眺めながら団子を頬張る。

この団子はもはや自分で作ったものではないだろう。だけどそれ

でも、何故だか無性に美味しく感じられた。

第十五話 オケアノス冒険譚 I

第三特異点へのレイシフトまでは、第二特異点の攻略から数えておよそ十日ほどの猶予がある。その間にマスターもサーヴァントも各々休息を取り、また鍛錬に費やしたりして時間を過ごしていた。

そして翌日に特異点へのレイシフトを控えた日の夜、人気の少ないカルデアの廊下を歩く二人分の足音があった。

「それにしても私たちをわざわざ呼ぶとはどういった用件でしょうかね?」

「俺が知るか。詳しいことは本人に聞くんだな」

にべもなく返されて、マーキダは仕方なしに口を噤んだ。アンデルセンの口が悪いのはいつもの事だから、今さら気にしはしない。互いにそれ以上口を開くことは無く、マーキダとアンデルセンは黙って肩を並べ歩いていった。

結論から言えば、この二人がともにいるのは珍しいことだった。マーキダは基本的に厨房か中央管制室に居座っており、一方でアンデルセンはカルデアの資料室か自室に籠っていることがほとんどだ。それ故に接点が少なく、仲が悪いわけではないが特別良いという事も無い間柄である。

それだけに、何故この時間に自分たちがまとめて呼ばれたのかが二人の疑問なのだが、それも目的の部屋まで来たのですぐに明かされることだろう。

「入りますよ」

そうして二人は一言かけてから、ロマニ・アーキマンの自室の敷居をまたいだ。

「やあ、よく来たね二人とも」

「いらつしやーい! 今日はこちらが臨時のダ・ヴィンチちゃん工房だ。ゆっくりしていきたまえ」

「勝手なこと言わないでくれないかなレオナルド! ここボクの部屋だからね!? ボクの部屋!」

さっそく二人でユーモアのあるような無いような自由なやり取り

をしているのを横目に、二人が部屋に入った。背後で扉が自動で閉まる音が聞こえる。

見渡してみれば、そこは部屋というにはあまりに生活感のありすぎる部屋であった。床には資料であろう紙束がこれでもかと散らばり、足の踏み場がほとんどない。そのうえ一つしかないテーブルにはパソコンと共にお菓子の袋や容器が散乱していて、これまた物の置き場がない。

有体に言つて、汚い部屋といって差し支えなかった。

「これは……今度掃除でもしておきましょうか？ さすがに酷すぎません？」

「いやいや大丈夫、ここはボクの部屋だからそこまでしてもらわなくてもいいさ。そもそもそうまで君に気にかけてもらう義理もないしね」

「だがこれは……いや、俺からは何も言うまい。男とはだいたいこのようなものだ。俺とてこれだけの原稿の山を作ればどれだけ仕事が増えたことか」

「はいそこ、思い出に浸らない！ それよりも座りたまえ。ロマニのベッドにでも腰かければいいだろうさ」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に従い、マーキダとアンデルセンが唯一の空白地帯であるベッドに浅く腰掛けた。それを横目にしながらロマニとダ・ヴィンチちゃんも椅子に座り、この場に呼ばれた四者が一様に集った。

「さてと、まずはわざわざこんな時間に来てくれてすまないね。ボクの方からどうしても内密に、かつ今のうちに話しておきたいことがあったから呼ばせてもらった」

先ほどまでとは打って変わった真面目な顔で語るロマニに、自然と三者の顔も引き締まった。部屋の密度が心なしか高まり、ゆつくりと時間が流れるように感じる。

「議題はまあ、この場に集ったメンバーを見れば何となく察したかな？ 単刀直入に言えば、ボクらが相手にするであろうこの事件の犯人、黒幕についてだ」

「ふん、やはりそうか。大方マスターが居ないのは変な先入観を持たせない為だろうか？ 予測はあくまでも予測、どれだけ言葉を積み重ねたところで真実の姿には劣る。俺たちが妄想した敵をそのまま疑い続けければ、見える事にも見えなくなるからな。それはまずいだろうよ」

「その通りさ。だからこの場で話すことは私たちだけの秘密、気の毒だが彼らには内緒だ。ああ、悪いが騎士王と聖女にも無しだ。彼女たちには別に話してもいいんだけど——」

「敢えて向こう側の共犯者を作ること、立香君とマシユさんに疎外感を感じさせないようにする、ですか。それにあの二人はやっぱり大人ですから、こちらの意図も察してくれることでしょう」

満足げにロマンとダ・ヴィンチちゃんが頷いた。打てば響くかのようなやり取りによって非常にスムーズに議題についての前提条件、土台が出来上がっていく。なのでこれ以上無駄な言葉を紡ぐ必要は無く、まずは主催者としてロマンが口火を切った。

「ボクらはこの前のローマで“魔神フラウロス”を名乗る者と遭遇、戦闘行為に至った。そしてその際に彼の口から非常に興味深い言葉、すなわち“七十二柱の悪魔”と“王の寵愛”、加えて“魔神柱”というワードを確認できた。まずこれらについてボクの見識を述べたいと思うけどいいかな？」

全員が首肯した。

「最初に言わせてもらえば、あの魔神フラウロスと名乗った存在は受肉している。この時点でもう、本来の悪魔の定義とは違う存在だ。そこから鑑みるに、魔術王の関与があるかは正直疑わしい。彼の悪魔は有名だけど、さすがにあのような醜い姿をしていたらもつと記録があるだろうからね。ここまでがボクの見解だ」

それに反論したのはアンデルセンだ。

「しかしだ、ロマニ・アーキマン。客観的に見て、奴が魔術王ソロモンと関係が無いと断じるのは不可能だろうよ。“七十二柱の悪魔”に“王”の単語、それで俺たちがまず思い浮かべるのはそいつだからな。そも人理焼却などという大偉業、それなり以上に高い位置にでも

居なければ到底不可能だろう」

「ですが私からすれば、彼は関係ないと思います。直接彼と過ごしたからこそ分かりますが、あの方は例え人に対して共感は出来ずとも、しかし滅ぼすことは決してないと断言できます。だからこそ私もドクターの意見に賛成です。魔術王が関与しているとは考え難いし、よしんばあのフラウロスが本物の七十二柱の一柱だとしてもその背後にいるのは違う存在でしょう」

今度はマーキダの意見。ここまでの三者は二人が魔術王の関与に否定的で、一人が肯定的だ。そして最後の一人、カルデアが誇る天才と言え——

「よし、このまま行けば水掛け論にしかならないだろうからいったんストップだ。この際だからひとまず彼の後ろに居るであろう人物についてはおいておこう。それよりもまず、レフないしフラウロスについての二人の意見を聞いておきたい。直接あの男を見て話して、君たちはいったい何を感じたのかな？」

議題をひとまず止めて、新たに話題を振って来る。実際その判断は正しいだろう。このまま行けば明確な確証もないままに終わらない議論が延々と続くことになるのだから。

「……私からはまあ、直接会ったこともないのに随分と恨まれていたと感じましたね。それと不可思議な同情の様な憐憫の様な、そんな感覚ですか。確かこのカルデアの望遠鏡、近未来観測レンズ・シバを作成したのはレフという話じゃないですか。いったいどのような意図でそんな名前を付けたのやら」

「そんなこと決まっているだろう、強烈な皮肉さ。奴がどうしてお前を知っているのかはいくつか説が考えられるが、とにかくお前が恨めしくて仕方ない！ だから奴はお前の国の名を付けたのだろうさ。」

『人理の観測ウ？ そのような事は一切無駄無意味！ 故にこそ、このレンズには人類一の無能の名こそ相応しいッ！』といった風にな」

「貴方さりげなく私のこと馬鹿にしてませんか？」

「さて、俺はただ奴が言ったことをそのまま真似ただけだが」

無然とした顔でマーキダが押し黙った。だがアンデルセンの所感

はまだ一切語っていない。なのでまたもや彼が口を開く番だった。

「それで俺から見た奴の感想だが……かなり難解だな。そして度し難い。あいつは人の事を理解しているが、同時に根本的には分かっている。その証拠に、あの男には愛が無い」

「？ それはどういう意味だい？」

「そのままの意味さ。愛は人の持つ最大の欠陥にして特殊スキルだが、奴の場合はどうも違う。人を愛していない——というよりも、人を愛しすぎて愛さなくなったというべきか。それが俺の感じたことだ。これ以上は資料が少なすぎるから今は控えさせてもらおう」

「……それはまた、寂しい話じゃないですか。よりにもよって愛を知らないとは」

「またもや難しい意見というか、扱いかねる言葉だ。しかしアンデルセンの観察眼は間違いなく一流のものであり、他者の真実に容易に近づくだけの技量を持っている。だからこそ、彼の言葉は一言一句無視できない貴重なものとなるのだ。」

「その後はしばらく意見が飛び交うが、どれも納得に足るだけの勢いはもてない。やはりと言うべきか黒幕についての情報が足りなさすぎるのだ。客観的に見れば確かに魔術王ソロモンがかなり怪しいが、まだそうと断定するには早すぎる。その名を借りるか騙っているだけの可能性も十分に見れるし、何より魔神柱の性質が悪魔とあまりに違いすぎるのだから。」

そして結局、この議論を打ち破ったのは発起人その人であった。

「ふう、意見はあらかた出尽くしたかな？ 薄々感じてはいたけど、今のボクらじゃ全く黒幕の正体と目的には辿りつけそうにないらしい」「そりゃそうだろうさロマニ。私だってもっと前から考えて、それでも全然見えないくらいなんだ。ちよつとの情報が増えたくらいで期待するのは虫の良すぎることさ」

「……そうかもしれないね。よし、じゃあ今夜はここでお開きにしよう！ 手間を取らせて悪かった、君たちも明日に備えてしっかり用意なり休息なりしておいてくれ」

「ああ、是非ともそうさせてもらおう。業腹ながら俺は明日から肉体

労働だからな、よく体力は回復させねば。まったくよくもまあ俺などをこうまで酷使してくれるものだ」

文句を吐きながら部屋から出て行くこうとするアンデルセンに、心底不思議そうな様子でロマンが声を掛けた。

「その割には、君は素直に従っているじゃないか。忌憚なく言わせてもらえば、ボクは君の事をもっと捻くれた男だと思っていたのだけど」

「そうだ、スパツと言われたがその考えで間違っていないぞ。ただ、マスターである立香はド三流サーヴァントの俺をアテにし、そしてマシユ・キリエライトは俺の作品の愛読者ときた。……こうまで来れば、俺とて作者として応えないわけにはいかんだろうさ」

「素直じゃないね、君は」

「お前に言われたくないさ、アーキマンよ。そっちこそ、もう少し素直になってその心の裡を曝け出してみたらどうだ？」

意味深にそれだけ言い残して、アンデルセンは部屋から去って行った。残ったのは三人だけ、またも妙な沈黙が流れるが、今度はダ・ヴィンチちゃんがそれを振り払う。

「さてと、私達もやることは山積みだ。マーキダ、明日はまだ君の出番では無いのだろう？ それならここで私たちの作業を手伝ってくれ。今は猫の手も借りたい有様でね」

「……分かりました、やれる限りはお手伝い致しましょう」

「おいおいまた勝手に決めないでくれよレオナルド……まあでも、ありがとう。助かるよ」

裏方たちのやることもたくさんある。そして、夜はまだまだ更けていく――

◇

「第三特異点へのレイシフト、無事に完了しました。藤丸立香、マシユ・キリエライト並びに各サーヴァント達のバイタルは全て正常値です」

「よし、今回もちゃんと成功したね。毎度この時ばかりは冷や冷やするよ。ここからは存在証明の時間だ、各自気を抜かない様に」

中央管制室に響く職員からの明るい報告に、ロマンがホッと胸を撫で下ろす。いくら成功率は限りなく百パーセントに近いと言えど、不安なもの是不安なのだ。この辺りはロマンの心配性な部分も多分にあるだろうが。なので成功したことに安堵し、顔がほころぶ。

「そして私は居残り。世はこともなし、なんとも平和なものです」

対照に不貞腐れた顔をしているのは、やはり居残り組とされたマーカーキダであった。本来ならばアンデルセンと席を替わるのが最も効率が良いのだろうが、それでは特異点の攻略がぬるくなりすぎるという事で止められているのだ。実際彼女は近接も遠距離もサポートも手広くこなせてしまうのだから仕方ない部分もあるが。

そうして相も変わらずロマンの横に椅子を構えた彼女が見つめるモニターには、レイシフト先の海賊船で早速一悶着起こしているマスタートの姿が映っていた。無論の事人間である海賊たちはサーヴアントの相手にはならないが、それにしてもハラハラさせられる光景だ。

「いやはや、立香君達の巻き込まれ体質はすごいですね。まさかいきなり見ず知らずの海賊船のど真ん中とは」

「これはちよつとお祓いを勧めたくなるけど、それをやるにはまず人理焼却を阻止しなきゃならない矛盾があるからねえ……でもいきなり海に落とされるよりかはマシじゃないかな？ 今の彼なら海賊船をそのまま乗っ取るくらいしちやいそうだし」

「それはまあ……そうかもかもしれませんね。うーむ、私だって舟を出すくらいしてあげるのですが」

ぼやいている内に案の定立香は海賊船を乗っ取り——というよりははまだ穏便なお願という形で乗せてもらうことになっていた。ここまで来てそろそろ彼の肝も太くなってきたらしい。セイバーオルタのスパルタな教育もいよいよ成果を出してきたようだ。この変わり様には思わずロマンの目にも感激の涙が浮かぶ。

「確かにこうなるかもと言ったのはボクだけだよ。純朴だったはずの彼がこうまでイケない方向に染まっていくなんて……人理焼却とは恐ろしいものだよとほほ」

「いや、それはさすがに関係ないかと思えますので泣き真似は止めましょう」

呆れたようなマーキダの声が響く。その間に立香たちは船旅を終えてとある島に辿りつき、そこで世界を開拓した女海賊と出会った。彼女と出会い、そして計測された途方もない反応を見てまずはロマンが一言。

「せ、聖杯の反応だぞ!」

「嘘ツ、本当ですか!? 開始一時間も経たずに人理修復完了ですか!?」
『少し落ち着きなさいってそつちの二人とも。それは偽物の聖杯のそのまた親戚というべきもの、なんでもフランス・ドレイク船長がポセイドンとやらを自力で倒して手に入れた代物らしいわよ』

のっけからいろいろ波乱のありそうな展開になって来た。ロマンがその荒唐無稽さに頭を抱えて通信機に向かってありったけのツツコミをかまして、マーキダは早とちりを恥じて赤くなって黙り込んだ。そして通信機の向こうから響くのは、豪快な女海賊、星の開拓者の笑い声だ。

——第三特異点オケアノスの攻略は、こうして幕を上げたのだった。

第十六話 オケアノス冒険譚 II

穏やかな風が吹いていた。

爽やかな潮の香りが届き、柔らかく髪を撫でる。青空には魚を求めてカモメたちが自在に空を飛びまわり、にやあにやあと鳴きながら太平洋の真ただ中を進む。黄金の鹿号^{ゴールドデンハインド}の傍を旋回する。

カルデアの者たちはこの時代に生きた人物、フランシス・ドレイクと共に行動を開始していた。史実とは違い女性だったことに驚きはしたが、しかしその人柄を見れば確かに女性とは思えないほどに豪快で男らしい性格だ。

彼女の協力の下でマスター藤丸立香はグラントオーダーを本格的に開始し、聖杯探索に本腰を入れることになった。その一環で、海の移動の足としてこの黄金の鹿号^{ゴールドデンハインド}に乗船させてもらっているのである。

その船の一角、船尾にて。船の縁に手をかけて海を眺めている姿があった。彼女は普段の黒い鎧を今は脱いでおり、その金髪を潮風に遊ばれるままに流している。

誰であろう、セイバーオルタであった。普段の暴君の様な苛烈で自信に満ちた姿は鳴りを潜め、ただ穏やかな表情で海を眺めている。まるでそれに魅入っているかのように。

だからだろうか、背後からやって来た人物に気が付くのが一瞬遅れてしまった。

「オルタさん、このようなどころで何をされているのですか?」

「……なんだ、キリエライトか。わざわざこんな所まで来てご苦労な事だな」

いったん振り向いてマッシュにそれだけ告げ、オルタはまた海の方へと視線を戻した。普段はそこまで冷淡な態度をとるわけでもないが、どうやら今回は海の方に気を取られているらしい。あたかも一人だけの世界に没頭しているかのようだ。

「その、オルタさん、よろしければ私も隣で海を見てもよろしいでしょうか?」

だからマシユがやや躊躇いがちにおずおずと尋ねたのも無理はない事であり、同時に彼女が無言で頷いたのはマシユにとっても喜ばしい事であった。

二人、肩を並べて海を眺める。身長自体は実のところマシユの方がいくらか大きいのだが、隣に立つ騎士王はそのような差を感じさせない圧力を普段は放っている。だから、このような気の抜けたかの姿は珍しい事でもあった。

「海がお好きなんですか？」

「好きか嫌いかで言えば、まあ好きな方だろう。だが特別な思い入れがあるわけではない」

そういうとオルタはふっ、と笑った。

「生前に、当然だが何度か海を見る機会は有った。しかし我がブリテンは知っての通り外敵から始まり飢饉、天災、内乱、財政難など諸問題が山積みな国でもあったからな」

そこで彼女は言葉を切って、海を眺めた。陽光が水面に煌めき、白く光る。目を灼きそうな輝きはしかし、まるで宝石のよう。

「だから、私はついぞこのように穏やかな気持ちで海を見ることは無かった。ああ、確か最後に見たのはローマ遠征の帰りだったか。あの時も同じ船の上で、しかし疲労困憊の状態だったな」

そこまで言って、今度は自嘲するように笑う。

「理想は、この海の様には何者をも呑み込むだけの度量は示してくれなかった。結局どれだけブリテンを立て直すために奔走しても国は良くならず、その果てに円卓は私を見限り仲間割れだ。ふん、王は人の心が分からないとはよく言ったものだ」

「それは……」

思わずマシユは口ごもる。勿論、オルタの語るブリテンの惨事について的事ではない。無論それはそれで大変すぎると思うが、彼女が反応したのはむしろ騎士王の自嘲だった。

「それは違う、そんなことは無い。騎士王は誰もの羨望の的だった」
——何故だか、マシユはそう言いたくて仕方が無かった。ただけどうしてこんな感情が浮かんでくるのか分からなくて、だから言えなかつ

た。だってそうだろう、ブリテンの滅びを直接知っている訳でも、騎士王の苦悩を見ていたわけでもないのだから。

「ならば良いとも、私はもはや騎士王であって彼女ではない。理想を以て国を治めること能わず、なれば圧政を以て民を抑える暴君として救済しよう。……などと宣ったところで、もう国も民も無いのだがな。今はただマスターの剣、それだけの存在だ。人類を救うという大業に挑戦する者を導くのもまた、王の務めだろう」

彼女の言葉を聞いて、マシユがホツとしたように息を吐いた。まるで心底から安心したかのように。

「私は、オルタさんがマスターの召喚に応じてくれて本当によかったと思っっています。例え姿が変質してしようと、その芯は変わらないという安心感。あなたが居ればどのような状況でもきつとどうにかなるといふ高揚感。これらを抱いて人理修復に挑めるといふ誇り。どうしてでしょう、私の心がそう告げているのです」

すると、オルタが顔を逸らした。心無しかその顔は赤い。

「……キリエライト、あなたは私を褒め殺すつもりですか？ まったく、姿が変わっても人を見る目は相変わらずあると見えますね」

「？ 何かおっしゃいましたか？」

珍しく敬体なオルタの最後の言葉だけ、小声で呟かれてしまったため聞き逃してしまう。だがオルタは頭を振って誤魔化した。

「いいや、なんでも。それよりもキリエライト、見るにお前は海を見たことは無いのだろうか？ どうだ、初めて見た広大な景色は」

それを聞けば、マシユは途端に頬を紅潮させた。潮風に冷えた体温が急激に熱くなる。

「凄い綺麗な光景です！ 世界にこんなにも美しいものがあるなんて全く思いもしませんでした！ あ、いえ、画像とかで見たことはあるのですが、それでも実物は途方もなく大きくて雄大なんですわね！」

普段の彼女とはちよつと違うハイテンションに思わずオルタが面食らい、けれどすぐに立て直した。常の仏頂面のような気怠い雰囲気を取り戻しながら、マシユと共に海を眺める。

「最果ての海、オケアノスカ。私にとってみれば微妙に引つかかる言

葉でもあるが、しかしこの光景の美しさは本物だ。忘れるな、サー・キリエライト。お前の心に刻むべきはこのような光景だという事をな。断じて人類の滅びの未来でも、また悪意でもない」

「大丈夫です、先輩と一緒にならきつと人類の滅びを防げると信じていますから」

「そうか、ならば良い。せいぜい奴と共に足掻き、そして生き残るのだな。それだけが、お前たちに許されたただ一つの道と知るがいい」

「はい！……あ、でも騎士サーの称号はさすがに私なんかには不釣り合いかと」

「どうだかな。お前ならばきつと良い騎士となるだろうさ」

そうして二人は再び無言で海へと目線をやる。だがそこに最初の様な気まずさは一片たりとも存在しない。

潮風の音だけが、静かにその場に響き渡っていた。

◇

「どうですかマスター？ 少しは良くなりましたか？」

「ああ、もう大丈夫だよ。付き合わせてごめんねマルタさん」

「いえ、構いません。私は聖女ですから、困っている方が居るならば誰であれ助けるのが使命です」

「フオウ、フオフオウー！」

船尾に居るマシユ達とはうって変わって、ゴールドデンハインド黄金の鹿号の内部にて。

立香はしばし横になっていた。理由は簡単、船酔いだ。現代の船ならば彼もそうそう酔う事は無いのだが、さすがに時代の違う船に即座に対応することまでは出来なかったらしい。

故にしばしの間マルタの看病の下で横になっていたのだが、そろそろ体の方も船に慣れて来たらしい。立香は勢いよく立ち上がると体を伸ばし、枕もとにいたフオウ君を持ち上げる。その動作にも異常なし、完全に本調子だ。

「それにしても……」

言いづらそうな顔をしているマルタ。何かあるのかと立香が促せば、ゆっくりと彼女は口を開いた。

「あなたの不調をマシユに言わなくてよかったのかしらと思ってね。

確かに大したことは無かったし、そもそも止めたのはあなただけども。きつと私よりもつと献身的に看病してくれたでしょうに」

「ああー……そのことかあ。うん、そうだね。マシユに言わなかったのは自分でもどうかと思うんだけど、もし言ったらきつとマシユは不安になるだろうから。ただでさえマシユだつて自分の事で不安でたまらないだろうに、マスターのオレまで不安にさせちゃったら申し訳が立たないからさ」

そう笑う立香の顔は笑っているが、けれど目元はどうにも強張ってしまっている。まるで無理をしているかのよう、いや、実際無理はしているだろう。少なくとも船に乗ってしばらくの間はマシユと共に居て、その間は何の異常も無いように振舞っていたのだから。

「あんまりこういう事を私たちが言うのはお門違いかもしれないけどね。あなたは人類最後のマスターにして希望であり、死なれでもすれずすべてが水の泡と化す弱点でもあります。この前代未聞の事態を乗り切るには、強靱な心と身体を手に入れることが必要不可欠な事は認めざるをえません」

ですが、とマルタは続ける。その瞳は優しい。まるで弟を諭すような、そんな調子だ。フォウ君がいつの間にか降りていた立香の肩に両腕をおいて、真正面から彼の顔と向き合う。

「しかしだからこそ、弱音や不調を抱え込んで隠してしまうのはダメなのです。あの暴君はそういった事をあまり許容しない性格をしますが、それでもその性質は善性。あなたが潰れてしまう事など望んでいないでしょう。そして私たちはもつと同じです。ここまで言えば何が言いたいかは分かりますね？」

「……もつとマルタさん達を頼れと」

我が意を得たとばかりにマルタが頷いた。

「そうです。別に一人で抱え込んでいてもいいことは無いのですからね。マシユに慰めてもらったり、それが恥ずかしいなら私のところに来なさい。なんならアンデルセンに泣きついてみるとか？ きつとすごい勢いで扱き下ろしながら何だかんだ愚痴を聞いてくれるわよ」

「はは、それはなんだか簡単に予想出来るな。うん、そつか。そういう

のもありなんだね」

ちよつとだけ晴れやかな顔をする立香。彼は足元に居たフオウ君をもう一度抱き上げると、そのまま胸に抱いた。フオウ君はちよつとだけ鳴いて、けれど彼のされるがままになっている。

「正直、すごい不安だった。なんで俺がとも思ったし、押しつぶされそうな日も有ったよ。だけどそつか、頼っていいのか。不安を吐いてもいいのか。そういう事だけはしちやいけないと思ったのだけど」

「馬鹿ね、そんなわけないでしょう。そうそう、ついでに言えばマーキダに相談するのもありよ。あの人はもうソロモン王に一直線だけど、あれで一児の母でもあるのだから相談に乗ってくれるはずよ。それにほら、恋の相談も。マシユへのアプローチのかけ方とか伝授してもらえるんじゃないかしら？」

「ちよ、マルタさん!？」

「バレてないと思ったの？ たぶんそう思っているのはあなたとマシユだけよ」

「そんな馬鹿な……」

「フオウ！」

さつきまでの晴れやかな調子はどこへやら、魂が抜けたかのようにへたり込んでしまう立香。唯一マシユだけにバレていないのは救いだ、それで果たしてよいのだろうか。

そんな感じにちよつと気の抜けた彼を見て、マルタはくすくすと笑って安堵したのだった。

◇

大海原に行くゴールデンハインドの鹿号は航海中に海賊の概念体といった存在との戦闘は有ったが、比較的穏やかかつ安全に進むことが出来た。そしてしばらく進んだ彼らの目の前に現れたのはサーヴァント反応のある島であり、この海域の財宝を目指すドレイク船長の号令の下いったん上陸してみる流れになったのだった。

『気を付けてくれ、サーヴァントの反応は間違いない。敵か味方が分からない以上油断大敵だ』

「そんなことは分かっているさ、カルデア星見屋の。ここまで心配性だと筋金入

りだね」

『ごめんなさい、彼はこういう人なので……』

「まあ別に構いはしないがね。いつだって陰に潜む危険を見抜くのはこういった人種だ。アタシは苦手なタイプだが、居れば重宝するのも間違いない」

そう言つて納得した様子のだ레이크船長に従つて、立香たちは早速島の探索を開始する。途中彼女の勘に任せて進んだ先には何やらルーン板が置いてあり、それによればこの島を牛耳っているのは海賊の先祖とも言うべき血斧王エイリークだという話だ。

『ま、ルーン文字を見る限りは間違いないだろうね。このレオナルド・ダ・ヴィンチに間違いはないさ』

「レオナルド……なんだつて？ 聞いたことのない名前だね、響きのにイタリアの方がいい？」

『その通りさ、もうすぐ君も知ることになるだろうから覚えておきたまえ。まあ、その頃の私はまだ男だがね』

「ナニを言つてんのやら……つと、来るかな？ いや、もう来てるな！

全員構えな!!」

唐突に怒声を上げた레이크船長に呼応するように現れたサーヴァント、バーサーカーのクラスで現界したらしい彼はほとんど喋ることが叶わず、そのまま立香たちに向かい襲い掛かって来た。

しかし悲しいかな、ここに揃っているのは多くのサーヴァント達と不可能を可能にする女傑であり、如何な狂気の伝説に彩られた血斧王でもさすがに戦力として低すぎた。故に呆気なく撃破されてしまい、そして海岸に戻った레이크たちの手によりバイキングから航海地図が発見された。

こうして島に滞在すること数時間、そして次の島に向かうこと十時間弱。一行は次なる島、迷宮と化した島へと到達したのだった。

第十七話 オケアノス冒険譚 III

「それにしてもすごいことになってきましたね……」

「ああ、まさかあの黒髭船長が出てくるとはね。……しかもあんな濃いキャラになっちゃって」

「正直普段マギ☆マリについて語るドクターも大概ですが、さすがにあれほどひどくは無いですね」

「いや、アレと比べられるのはいくらなんでも心外だからね！」

キレのいいツツコミが管制室を飛び、周囲の職員達がまたかといった手合いで顔を見合わせた。

そして当事者であるドクターロマンとマーキダはそれらの視線をちよつと一瞥して、こちらは溜息を吐く。段々とマシユに続いてお約束になりつつあるやり取りだが、こうも生暖かい目で見られると少しばかりやり辛いのだ。

「まあ、甚だ不本意だけどボクの事は置いておこう。それよりも黒髭、エドワード・ティーチの持つ聖杯についてだ。あれをどうにか奪還出来なきゃこの時代の修復は不可能だ」

「だけど向こうは一人減ってもサーヴァント四人態勢。まさかオルタさんとタラスクの二人がかりでも防衛しきった槍兵までいるとは想定外ですね」

「加えて向こうの船はサーヴァントの宝具と来た。立香君たちも現場で出来るだけ打開策を考えているだろうけど、ボクらの方でも思考は止めない様にしないと」

そこまで言ってロマンはもう一度溜息を吐いた。カルデアの現状は中々厳しい。

大英雄と呼んで間違いない聖剣の担い手、騎士王アルトリア。

かつて怪物とも呼ばれた、しかし真実はそうでは無かった雷光。アステリオス

竜を操る聖女マルタに、こと守りについては最上のマシユ。

これに加えて不可能を可能にしてしまう人間のフランシス・ドレイクに、サポートまで万全のアンデルセンすらいるのだ。もはや過剰戦力、神秘の薄い海賊ならばほぼ一蹴してしまうだけの猛者が揃ってい

る。

なのに、先の接敵、黒髭を首魁とした『アン女王の復讐号』クイーンアンス・リベンジの面々と決着をつけることが叶わなかったのだ。

その原因は至って単純、海賊の中でも頂点に位置するような猛者たちの中に、その海賊すら軽く上回る槍の英霊が居たというだけの話。飄々とした態度のその男は、あろうことか騎士王と竜の二者を真つ向勝負で相手取りながら倒れることなく互角の防衛戦を演じてみせたのだ。

そして攻撃力に優れる彼らを抑えられてしまえば、残りはいくら英霊といえども攻撃力には優れない者達ばかりだ。唯一アステリオスだけはそうではないが、けれど彼は勘違いでカルデアと交戦した時の傷が治っていない。そのうえ女神エウリユアレを守ることに意識を傾けていたとなれば、戦況が聖杯を持ち強力な船を持つ黒髭に傾くのも仕方のない事だった。

そしてダメ押しゴールドエンハインドの黄金の鹿号の損傷により、結局カルデアの面々は撤退を余儀なくされたのだった。

「状況は逼迫しているが、だけど全く希望が無いなんてことは無い。間違いない大英雄と呼んで差し支えないであろうあの槍兵さえ倒せれば、戦況は一気にこっちに傾くはずだ」

「それか私が向こうに行けば盤石なんですがね。いつそこっちから勝手に行っちゃいましょうか？ オルタさんはどうにか説得するとして」

「それもどうだろうかね。少なくともここまで彼女はボクらの期待に寸分たがわず応えてくれている。となれば、ボクらもこの特異点まではギリギリの所まで彼女の言を信用すべきだ。個人的には危険に溢れすぎて勘弁してほしい内容だけどね——ってちよつと!？」

ロマンが三度溜息を吐こうとして、今度はその口をマーキダの手により塞がれた。いきなりの行動にロマンの声が裏返る。

「あまり溜息を吐きすぎるものではありません。親から幸せが逃げる」と教えられませんでしたか？」

「そう言われてもどうだったかな……？ ちよつと記憶にないから分

からないや」

「まったく……親の顔が見てみたいものですね。それでもうちのバカ息子に比べればマシでしょうけども」

腰に手を当てて怒っているマーキダ。その姿はまるで粗相をやらかした子供を叱る親のようだ。いや、姿やら言動やらで忘れがちだが、彼女は確かに一児の母だったはず。それもソロモン王との間にできた息子のだ。なのでロマンとしてはちよつと気が気でなかったりする。しかもダビデ自身の親の話が振られるともうどうしようもない。

ただ、話題ついでにどうしても聞いてみたいことがあったのもまた事実だ。

「……君の息子は、いったいどのような人物だったんだい？」

それは純然たる疑問。マーキダはカルデアに来てから一切自身の息子については喋っていない。彼女は果たしてどのように思っているのだろうか？ 今更、かつて親だった者として気にしているのかと聞かれれば首を傾げざるを得ない。だが何となく気になった事だった。

そして問われたマーキダといえは、困ったように笑った。

「どうしようもない男でしたよ。信じられます？ あのソロモン王からアークを奪って来たんですよ？ 本人は了承を得たとか言ってますけど、私としてはちよつと信じられないくらいで」

「エチオピアの正教会に伝わる話は真実だったのか……そう言えば君はこの場に居る時はマスターの事を立香君呼びしてるけど、実は息子に重ねていたりとか？」

「いえいえまさか！ むしろそれはマスターに失礼ですからね。あの子は本当にソロモン王の息子なのかと疑うくらいどうしようもないドラ息子といえますか、何があって宮殿で魔術とか呪術で悪戯する子が後世に残る偉大な帝国を築いたのか不思議なくらいですよ。アレですか、勝手に重石にされたシバ王国の後釜に上手いこと収まったのですかね？」

返って来たのは意外なほど辛辣な評価である。普段から穏やかなマーキダからしてみれば、もつと息子を溺愛していても良い気がした

のだが。その疑問を彼女に問えば、今度は複雑そうな顔をした。既にその顔に笑みは無い。

「……私は、メネリクが成長しきる前に死にましたからね。享年はおそらく三十代に入っただけと聞いたところでしょうか。なので彼の悪ガキ時代しか知らないと言いますか、後世において偉大な者として名を残した彼の姿を知らないのです。本来ならそれでも肉親としての情があるのでしょうか、私にとっては手を焼いた息子程度の認識しか得られなかった」

そう言えば、彼女は元はあまり情緒の育っていなかった人物だと聞いた事をロマンは唐突に思い出した。

「愛は分かります。悲しみも分かります。楽しみも怒りも、人としての情は全て余さず知っています。ですが、それでも、親子愛だけは得られなかった。何とも無様なものですね……出来る事ならもう一度新たにやり直したいほどに」

「……いいや、そうでもないさ。君は愛そうと努力したのだろう。ならそれは間違いなく偉大なことさ」

「ありがとう、ドクター。そう言ってもらえれば私も救われます」
寂しそうに笑って、マーキダは立ち上がる。その足取りは軽い。今話をひきずつている訳でもなさそうだ。そのまま彼女は一声かけてから管制室を出ると、どこかへと去って行った。おそらくは厨房にでも向かったのだろう。攻略中の職員の胃は彼女が握っているのだから。

「ドクター、あまり女性問題に口出しするもんじゃありませんよ？」
「そうそう、ただでさえあんな美人といい雰囲気なのにそれを自分で壊しに行くとかありえませんか。あ、でも最後にフォローしてたからむしろマツチポンプか。よっ、にくいねえ！」

「勝手な事言ってくれるなあ君たちは！ ボクらはそういう関係じゃないからね！」

職員達の言葉に勢いよく立ち上がって反論して、そしてまたロマンは椅子に腰を下ろした。

そう、彼らはそういう関係になる事など無い。再三の事だが、彼女

が愛した人物とロマンは全くの別人なのだ。よしんばマーキダがロマンの正体に気づいたとして、そのまま愛を向けるかといえはロマンの予想は否である。

——それに第一、ロマンから見たマーキダへの感情とて、あまりに複雑すぎるのだから。

◇

黒髭との一戦の後に島へとどうにかたどり着いたカルデアの面々は、まさかの相手としてこの前の月見で出会った女神と遭遇してしまう。しかしそこはどうか味方に付いてもらい、更にその島を住処としていたワイバーンを乱獲して壊れた船の補修に充てることに成功した。そのおかげで再び大海原に船は漕ぎ出し、一路黒髭へのリベンジに向けて出港した。

『次は絶対にあの男をとつちめるわよ！ あんなの存在自体が主への冒瀆です！ 火と硫黄で滅ぼされてしまえばよいのです！』

『落ち着け、マルタ。確かにあの男は女から見れば鳥肌ものなのだろうが、俺としてはむしろ好ましいぞ。生前に苛烈な伝説を打ち建て、そして畏怖と共に死後も伝わった破格の大海賊！ しかしその正体はオタクそのもの、そのうえ真つ当な海賊らしく欲望に忠実ときた！ いいぞ、これは滾って来る。俺としては是非ともお近づきになって、世界で一番熱い祭典への意気込みを語り合いたいところだ』

『伝説の大海賊と超有名な童話作家が来たら握手会とかですごいことになるそうだけどね……』

怒りと義憤に燃える声、真摯だがどうにも面白おかしく話しているようにしか聞こえない声、そして予想される惨劇を脳裏に浮かべてげんなりした声。どうにも対照的過ぎる三人の声だが、これでも決戦前の状態なのだから適度な緊張感はある……はずである。少なくともマシユとオルタは真面目だった。

「もうちょっと冷静に気合を入れてくれませんかねこの人達……マシユさんとオルタさんの二人が最後の砦ですよ」

『はっ、いいじゃないかそれくらい！ むしろ気合が入って何が悪いんだい？ アタシら海賊なんざ結局は意地のぶつけ合い、勝った者が

絶対正義なんだからさ。だから優等生ぶってないでこれくらい
パーツといつてくれなきや嘘つてもんよ!』

「うん、流石は世界一周を成し遂げたドレイク船長だ、色々豪快すぎて
逆にカリスマ性を感じるね! いや、むしろこれが嵐の航海者の力な
のかな?」

そんなやけくそ気味なロマンの声が消えるか消えないかの内に、ド
レイクが黒髭の船を発見した。やって来る船の威容は些かも衰えて
いない。いよいよ聖杯をかけての大一番、ある意味で絶対に負けたく
ない勝負が始まった。

先陣を切ったのはセイバーオルタ。湖の乙女を加護により水上を
走れる彼女は当たり前のように水面に立つと、当然の権利というかの
ように『約束された勝利の剣』を躊躇なくぶちかました。

暗黒の光は高速で移動する『アン女王の復讐号』の表面をいきなり
削り飛ばし、宝具といえども無視できない損傷を与えるに至る。

そこからはもう完全に超接近戦の殴り合いだった。船と船のぶつ
かり合いに、大英雄と大英雄の衝突。竜は水陸両用とばかりに暴れ、
黒髭はやはりふぎけていても黒髭だった。どこまでも大海賊として
の実力を見せつける彼と、その配下に収まっているらしき二人組の女
性はカルデアを以てしても侮れない。

だがそれも、オリオンの仕掛けた爆薬により『アン女王の復讐号』が
さらに損傷したことで均衡が崩れ始めた。動揺する船員たちに追い
打ちをかけるかのような猛攻。既に敵の手の内を知り、かつ仲間が増
えたカルデアにしてみれば当然の結果ともいえる。

故に黒髭とその仲間は倒れ、勝利と聖杯はカルデアの手に収まった
——かのように見えたのだが。

「まさかあの槍兵が裏切って、しかも聖杯と女神ごと逃亡するとはね」
「下手な援護じや女神エウリュアレまで傷つけ、聖剣を抜けば聖杯ま
で諸共吹っ飛ぶ。ままならないものですね」

黒髭の配下であったはずの男の裏切り。それに付随する聖杯とエ
ウリュアレの奪取と、槍兵の単独での離脱。まさかの展開が怒涛のよ
うに続き、彼を追いかけた先に待ち受ける最後の敵は、世界最古にし

て最強の海賊船だった。

アルゴ船の船長、イアソンは正体不明の槍兵の持つ二つの荷物を見て顔をほころばせ、ついでその後ろから追って来た黄金ゴールドの鹿号ハインドを見て露骨に顔を顰める。その後ろには二人の影、山の様な巖と嫺やかな少女が居た。

『おや、まさかまだこんなのが生き残っていたとはね。どうしたんだいヘクトール、君ともあろう者が塵の掃除一つ出来ないなんて』

『いやあ、おじさんにそれを言われても、俺って防衛が専門ですし？』

『そもそも向こうにもすごいのが居るんで無理つてもんですよ』

『……はっ、トロイア戦争の大英雄がどんなかと思えばこのざまかよ。だがいいさ、こつちには使える手駒がまだまだいる。さあ、私の可愛イメディア、それに大英雄ヘラクレス。あいつらを皆殺しにしてしまえ！ 屑の欠片なんて一つだって残すなよ！』

何もかもを見下すような、絶望的なまでに捻くれた男。だがその配下にいる者たちの実力は本物だ。故にここに来てカルデアの面々は最大の難敵に出会うことになってしまった。

『オルター！』

『承知している！ あの男は私が受けもとう、他の者は死にたくなければ一切手を出すな！』

立香の切羽詰まった声と、それ以上に焦りと緊張感を孕んだオルタの声。敵は紛れもない最強の大英雄、強者揃いのアルゴナウタイの中でもなお燦然と輝く英雄の中の英雄。例え狂化していようともヘラクレスの実力は恐ろしいを通り越して余りある。

カルデアが誇る最大戦力のセイバーオルタをして格上と言わざるを得ない強敵の出現に、一気に趨勢が決まり始める。これが聖杯と繋がったオルタならば強引に倒しきること可能なのだろうが、生憎とカルデアの魔力供給は膨大であつても無限ではない。無理をすれば簡単に限界が来てしまう。

『だが解せん、その女神を攫ってなんとする？ どう見ても性根の捻じ曲がった貴様の事だ、一応は英雄らしく慰み者にでもしてみるか？』

『くっ、ははははっ！　これだから低俗な馬鹿は嫌いなんだ！　慰み者にする？　そんな事をこの私がするかよ、私の目指す理想はこの女を生贄に捧げてこそ始まるもの。すなわち——』

戦況の余裕ゆえか、イアソンは自身の考えを簡単に喋ってしまふ。それをヘクトールが諫めようとして、けれど間に合わなかった。

『神霊たるこの女をアークに捧げて私は無敵の力を得る！　そのための犠牲だ、悪く思わないでくれ。そして君たちは無残に死んでくれたまえ！』

「アークですって……！　ってことはまさか——」

神が授けたとされる契約の箱アーク。それはダビデ王の所有した触れた者を殺す禁忌の箱であり、またソロモン王から一説にはその息子にまで受け継がれた最凶の箱の名だ。まさかギリシアの英雄であるイアソンからその名が出るとは思わず、マーキダは押し殺した声で叫んだ。

「まずい、アークはちよつとマズイって！　アレは文献を見る限りそんな力を得るためのものじゃ断じてない！　何が何でも神霊を捧げるなんて事は止めないと、間違いなく碌な事にならないぞ！　絶対に防ぐんだ！」

ロマンの声に後押しされるようにして立香たちの動きに必死さが混じる。だが敵は最強の英雄と防衛に於いて右に出る者のいない英雄、そして神代の魔女である。あまりにも分が悪い戦いだっただ。

となれば、いい加減に指を啜えて見ている訳にはいかないだろう。ここで全滅などではお笑いにもならない。

「ドクター、レイシフトの準備を。これはもう事態が進みすぎています！　アークについては私もそこそこ知っているので助けになるでしょう！」

「分かっている！　すぐにレイシフトルームに向かってくれ！」

急いで立ち上がり駆けだしたマーキダだが、刻一刻と戦場は動いている。だからせめて、彼女がレイシフトするまで持ちこたえてくれればよいのだが。ロマンとしてはそう願わざるを得なかった。

第十八話 オケアノス冒険譚 IV

レイシフト後に現れる時間には、およそ数秒から数分の誤差が発生する。それは特異点というあやふやな存在を観測する故に発生するでしょうもない現象であり、同時に後から追加戦力を送るには致命的な差になることも有り得る。

幸運なことに、ローマの際は大した問題は起こらなかった。見事仲間に犠牲を出すことは無く、人理修復も完遂させて見せた。

けれどいつまでもその幸運が続くとは限らない。

つまり、オケアノスの際はどうしても間に合わなかった。ヘラクレスを相手にその身を投げ時間稼ぎ犠牲になった人間がいたのだ。

「これを言うのは違いかもしれませんが、それでも謝罪はしておきましよう。私がつと早く来ていれば、アステリオスは犠牲にならずに済んだかもしれない」

「……構わないわ。あの子は自分の意志でそうしたのよ。人間として、やるべき事をやりたいようにやった。それだけの事なのだから」

船上に沈鬱な声が響いた。常と変わらないような調子を心掛けたが、けれどエウリュアレの声には普段の覇気がない。彼女を慕い、そして彼女の為に死んでいった雷光の死は女神をして堪えるものがあったらしい。

だがいつまでも悲しみに暮れてはいられない。むしろその死を悼み勇気をたたえてこそやらなければならないことが彼らにはあるのだ。

現在、一行はアルゴ船からどうにか離脱を果たしてしばらく経った頃だ。カルデアの次の指針はイアソンの語ったアークを彼らの魔手より先に見つけ出すこと。そのために船は様々な島を巡りまわっている真ただ中である。

いや、正確に言えば「だった」と言うべきか。ある島に近寄ったところで状況は遂に動いた。

島から正確に射られた一本の矢。それはオリオンに突き刺さり、そこには矢文が添えられていた。その書き手は純潔の弓手アタランテ

であり、その名を聞いたアルテミスがテンションを上げたのは完全な余談だろう。

ともかく、その矢文に従いひとまずカルデアの面々は島に上陸してみるのが良かった。

◇

上陸した島でアタランテに案内された先には、一人の青年が居た。その姿を見てマーキダが明らかにマズそうな顔をして、名乗りを聞いて静かに顔を覆った。反対にマルタは期待に目を輝かせた。

「やっぱりアークときたら貴方ですか……はあ、愚息メネリクの方を期待したのですが」

「久しぶりじゃないかマーキダ。いいね、美人の溜息は絵になるよ。どうだい？ 目当ての人物に会えない傷心ならば僕が慰めてあげるけど」

「これでも私、人妻なのですよダビデ王。しかも夫は貴方の息子さんです」

「むしろそれでこそ燃えて来るじゃないか。人妻なら寝取るのも悪くないだろう？」

「よくそれを寝取った人妻との子供相手に言えますね。ホントにその精神性は逆の意味で尊敬に値します」

「え、これがダビデ王？ 嘘でしょ、嘘だと言ってください主よ……！
“あの人”の祖先がこんな屑とか信じたくないです夢ですよねこれって」

爽やかな笑顔でマーキダとの再会を喜んで見せたその青年。彼こそアークの正統な持ち主、かつてユダヤの王としてその名を轟かせた世界的な名君。おそらくはこの場の誰もが知るであろう偉大なる者ダビデ王その人であった。

なのだが、その輝かしい肩書を持つ者とは思えないあまりの屑発言に場にいる全員がドン引きしている。特にマルタは重傷で、今度は彼女が無言で顔を覆った。期待に輝いていたはずのその眼も段々死んできている。彼女からすればダビデは“彼”の先祖であり、聖書で伝えられる偉大なる王のはずなのだから無理もない。

「ねえマーキダ、この人が本当にダビデ王？ 発言がちよつと屑すぎない？ どう見ても女の敵だし、隣人の妻に手を出してるわよね？ 実はその名を騙る別人なんじゃないの？」

「いやあ、確かに僕はあのダビデ王そのものじゃなくてダビデ王を象つた英霊だけだね。でも僕を示す名は間違いなくダビデだよ、聖女さん。どうやら素敵な顔と身体をお持ちのようだけど、どうだい？ 僕の妻となつてみないかい？」

「なななな、なるわけありません馬鹿ですかあなたは！ なんてことを言うのですか……でもこれが、ダビデ王の本当の姿……なの……？ 本当に？ こんな人が先祖に居るとかこれから先“あの人”の事をどうという風に思い出せばいいのよ……」

息を吸うようにして二言目には妻に迎えたいと言い出すダビデに、さすがのカルデア一行も何も言えなかった。ただでさえ引き気味なのにいよいよ絶対零度の視線がダビデに突き刺さり始める。そして自身が尊敬する者の真実の一端を突きつけられたマルタはそれともう可哀想な事になっていた。隅っこに引つ込み、大事そうに“彼”の証である杖を抱きしめる。

そんな彼女に寄り添う狩人が一人いた。彼女はこれまた爽やかな、だけでもどこか同情気味な表情を浮かべている。

「分かるぞ、汝の気持ちは。私もついさつき自身の信仰を木端微塵にされたばかりだ。ああ、辛いだろう、信じる相手が言い様の無いイイ性格だったなど。せめてその衝撃を分かち合うくらいはしよう」

「あ、アタランテ……！ まさか異教徒に黄金律を実行する人が居るなんて驚きました！ 握手しましょう握手、それと今日からあなたは名誉教徒です誰がなんと言おうと名誉教徒です私が認めます」

「……せつかくだがそれは辞退しておこう。私の信仰は変える気は無
いからな」

いつの間にか女同士の友情が出来ていた。こう、傷が深い者同士の悲しい友情だった。そのあまりの痛々しさから目を逸らして、ひとま
ずダビデの屑つぷりに耐性のあるマーキダが話を進める。

「それで、あなたが『契約の箱』を持っているのですよね？ やはりイ

アソンから逃げてここにアタランテさんと共に？」

「そうそう、ついでに彼女も口説いてみたんだけどどうにも身持ちが固くてね。うん、やっぱりマーキダがボクの妻にならないかい？」

きつとソロモンよりも色々満足——つて拳を握りこんでちよつと待ったそれはさすがにどうかと痛いッ！」

『えー……まさかあのダビデ王にいきなり殴りかかるとは。すさまじいなー、真似できないなー』

「おおっと、こいつは痛快だな。屑男を殴る義娘、こういうのは得てして胸がすくような気持ちを読者に与える。それが実際の現実においても通用すると図らずもこいつらは示してくれた訳だ。いいぞ、執筆が気持ち早まる気がしてきた」

森の中に鈍くともすつきりした音と、思わずといった風なロマンの微妙な反応が響いた。いきなり『魔力放出』全開のマーキダに殴られたダビデは思いつき吹き飛び、木にぶつかりやと止まった。そして誰もがハラハラしながら見守る中で何事も無かったかのように立ち上がる。伊達に神から加護として強靱な肉体を与えられてはいないようだ。

「ふう、これで長年の胸のしこりが取れました。あの時はよくも媚薬なんて渡してくれましたね、お義父さん。今のはそのお返しです」

「そこでわざわざお義父さんとはつきり言う所に君のそこはかかない拒絶を感じるよ。それに今のは結構きたね、かなり響いた。でもほら、そのおかげで彼といい仲になれたのだから本望だろう？ 好きな相手の子供まで孕めて、今風に言えばwin-winじゃないか」

「そ、それは……まあそうですね……」

あけすけな言い回しのダビデに、マーキダは思わず人差し指を合わせながら口ごもってしまう。まるで騙されやすいちよろい女のようなのである。実際ダビデに騙されたのはそうなのだが。しかもwin-winといってもダビデにとってのwinは女性に媚薬を渡すというその背徳的な行為に集約され、そのうえナチュラルにセクハラまでかましているのだが。

「嘘でしょ、シバの女王とソロモン王のラブロマンスってまさかの媚

薬がらみなの……！ 純愛要素とか駆け引きの末に惹かれ合った伝承はどこ行ったのよ!? ……いよいよこのふざけた王様の頭を爆散させる時が来たのかしら」

「いい加減に落ち着け、マルタよ。聖女であるお前がそうも冷静さを失ってどうする?」

「君は……アビシヤグ? アビシヤグじゃないか!? まさかこんなところで再会するとは奇遇だねえ! マーキダといい君といいどうも僕は運に恵まれているようだ。これは主にとびっきりの感謝をしなければだね。何やらボクのことを忘れているみたいだけど、大丈夫、今の僕は肉体的に若いだけさ」

「……私はアビシヤグなる者ではない、その姿で耄碌したかダビデ王」
「わー! 落ち着いてくださいアルトリアさん! 剣をしまってください!」

無言で抜剣したオルタをどうにかマシユが抑える。もう場は滅茶苦茶だ。ダビデ一人にペースを乱されまくっている。唯一同じような屑青年としてオリオンなら止められる目もあるだろうが、それよりもむしろ意気投合してアルテミスに潰される運命が見えている。

なのであまりのフリーダムっぷりを発揮するダビデをその場に居る誰もが御せなくなっていたのだが、幸いなことにその場には比較的冷静であつたらしい。

『よし、とりあえずじゃれ合いはそこまでにしよう。ボクとしてもダビデ王のあまりの酷さに開いた口が塞がらないけど、いつまでもこうしてはいられないからね』

「おや、君は? 何やら声だけ聞こえているようだけど?」

『……ああ、これは失礼しましたダビデ王。私はロマニ・アーキマン、カルデアの所長代理を務めていて、皆からはドクター・ロマンと呼ばれている者です』

「……ふうん、なるほどね。よろしく頼むよ、カルデアの魔術師さん」
心なしかダビデの声が低くなり、ようやくダビデが真面目なモードに入ったらしいことが伝わる。やつとこの無軌道地獄が終わることに安堵して、カルデアの面々はホッと一息ついた。たった数分のやり

取りだが、もうこの王様の相手はこりごりだと思わせるだけの濃密すぎる数分間である。

なのだが、誰も次の言葉を言おうとしない。聞くべきことは間違はなくあるのに、誰もが顔を見合わせてから満場一致でマーキダの方を無言で見つめた。どうやらダビデの相手は彼女に投げるつもりらしい。さもありません、彼の相手は慣れなければただ疲れるだけだ。マルタにいたっては首を全力で横に振っている。よほどトラウマというか、期待を裏切られたらしい。

仕方なくマーキダは渋面をしながら本題を切り出した。

「それでダビデ王、あなたが持っている『契約の箱』は今どこに置いてあるのですか？」

「この島にあった地下墓地さ。ひとまずはそこに安置しているよ」

「……？ 英霊の宝具なら自在に出し入れできるものじゃないんですか？」

立香が問う。それに答えたのはマーキダの方だった。

「ダビデ王の所有する『契約の箱』は彼の宝具であって彼の宝具でないのですよマスター。あくまでも神から授けられた物だから、ダビデ王と共に顕現してダビデ王とは独立して現界を続ける死の箱です」

「死の箱……？ そつちはどういう意味？」

「僕の箱はいわゆるパンドラの箱という奴でね。開けてはいけないし壊してもいけない、仮にやっつけてしまえば周囲に恐るべき禍を降りかけるとんでもない箱さ。しかも直に触れたら一瞬で死ぬおまけ付きだね。そのくせマーキダの言う通り僕とは独立してるから、僕を座に還しても消えない厄介な宝具さ」

「なんでそんな物騒な物を古代の王様はもっているんですかねえ……？」

もはや立香、あきれ顔である。現代人の感覚から言えばただ危険極まりないだけの授かり物など論外という事だろう。それに関してはマーキダとしても同様である。少なくとも欲しいとは絶対に思わないし思えない。

ちなみに言えば、ダビデを殺害しても何も状況は好転しないことに

明らかに数名が舌打ちを零したのは余談だろう。

「それでダビデ王？ 『契約の箱』に神霊を捧げた場合はどうなると思いますか？ やはり——」

「まあ暴走が起きてこの辺り一帯は滅びるだろうね。アレはそういう代物だ。しかも特異点で使えば丸ごと時代が吹っ飛んで、きつと君たちの言う人理は跡形もなく破壊されるんじゃないかな？」

『やっぱりそうなるか……アレはそんなイアソンの語るような生易しい箱じゃないもん……そのうえ下手に破壊まで出来ないと来たか。これはいいよお手上げだぞ』

ドクターの言葉に空気が重くなった。つまるところ消すに消せないアークは完全に厄ネタ、イアソンに奪われればほぼ詰みである。最悪の場合エウリュアレ以外の神霊を聖杯で呼ばれる可能性すらあるのだからどうしようもない。

「となると本当に『契約の箱』は守り通さなければなりませんし、出来る限りエウリュアレさんも奪われることは避けなければ」

「だがその道は熾烈を極めるぞ。相手にはよりにもよって大英雄が二人と、神代の魔女だ。特にヘラクレスは私でなければ抑えきれないだろう」

オルタの言葉に頷いたのはアタランテだ。

「悔しいが汝の言う通りだな。あれはアルゴナウタイの中でも誇張無しに最強の英雄だ。そのうえ私の宝具でもあの身体を、奴の宝具『十二の試練』を貫けるかといえば疑問が残る。汝らには何か手だてはあるか？」

「あるにはある」

その言葉に、一斉にセイバーオルタに注目が集まる。

「私は先の戦闘で一回は奴を殺した。おそらくアステリオスがさらに一回は殺してくれているだろう。そうなれば残り十回、このうちの五回程度ならば我が聖剣で一息に殺してみせよう」

「こ、殺していたんですかあの状況で……やはり騎士王というのは規格外ですね」

「そう褒めるな、キリエライト。だが逆に言えばそれが私の限界でも

ある。無制限の魔力供給があれば奴の『十二の試練』による耐性の上からさらに聖剣の解放で押し通せるだろうが、さしものカルデアもそうまで無茶な魔力供給が出来る訳ではあるまい?」

『その通りだ。おそろく君の想定しているような魔力の使い方をすればカルデアの他の電力まで回さないといけなくなるから、とんでもない事態になるのが目に見えている。だから悪いがその作戦は却下だ』
ロマンの言葉にオルタは特に落ち込むでもなく「そうか」とだけ返した。この返答は既に予想済だったらしい。

「えーと、そうなるとヘラクレスは既に二回死んでいて、そこからオルタさんで五回だから計七回……つまりあと五回、大英雄を殺さなければならぬという訳ですね。しかも違う手段で。先輩ならどうしますか?」

「……『契約の箱』にぶつけるのはどうかなって最初は考えたんだけど、よくよく考えるとヘラクレスって死後に神にまで押し上げられた存在だよな? オレだって知ってるこの逸話がどうなるのか不安かなって」

「二理あるね。僕も流石に試したことは無いから分からないけど、ヘラクレスほどの神性を『契約の箱』にぶっつけ本番で捧げちゃうのは怖いな。難行に挑む際は一定のリスクは誰しも背負うべきものだけど、これはちよつとどう転ぶか分からないから保留だ」

「となると正面から殺しきるしかないのね……私の『愛知らぬ哀しき竜』なら理論上は殺せるはずだけど、対怪物の専門家相手に通用するとも思えないし」

「ねえダーリン? 私の弓ならヘラクレスも倒せるかなあ?」

「ま、やれないことは無いだろうが、お前の技術じゃ一回殺した代償に即殺されるのがオチだな。つかこの姿であいつに挑むとか怖すぎて震えてくる」

やはり、どうしてもヘラクレスが鬼門となるらしい。彼の『十二の試練』はAランク以上の攻撃でしか貫けず、そしてそれだけの攻撃手段は数多くの英傑が集うこの場においてもなお少ない。オルタ以外にヘラクレスを殺す手段はほぼ皆無、どうにか工夫しても二回

の殺害が限度とみるべきか。

「マーキダはどうだ？ お前の持つ剣の真名解放で殺すことは？」

「情けない話ですが、私は自身の剣の真名を知りません。なので真名解放も出来ず、素のままでは間違いなくヘラクレスを殺しきることは不可能でしょう。かといって魔術や呪術で殺しきれるかということもどうかと思いますし。良くて一回、それから先は通じるかどうか」

『剣は一応真名が用意されているはず、か……なるほどね。でもこの場じゃ全く頼りにできないか』

「まあその通りですが、けれど私には一つ大英雄ヘラクレスを一気に殺しきれるだけの火力の算段が付いています」

だから、続くマーキダのその言葉に今度は彼女に注目が集まった。期待の籠められたその視線をもともせず、幻想女王は更に続ける。

「準備時間が多少必要ですし、国土までヘラクレスをおびき寄せてもらう必要はありますが、間違いなく殺しきれるであろう手段です。どうでしょう、そちらに賭けてみるというのは？」

「どうも何も、それしかあるまい。お前がしくじれば俺たちは全員おじゃん、ここで哀れにも人理修復はお終いだ。で、その手段とは何なのだ？ やはり貴様の事だから“アレ”か？」

アンデルセンが確認するように聞いた。

マーキダは薄く笑う。その手に握るは『智慧と王冠の大禁書』、シバの国を示す唯一の歴史書である。裏側より映された王国の影、その呼び名が真に示される時がやって来た。

「その通り、シバの国土とその所有物の一部をこの世界に“証明”します。『幻想女王』の名に懸けて、失われた我が王国をもう一度地上に降ろしてみせましょう」

確かに、そう宣言したのだった。

第十九話 最強の試練

——世界の裏側という言葉がある。

それは文字どおりに世界、つまり星の内海を指す言葉だ。神秘の薄くなった西暦以降に多くの幻想種が住処と決めた地であり、魂だけとなった彼らは次々と人間の前から消えていくこととなる。

つまりこれは星を支配する法則が神秘から物理法則へと変遷した事を意味し、星の表面を覆う織物テクスチャもまた神代から人の世へと完全に移り変わったということ。神秘はただでさえ減少していたのが、この変遷によって加速度的に消えていったのだ。

一般的に、神秘が消えた最初の切っ掛けは英雄王ギルガメッシュとされている。彼が神を廃した決別により神代の終わりは決定付けられた。ここが神秘の終わりに対する始まりといって良いだろう。

では、その次はどこなのか。ここで登場するのが魔術王ソロモンである。彼はただ一度の魔術行使だけでその名を馳せ、魔術王として立脚した。そしてこの人物の死をもって神秘の終焉はいよいよ本格的となり、世は物理法則の支配する世界へと変わっていったのだ。つまりとところこの出来事は神代が本格的に姿を消す契機の予兆であり、世界の裏側という形をとった神代が物理法則の台頭する“表面側”によって押しやられたという意味を示す。

ここで、一つの例を取ろう。

目の前には普遍的な大きさの机があり、そのうえには薄い布が被さったテーブルクロスが掛かっている。この時の机を星、テーブルクロスを世界の裏側と仮定し、薄い布を現実の世界としよう。

この場合、テーブルクロスはひどく不安定である。引つ張れば呆気なくずり落ちてしまうし、何かの衝撃で揺れる可能性もある。あるいは捲ることすら容易だろう。このままではとても安全とは言えず、テーブルクロス世界の裏側が崩れればその上に乗った現実薄の世界も共に崩壊してしまふ。

これを防ぐ為に用意されたのが、テーブルクロスと布ごと机に縫い止めることのできるピン。つまりは世界の裏側に立つ惑星ほしを縫い止

める最果ての塔である。この塔のお陰でこの世界は崩壊の危険がなく、世界の裏側もまた安定した存在となっているのだ。

だが、これには一つ致命的な見落としがあった。先の例をもう一度挙げてみよう。テールクロスは確かにピンによって固定されたが、誰も真つ直ぐ伸ばした状態で留めたとは言っていない。だから、実はテールクロス自体がたるんでいたらどうだろう？ 四隅は確かに安全だ。しかし中央部分は布が余っているため風が入り込めば呆気なく膨らみ、上に乗った布をも押し曲げてしまうだろう。そしてこの動きを世界規模で考慮すれば、世界の裏側とその上に成り立った現実世界も大変な事態に見舞われることは想像に難くない。

だから、世界はそれを防ぐべく“重石”を欲した。それも西暦に完全に移行してからでは遅い、もつと早くからだ。此度は織物テクスチャを縫い止めるのではなく押さえつける重石なのだから、神代の神秘を纏い、また台頭を始めた物理法則とも親和性が高い方が好ましいだろう。その方が二つの世界に及ぼす影響は少ないはずだから。

となれば、人の世に存在するモノを重石としてしまうのが理想か。だがこれに合致する存在があったとして、小さな規模ではいけない。それでは吹けば飛ぶ程度の小石にしかならないのは目に見えている。よって一番の理想となるのは国規模の存在、それも神代にて巨大に繁栄しながら神秘も物理法則も呑み込める、いわば神代時代の最後にして最新の国だ。

果たして、これに合致する国は存在した。故に世界はその国に積み上げられた歴史という概念を奪い、これをもつて世界の安定に用いた。だからこの国は人々の記憶にしか残らず、あらゆる記録から抹消されたのだ。それは悲劇的とも言えるし、運が悪かったとも言えるだろう。

——そしてかの国こそは、歴史から消えた幻想王国。唯一女王の保有する歴史書だけがその存在を証明できる虚構の国土。これこそは、シバの国に他ならない。



ヘラクレス。

その名は魔術世界においても一般世界においてもあまりに有名な名前だ。古今東西において知らぬ者などいないであろう英雄の中の英雄。最強の名を恣ほしにまにし、ありとあらゆる難行を越えてみせた不撓不屈の大英雄である。

そんな相手に、これから立香たちカルデアの面々は挑まなければならない。確かに相手はバーサーカー、思考は狂気に吞まれ常の理性は薄れている。だがそれでも、鍛えぬいた武技の冴えは失われていない。オルタと真正面から張り合えることが何よりの証拠だ。

「なんだ、もしかして緊張してんのかい？」

「ドレイク船長……ええ、そりやあもう。本当にうまくやれるかどうか心配でしょうがないですよ」

島の海岸近くにて。イアソンを待ち構える一行はヘラクレスを打倒すべく息を潜めて彼らの到着を待っていた。木陰の中で静かにその時を待っている立香に、手持無沙汰のドレイクが話しかける。

「そうは言ってもアンタが肉付けした作戦だからねえ。司令官がそんな浮かない顔してちゃ、ついてく部下も怖気ついて逃げ出しちゃうよ？」

「それを言われると立つ瀬がないんですがね。……ドレイク船長は怖くは無いですか？」

「アタシかい？ そりやあ勿論怖くないと言えば嘘になる。なんだいやあ、筋肉達磨のくせに技能があって、その上殺しても死なない不死身の男ときた。そんなのに生身で向かおうなんざ自殺行為もイイとこさ」

そういう割に、彼女は全く怯える様子など見せない。同じ人間のはずなのにどこまでも立香とは対照的だ。だから彼は、思わずその理由を聞いていた。

「あん？ 今更そんな事聞くのかい？ アタシとアンタは既にこの特異点での協力関係を成立させている。なら手を貸すのが商人つてもんだし海賊つてやつだ。それにね、命つてのは出し惜しむもんじゃない。金や酒と同じでパーツと使つてこそそのモンさ。だからアタシはここで命を張ることに不満はない。むしろこの程度の山、いつだって

アタシらは越えて来たのさ！」

言うだけ言つて豪快に笑うドレイクに、つられて立香も笑みをこぼす。緊張していたのがまるで馬鹿のよう。彼女を見習った玉碎覚悟はどうかと思うが、今だけはそれくらいの気概で挑むべきなのだろう。

「そうそう、その面構えだ。いい顔になってきたねえ、それでこそ率いるモンの顔つてやつさ。……つと、来たようだよ」

俄かにまとう雰囲気を変貌させたドレイクの示した先には、確かにアルゴ船の姿がある。いよいよ文字通りに全てを懸けた総力戦が始まるのだ。

「よし、それじゃあみんな手筈通りに」

周囲に向かつて立香が言えば、静かにサーヴァントが移動する気配を以て肯定が返される。そして彼の近くに残ったのはマシユとセイバーオルタ、アンデルセンにエウリュアレという面々であった。他の者達はアルゴ船に対する陽動とつり出しを担当し、マーキダだけは島の奥でスキル『幻想女王』を用いた陣地作成を行っている。

しばらくして、多数の矢が風を切つて飛ぶ音と、それが船からの魔力砲によつて撃ち落とされる音が響いた。次いで槍が振るわれる鈍い音と、竜の吠え声。とうとう戦端は開かれたらしい。

「先輩、おそろくはもう——」

「■■■■——ッ!!」

マシユの声がかき消される。それはまさしく狂戦士の咆哮。あらゆる英霊のほとんど頂点に立つ者の叫びだ。もはやその声はそれだけで威圧感を抱かせ余りある。足が震えそうになった立香はしかし、それでも毅然として前を向いた。

——そこには、エウリュアレ標的を捕らえんとするヘラクレスが猛然と向かつてきている姿がある。

「来るぞッ！ 命を張れマスター！ この最強の試練、見事乗り越えて見せろ！」

「上等ッ！ 命呪を以て命ずる！ オルタ、絶対にヘラクレスをオレたちに追いつかせるな！ それからアンデルセン！」

「こいつはとっておきだ、上手く俺を運べよマスター。」「トランクよ、遥かなる空を目指し駆けるがよい」

「私の扱いは丁重にね、勇者さん？」

次の瞬間、様々なことが一挙に起きた。

疾走するヘラクレスの斧剣をオルタが令呪によって増幅された力で真正面から受け止めた。衝撃で地面が窪み、体重の軽いアンデルセンとエウリュアレが浮かび上がる。

いや、浮かび上がり、そのまま空中に浮遊した。アンデルセンの行使した術によって引き起こされた現象を確認するまでもなく立香が二人を小脇に抱え、その場から離れるべく全力疾走を開始した。

そう、これこそが立香の肉付けした作戦だ。イアソン達の狙うエウリュアレを抱えて立香が全力疾走、奥地で待つマーキダの元まで逃走する。それによってヘラクレスをイアソン達から引き離し、ヘラクレスのサポートをさせない。反対に逃げる立香のサポートをマシユとアンデルセンで行おうという魂胆だ。

だが無論の事、ヘラクレスから逃げたところで即座に追いつかれるのが関の山だ。だからこそ、セイバーオルタがここにいる。

「■■■■——ッ！」

「行かせると思うか？ 甘いぞ、ヘラクレス！」

ヘラクレスの剛剣を同じくオルタの剛剣が受け止めた。発生した剣戟による衝撃は周囲の木々を容易くへし折り、まるで局地的な台風でも起きたかのような惨状を露呈させる。だがこれはまだまだ序の口、どちらもこれから先こそ本領である。

振るわれる斧剣をかがんで躲したオルタの剣がヘラクレスの腕を確かに斬りつけ、しかしまったく通用しない。やはり『^{ゴッド}十二の試練^{ハンド}』は厄介であると改めてオルタが歯噛みして、その不利をおくびにも出さず不敵に笑った。

「どうした、バーサーカー。守る者がいなければ本領は出せんか？」

いや、それとも本来守るべき幼子を手に掛ける事を躊躇うか。皮肉なものだな、私と貴公の立場が逆転する日がこようとは」

「■■■■——■■■■——！」

揶揄するようで、しかしその実わずかに敬意の含まれたオルタの言葉。それによってほんの一瞬、理性の無いはずのヘラクレスが動揺したかのように見えた。その隙をオルタは逃さない。一気に後方へと跳んで、開いたはずの立香との距離を多少なりとも埋め戻す。そうしなければ、最後の詰めを打てないから。

「悪いが貴様を誘導しなければならぬのでな、しばらく付き合ってもらおうか。なに、退屈はさせん。あの時に比べれば今の私は確かに弱いが、故にこそその強さがあるのだから」

「――■■■■!!」

オルタの言葉が分かるかのように、さらに勢いを強めて突進するヘラクレス。迎えうつ様に黒の魔力をその身に纏わせたセイバーオルタ。一步も譲らない両雄の戦いは、まだ始まったばかりである。

◇

「そうらキリキリ走れ！ 奴は締め切りなぞ待ってはくれんぞ！

デッドライン締め切りはすなわち死だ、それがいやなら馬車馬の如く走るんだな

！」

「分か、ってる、っての……!!」

「ミスターアンデルセン、冗談を言っている暇はありませんよ！」

とにかくひたすら走っている。第二特異点でも決戦を前に走り通した気がする立香だが、状況ははつきり言ってなお悪い。浮いているから重さは感じないとはいえ、二人を抱えて走っているのだ。それに加えて今回の相手は追いかけるのではなく追いかけて来る者、それも徒歩ではなく全力疾走の大英雄がだ。どれだけ走っても聞こえてくる戦闘の音色は、作戦と分かっているにもなお立香の精神を蝕んであまりある。

また、他の者の援護は期待できない。なにせアルゴ船に残ったメンバーとしてヘクトールとメディアという屈指の英雄たちなのだ。そのような余裕はないだろうし、むしろ期待する方が虫の良い話といったところだろう。

そのとき、後方で一際鈍い音が響いた。ついで密度のある砲弾が飛ぶような音が宙を走る。遅れて立香の隣にロマンのホログラムが浮

かび上がる。

『!? ヘラクレスがオルタから離れた！ そつちに来るぞ！』

「マシユ！」

「はい！ 先輩には指一本だって触れさせません！」

マシユが力強く答えた数瞬後には、もうヘラクレスの巨体はすぐそこにいた。迫り来る明白な死の塊。豪快に振るわれる斧剣をマシユがすれすれで盾で防ぎ、その合間を縫って立香がさらに駆け抜けた。「ほら、あなたは仕事しないでいいのかしら？ それとも口が回るだけの腰抜けなの？」

「馬鹿め、俺の仕事はいつだって筆と口を動かすことだけだ。“白鳥のように飛び立て。この池は、おまえたちの住む場所ではない”」

「■■■■—!?!」

自作の童話の一節をアンデルセンが唱えた瞬間、まさにマシユに向かい斧剣を振り上げていたヘラクレスが一気に遠くへと吹き飛ばされた。咄嗟の事に体勢を整えきれないヘラクレス。その先に待っているのは当然ながらセイバーオルタであり、既に堕ちた聖剣は漆黒の光を湛えている。

「遠慮はするな、好きなだけ喰らっていけ——！」

『約束された勝利の剣』ツツ!!

解放された暗黒の光がヘラクレスを寸分たがわず呑み込み、その命のストックを容赦なく削っていく。そして光の奔流が収まった頃には、瀕死になりながらも直立不動のヘラクレスの姿がある。受けた傷もすぐに修復が始まり、数秒もすればまた元通りの姿に戻る事だろう。

「さて、これで私の切れる手札は全て切った。後は立香の意地と、幻想女王の奥の手に委ねるだけか」

嘯きながらもオルタは剣を構えることは止めない。もう彼女の放つ攻撃は一切通用しないだろうし、それを僅かに残った理性で承知しているだろうヘラクレスはもっと果敢にオルタを突破しようとするだろう。

それで構わない。元より彼女は死兵、時間稼ぎと出来る限りの命の

ストックの消失が任務なのだから。かといってカルデアで復活出来ることにかまけて死ぬ気もまた毛頭ない。それは命を張って戦う己がマスターとマシユに対して、あまりにも不誠実な行いなのだから。故にまたも最強格の大英雄同士が激突し、その音を背にしながら立香はとにかく一心不乱に前だけを目指す。目的地はもうほど近い。いま走っている草原をもう少し進んだ先の山影、そこは勝利と安全の確約された幻想の国土となるのだから。

『あと五十メートル！ もうひと踏ん張りだ！』

「了解——！ 絶対に成功させて見せるとも！」

「先輩！」

鋭いマシユの一声、思わず振り返ればヘラクレスの威容がそこにはある。また追いつかれたか、そう歯噛みするもどうしようもない。むしろ攻撃が一切通用しない中でオルタはよくやっている、それを理解するからこそ泣き言だけは決して言わない。

振るわれた斧剣をマシユがどうにか受け止める。彼女の技量もまた素晴らしいものではあるが、単純な話として嵐のような暴力を防ぎきれだけのものでは無い。故にマシユが勢いよく弾かれ、いよいよ立香が無防備な状態で晒された。

「ここまでか——いいやまだだ。まだもう一人残っている。」

「よく来ました！ ここは任せてそのまま走ってください！」

草原の終わりに位置する山の影から、立香とすれ違うようにして一目散にヘラクレスに迫る影があった。準備を終えたマーキダである。彼女は『魔力放出』とその剣技で紙一重のところ立香に迫る斧剣を防ぎ、大英雄に立ちほだかった。

「私は対人戦の経験が浅すぎるので大した時間稼ぎは出来ませんが、まあ数秒止められれば御の字でしょう」

笑う。その言葉に嘘はない。例えどれだけ彼我の条件をマーキダに有利に整えたところで、ヘラクレス相手に二十秒も打ち合えれば万々歳である。だからこそ、今の状況では数秒程度の時間稼ぎしか出来ず、この場ではそれで十分だった。

「ふん、まさか女王自ら出てくるとはな。キャスターの本領を忘れた

か？」

「それこそまさか。ただ私は貴女が居ると知っているから出て来ただけのことですよ」

「……そうか、ならば期待に応えよう」としよう」

遅れてやって来たのはセイバーオルタ、傷だらけになり鎧も破壊されながらどうにか生きている。そんな彼女と交代するようにしてマーキダが山の影に戻り、何度目かも分からない剣戟を披露する。

放たれる剛剣を防ぐオルタの姿はもはや精彩に欠けていて、このままいけば押し切られるのが見えている。その証拠に、ぼろきれのように彼女は吹き飛ばされた。それを猛追するヘラクレスに、オルタが口元を弧に歪める。

「かかったな、女王の罠に」

吹き飛ばされた先は立香とマシユ、そしてマーキダの消えた山の影だ。すべては騎士王の狙い通り。

——この瞬間、命のストックを半分以下に減らしているヘラクレスの敗北は決定付けられた。

「シバの女王として、敵意ある侵入者に罰を与えます」

厳かなその声と共に、ヘラクレスは自身の能力の低下を自覚した。おそらくは呪術によるもの。同時に、理性の片隅でこの場所が一六世紀の海ではなく、紀元前の土地と化していることに気が付いた。

これこそはシバの女王マーキダの保有するスキル、『幻想女王』の効果だ。常に彼女を中心として狭い範囲をシバの国土とするこのEX規格ランクのスキルは、実のところ大した恩恵を与えてはくれない。せいぜいが筋力のランクを一段階上げる程度の効果であり、それなのに魔術によって範囲を増やせたところでなんの意味も為さない地味なスキルだ。

『幻想太陽神殿』、起動。全制限を解除します。出力最大、これより国土への不法侵入者の排除を行います」

しかしそれも、マーキダの保有するもう一つのEX規格ランクの宝具、『智慧と王冠の大禁書』があれば大きく化ける。シバの女王という存在を以て逆説的に証明されたシバの国は、その国土にのみ降り立つ事

を許される。シバの国を排斥した世界に対して、声高に王国の存在を証明する権利を得るのだ。

故に、証明されるはシバの女王の聖域でもある“太陽の神殿”、それが宝具と化したものである。『幻想女王』によって広げられた国土の半分以上を使い、煌びやかにして神聖なる神殿が顕現する。設置された強力巨大な改造魔力砲は、確かな威力と威容を以て敵対者ヘラクレスを滅ぼさんと牙を剥いた。

そして、女王の手札はそれだけではない。

「■■■■——!?!」

上空に影が差す。眼前に迫る脅威から逃れんとするヘラクレスを襲ったのは、容赦のない砲撃達。だがそれは正面に聳え立つ神殿からのものではなく、その上に飛来した銀の舟から放たれた一撃。それらに混じり数本の棒が銀舟から射出され、陣を描き中心のヘラクレスの動きを確かに封じて見せた。

されど、ヘラクレスにしてみれば拘束はたかだか小石に躓いた程度のもの。打ち破るのはあまりに容易い。けれども、これこそが王手に繋がる一手だという事もまた彼は理解していた。

臨界寸前の魔力砲が、今か今かと発射の時を待ちわびている。強く、強く、ただ強く。総てを滅ぼす圧倒的な火力が解放されるその時を。

最後の一手は、幻想女王の名の下に宣言された。

「さあ、裏側より浮上した幻想の一撃を受けてみよ！

『マハラム・ビルキス
幻想太陽神殿』——発射ッ!!」

神殿に取り付けられた巨大な砲口、その狙いはあやまたずヘラクレスを狙っていた。たった数秒程度の拘束がこの瞬間彼にとつての命運を分けることになり——ヘラクレスは自身の最期を悟って微かに笑った。まるで倒された事をこそ言祝ぐかのように。

次の瞬間、収束された魔力砲が発射された。怒涛のように迫るそれは聖剣にも迫りかねない至高の一撃、ランクにすればA+はくだらないだろう。それだけの一撃が過たず拘束されたヘラクレスを捕らえ消し飛ばした。

派手な破壊音の後に残ったのは、もうもうと煙る土ぼこりのみ。その中を見通す事は誰であれ難しい。

「さて、これで決まっていれば良いのですが。もう次の一撃もありませんし」

「ぶ、物騒なこと言わないでほしいなマーキダ……」

祈るように砲撃の煙が晴れるのを待つ一同。風が吹き、ゆつくりと煙が晴れていく。

果たして煙の消えたそこには、もう誰の姿も確認できなかった。

『ごつちでも確認が取れた、ヘラクレスの霊基は確かに消失しているよ。おめでとう、大英雄殺しの達成だ』

讚えるようなロマンの言葉に、ようやく一同の張り詰めていた空気が緩んだのだった。

第二十話 第三特異点、決着

ヘラクレス攻略組が行動を開始してから早数分、戦場は島からアルゴ船へと移行していた。

「さてと、こっちもそろそろ終わりかな？」

やれやれと言った風に呟いたのはダビデ、普段持っている杖は脇に置いて、どこからか取り出した豎琴と宝具の投石器を所持して自然体で立っている。そんな彼の目の前では、神話もかくやといった戦いが繰り広げられていた。

ギリシア神話においても狩人として名高いアタランテと、狩猟の女神そのものであるアルテミスを相手取るのはヘクトールだ。二体一という不利な条件の中でほぼ互角に渡り合っている。放たれる矢を悉く叩き落とし、当たり前のようになりかかりアソンを護っているのはさすがという他ないだろう。

もう一人、ギリシア神話の魔女メデシアは苦戦気味だ。なにせ高い対魔力を持つマルタと、彼女の従える竜を相手取っているのだから。しかしそれでも竜牙兵を用いて数の利を生み出し、只の人間でしかないドレイクをそれなりに苦戦させている。

状況だけ見れば一進一退、メデシアはやや相性差で押され気味だが、それでも勝利には今一步足りないだろう。このまま続けても膠着戦になるのは目に見えている。しかしそれも、このまま続けばの前提だが。

「おわつと！ とと、心臓に悪いなまつたく……」

「おや、気を付けてくれよ。僕は男を助ける主義はあまりないからね」
「相変わらず清々しいくらいに層だなお前」

ダビデの一步手前に飛んできたぬいぐるみじみた生き物、本来のオリオンがばやきながら立ち上がった。どうやら戦鬪の余波でアルテミスから吹き飛ばされたらしい。その様を横目に見ながら、彼は抱えていた豎琴をつま弾いた。

無造作に弾かれる様で、しかし美しい旋律を豎琴は奏でる。その音が届いた直後にヘクトールの槍が異常なまでに命中率を低下させ、舌

打ちをした彼に対して一気にアタランテたちの有利な状況に移行する。ダビデの豎琴の演奏による効果、敵味方問わず槍の命中率を極端に低下させる能力がこの場面で生きていた。

「さつきから見ただが、ホントにその豎琴便利だよな。こんな姿で役立たずとか悲しすぎるから俺にもくれよ」

「お試しくらいならいいけど、君のその恰好で弾けるのかい——つと！」

聞きながら、今度はもう片方の手で投石器の石を投射した。明確な脅威に対して放たれる警告なしの一投は過たず竜牙兵に炸裂し、まさにドレイクを背後から弓で狙っていた竜牙兵を呆気なく散らす。

つまりダビデの発言はこういう事、実際に戦っている両者だけなら膠着状態だが、そこに彼の支援が入ればそれだけで戦局は傾く。それをよく理解しているダビデだからこそ、二つの戦況に対して的確な支援を行えるのだ。

「よくもまあそんな器用に豎琴弾いたり石投げたりできんなおい。さすがに戦争に次ぐ戦争を経験した巨人殺しは違うって事かい？」

「そう大きな事じゃ無いさ。だってほら、見てごらん？」

視線で促されてオリオンが見た先には、戦闘中のアタランテとマルタの姿がある。この時点でなんとなく嫌な予感はある。

「ミス・オリオンはさすがに除外だ。君に向ける熱量が尋常じゃないからね。ドレイク船長はそうだね、あの豪快な性格と胸囲は中々お目にかかれるものじゃない。アタランテ、あの子はどこがとは言わないが小さい。だけどそれが魅力なんだろうし、僕としては惜しくは感じるけどやっぱり妻に迎えたいね。それでマルタ、あの子はいい。完璧だ。程よい大きさに貞淑、だけど活発なところもある元気な女性。素晴らしいじゃないか」

「うわあ……」

もはやドン引きといったオリオン。それを知ってか知らずか、ダビデは豎琴を弾きながらさらに続ける。

「そこで僕は考えた。どの子も綺麗で可愛いからちゃんと助けてあげたいけど、あいにく僕だって分裂は出来ない。だからこうしてア—

チャールらしく、どっちの戦闘も俯瞰してサポートしてあげれば良いのではと結論付けたんだ」

「やばいくらい酷いこと言ってるのに、なまじそのサポートを完璧にこなす無駄な有能ぶりがお前ズルいだろ。でも屑だけど」

「ははは、そう褒めないでくれ。男に褒められてもあんまり嬉しくないからね」

「イイ性格してるよマジで……」

オリオンが思わず嘆息した時だった。彼らの頭上に影が差し、上空から人影が複数降って来る。その姿を見てダビデが安堵したように笑い、オリオンが一息ついた。戦闘はまだ継続しているが、それでも突如やって来た銀の舟に誰しも注目する。

「やあ、お疲れ様。その様子だと無事にヘラクレスを倒せたみたいだね」

「いやあどうにか。全員で勝ち取った勝利ってやつかな」

はにかんだのは藤丸立香だ。既に逃走劇で消耗した体力は回復しただけで、しゃんと立っている。その後ろにはマーキダによって傷を治療されたオルタや、その他の面々が傷一つなく揃っていた。

「ダビデ王も特にお変わりなく。しいていえば中々楽しそうなお話が聞こえました」

「おや、聞こえていたかい？ でもこれが僕な訳だから、今更何を言われようと困るけどね」

「いや、別に言いませんよ……やっぱり最低ですけども」

「私もいろんな勇者や人間を見てきたけど、ここまで屑かつ有能な男はそうそういなかったわね」

そのような事を話しているうちに、銀の舟が融けるように消え去った。地に差した影もはやなく、まるで夢のように空飛ぶ飛行船は失われた。マーキダは特に気にした様子もなく、状況を一瞥する。状況的には合流を果たしたカルデア側が大幅に有利だろうが、可能性としては一つ有り得ることがある。

「魔神柱、出てきますかね？」

「そりゃあ追いつめられれば獣共は出て来るだろうよ。だがまあ、奴

はもう一回見ているからな。ここにきて苦戦するなんてつまらない展開は無いだろうよ。いや、それとも劇的な展開が無いただの作業だから余計につまらないのか？」

「御託はよせ物書き、さっさと片付けるぞ」

その身に魔力を充溢させたオルタが剣を構えた。その眼は既にヘクトールへと向けられている。どうやら彼女としても、何度か戦闘を行い決着を付けられなかったことが悔しいらしい。さすがの負けず嫌いというべきか。

『よし！ そうとなればこの特異点での最後の戦いだね！ イアソンもなんだかすつごい動揺してるし、今のうちに畳みかけちゃうとしようじゃないか！』

「ドクターの言う通りです！ マスター立香、指示をお願いします！」
「分かった、行こうマッシュ！」

◇

「い、意外と呆気なく終わりましたね先輩……」

「うん、気合入れてただけに意外と拍子抜けというか……ヘクトールとかは大英雄だったというのは実感したけどもさ」

船から海を眺めながら、立香とマッシュが呟いていた。結局この特異点における最終戦闘は加勢にきたオルタやマーキダによって一気に戦況が傾き、呆気なく終わってしまった。その後の魔神フォルネウスすら事前に『呪術』のスキルを付与されたアンデルセンがオルタにサポートを施し、結果として令呪の後押しを受けた聖剣の解放を前に儂く散ってしまったのだった。

そういう訳でやや脱力気味の二人にドレイクが何やら話すべき近寄って行く。その光景を眺めながら、マーキダは何故だかダビデ王と共に佇んでいた。

「短い間でしたがお世話になりました。もう二度と会うことが無いことを祈っておきます」

「え、そんなこと言うのかい？ 心外だなあ、僕としては全部本心なんだけども」

「だからこそたちが悪いんですよ貴方は」

顔を背けて海に視線をやった彼女は、ポツリと一言零した。

「貴方は、この人理焼却がソロモン王の仕業だと思えますか？」

囁くようなその声は、常には無い不安に揺れているように思える。まるでダビデの返答を恐れているかの様な、そんな声色だ。

「そうだねえ……隠れて交際していた愛人十人くらいに一斉に裏切られたらそうなるかも？」

「そんな事で焼却されたら私たぶんショックで自殺しますよ」

「真顔で言われると怖いからやめようね。それで、真面目に言えば先の魔神の名前は間違はなくソロモンの使役した悪魔の名前だ。だからアレが何か一枚噛んでいる可能性は高いと思う」

「やっぱりそうですか……」

マーキダの声はどこか歯切れの悪い印象を与える。普段ならそれでもありえないと突っかかりそうなもののだが、珍しくそのような様子は見られない。

そのことはやはり普段から彼女の様子を見ているロマンからも一目瞭然だったらしい。カルデアからの音声通信が開いた。

『君らしくないね、どうしたんだい？ もっと食って掛かると思ったのだけど』

「確かに普通ならそうなのですが……相手が他ならぬダビデ王ですからね。私などよりはるかに彼の事を知っている人の言葉はとても無視することは出来ません」

「……意外と僕の事を高く評価してくれているようだけど、それは大きな間違いだよマーキダ。僕よりも君の方がよっぽどソロモンの事を知ってるし理解できてる。そこはほら、アレの千人規模のハーレムの中でも唯一の存在だから誇っていい」

「ぐぬぬ、千人規模のハーレムって言葉はやはり嫌ですね……」

「まあそこは事実だから仕方ないさ。そしてだからこそ、僕なんかよりも意外なことに気が付かなかったり目が向かなかったりするものだ。つまりは恋は盲目ってことで納得するしかないね」

『いい事言ってるような風だけど、本人の中身が中身だけに締まらないなあ……！』

ロマンの声にダビデは愉快気に笑った。どうやら否定する気は毛頭ないらしい。そのあたりが余計に彼に対する評価を下げて、かつ不思議な大物感を出すのだから奇妙なものである。

「さて、それじゃあ僕もちよつと向こうに行つてこようかな。彼らに残しておくべき言葉も少しはあるしね」

「はい、それではさようならダビデ王。……それなりに楽しかったですよ」

「それはありがとう、じゃあまたね」

そう言つて、手を軽く振りながらダビデは去つて行つた。

◇

レイシフトから帰還し、第三特異点攻略の祝勝会を終えてから早一日。騒ぎすぎて一日静かだった分を取り返すかのようにカルデアは活気づき、少ない人数の職員達がそこかしこで走り回っている。

そんな彼らに申し訳ないと思いつつ、白い廊下を歩く姿が二つある。白の白衣に黒のドレス、対照的なロマンとマーキダはしかし和やかに話していた。

「結局のところ君の宝具はどういう効果なんだい？ そろそろ教えてくれてもいいんじゃないかな？」

「そうですね、この段に来れば話すのも吝かではありませんよ」

そう言うと、彼女は手元に話題の宝具である『^ケ智慧と^ブ王冠の^ラ大^ネ禁^ガ書^ス』を顕現させた。相変わらず鎖で戒められた古ぼけた書物という印象を与えるそれだが、実際はかなり派手な宝具だということは第三特異点で立証済みだ。

「簡潔に言えば、裏側送りにされた王国を証明して召喚する宝具ですね。まずはスキル『幻想女王』で仮初の土地を用意して、それからこの宝具に記された“シバ王国の歴史”で王国がかつて地上に存在したことを証明します。そしてシバの国の所有物を現世に降臨させるのです」

「つまり、一種の召喚系宝具ってわけか。もしかして魔力炉として働いているのもその影響だったりするのかな？」

「その通りです。微妙にですがこの宝具は魔力で満ちた裏側に繋がっ

ているので、そこから魔力を汲み上げて使っています。ただこれが中々融通が利かないものでして」

「証明して召喚したシバの国への魔力供給は出来ないから、更に魔力を喰うと。とんだ燃費の悪さだね」

その言葉にマーキダが頷いた。これは第三特異点で言っていたことだが、仮にこの宝具でシバの国の防衛設備を使用したと考えたとして、まず存在を証明するための必要魔力がそもそも大きすぎるらしい。具体的には聖剣二発分に匹敵するというのはカルデア側で計測済みだ。しかも多大なコストを支払って現世に建物を降ろしたとしても、今度は各機能を行使するのにさらに多くの魔力を持つていかれる。このうえ召喚するまでの用意にも時間がかかるのだから、はつきり言って通常の聖杯戦争ではかなり使いどころの限られる宝具だろう。

「まあその分『幻想太陽神殿』^{マハラム・ピルキス}はかなりの威力を誇ると自負していますし、アクスムの宮殿はちよつとやそつとの事では壊れない防壁になります。他にも便利な所有物は多くありますし、幾つか記述のある武器や銀舟くらいの小規模さなら証明も低コストですから使いやすいですね。……本当は国にはたくさん武器や財宝があったのですが、さすがに生前にそれら全てを記述する気にはなれませんでしたよ」

「今から思い出せるかぎり書き加えることは出来ないのかい？」
「それが出来れば非常に良かったのですが、残念ながらできません。もちろん後付けで王国の所有物を過大に書き直してもほとんど反映されません。まあ気持ち強化されるかもしれませんが、ほぼ誤差の範囲ですね」

「そんなに美味しい話はないと。それもそうか」

納得した面持ちのロマンに、曖昧にマーキダが笑った。

「二応シバの国を丸ごと召喚できればとんでもない強さになるとは思うのですが、そこまでに至る必要経費を考えるとゾツとしますね。なのでこの宝具はちよつと使いづらい切り札的なものとして運用を考えてください。立香君にもそのように伝えますので」

その言葉に、ロマンは一拍おいて納得した。そもそもセイバーオル

タの話していた内容は第三特異点までの事なのだから、次の特異点からはマーキダも本格的に参戦することになるのは自明の理だ。実際彼はヘラクレスとの対峙を見事乗り越え、一皮剥けて成長したように思える。となればこれ以上の試練は意識して与えることもなく、最初から全戦力で攻め込むのも視野に入る。

つまりそれは普段管制室でロマンの横に居る人物が居なくなるわけだ。そのことに何となくロマンは寂しさを覚えてしまう。だってそれなりに楽しかったのだから、ここしばらくの管制室での時間は。

そのまま、しばらく二人して無言で歩く。不快ではない、むしろどことなく心地の良い無言時間だ。

「と、着きましたよドクター。さて、今回はどんな方が召喚されたのでしょうかね？」

扉の前でマーキダが聞いて来た。そう、ちょうどいま現在マスターである立香が五人目のサーヴァントの召喚を行っているのだ。いよいよ三つの特異点を越えて、さらに苛烈になっていくであろう人理修復の旅。それに対抗するためには、さらなる戦力が必要不可欠だった。

しかし、ロマンの笑みは微妙に硬い。まるでこの部屋の中に入りたくないかのようである。

「楽しみではあるんだけどね、なんだか嫌な予感がしてならないような、そんな虫の知らせが……」

「？ いつの間に直感スキルを手に入れたのですか貴方は？ まあまあ、そんなこと言わずに入りましょうよ！」

「あ、ちよつと?! ずいぶん強引だなあ！」

背中を押されて強引に扉の方に向かわされる。自動ドアが開き、室内へロマンが放り込まれた。その後ろからは期待に満ちた調子でマーキダが続き、自動ドアがまた閉まった。

室内に居たのはいつも通りに立香とマシユのコンビ、それから今回は聖女マルタが付き添いらしい。ただ誰もの顔が非常にげんやりしているのは、間違いなく気のせいではないだろう。

「あー……ごめんなさいドクター。どうやら貴方の勘が合っていたよ

うです」

「うん、これはちよつとね、そんな気はしたけど悲しいなあ……」

「相変わらず君たちは変わってないねえ、もう少し笑ったらどうだい？」

召喚された五人目のサーヴァントは、どうやら特異点での記憶を保持したままらしい。カルデアのシステムは穴が多いからこそ、そのような事も起こるのだろうか。現状の説明が要らないのは助かるが、彼の場合だとなんとも言えないことになるのはこの対応を見ても明らかだ。

ともかくそのサーヴァントの名は、

「やあ、また会えるとなんとなく思っていたよ。数日ぶりだね、マーキダにD r. ロマン」

第三特異点で別れたはずの、あのダビデその人であった。

第四章 死界魔霧都市ロンドンⅠα

第二十一話 ハロウイン I

ダ・ヴィンチちゃんの工房には、これまで足を踏み入れたことが無い。

それも当然の事であり、魔術師は誰しも己が魔術工房を保有し、その中に他者を入れないし入ったならば帰さない。いわば魔術師が持つ最強の陣地であり切り札、そして城壁が工房の役割という訳だ。

私個人としては、面倒なので自室を工房とはしていない。キヤスターらしく陣地作成スキルはもっているし、道具作成を用いればより質の高い魔術工房は作れるだろうが、そもそもカルデア内でそこまできつちり工房を作る必要が無いのも事実だ。

だから今回こうしてダ・ヴィンチちゃんの工房に招かれたのは、正直意外だったという他ないだろう。

「やあやあよく来てくれた。かけてくれたまえ、茶の一つくらいは出そう」

「お気遣いありがとうございます」

一礼して、既に用意されていた席に座る。そこで首を動かしてみれば、辺りは様々な未知の道具や礼装で溢れ返っていた。それ以外にも書きかけの絵や設計途中の機械の類、図面に書き起している最中の設計図が多く散乱している。

有体に言って、片付いてない部屋というべきだろうか。だけど不思議とこの光景が嫌ではないというか、むしろここでは何処か落ち着くような雰囲気さえ醸し出している。

しばらくそれらを眺めていると、鼻先によい香りが漂ってきた。確かこれらは茶葉を用いた飲み物、紅茶と呼ばれる飲み物だったか。見ると、何やら不可思議な道具から色づいたお湯が出て来ていた。きつとあれもダ・ヴィンチちゃんの発明品の一つなのだろう。

「お待ちどうさくん、紅茶一つあがりだ。ふふふ、どうだい、全自動紅茶作成マシーンは？」

「ふむ……」

一口含んでみる。紅茶については詳しい所は何も知らないのだが、爽やかな風味と味が口内に広がる。確かに美味しいと言えるし香りも良いと思うのだが、しいて言えば一つ欲しいものがある。

「砂糖はありますか？ そのまま飲むと苦くていけません」

「ふっ、ははははっ！ まさか味より前にそれを言われてしまうとは。さすがに私も予想外だぜ。ほら、これに砂糖があるから使うといい」「わざわざすみません」

渡された小さな瓶を空けて、角砂糖を紅茶の中で投入していく。およそ七個ほど入れたところで良さげな味になったので瓶を閉じて、ダ・ヴィンチちゃんに返却する。それから口を付けてみて、予想通りに飲みやすい味となっていたことに内心で安堵した。

そこで何やら視線を感じたので正面を向けば、果たして万能の人と呼ばれたカレは目を丸くしてこちらを見ていた。

「随分と砂糖を入れたものだ、甘すぎないのかい？」

「？ これくらいなら普通に入れますが。昔は甘いものもあまり食べられませんでしたから余計に。ええ、そう思うと良い時代になったものですね」

「はあ、こりや筋金入りの甘党か。ちなみにエチオピアはコーヒーの名産地だったりするが、君は飲めるのかい？」

「あんな真っ黒で苦くて黒い飲み物、私に飲めるわけ無いじゃないですか。せめて砂糖を大量に入れないとやってられません」

個人的には、あんな飲み物は飲料だと認めない。アレはそう、悪魔の飲み物だ。ドクターは気に入っているらしくかなり飲んでいるのだが、私としては今すぐにも飲むのをやめてほしい。アレを飲むなどなんの拷問だろうか。ただでさえ彼は睡眠不足なのだから、そこまです自分を追い詰めなくても良いと思うのに。

「おや、その顔はアレだね、ロマニの事を考えていたかな？」

「……鋭いですね。ただでさえ睡眠不足の彼があんな苦い悪魔の飲料を愛飲するのはどうなのかと思ひましてね」

「確かに、コーヒーの成分に含まれているカフェインは脳を活性化さ

せる効力があるから、あまりロマニには好ましくないな。今度それとなく注意しておいてくれ」

そう言つてこの話題を打ち切つたダ・ヴィンチちゃんは、テーブルの下から何やら袋を取り出した。無言で出して見ると促してくるの
で中身を取り出してみれば、果たして中身は帽子とローブだ。それぞ
れ黒と深い蒼で、触つた質感はかなり良い。

「これは？」

「今回君を呼んだ理由さ。今度カルデアでは息抜きにハロウインをし
ようと思つていてね。そのための仮装道具を先に渡しておこうと
思つたのだよ」

「それでこんな物を……」

ハロウインについての詳細は聞いている。お菓子をもらい、仮装を
施して楽しむケルト由来の祭りだとか。だから仮装道具については
そんなに不思議でもないのだが。

「見るに、魔女衣装でしょうか？ 割とコテコテですね」

「こういう時はむしろありきたりやテンプレートこそ似合うのさ。ほ
ら、それを着てロマニにお菓子をたかりに行くといい。きっと驚くぞ
う？」

「まあ確かに、こうも凝つた物だと驚きそうですね」

見た感じ、かなり細かく作り込まれている。どうやらダ・ヴィンチ
ちゃんは裁縫についてもかなりの腕前を持っているようだ。はつき
り言つて万能過ぎてもはや嫉妬の念すら起こらない。

なのだが、何やら向こうは不満げだ。こちらを半眼になつて見て来
る。何か悪いことを言つただらうか？ 疑問に思いながら問いかけ
れば、深いため息をつかれた。何故？

「君はまだ気づいていないのかい？ それだけ強く意識しておきなが
ら」

「……なんの話ですか？ 身に覚えが無いのですが」

「本当に？ ……なるほど、確かに恋は盲目というのは本当のようだ。
ダビデ王の慧眼には恐れ入る」

よく分からないが勝手に納得されてしまった。いや、話の流れから

私がドクターロマンの何かについて気づいていないという事なのだろう。ただ、そのことが私には分からない。確かにドクターロマンはそれなりに気になっているが、そもその理由を探るために気になっているという因果の狂ったような想いが元のはず。

だから、私に対して恋は盲目などという言葉は何の意味も為さないはず。それでも何か意味を持たせるならば、つまり私がロマンに対して――

「ありえませんが、そのような事は。私が好きなのはただ一人だけです。確かに彼と共に居ても不愉快でない……どこか楽しいと思ってるのは否定しませんが」

「頑なじゃないか。そうまで否定するならまあ、それでもいいさ。その間に、私が彼を貰っていくとしよう」

「……は？」

何を言っているのか分からない。いや待て、そもそも目の前の存在は精神的には男じゃないか。それなのにもらって行くなっておかしくはないだろうか。

「貴方、自分が何を言っているのか分かっていますか？」

「おいおい、この私にその質問は悪手だぜ？　自分の言葉に責任も持たずに、誰が天才なんて名乗るものか」

「それはそうですがね、ですが貴方の中身は男じゃないですか。それでもそのような事を言うのですか？」

「そりや言うさ。こと恋愛について男女の性差は関係ないだろうか？」

このうえ今の私は『黄金律』を宿した極上の女体だ。文句は誰にも言わせないよ」

どこまで本気で言っているのだろうか、この存在は。酔狂でこのよきな事を言うとも思えないし、かといって本気と取るには普段の態度からして信じられない。普通に考えれば、私に対するなにがしかの当てつけか。だけどその理由が分からないし、されて何の意味があるのやら。

「だけど、そう、何故だか負けたくないと心が訴えてくる。勝負ではないのに、負けたら終わりだと心の何処かが言っている。」

「……私だって『黄金律』はもってますよ。身長だって貴方より四センチは高いですし」

「体重はどうだい？　ちなみに私は四十キロだ。そうそう追いつけるとも思えないけど」

「五十二キロです。だけど私のは健康的を維持しつつ美容的なギリギリの体重なのに、貴方のそれは幾ら何でも軽すぎるじゃないですか。その中身は実は骨と皮だけなんて考えられますけど大丈夫なんですか？」

「まったく平気さ、この私に失敗があるわけないのは承知してるだろう？　それに、世の中の男性はやっぱり女性の体重に夢をみるものさ」「それは自分の実体験ですかね？」

「ああそうだと。この辺り、君とは比べ物にならないアドバンテージだと思うのだけどどうかな？」

問われて、言い返せずに黙り込む。確か世の中の男について知っているのはダ・ヴィンチの方に分があるだろう。でもだからこそ、元男に対して女性としての魅力で負けたくないのは事実だ。だけど、それで勝利したとしてどうするのだ？　カレは彼を貰うと言っていたが、もしカレに勝利すれば私が彼を手に入れられる？　だがそこに意味は無い……はずだ。そこに意味を見いだせるとすれば、それは互いに相思相愛の時に限るだろう。

だから、結局この争いに意味はない。そんな事はお互いに分かっている。カレが本気だとしてもそうでないにしても、ここでの言い争いは時間の浪費だ。

「なんて、小粋なジョークで場を温めたところで本題に入ろうか」「ジョークとは思えないくらいには目が本気だったように見えました」

思わず反論してしまう。するとダ・ヴィンチちゃんはくつくつと笑った。まるで愉快でたまらないといった具合だ。

「それはそれさ。ちよーっと君の事を試してみただけど、想像以上に頑固だから驚いてるよ。だからそんな君にこれを進呈しよう」

渡されたのは一枚の紙。広げてみれば、五桁の数字が並んでいる。

これは一体何のだろうかと視線でダ・ヴィンチちゃんを促すと、カレは笑って教えてくれた。

「その紙に書いてあるのはロマニの自室の暗証番号さ。普段は鍵を閉めてるから入れないんだけど、それがあれば外から勝手に入ることが出来るのさ」

「えっと、それって結構マズくないですか。完全に相手の了解を得ずに敷地に入っていますけど」

さすがにいつの時代においても勝手に他者の部屋に入るのはマナー違反だろう。その法則に男も女も関係はないはず。だからこそ、何故このような物を渡されたのか分からず困惑してしまう。

「君も知っての通り、ロマニは割と自己犠牲系ヒロインみたいな状況になっていてね。かなり無理をしているから満足に寝てすらいない。管制室に基本的に居座って仕事をしてるし、見かねたこつちが部屋に追い返してもそつちで仕事をしてるくらいのワーカホリックだ。これはいけないと私も思ってたね、だから君にこれを託すことにした」

「つまり、私にドクターの面倒を見て欲しいと？」

「そんな所さ。堂々と部屋に入って、暗示か何かで眠らせて、それで膝枕でもしてやってくれ」

軽く言ってくれる。ドクターを相手にそこまで持つていくのがまづ大変そうなのだが。とはいえ頼まれたのは事実だし、彼の睡眠不足の深刻さも確かに不安だ。ダ・ヴィンチちゃんの依頼をこなすことに否は無い。

「ただ、一つだけ訊きたいことが。さつきはあんなにこつちを牽制するような事ばかり言っていたのに、どうして急に私に塩を送るような真似を？」

気になったので聞いてみた。だってそうだろう、さつきはあれだけ自分の優位を説いていたのに、急にライバルの様な相手が有利になるような事をするには違和感がある。

よって口をついて出た言葉は、どうやらカレの琴線に触れたらしい。腹を抱えて笑い出すと、その場に突っ伏してしまった。

「……なんです、その反応は？」

「ふつ、ふふふ、まさかそこまで本気になるとは思わなくてね。それに信じるとも思わなかったのさ。心配いらない、全部ぜんぶ冗談だ。君のライバルは一人もないよ」

「その言い方は引つかかるものがありますが……まあ今は良しとしておきましょう」

飲みかけの紅茶を一気に流し込んで、テーブルから立ち上がった。もらった紙は懐に仕舞い込んで、工房の出口まで歩いて行く。そんな私の背を追いかけるように、座ったままのダ・ヴィンチちゃんの声が届いた。

「いつまでも見て見ぬ振りはよくないぞ？　ま、君が君ならロマニもロマニだがね。チキンはチキンで厄介だよ、まったく」

追いついたその言葉を振り払うように、工房の扉を閉めた。

◇

「さてと、入力するのはこの番号ですか」

夜、ロマニ・アーキマンの自室前にて。結局ダ・ヴィンチちゃんに言われるままに来てしまったのだが大丈夫なのだろうか。今更ながら不安が残るが、躊躇っていても仕方ない。なので入力装置に暗証番号を入力して、閉め切られた扉を開けた。

「失礼しますよー」

「だ、誰だ!?! ……ってなんだマーキダか。どうやって入って来たんだい?」

一瞬だけ普段とは全く違う鋭い反応を見せたドクターは、こちらの姿を見てホッと息を吐いた。座っている彼の前にはこの前と同様にパソコンなる機械が置かれていて、さらに周囲には様々な書類が散乱している。ただ前回よりはお菓子の数は少ない。

「ダ・ヴィンチちゃんから暗証番号を貰いました。それを使って入って来たのですが――」

一気に彼の下へ近づくと、その顔色は相変わらず悪い。まるで幽鬼が彷徨い出て来たかのような。それとも死人が生者の振りをしているとでも表現すべきか。ともかくその眼の下の隈も含めて酷いことになっているのがよく分かる。

これまでは彼の決断を尊重したいと思って見て見ぬふりをしていたが、さすがにこれは酷すぎる。いや、もしやダ・ヴィンチちゃんの言っていた“見て見ぬふりをしていること”とはこのことか。なるほど、確かにその慧眼には恐れ入る。

「随分と無理をしているようじゃないですか。少しは休息を取ってもらわないと困ります。もともと私が此処に来たのだから、ダ・ヴィンチちゃんがそのことを心配していたからなんですからね？」

「氣遣いはありがたいけど、ボクは大丈夫さ。この程度の事で潰れてたらカルデア所長代理なんてとてもやる資格は無いわけだし、分かったら君も帰ってもらって平気だよ。そこまでしてもらおう必要もないからね」

そういつて笑うドクターだが、やはりその笑みもどこか不格好だ。それに何より、普段の彼からは感じられない違う雰囲気漏れ出ている。

「私が、信用できませんか？」

「……え？ そんなまさか。ボクは君たちの事を深く信頼しているさ」

「嘘ばかり。今の貴方の言葉からは、普段の誠実さを感じられませんが。むしろ自分の工房に入ってこられた魔術師の様な印象を感じます」

どこことなくよそよそしい空気を纏っている原因は、きっとただの疲労だけではないのだろう。唯一安心できる領域に無断で入られたからこそ、彼の意識など関係なしに警戒心がうっすら出ている。無意識に出ているものだろうから殆ど分からないが、それでもなんとなく疎外感を感じてしまう。

そしてそのことが、どうにも寂しい。

「大丈夫ですよ、私は何があるかと貴方の味方です。もちろんカルデアの皆さんだってそうでしょう？ 分かったらあまり意地は張らないで、休める時は休んでしましましょう」

「そうは言ってもやることは山積みだから、もう少し待って欲しいのだけ——」

「いいえ、待ちません。今日はもう寝てしましましょう、遅れは後から
幾らでも取り戻せますが、貴方を仮に失えば取り返しがつきません。
だから、いったん休んでくださいな」

「あつ、ちよつと……待つ……て……」

真正面から彼の瞳を覗き込み、簡単な暗示をかけてしまう。魔術に
ついての深い見識があつても魔術師ではない彼は抵抗もままならず、
呆気なく眠り込んでしまった。これまでのドクターの意地は何だっ
たんだとばかりの即落ちぶりだが、これも彼の為を思えば仕方ない。

椅子の上で寝てしまった彼の身体を抱え上げ、ベッドの上に横たえ
る。穏やかな寝顔は普段の緩いふわつとした雰囲気を彷彿とさせる。
そう言えば、確かにそのあたりはドクターとソロモン王は似ているか
もしれない。まさか気になつている理由はそこにもあるのだろうか
？

「ま、いくら考えても答えなんて出ませんね」

苦笑して、彼の頭の方に腰掛ける。せつかくだからダ・ヴィンチ
ちゃんも言っていた膝枕でもしてみよう。他者にしたことは無いか
ら、これも一つの経験と思えば悪くない。そのままだと普段着ている
ドレスが嵩張りすぎて邪魔なので、裾をたくし上げてむき出しにした
太ももに頭を乗つける。中々恥ずかしいが、まあ他に誰もいないので
よしとしよう。

それにしても、穏やかな夜である。

第二十二話 ハロウイン II

ドクターを膝枕で寝かしつけてから、特にすることもなくジツとしていた。散らかった部屋を眺めて、たまにドクターの頭をなんとなくに撫でて暇を潰す。こうしているとまるで大きな子供でも出来たかのように、今更そんな感情を抱く自分に呆れてしまう。そんな事をしながらいくらか時間が経った頃、時計を見ればいつの間にか朝が来ていた。

つまり、数時間以上ずっとこの体勢だったわけか。我ながらよくもまあこれだけ長時間座ったままだと感心してしまう。よくよく考えれば太ももが痺れている。膝枕の代償はそれなりに大きいらしい。

だけど、悪い気はしなかった。むしろ穏やかな気持ちでいられたし、ある意味楽しかったとも言えるだろう。これなら、ドクターにまた膝枕をしてあげてもいいかもしれない。今度はちゃんと同意を取ってからやろう。

「んっ……」

「おやっ？」

膝の上のドクターが微かに声を漏らし身じろぎした。今はちやうど顔がこちら側にあるため、その寝顔がよく見える。すでにその顔色は昨夜に比べてもだいぶ良好になっていた。ひとまずまとまった睡眠時間をとれたことで体調が回復しているようだ。やはり相当無理が崇っていたらしい。

そのままドクターはしばらくうつらうつらしてから、不意に目を開いた。寝ぼけ眼が何処となく面白くて、つい何も声を掛けずその様子を見守ってしまう。頬をつんつんしてみると男の割に柔らかくて気持ちがいい。

「……なんだろう、この柔らかい感触は……？ それにこれは……ピン——つてうわあ！ いつの間に寝てたんだボク！」

「ちよ、ちよつとドクター!？」

まるでばね仕掛けのように勢いよく跳ね起きたドクターの頭を間一髪で躲して、それから急いでちよつとだけ乱れている服装を整え

る。どうやらドクターは完全に目が覚めたらしく、すさまじく気まずい表情で顔を逸らしている。こっちもきつと顔が赤いだろうから、どうしても直視できない。

「……見ましたね？」

「な、なんのことか分からないな……？　ボクは何も見えないとも、うん。けっして何もだからマカロン一個で許してください」

「……それで手を打ちましょう、こちらにも落ち度はありますからね。それで、よく眠れましたか？」

話題を切り替えて彼の顔色を窺う。やはり昨夜に比べれば格段に生気に満ちている。なのだが、表情は微妙に不満そうだ。これはやはり、暗示で強引に眠らせたのを怒っているのだろうか。手段はそれしか無かったとはいえ、いざそのことを詰られる立場になると身がすくんでしまう。

「その、強引に眠らせたことは謝りましょう。すみませんでした」

「そうだね、そのせいで予定がすっかり狂ったよ。だけど……悪気はないんだろう？　自惚れじゃなければ、純粹にボクの事を心配してくれたというのも分かってる。だからボクからはむしろ、ありがとうと言わせてもらうよ」

その言葉は皮肉でもなんでもない、純粹で混じり気の無い感謝だった。どうしてもその言葉が眩しくて、つい顔を俯かせてしまう。なんだろうか、この気持ちは。とても嬉しい。

「優しいですね、貴方は。良かった、もっと怒られるかと思いましたよ」

「そんなことはしないよ。だけどそうだね、謝るならばこれからは昨日みたいなことはしないでくれ。ボクはほら、眠らなくてもどうにかなるからさ」

「いや、そこは譲れませんよ。貴方はもつと自分の体調を鑑みて整えるべきです」

本当に、この人は責任感がありすぎるのだ。自分で何もかもを背負って、それでどうにかなると思っっている。心配される価値など無いと信じているのだ。たかだか所長代理という椅子を手に入れた程度

の事で。

「だけど実際は職員の人だつてドクターの事を心配しているし、ダ・ヴィンチちゃんだつてそうだ。もちろん、私だつて。だからこそ、こんなところで倒れて欲しくない。この人が倒れてしまえばそれだけでカルデアは崩れるだろうし、何より私が嫌なのだ。」

「しかしそれでもドクターに納得した様子はない。普段の優柔不断だったりチキンだったり言われる態度はどこに行ったのかと聞きたくなるような態度である。こうなれば、少しばかり強引な手段を取るのも吝かではない。」

「人間ならば誰しも適切な睡眠や休息はとって然るべし、基本ですよ？」

「ボクだつて医者の方だからね、それくらいは分かっているよ。でもほら、仮にもカルデアを率いるような男が何もせずにいるなんて駄目だろう？」

「いいえ、それでは必ず後になって揺り返しが来ます。それとももう来ているかもしれません。率いる者だという自覚があるなら、むしろもっと身体を大切にすべきなのです」

「そうは言っても——」

「ダビデ王なら出来ましたよ？」

「うぐつ！」

「遮るように断言すると、予想通りドクターが苦し気に呻いた。やはり層の代名詞と比べられたら辛いのか、その顔が嫌そうに歪んだ。実際のところは知らないが、ダビデ王はあれで優秀な王様だ。きつと無理をするしないの線引きはキツチリしていたことだろう。正論に混じる適度な嘘は時に最大の武器となるのだ。」

「ただいまこの程度では足りないのも分かっている。このままではなあなあで終わってしまうのは目に見えているから。」

「故に、さらにもう一押しだ。」

「ダビデ王なら出来ましたよ？」

「そ、そう言われてもボクにはやる事がたくさん——」

「ダビデ王なら出来ましたよ？」

間髪入れずもう一度。より強く、はつきりと。

「分かった、分かったから！ これからはもう少しちゃんと睡眠を摂るから、そんな心にグサリとくる発言ばかりゴリ押さないで欲しいなあ！」

「よろしい。ああ、素晴らしいきかな健康管理、すべては睡眠一つです！」

自分でもどうかと思うような言い包めの末、ようやくドクターも睡眠、というよりも休息の重要性を理解してくれたようだ。ここまではないと折れてくれないあたり、彼も何だかんだ筋金入りの頑固者である。普段いかに自身の心労を押し殺しながら立っているのか、手に取るように分かるというものだ。

「これからは暇があれば貴方の所に来ましようかね。貴方さえ良ければ、また膝を貸してあげますよ？」

「ぐっ、美女の膝枕だと……！ 君はボクを墮落させるつもりかい！」
「ある意味そのような物ですが。むしろ貴方はもう少し墮落してもバチは当たりにませんよきつと」

努力すればするだけ報いられるというのはあまりない。ひたすら真正面だけ見据えて走り続けるよりかは、多少力を抜いて過ごす方が遥かに心体にプラスである。むしろドクターはこの辺りのさじ加減はかなり上手いだろうに、どうして仕事方面では気張ってしまうのか。

「さてと、それじゃあ朝ご飯を食べに行きましょう。まさか保存食料のような味気ないもので済ます気はありませんよね？」

「……そのつもりだったけど、君の目を見る限り駄目そうだね。分かったよ、朝食に付き合おう」

「ドクターは何が食べたいですか？ まだ朝早いので、希望があれば作りますけど」

「任せるよ。だけどそうだね、たまには日本食とかどうかな？ 確かにレシピ本もあったはずだし」

「ならそれでいきましよう。日本食、味噌汁や卵焼きは美味しいですよ。納豆はちよつと苦手ですが」

和気藹々とした空気のまま、ドクターの手を引いて立ち上がる。今日もまだ始まったばかりだ。だけど今はとても楽しい気分が始まったのだから、きつと今日がいいことがあるだろう。そう思うと、少しだけ足取りも軽くなるのだった。

◇

同日の夕方ごろ。カルデアの中央管制室にマスターとそのサーヴァント達が一堂に会していた。空気はいやに深刻で、それだけ先ほど告げられた言葉の重さを物語っている。

「で、ドクター？ もう一度この内容を言ってもらえますかね？ オレの耳がおかしくなったのかもしれないし」

「よし、もう一度はつきり言おう立香君——エリザベート・バートリーから招待状が来た。これによれば場所は特異点のチエイテ城、原因は不明だがそこに召喚されたらしい彼女がハロウィンパーティーの準備を施して君を待っているらしい」

「な、なんて恐ろしいことに！ まさかとは思いますが、行けとは言いませんよねドクター!？」

「……非常に残念だ。人類最後のマスターよ、君の無事をボクらはただ祈るとしよう」

ちよつと芝居掛かった、けども残酷なドクターの言葉に立香君が崩れ落ちた。その姿を駆けよったマッシュさんが支えて、必死に慰めの言葉をかけている。けどどうやら立香君はかなりのショックを受けたらしく、心ここに在らずといった有様だ。端的に言っただけで済む。

しかもより酷いのはここに集ったサーヴァントのほとんどが似たり寄ったりの反応を起こしているという事だ。オルタさんは無言で頭を抱えているし、アンデルセンは卒倒しそうな状態だし、マルタさんは思わず杖を地面に叩きつけそうになっていた。こつちも大概ひどすぎる。

「私はどこまででも先輩にお供します！ それと、その、ハロウィンパーティーというのも非常に興味がありますので……」

「うん、さすが自慢の後輩だよ。ただただ感謝を……!」

「そ、そんなに畏まらなくてもいいですから！」

茶化してはいるが、彼は非常に嬉しそうである。やはりこう、マシユさんとの行動は単純に楽しいのだろう。単刀直入に言えばきつと惚れてる。間違いない。恋愛脳マスターとしての勘がそう告げている。

私個人は特に思うところがない。というよりは直接的な接点がなく、ほんの少し通信越しに二言三言交わした程度なので、愉快的な反応をしてしまうほど彼女のことを知らないのだ。

「マーキダ、そのエリザベート・バートリーって子はどういう人なんだい?。」

そんな中で唯一彼女を全く知らないために平静を保っているダビデ王の言葉に、簡単にエリザベート・バートリーという人物について説明しておく。いわば属性過多アイドル、しかも超音痴。竜の角が生えている竜の娘。これくらい言えばダビデ王には十分だろう。あまり説明しすぎて妙なスイッチを入れさせても困るから。

傍らでは、マスターが今だ未練がましく足掻いていた。

「オルタは付いて来てくれますよね……? いつもオレにスパルタやっていたわけだし今回も——」

「マスター、先にこれだけははつきり言っておこう。三つの特異点と死線を潜り抜け、貴方は確かに成長した。まだ発展途上だが、ひとまずは及第点と言えるだろう。故に私が必要以上に手を貸す理由もまた薄れた。今の貴方ならば自身の身一つで苦境を越えることも十分に可能だ」

「なんでだろう、このタイミングで認めてもらっても全然嬉しくない……! それってつまり見捨てる事と同意じゃないのかなって?」

ほら、目を逸らしてるし——」

「さて、何のことだか……? 私はただ貴様に事実を述べただけだ。それ以上の意味はないぞ」

もはやどうしようもないらしい。既にマルタさんも微妙そうな顔つきをしているし、アンデルセンは死んでも御免だという雰囲気醸し出している。このままだと立香君とマシユさんの二人旅か——い

や、案外それも悪くないような気はするが。他人の恋路を見守るのも
イイかもしれない。きつとまだ立香君の片思いなのだろうけど。

「よし、それじゃあこうしよう!」

しんと静まりかえってしまった場に、ダビデ王の明るい声が響く。

「僕とマーキダがマスター達について行こう。今回は聞く限り君たちが
乗り越えて来たほどの危険は無さげだし、それならいつそ楽しんで
みるのもいいんじゃないかな? ちょうど君たち二人もいい雰囲気
だし、邪魔はしないよ」

「んなつ!」

「ダビデ王!? わ、私と先輩はそういう関係じゃ——」

「おいおい、年若い少年少女にそうも直球を投げるなよ王様。もつと
こういうのはあれだ、静かにゆっくり進むのを陰でにやにやするのが
面白いんじゃないか」

「そういうアンタも大概直球で趣味が悪いわね……」

「だけど理には適ってるね。二人なら間違いなくおおよその事態には
対応できるだろうし、悪くない。というかもうこれで決定だ! これ
以上グダグダやっても逃げ腰になるだけだからね!」

「うわっ、一番ドクターらしくない言葉ですね!」

「そう言うのやめようよ立香君!」

ドクターの悲鳴が木霊した。割と悲し気で、どことなく同情してし
まう。

だけでもさらに追い打ちが、周囲でくすくすと笑っていた職員の人
たちからも入っていく。

「いや、よく言ったぞ藤丸立香! もつとはつきり言ってやれ!」

「そうだそうだ、頑張りすぎないこの心の心を折って寝込ませてやれ!」

「とんでもないね君たちも! ほらほら、レイシフトの準備に取り掛
かろう!」

気を取り直したドクターの言葉で慌ただしくレイシフトの準備が
始められていく。こういう時にしっかり立ち直るのはまあ、彼の持ち
味なのだろう。

ひとまずレイシフトを行うべく、コフィンのある部屋へと立香君た

ちが向かって行く。何やら彼とマシユさんは気恥ずかしそうで、なんだか見ているこつちがこう、焦れてくるようだ。あれで本当に彼女の方は恋心が無いというのだから恐ろしい。

「あ、マーキダ。ちよつといいかな?」

「? どうしましたドクター?」

レイシフトルームに向かう私を軽く手招きして呼び止めてきた彼は、何やら小さな袋を手渡してきた。見てみれば、それはお菓子の一種、確かマカロンと呼ばれるものだったはずだ。

「二応、トリックオアトリートだ。それとこつち、ダ・ヴィンチちゃんから預かってきたんだ。せつかくのハロウィンパーティーのお誘いなんだから着てくといいい。こつちはマシユにあげてくれ、きつと喜ぶだろうから」

「あはは、ありがとうございます。なるほど、狼の耳のカチューシャですか」

「ホントは服もあげたかったらしいんだけど、そつちはまだできてないらしい。今は工房で何か作っているようだけど、カレも無念そうにしてたよ」

「……まあ、どうせあの人の事ですから、目も当てられないような姿になるんでしょうけどね」

「同感だ」

しみじみと頷きあつて、ふと手に持った三角帽子とローブを意識する。せつかくだから今のうちに着てしまおうか。これくらいならばすぐに着ることも出来るのだし。

そうと決まれば着てしまおう。黒のドレスの上から青のローブを羽織つて、茶髪を抑えるように三角帽子を被ってしまう。ただこのままだとよく分からないので、さつそく感想を求めよう。

「どうですかね? 似合ってますか?」

「あー……ボクに意見を聞くのかい?」

「目の前にいるのですから当然じゃないですか」

至極当たり前の結論である。むしろここで意見を求めないほうがどうかと思うのだが。

すると彼は何やら顔を逸らしてから、今度はまじまじと見つめて来る。けれど中々その先が来ない。早くいかないとおいて行かれると思いなながらも待っている、ようやく閉ざされていた口が開いた。「そうだね、帽子が少しずれているから直そう。それ以外は大丈夫だ、よく似合ってるよ」

こちらの頭に手を伸ばして、帽子を直してくれる。彼との距離が非常に近い。吐息が微かに聞こえてくる。しかもやけに自身の鼓動が早いような、そんな気すらしてくる。

「よし、これで君も立派な魔女だ。初めてのハロウィン、存分に楽しんでくるといい」

「ええ、もちろん出来るだけ楽しんできますとも。……まあ、ちよつとばかり不安要素はありますが」

「そこはもう、うん、割り切るしかないだろうね……」

困ったように相好を崩したドクターにひとまずの別れを告げて、管制室を後にする。そうだ、ドクターのいう通り私にとっては初めてのハロウィンなのだから、楽しむのが筋だろう。

「だけど、今もつとも胸を占めているのはハロウィンの事では無かった。」

「なんでよりもよってピンク色のマカロンなのですかね……」

今朝の出来事を想い出して笑ってから、袋を開けて一口で食べてしまおう。その甘い味は安物のはずなのにとても美味しいと感じてしまおう。

きつとそれは、今晚の中で一番不可思議な思イタズラい出をくれたのだ。

第二十三話 ハロウイン III

「先輩！ あんな所にもジャック・オ・ランタンがあります！ あっちには蝙蝠の飾りに十字架まで！ ここにはどれだけのカボチャが使われたのでしょうか!? 一つ、二つ、三つ……」

「ほら落ち着いてマシユ、きつと膨大な数があるだろうから数えきれないって。でもすごいなあ、こんなに凝った飾りをしてるなんて」

「随分と張り切ったようですね。ですが可愛らしくて私も好きですよ」

「いいじゃないか、祭典を楽しむのは領主として悪くない心がけだと僕は思うよ」

各自素直な感想を漏らしつつ、チエイテ城へと続く道を歩いて行く。周囲にはこれでもかとはかりにカボチャのランタンや蝙蝠の飾り付け、それにおどろおどろしい装飾が施されていて、非常に恐怖感と愛らしさを煽る仕様となっている。これを全部仕上げたというなら大したものだ。ここまで雰囲気を出されると私もかなり興奮して来てしまう。

ちなみに、はしやいでいるマシユさんの頭には例の狼耳のカチューシャが乗っかっていたりする。最初は恥ずかしいと言って断っていたのだが、立香君が頼み込んで恥じらいながらつけたのだ。見ていてすぐくやきもきする初々しい二人である。

そういう訳でコスプレした彼女を見ながら一人ほっこりしてたら、早速ドクターから連絡が入った。彼も立香君達を見て和んでいるのか笑顔を浮かべている。

『思ったよりも楽しんだるところ悪いけど、残念なお知らせだ。付近にエネミーがいる。それもゴースト系とスケルトン系のだ』
「えー……なんでまたこんなところか?」

『ハロウインはそもそも悪霊を追い出す儀式なわけだから、行き場を失った悪霊が彷徨い出てるんじゃないかな? どちらにせよ大した脅威じゃない、気楽に挑むといい』

その言葉が消えるか否かといったところで、周囲の木々からカボ

チャを被ったゴーストとスケルトンが飛び出して来た。やけに可愛らしい見た目だが、その敵意は本物だ。ちゃんと相手をしないと危険だろう。

「さてと、対悪霊なら僕の出番だ。マスターとマシユ君はのんびり觀光しつつ僕の実力を見極めてくれ、マーキダはスケルトンの方を頼むよ」

「貴方に指示を出されるのは……まあ間違いはないと思うのでいいでしょう」

「あ、私も一緒に——」

「大丈夫大丈夫、僕らに任せてくれ。せっかく楽しんでる女性に無粋な真似はさせたくないからね」

「私は女性じゃない判定ですか」

「おや、それなら今から僕と逢引きでもするかい？ もちろん大歓迎だけど」

「冗談を」

相変わらず呼吸をするように女性を口説いてくる人だ。応える代わりに剣を構えて、自分でもそれと分かるほどに獰猛に笑った。狙いは正面、倒すは骸骨。八つ当たり気味になるだろうが構いはしない。久しぶりに剣を振るう感覚を思い出し、精神が切り替わっていく。

「今の私は魔女ですけど、たまには剣技もお見せしましょう。ヘラクレス相手だと紙屑同然でしたが、それでもシバ王国では二番ほどの使い手でしたので」

戦うのは好きではない。だけど剣を握り振るうのは好きだ。その矛盾した感覚はしかし、結局戦いこそがすべてな現状においては最も役に立つ事となる。

破魔の豎琴を抱えたダビデ王が弦を弾き始める。柔らかく響くその音色を合図にして、『魔力放出』でブーストした速力と共に一気呵成に敵陣へと突っ込んだ。

◇

敵を蹴散らしながらのんびり進み、村を越えて城門を越えてさらには廊下も抜けた現在。

最初は四人だったはずの同行者は、いつの間にか三人も増えていた。

「ねえ、あれってほっといいのかしら？ 明らかにあの少年と狼耳の少女に蛇女が横恋慕しちゃってる修羅場よね？」

「あー、アレはもうどうしようも無いですね。私も口惜しいですけど、なるように任せましょう。下手に突いて大火傷なんてしたくないですし」

隣を共に歩くメイド姿の夫人、カーミラの言葉に溜息をつきながら返した。伝承の割に意外と気の利く彼女は後方で起こっている修羅場が気になるようだが、あの清姫という子は見た感じ止まりそうになりタイプだ。可愛いけれど一途で重くて嘘嫌い、むしろどうやって止めればいいのかだろうか。

今も見ていて頭の痛くなるようなやり取りが続いているのに。

「まあまあ、狼耳とはまた愛らしい手に出ましたねマシユさん。そうとなれば私も、旦那様ますたあの為なら耳の一つや二つ新たに生やしてみせましょう」

「えっと、その、これは結構恥ずかしくて……え、可愛いですか？ そう直球に言われるのも恥ずかしいですよ先輩……」

「そもそも蛇には耳が無いから、まずはそこからだって。だからほら、清姫はそのままの君でいよう、ね？」

「それはつまりこのまま清い関係が続けて結婚しようという事ですね！? それはなんとも素敵です！」

「落ち着こう！ まずは話し合いだから、ステイ清姫！」

一応は立香君が機転を利かせてマシユさんと清姫の間を取り持っているおかげで、和気藹々としているからどうにかなるだろう。それにしてもあの清姫という娘の暴走ぶりはひどいが。

ただそれよりもむしろ、もう二人の方が個人的には遥かに厄介かつ面倒だった。

「へー、そのようなことがあったのね。すごいじゃない、流石は古代の王様ね。もつと貴方の武勇伝が聞きたいわ！」

「よしっ、それなら次はサウル王との話をしようじゃないか！ 彼は

立派な人だったのだけど、最後には神の恩寵を失ってね。だけど僕は彼に対して色々と便宜を——」

ダビデ王は何が起きてもぶれない。というよりも途中で踊り子兼スパイという経歴を持つらしいマタ・ハリという美女と出会ってから、終始あの調子である。どうやら彼女の方も人を立てて煽って話を聞くのが上手いらしく、ダビデ王はもう鼻の下を伸ばしきってしまった。今回は悪意は一切無いので大事はないが、もし敵対者だったらと思うとゾツとする話だ。きつとあらゆる内容が赤裸々にされていることだろう。

『頑張ってくれ、マーキダにカーミラ夫人。立香君があのだ二人に気を取られている以上、君たちが最後の良心だ』

「私の事をそんな風に評価する人間なんて初めてね……随分と面白い人じゃない、ちよつとだけ興味が湧くわ」

「駄目ですよ、彼は貴方の好む人じゃないので。もし手を出すならばここでその首を刎ねますが?」

「冗談よ、そう怒らないでちょうだいな。まったく、誰も彼も色恋に狂ってばかりじゃない……」

「? 何か言いましたか?」

「いいえ、なんでも?」

つつけんどんに返されて、ひとまずそれ以上の追及は控えた。内容はまあ、たぶん私には関係の無い事だろう。

そうしてしばらく城内を進んで行き、マスターの胃がいよいよ死にそうな頃になってようやく次の部屋に到達した。

扉を開けた先は広いが、反してあまり家具は無い部屋であった。在るのは小さめの椅子とテーブルが一つと、腰掛けて裁縫を行っている紳士然とした男性が一人。見たところ刺繍だろうか、かなりの腕前だ。

その紳士然とした男性——かつて見たカルデアの記録によれば吸血鬼と化したヴラド三世か——はこちらに気づいて刺繍を行う手を止めた。そして傍らに立てかけてあった杭にも似た槍を握り、戦意を漲らせて立ち上がる。

「ほう、もうここまで来たのか。よかろう、この城の番人として、そして祭りを盛り上げる道化として全力でお相手しようではないか」

「ですってよマスター、どうします?」

「ダビデ! 出番だ! ノーアビシヤグ!」

「えっ、僕かい? やだなあ、今は育児でどれくらい苦労したか語るところだから後にしてくれ。ほら、彼も殺す気まではないみたいだし?」

「何言ってるんですかぶっ飛ばしますよダビデ王」

「……かのダビデ王とは中々愉快な人物だったようだな。うむ、そのことはひとまず置いておこう。そこな黒の少女よ、名は何と言う?」

ヴラド三世が指名して来たのはどうやら私のようなのだ。問われたので、ひとまず名乗り返す。

「シバの女王、マーキダと申します。お初にお目にかかりますね、ヴラド公」

「ほう、そなたがかのシバの女王か。なるほど、また古い女王が出て来たものだ。……そうだな、たまには武人らしく戦うのも一興か」

「というと?」

「なに、普段は吸血鬼という汚名に甘んじているが、道化としては武人らしく振舞う方が面白があるう。かつて竜を討つたとされるそなたの剣と、ドラクルと呼ばれた余の杭。どちらが優れているか——尋常に勝負といこうではないかッ!!」

「な——ッ!」

荒げた語尾と共に恐ろしい速度でこちらへ迫って来るヴラド三世。突き出された槍の穂先に剣先を絡めることではいなし、横を紙一重ですり抜けるように動いた。即座に背後を向けば、五歩先にこちらへと油断なく槍を構えたヴラドがいる。マスターたちの方には目もくれな

いあたり、どうやら一対一の戦いが望みらしい。

「まさかこんな展開になるとは……仕方ないのでマスターは先に進んでください。私は後から合流しましょう」

「えーと、じゃあそれでいいのかな? ごめん、ここは任せるよ。代わりにダビデはこっちでどうにかしとくから」

『はあ、とんだ災難だけど頑張ってくれマーキダ。帰ってきたらもう少しボクのお菓子を分けてあげるからさ』

ヴラド三世の後ろを走って駆けていく彼らを見送り、目の前の英霊へと剣を向ける。妙な流れになってしまったが、相手がやる気ならば是非もない。最悪死んでもカルデア送りなので、ひとまず気楽に臨むとしよう。

ジリジリと睨み合いながら互いの挙動を一分も見逃さずに呼吸する。息苦しくなるこの雰囲気は懐かしくて心地よい。久しく感じなかった強敵に剣を向ける感覚は、どうやら体の方に染みついてしまっていたらしい。

僅かにこちらの剣先を下げる。場を動かすためのフェイント。自分でも分かりやすいとは思っているから、乗るか反るかは相手次第。

果たして、ヴラド公は躊躇なく乗って来た。

「ふっ——！」

先と同じように真正面から突っ込んでくる。単調だが、槍のリーチの長さを活かすならば間違っていない。自身の中の数少ない対人戦闘を思い出しながら、剣に明確な意思を乗せて閃かせた。

まず一合。迫り来る槍を弾いた。武器同士が高い音を奏でる。

二合。生じた隙に懐へ潜り込むが、槍の胴で払われる。一步下がりのローブをはためかせながら体勢を整える。

三合。空を囓むように突かれた槍を半歩ズレて避けた。返しの剣は受け止められ、弾かれた力を利用して間合いを取る。互いの力量が見え始め、不敵に笑った。

「中々やるな」

「そちらこそ」

四合、五合。一気に踏み込んで剣先を喉元に突きつける。だがそれを寸前で躲され、逆に槍が横薙ぎに襲って来た。宙で横に回るように回転してやり過ごす。

六合、七合。帽子が地に落ちるよりも前に、着地した隙を見据えた穂先が顔に向かってくる。剣で逸らし、頬に切り傷が出来た。その負傷を一切気にせずに槍を掴み、前へと突き進む。ヴラド公は逃げられ

ない。槍を持つ手を振り払われるも、剣の間合いに持ち込んだ。相手の攻撃はおおよそ見えた。故にここからが本番だ。

「ぬうつ……い！」

「まだまだー！」

八合、九合、十合、十一合、十二合、十三合。槍にとって不利な間合いに入られたヴラド公が一気に窮地に追いやられる。正面から勢いよく結ばれる剣閃を槍の腹でかろうじて受け止めるも、反撃の機会が出来ない。それはそうだ。こちらは嵌め殺す気でやっている。徹底して槍の利点を潰して短所をあぶり出す。故に相手の技の出だしを潰すことに成功し、一切の攻撃に移させない。

確かに私の対人戦経験は多くない。だがこれでも圧倒的な怪物と戦う時に必要な手段は弁えているのだ。今回はそれが上手く対人戦においても有効打を示してくれた。この戦法の確立を頭の片隅で意識しつつ、ここぞとばかりに攻め込んだ。

十四合、十五合、十六合、十七合。反撃の隙を与えないだけの勢いで以て剣を打ち付け、間合いを詰める。もはや超近接戦とも形容できるだけの怒濤の攻撃を続け、ついにその槍を弾いた。甲高い音と共に宙を舞う槍には一切目をやらない。よそ見はしない、するだけの余裕もない。最後の瞬間まで油断はしない。

得物を失い追いつめられたヴラド公の胸元に、ピタリと呪魔の剣の切っ先を突きつけた。

「ほう、余に止めは刺さぬのか？」

「祭りで人死になんて洒落になりませんよ。貴方だって明らかに本気では無かったですからお相手です」

ヴラド公の今の在り様はどう見ても吸血鬼だ。なのにその力を全く使わずただの槍術だけで戦ってきたのだから、刃落ちもいとこだろう。この勝利もはつきり言つて当てにならない。

だが吸血鬼は、私のその言葉を否定した。

「本気だったとも、少なくとも殺す気で杭は振るった。……だがそうだな、忌まわしき吸血鬼としての力を用いるのは躊躇った。このような時くらい、悪鬼が武人らしく戦うのも良しと断じたのは確かだから

な」

「いいんじゃないですか？ どうあれ心が人間ならばそれが真実ですよ。私も昔そういう人に惚れましたからね」

「ならば善いのだがな。しかし口惜しい、魔術も用いぬ小娘に近接戦で負けるとは。これは余も改めて研鑽に励まねばなるまいて」

「いやまあ、これでも私紀元前の戦闘系女王ですので。剣において目立った強さは無いですけど、それでも平均以上はありますからね？」

「やっぱりこう、見た目の所為で侮られやすいのか。ここしばらくはほぼ魔術と呪術が本体といった有様だったが、一応最初に竜退治を行った時は剣の方がメインだったのに。」

ともかく剣を収め、武装解除しつつ先ほど落ちてしまった三角帽子を被りなおす。ヴラド公も槍をしまい先ほどまで座っていた椅子に掛けなおした。どうやら先ほどの刺繍を続けるらしい。ちよつと近づいて見てみれば、かなりの完成度である。見た目と苛烈さの割に良い趣味をお持ちのようだ。

せつかくだからここで少し教えてもらおうか。そんな欲望が鎌首をもたげたところでドクターの方から通信が入った。

『マーキダ、どうやら立香君たちが特異点の原因を回収できたようだ。刺繍に見とれるのもいいけど、レイシフトの時間だよ』

その言葉と共に、身体を金の粒子が覆い始めた。どうやら本当にカルデアへ帰還するらしい。もう少しこの不思議なハロウインを楽しんでも良かったのだが、仕方あるまい。

「それではまた、ヴラド公。先の一戦は楽しかったですよ」

最後に残した言葉に、彼はふつと笑うような仕草を見せた。そのことを見届けるやいなや、宙を引っ張られるようにしてカルデアへと戻って行くのだった。

◇

「そういう訳で、ちよつと楽しみ損ねましたが十分楽しい特異点でしたよ。ドクターも来ればきつと良かったでしょうに」

「それは良かった。立香君たちも何だかんだ楽しんだみたいだし、結果的にはいいハロウインとなったみたいだね。……その傷を除いて

は」

話しながらドクターが救急箱を取り出し、こちらへとよつて来る。取り出されたガーゼと消毒液を見ながら、今回の顛末を想い出した。

結局、特異点の元凶であったエリザベート・バートリーが拾ったという聖杯の欠片は回収され、彼女の方は座に帰って行つた。欠片の方は聖杯ほどの力は無いにしても強大な魔力を貯蔵しているのは変わりないらしく、こちらは封印せずに立香用の切り札として用いるらしい。

そういつた予定を戻ってきた後に聞いた後は、問答無用でドクターに医療室に連れてこられたのだ。曰く、頬の傷はちゃんと治療した方がよいという理由である。確かにヴラド公との戦闘でそこそこ大きな傷はついたが、サーヴァントの肉体ゆえ数日もあれば治るだろう。なので気にしなくとも良いと言つたし、今も言っているのだが。

「女性の傷、それも顔に付いたのなんて大事じゃないか！ 医者としてのボクはそういうの見逃す気は無いからね！」

「ですがこんな傷程度にそこまで真面目にやらなくとも……」

「いやいや、それは君が自分の事に頓着しなさすぎるだけだからね。普通気にするし、どうにかしようとすると思うよ……さて、ひとまずこんなものかな」

手際よく傷が消毒され、ひりひりする感覚の上からガーゼで覆われる。応急処置だが、それでもやらないよりはマシだとドクターはいう。実際の効果は知らないが、そう言うのならばしばらくこうした方が良いのだろうか。

「ちよつと腑に落ちませんが、それでも感謝しますドクター」

「それこそ別に構わないさ。カルデアの皆の健康管理はボクの仕事の一環、というか本来の仕事だからね」

そう言うとおわあと大欠伸をしようドクター。時間を確認すれば、もう既に0時を回っている。通常の間人ならばもう寝る時間だろう。

腰掛けている医務室の椅子からベッドに座りなおして、ポンポンと膝を叩いた。それを見てドクターが非常にげんなりした顔をする。

「もしかして、またかい？」

「だって普通にしても寝ないじゃないですか貴方。かくなるうえはずっと私が見張るべきだと思いますよ」

「君も変なところでアグレッシブだね……ちなみに、ここで断つて出て行った場合は？」

「仕事をしている貴方の後ろでずっと無言の重圧を掛けますがよろしいですか？」

「……はあ」

深いため息を吐いて、観念したようにこちらへとよつて来る。ベッドの上に横たわり、こちらの膝に頭を預けてくれる。こちらの顔を見上げながら複雑そうな顔をしているドクターの頭を撫でて、耳元で囁くように呟いた。

「おやすみなさい、善き夢を。そして願わくば貴方の明日に幸せがありますように」

「まったく、君も……たいがい……母性がある……じゃない……か」

それだけ蕩けたような声で言ってから、電池の切れたかのように呆気なく彼は寝てしまうのだった。

第二十四話 霧のロンデイニウム

「やあロマニ、そつちの進捗はどうだい？」

「悪くないさ。これを片付ければひとまず安心かな。そうは言っても課題は山積みだけどね」

椅子を後ろに引いて、身体を伸ばした。強張ったロマンの身体が心地よい音を立てながら伸び、どれだけの長時間机に向かっていたかを雄弁に物語る。

時刻は夕方、明日には第四の特異点であるロンドンに向かおうという頃。相も変わらずカルデアの所長代理であるDr. ロマニは、強引に作りだした時間で人の数倍は働いていた。

だが、そんな彼はこれまでとは少しばかり様子が違う。それはロマンとも付き合いが長く、このグラントオーダーが始まってから常に彼の事を気にかけていたダ・ヴィンチだからこそ即座に理解できた。

「随分と顔色が良いじゃないか。よい兆候だ、少しは生活習慣を改める気になったのかな？」

「おや、分かるかい？ ここしばらくは強制的に0時には眠らされてね。そのせい、いやおかげかな？ ともかくすっかり健康優良児に逆戻りさ」

若干皮肉気な物言いだだが、そこには単純に正の感情しか見られない。

だからだろうか、ダ・ヴィンチの物言いもやはりどこか皮肉気で、楽しそうであった。

「なるほど、元奥さんな女性の膝枕は私の作った高性能低反発枕よりもよほど安眠を提供してくれると見える。うんうん、君も男の子だと分かって安心したよ」

「うげっ、何故それを君が知ってるんだい!？」

「当たり前だろう、マーキダに膝枕を唆したのはこの私だからね」

「そ、そういうことだったのか……これは一本取られたよ」

呆氣にとられたような表情をするロマンに、ダ・ヴィンチはしてやったりという顔をする。

「それでどうだい、やっぱり気持ち良いものなのかい？　そういうの気になるな」

「い、いくら君でもそんなの恥ずかしいから言わないぞ！　天才なんだからそれくらい自分で想像してみたらどうだい!？」

「え、そうは言っても百聞は一見に如かずって言うじやないか。想像よりも実体験を聞いた方が早いと思うんだけどな」

どこまでも自由なカレは唇を尖らせて美しく拗ねて見せるが、ロマンには全く影響がない。それどころかいそいそと机に向き直ろうとしている有様だ。さすがにせつかく遊びに来たのにそんな展開になるのも面白くないダ・ヴィンチは、更に話題を展開する。今度はちよつと真面目な話だ。

「言わなくていいのかい？　君の正体をさ。彼女ならきつと喜んで受け入れてくれると思うけど」

当然の疑問に対して、返って来たのは無言の抗議だった。

気にせず、さらにダ・ヴィンチは続ける。

「こうまで君を気に掛けているのも、きつと無意識に意識しているからだぜ？　そりゃあ世話焼きな面が出ているのもあるだろうけど、それだけで知り合ったばかりの男に自分の太ももを許すもんか。女はそんなに甘くないぞ？」

「……君にそれが分かるのかい？」

「分かるとも。だって今の私は正真正銘の“女”だからね」

堂々と胸を張って宣言したダ・ヴィンチに、今度こそロマンが向き直った。明らかに呆れ顔である。

「そこについての議論はひとまず置いておこうか。それで君の提案だけど、悪いが却下だ」

「何故だい？　せめてそれくらいは教えてくれないと困るな」

「むしろどうして君がここまで出張って来るかが不思議なんだけどな？　そんなにマーキダが気に入ったのかい？」

「そうだね、真つすぐな想いを見ているのは悪くない。それに色々通じるところもあるからね」

その言葉にロマンが納得したような顔をした。きつと彼は黄金律

の事と、いつだったかの食堂でのボディタッチの件を思い出しているのだろう。確かに間違つてはいない。

だがそれだけでもないのだが。ダ・ヴィンチはこのことを言うつもりは無い。きっとこれから先もいう事は無いだろう。

「聞いておいてなんだけど、君が黙っている理由については予想がついてるさ。だから敢えて言おう、いつまでチキンでいるつもりだい？

もう少し甲斐性を出しても良いだろうに」

「そういう問題でもないんだよ。私ソロモンでないボクにとってはね……」

絞り出されるようなその声。ダ・ヴィンチはそれ以上を追及しなかった。あくまでこれは彼の問題なのだから、これ以上のお節介は度が過ぎるといふ者だろう。例え本当は大切に想っているのに、チキンすぎて踏ん切りがつかないとしても。

だいたい、彼はやろうと思えば自分が彼女の想い人であると証明できる手段を二つも持っているのだ。それをういれば一瞬だろうに、それすらしようとししないのだから筋金入りと言えるだろう。

「そうか、ならそういう事にしておこう。じゃあねロマニ、邪魔したよ」

一言断つてダ・ヴィンチは部屋を後にした。廊下に出て、自身の工房へと向かう。

既に先のやり取りはカレの思考から排除されている。故にその足取りは軽かった。

「さて、君はいつまで傍観者でいるつもりなんだい？ 舞台上上がる資格は君だつて等しく持っているだろうに」

「私はカレの共犯者さ。傍観なんて気取った立場じゃないし、研究者として端役に徹するのは当然だろう？」

「どうだか、君こそもつと素直で単純に生きてみるべきじゃないかな。万能の人間というのはどうしてこう、誰も彼も一癖あるんだろうかね？」

だからすれ違いざまに掛けられた問いかけにも、心を動かされることは無かった。

——本当に？

◇

レイシフト準備のために中央管制室へと向かうロマンは、その途中で見慣れた人影を見つけた。廊下の壁に寄りかかって目を瞑っているマーキダは、どうやらロマンがやって来るのを待っていたらしい。彼が近くまで来ると途端に目を開けてロマンの方へと近づいてくる。「やあ、どうしたんだい？」

普段通り、笑みを浮かべながら問いかける。それに対してずいとな近づいたマーキダの表情はいつもよりもやや険しい。なにか彼女の機嫌を損ねる事でもあったのだろうか？ 疑問に感じながらも、マーキダの次の言葉を待つ。

「……よくご存じだとは思いますが、今回からは私も最初から特異点に向かいます。これまでのように貴方の隣で補佐をするという訳にはいきません」

確かに、それは良く分かっている。頷くことで言外にそう告げたロマンに、彼女は更に言葉を続ける。

「なので今日からはもう強制的に眠らせるとか、そう言う事も出来ません。なのでせめて、ちゃんと私のいない所でも最低限の健康管理はして下さいね」

「おや、意外だね。もっと厳しく言ってくるかと思っていたのに」

内容自体は至極真つ当でこれまでも口を酸っぱくして言ってきた言葉であるが、それにしても内容はやや妥協した様子を感じる。彼女のことだから、もっといろいろと付け足してくると考えていたのに。例えばそう、睡眠時間は何時間しつかり摂れだとか、きっちり休みは入れろだとか、食事の栄養バランスにも気を配れとか。

そこまで苦も無く考えてから、ロマンは自身の淀みない思考に苦笑した。

「はは、これは参ったな」

「む、何が面白いんですか？ 私は貴方の事を心配しているのですが」「いやいや、君が面白いんじゃないかと、僕が面白かったのさ」

いつの間にもやら、マーキダが言ってきたきそうなことがあっさり頭に思い浮かぶようになってしまっているのだ。つまりはそれだけ近くに

居た人物という事であり、どれだけ自分が彼女の世話になっていたのかを改めて自覚してしまう。

こんな他人に頼ってばかりの体たらくでこれから先大丈夫なのかと不安になる反面、この状況をそれなりに心地よく感じる自分すらいるのだから笑ってしまうのだ。

ともかく頬を膨らませている彼女に対して、特に悪気はないと言つてしまえばそれで追及は終わった。

「まあ、そういうことにおきましよう。とにかく、貴方に倒れられたら私はもちろん他の人だって多大な迷惑を被るのですから気を付けてくださいね」

「ああ、意識しておこう」

「はあ……確約ではないんですね」

「それは、まあね」

どうせマーキダというストッパーの外れた自分は、必要に駆られればいくらでも無茶をするだろう。例え自覚してしようと止まることはできないのだから、せめて曖昧に言葉を濁すしかない。

けれどそう、ここまで本心から慮ってくれる人物に対して期待を裏切り続けるのも人として酷い話だろう。だから今のロマンには相手への恩と後ろめたさが同居していて、それ故に普段は出せない勇気を少しばかり奮い立たせることが出来た。

「せめて君へのお礼に、僕が知っている魔法の呪文を教えてあげよう。唱えればきつとどこかで君を助けてくれるであろう魔法の言葉さ」

「魔法の呪文？ それはまた随分とこう、ロマンチックなものですね。貴方らしいと言えばそんな気もしますけど」

「ははは、否定できないのが苦しい所だよ」

だけでもし否定できたとしても、きつと否定する気は毛頭なかったことだろう。

『エレタム・サーラム』だ。意味はとある言葉で“呪いの王”^{まじな}を意味する。ちよつとロマンチックというには華が無いけど、きつとこれがピンチの時に助けてくれるはずだよ」

「ホントに、男性が女性に贈る言葉としては最低クラスだとは思いま

すが……ありがとうございます。大事にさせてもらいますね」

微笑して、マーキダは歩き出した。その後を追ってロマンも歩み出す。次の特異点の攻略はもう間近だ。

◇

『レイシフト完了——どうだい、そっちの様子は?』

一八八八年、産業革命の真ただ中のロンドン。霧と工場の都こそ、此度の特異点となっている地であった。

カルデアより降り立ったのは合計で七人の姿である。今回からは最初から全力、一切の油断も刃落ちもなくグランドオーダーを完遂させる構えとなっていた。

そして今回のロンドンは比較的近代である故に神秘は薄く、ロマンが危惧するような事態は特にないと思われていたのだが。

「霧が凄いです……! ドクター、この時代のロンドンはこうも霧が深いものなのでしょうか?」

『? いやそんなはずは……ってなんだこの魔力係数は! 立香君、その霧を吸っていて平気かい!? 体調が悪く感じたりとかしてないかい!』

「いえ、特に何もありませんけど……?」

「それはおかしいですね、この霧は紀元前並の濃度なので一般人には途轍もない毒となるのですが……」

ロンドンと言うのを差し引いても異常な霧とそこに含まれる頭のおかしい濃度の魔力、そしてそれを無効化できているらしい一般人マスターの藤丸立香。早速疑問点が多く噴出したが、これに答えを示したのは久方ぶりの故郷への凱旋となるオルタであった。

「おそらく、契約しているマッシュ・キリエライトの耐毒スキルがマスターに流れ込んでいるのだろう。心配する必要は無い、その守りは絶対だ」

「なるほど」

その言葉に納得する一同。ちょうどその時、霧の中から機械的な音が響いた。明らかにこちらに向かってきて、しかも大量と思しき機械音に全員が一斉に神経を尖らせる。この状況下、味方だとは期待しな

い。

立香の指示がまずは飛んで、六人のサーヴァントが陣を描くように未知の脅威に備えた。マスターと戦闘力のないアンデルセンを護るようにマシユとマルタが、その数歩前にダビデが立ち、最前線にオルタとマーキダが共に剣を構えて並んだ。

備えは万全。故に何が来ても良い。全員が息を呑み、緊張感を漂わせる。

『こつちでも多少の解析は出来た。正体は不明だが、サーヴァントではない。ただ数がやけに多い。こちらで確認できるだけでも五十はくだらない。たぶん大丈夫だと思うけど油断はしない様に』

ドクターの言葉が静けさを増した霧の都に響き渡った。よくよく考えれば、周囲には人っ子一人いない。その中で、機械の無機質な音だけが嫌に大きい。

「――来るぞー！」

オルタの警告の声が響いた。それと同時に霧の中から大量の機械兵が飛び出してきた。姿は不格好だが、その身に纏った不自然な魔力と刃は明らかに魔術側の存在であることを意味している。

「タラスク、焼きなさいー！」

マルタの指示に従ったタラスクがまずは先陣を切り、やって来た機械兵をその甲羅で受け止め踏みつぶした。更に追加とばかりに炎まです吐き出し、霧と共に一切の容赦なく焼き払う。

それに続いてマーキダとオルタも剣を構えて斬り込み、続々と雲霞の如く登場する機械兵を蹂躪していく。強さ自体は大したことない。剣の扱いに長けた二人ならば鼻歌混じりに殲滅できる程度だ。

「だけどこれは厄介だね、数が多すぎる。戦争は数だと聞くと実際その通りだけど、いくらなんでも僕だってうんざりだ！」

現れる機械兵はやけに数が多い。倒しても倒しても湧いて出て来る。どこから来ているかは不明だが、まるで無制限に供給されるかのようだ。ぼやくダビデも投石器を用いて的確に潰しているし、マシユも一歩前に出てマスターを護りながら大楯を振るい吹き飛ばしている。

それでも数が減ったようには見えないのが現状なのだが。

「ドクター、今どれだけ倒してますか!？」

『五十は超えた六十、七十……。ちょうど八十は超えた! だけどだいぶ数も減って来てるし、確認する限り援軍でやって来ている反応も少なくなっている! もうひと踏ん張り——つてマズイ! サーヴァントが来てるぞ!』

「このクソ忙しいときに面倒なものだな。そら、どうするマスター? 俺が和解でもやってみるか?」

「余計に場がこじれるだけだと思うわよアンデルセン! もう少し慎重を覚えなさいってば!」

戦いの合間にも馬鹿らしいやり取りを続けるうちに、いよいよ正体不明のサーヴァントの反応が近くなる。刻一刻と迫る強大な魔力の塊はもはや霧の中であろうと明確に感じ取れた。

その魔力の質を感じてまず意識するのは“凶暴”という言葉。近づけば近づくほどの荒々しい魔力の奔流が肌を刺す。しかしそれらは立香たちカルデアの者よりもむしろ、謎の機械兵達に向いていた。「そら、このロンディニウムにお前たちはお呼びじゃないんだ! さっさと失せやがれ!」

「え、嘘だろ——!?!」

赤雷を迸らせながら流星のように霧から飛び出してきたのは、金髪に鎧を纏ったオルタスつくりの騎士であった。鎧の音を響かせながら手に握った長剣を閃かせ、瞬く間に機械兵を塵殺していく。明らかに手慣れた動き、この手合いと何度か戦闘していなければこうはならないだろうという鮮やかな手並みであった。

かくして霧の中より現れた兵隊は、同じく霧の中より現れたサーヴァントにより一掃されてしまった。立役者である彼女は目ざとく立香を見つけると、そちらへ駆け寄って来る。

「よう、お前さんも災難だったな。なんだ? サーヴァント連れてんのか? こりや加勢は必要無かったかね」

「いいや助かったよ、ありがとう。それにしても君は——」

立香が当然の疑問を述べようとしたその時であった。

霧の中から、先ほどまで剣戟を繰り広げていた二人が帰還する。

「ほう、まさか卿が召喚されていたとはな。モードレッド卿」

「父……上……!?!」

弾かれたように騎士、モードレッドが振り返る。そこにいるのは彼女そっくりの黒い騎士王であり、思わずつぶやいたと思しきその言葉が全てを物語っていた。

「何故、何故貴方がここにいる!?! ロンディニウムを救いに来たか!?! 待て、そもそもその姿は一体なんだ!?!」

「質問が多いぞ、モードレッド卿。今の私はその男、藤丸立香に従う騎士王アーサーの別側面と取れる存在だ。貴様の言う通り、このロンディニウムを救うべくカルデアから馳せ参じたと言うのが妥当だろう」

「別側面、カルデアだと? おい、そのの! 立香ってやつ! 簡潔でいい、まずは事情を聞かせろ!」

そうして立香が本当に掻い摘んで自身らの事情を説明すると、モードレッドは深く重たいため息を吐いた。

「まさかこのロンディニウムがそこまで大事に関わっていたとはな。それでこの黒い父上を従えて特異点を巡ったと……ちつ、忌々しい奴め。本当ならその不敬は我が剣で払わせるところだが——つて痛い!!? 何をする父上!?!」

「貴様、この段に来てマスターに手をあげようとするとは何事だ。すまないなマスター、愚息が迷惑をかけた」

「いや別に俺はなんとも——」

それよりも何ともあつたのはモードレッドの方であった。

「愚息……愚息だと? それはつまり父上がオレの事を……いやまって、落ち着け。あの方がそのような事をいう訳が——」

「ならば反逆してみるか? だが今の私は使える物は何でも使う主義だ。貴様が反逆するならば、カルデアの全てが牙を剥くと心得よ」

「ぐつ、別にそういう訳じゃない……」

「それならば話は一つだろう。私と共に来るがいい、モードレッド卿。卿とてかつては円卓の騎士として名を馳せた身だ、世界を救うことに

否はあるまい？」

至極真つ当な勧誘の言葉。だがモードレッドはまるで悪魔の勧誘であるかのように額をしわを刻んで悩み始めた。彼女のとつてみれば敬愛し反逆した王からの直々の招集、だが目の前の王は正確には彼女の知る王ではない。なのに直感的には中身は変化が無いと訴えているし、誘いに乗る事自体は悪くないとも思えてしまう。

非常に鬱屈した内心を持って余すモードレッド。そんな彼女に思わず声を掛けてしまったのは、盾を携えた彼女であった。

「その、モードレッドさん。少しよろしいでしょうか？」

「ああ？　なんだよてめえは……っておいおいマジか。いや、やつぱりいい。続けて見ろ」

「ありがとうございます。その黒い騎士王は確かにあなたの知っているアーサー王ではないのかもしれませんが、しかし根底は全く同じです。誇りを抱き、王としての矜持を保った方なのです。だからこそ、もしそれで迷っているというのならば——」

「なるほどな、よく分かった」

話すごとに剣呑になるモードレッドの気迫に押され、だがそれでも心は折れることなくはつきりと言いたいことを喋るマシユ。そんな彼女に対して向けていた圧が急に緩んだ。代わりにしげしげとマシユを見つめている。

「お前、名前は？」

「マシユ・キリエライトです」

「いい名前だ。よし、決めた。誰でもないお前がこの父上の事をそのまま保証するというなら、今だけは父上の下で騎士として仕えよう。それで異論は無いか、立香？」

「無い。俺たちはモードレッドさんを歓迎するよ」

「よし、んじやこの話はこれで決まりだな！　つーかオレもあの科学者がうるさくてかなわなかったんだよな。いやー、これでちよつとは楽になると思うと清々するぜ！　そんじや行こうぜ！」

さつきまでの真面目な悩みはどこへやら、一切の気負いなく歩き出したモードレッドに慌てて立香たちがついて行く。彼女の横に並ん

だオルタがその行先を聞けば、モードレッドはすぐに行先を教えてください。

「オレが拠点にしてるところだよ。これ以上の詳しい話はそっちでしようぜ。暗殺者も出ているようなこんな場所じゃおちおち話もしてられないしな」

その言葉に従って、ひとまずモードレッドの先導に任せるのであった。

第二十五話 霧中の探索

霧の都ロンドン。

一般にそのようにして呼ばれることの多いロンドンではあるが、けれど今回の事態は異常の一言に尽きる。神代と同じだけの魔力を含んだ魔霧に、市内を徘徊する不明の怪機械^{ヘルタースケルター}、果ては目的も正体も見えない黒幕たち。これまでカルデアが解決して来た特異点の中でも、今回が一番先の見通しの立たない物であった。

そしてだからこそ、このロンドン市内をよく知っている者と出会えたことは何より大きかったのである。

「やあ、初めまして。僕はヘンリー・ジキル、魔術師兼科学者と言え分かるかな？ このおかしくなつたロンドンでモードレッドの仮マスターを務めているんだ、よろしくね」

モードレッドの案内に従い向かったアパートで出会ったのは、本来ならば小説『ジキル博士とハイド氏』の主人公である架空の人物ヘンリー・ジキルその人であった。しかもこの人物、サーヴァントではない。あくまでも一人の人間としてこの場に存在しているのだ。

そのことに対する疑問はさておき、それによってロンドン市内を非常に歩きやすくなったのだから巡り合わせに感謝するほかないだろう。そのうえで戦力的にも、カルデアの一行が加わったことでより強化された状態にある。余程の大英雄でも出てこなければ、まず敵はいないと考えて良いだろう。

実際、途中までは明らかにトントン拍子で進んでいた。モードレッドと共に手分けしてヘルタースケルターを蹂躪し、ソーホーに跋扈する空飛ぶ魔本を退治して、アンデルセンによって実態を現した絵本の概念より形作られた英霊を倒すなど明らかに順調に、一步一步特異点の謎を解明すべく動いていた。

◇

「何にも見えない夜空というのは、どうにもつまらないものですね」

ほうと息を吐いて、霧に覆われた夜空を見上げる。そこには星々の輝きなど一つとして見えず、ただ靄に覆われたような暗黒がのしか

かっているだけだ。そんなものを見ていると気が滅入るだけだと判断したマーキダは、視線を前へと戻した。

場所はアパートの屋根の上、時刻は既に深夜に入っている。ちょうどこの日のうちにもフランケンシュタイン博士の家を訪ねたり、新たな仲間として仮称フランを引き入れたり、他にもアンデルセンと同じく有名作家のシェイクスピアを引き込んだりと波乱の展開だったと評して良いだろう。しかもその過程で話すだけでも疲れるような狂気の悪魔とすら邂逅しているのだからたまらない。サーヴァントであつても精神的な疲労を覚えてしまう程だ。

とはいえ、疲労とは裏腹にカルデアの探索はどこまで行っても非常に順調であつた。これまでの所圧倒的に強いというような英霊とは出会っていないし、市内を徘徊する敵として相手になりはしない。

唯一強敵だつたと言えるのは絵本より実体化した英霊、ナーサリー・ライムであるが、それすらも流石に数の暴力の前に抵抗することとは不可能であつた。結局は敗北しこの世界より退場することになつた――

「そうかしら。私はとつても楽しいわよ。こんな暗い空なら、いつそ夢も見ないで寝れそうなもの。疲れた子供には最適のお供ね!」

わけでは無かつた。さすがに子供の姿をした英霊で、しかも悪気があつてソーホーで騒ぎを起こしたのではなかつたからか、とどめを刺すのが躊躇われたのである。そのうえモードレッドもオルタも今回は相手の邪気の無さを認め、容赦なく殺すのではなくマスターの意見を尊重した。

故にこそ、マーキダの隣には足をブラブラさせて楽しんでいるナーサリー・ライムの姿があるのであつた。

「子供、ね……そう言っている貴女も子供じゃないですか。寝なくて良いのですか?」

「あら、失礼なこと言うわね。私、これでもサーヴァントなのよ。寝なかつたってへっちゃら、夜更かしは子供の醍醐味なんだから」

「そ、そうですか……」

納得いかないという表情を見せながらも、ひとまずそれで話を切つ

たマーキダはのんびりとロンドンの市内を見渡す。霧に包まれてあまり遠くまでは見えないが、それでもぽつりぽつりと灯りの暖かい色は見受けられる。それらを眺めている間に、ゆっくりと時間は経過していく。

「ねえ、お姉さんは子供時代ってどんな人だったの？　せつかくなんだもの、聞いてみたいわ」

「私のですか？　あまり面白い話とは言えませんが……」

急な発言に驚いて確認すれば、ナーサリー・ライムは首肯した。どうやらマーキダの過去について聞きたいらしい。あまり話す事でもないが、聞かれたのだから答えるまでだ。

「子供時代は基本的に一人だけで生きてました。いろんな危険のある中でどうにか食い繋いでいたので、あんまり子供らしくなかったと言えますかね。あなた達子供が持つような夢よりも、敵の効率的な殺し方を考える日々でしたよ」

「まあ！　夢を見れないなんてとても勿体ないことだわ！　もしかして、子供時代があんまり楽しくなかった人かしら？」

「そう言われればそうかもしれないですね。もちろん、それを後悔したことはありませんけどもね」

もはや本人すらぼんやりとしか覚えていない過去の記憶。山の中で這いずり回って、明日生きるために今日無茶をする。そんなことが当たり前になっていった数年間だった。生きるか死ぬかの極限の中で擦り切れた精神は歪な心を生み出したわけだし、そのことは今でも一部で関係しているのだから業が深いと言えた。

けれどそれでも、きつと後悔をすることだけは無いと断言できる。仮に聖杯に願えば幸福な子供時代を過ごすことが出来ると言われても、それだけは頷かない。

「あら、それはどうしてなのかしら？　誰だつて子供として楽しく生きて、ピーターパンのように過ごしたいと願うものよ。なのに失った子供時代を取り戻そうなんて思わないのは変じゃないのかしら？」

「まったく変じゃありませんよ。少なくとも私にとっては紛れもない宝物と言っているのですから」

子供の夢の具現らしい、尤もな質問だ。だけどマーキダの心は最初から決まっている。

だってそうだろう、その時の経験が無ければシバの女王にはならなかった。竜を退治なんて無謀なことに挑むことにはならなかっただろうし、そこからシバの国を建国するという話にもつながらない。

そうなれば、彼と出会う事すらなく終わっていた。知恵比べもあの夜も何もかも、存在せずに終わっていた。だからマーキダは過去について不平を言う気はない。不幸な生い立ちを持つていた？ だから辛かっただろうと？ そんなのは大きな間違いである。

そのことをナーサリー・ライムもまた察したのだろう。頭から納得出来た様子ではないが、それでも一つ理解したような面持ちで頷いた。

「そうなんだ。子供の夢を追求しないなんて、私にはとても考えられない事ね。じゃあ逆に、今はどんな夢があるのかしら？ 私は子供たちの英雄だけど、大人になっても夢を見る機会自体は平等よ。お姉さんの夢、聞かせてちょうだい？」

「私の夢……私の夢ですか……うーん、難しいですね。ですがそうですね、こうなればいいなという願いならささやかならありますが」「聞きたいわ！ 女王様の夢ってどんなものかしら？ やっぱりとびつきり豪華で贅沢な悩みだったりするの？」

子供らしい無邪気で直球な言い回しにマーキダが思わず苦笑した。彼女の中の自分はさながらハートの女王なのだろうか。だとすればさすがに女としてちよつとやめてほしいとも思ってしまう。

そんなに欲深い願いでもありませんよと前置きして、静かに語り始める。

「私はただ、かつて有耶無耶になってしまつて果たせなかつた約束を果たしたいのです。国も勿論大事ですが、やっぱりこう、一人の女としてどうしても欲しい方が居ますから。そして今度こそ心を教えるというリベンジ——というよりも続きをします。それで改めて好きになつてもらおうのが私の夢ですから」

それこそが女王の願い。もし聖杯に懸けるならばこれしかない

いう、人としてありきたりで純粹な想いである。

「どうです？ 私の夢は貴女のお眼鏡に適いましたか？」

「ええ、勿論よ！ そんなに素敵な恋をずっと抱けるなんて、あなたはとても真つすぐな人なのね」

無邪気な賞賛の声がどうにも眩しい。そのせいでちよつとだけ目を逸らしたマーキダは、自分の内心に自問する。

一体どうして、自分はある人の事が好きになってしまったのか。その理由は今でも正直に言えばよく分からない。一目ぼれなのだろうし、実際いつかダビデ王に語ったように賢い人が好きなのも事実だった。良き王として君臨している様を尊敬したし、そんな人物に対して何か与えられればと思ったのもまた真実。成り行きで抱かれたのも間違いないが、その時にはもう間違いなく自覚していたからこれも正確には関係ないだろう。

だからそう、結局はこの恋に理由なんて無いのかもしれない。ただ好きになったから今でも思い続けているという、ある意味では呪いじみた気持でもあるのだろう。自分でもしつこいというか重いという自覚はあるが、一度始まったこの想いは止められない。止める気もない。

——そしてだからこそ、ふと脳裏に浮かんだ白衣の影は何かの間違いだと断じて封じ込めた。

話し込んでいるうちに夜風が段々と冷たくなってきた。いつの間にか朧に輝く月も空の中ほどにまで昇り、遅い時間であることを示してくる。どうやらそれなりに長い時間居座ってしまっていたらしい。「さてと、そろそろ中に戻りましょう。いつまでもこんなところに居て誰かに襲撃されたらたまりませんからね」

「えー、面白くないわよ。もつとここでお姉さんと話していたいわ」「そうは言ってもですね……」

どうにも子供の相手は苦手だ——マーキダはそんな風に感じながらも、渋々浮かした腰を下ろすのだった。

◇

そこからのカルデアの進撃は疾風怒濤にして破竹の勢いであった

と言えよう。

まずは手始めに情報入手のために時計塔の制圧を行った。ジキル自身はそれなりに危険性を考慮していたのだが、高い『対魔力』を誇るサーヴァントが四人もいて、しかもほぼ神代の魔術師までいるとなればどのような危険ももはや危険とは言えない代物であった。容赦なく飛来する魔導書や掛ければ致死に至る罨すら危険ではなく、アンデルセンは至極順調に求めていた情報を入手した。

しかもその過程でPを名乗る英霊パラケルスと、更にはロンドンを騒がす連続殺人鬼をセイバー二人の『直感』で仕留めてしまったのだから大収穫と言えるだろう。

その次はフランのヘルタースケルター探知能力を活かした大元の撃破に取り掛かる。これもまた早かった。ヘルタースケルター自体はモードレッドをして『割と歯ごたえのある敵』と言わしめる難敵だが、そうは言っても数多くの英霊が丸一丸となっているカルデアの戦力には敵わない。ひたすらヘルタースケルターを探知しては撃破し、そこから相手の居場所を探り出し、そしてようやくヘルタースケルターを生み出す大元、チャールズ・バベツジの下へと辿りついたのだった。

本来のバベツジ自身は紳士的でも、聖杯の縛りがあれば交戦は避けられない。即座に交戦を開始したチャールズ・バベツジを見て、マーキダがさすがに愚痴を吐いた。

「いやちょっと待ってください。固有結界ですって？ その鎧の内部が？ これでも一応は魔術師なのでそう簡単に固有結界に至られると軽く殺意が湧いてくるんですが。しかもそれで鎧の機関を動かしてるって、まずその魔力はどこから引っ張って来るんですか？ 世界からの修正による反動はどうしてるんですか？ ああなるほど聖杯ですかそうですか、羨ましいですねまったく魔術王でも出来たか分からない固有結界をリスク無しに近代の人が扱うつてなんだかすごく悔しいんですけども」

『お、落ち着くんだマーキダ、なんだか君らしくないぞ。そこはほら、ソロモン王にも固有結界は使えたはずとかポジティブに考えないのかい？』

『まあまあロマニ、それを言っても詮無い事だろうさ。そも固有結界っていうのは魔術師の中でも最高クラスの奥義なんだよ？ それをいとも簡単に扱われたら同じ魔術師として多少なりとも悔しいという気持ちは私にも分かる』

そんなロマンとダ・ヴィンチちゃんのやり取りを軽く聞き流しながら、どうやら魔術師として多少は思う所のあったらしいマーキダがやけに殺意に溢れている所為でバベツジも割かしあつさり沈んでしまふ。そもそもがカルデアの戦力自体相当なものなので、そうでなくとも倒されるのは時間の問題であつただろうが。

その後はしばしの小休止の後、バベツジが消滅の際に残した言葉に従いロンドンの地下深くへと向かい進んで行く。次第に濃くなる霧に従い進んで行けば、その先に有つたのは魔霧を生み出す大元である巨大蒸気機関『アングルボダ』と、この特異点における黒幕である若き日のマキリであつた。

だがそれすらも、もはやカルデアの道を阻むに能わず。凶悪な魔神柱に変貌したマキリとて例外ではない。むしろこれまでの特異点において、既に二度も魔神柱とは交戦しているのだ。それだけの機会があつて、人類最後の希望たるマスターが対策を練らないなどありえない。

「ローマで！ オケアノスで！ お前たちとは二回も戦つてるんだ！ それなのに、今更こんなところで負けるわけないだよッ!!」

立香の叫びと共に打倒される魔神柱。だがそこで事態は終わらない。更にマキリが呼び出したのは、雷電博士と名高いかの科学者ニコラ・テスラその人であつた。

聖杯からの魔力供給と周囲の魔霧を味方につけての怒濤の進撃に、流石のカルデアの戦力でもテスラを攻めあぐねた。けれどそれでも、最後にはロンドンの街中に出たところで遭遇した二人のサーヴァントの協力もあつてテスラの打倒は完了し、これで今度こそ終わったと思えたのだが。

空に集められた大量の魔霧から、恐ろしいまでの霊基反応が生まれだす。

降臨するは嵐の王。カルデアにおいて最高戦力として迎えられているアルトリア・オルタのIFとも言うべき姿、すなわちそれは聖槍を携えたアーサー王である。

「ほう、まさか私自身と会いまみえることになろうとは。しかも貴様、そのような余計なものまでぶら下げてどういうつもりだ。言葉があるなら言ってみろ」

「いや父上、さすがにそれは言いがかりじゃ——」

「なんだ、モードレッド卿？」

「い、いえっ！ なんでもありませんアーサー王よ！」

シリアスなのかコミカルなのか分からないが、とにかくアーサー王の実力はこの場に集う誰もがよく心得ている事である。であれば、油断など出来ようはずもない。武器が聖剣から聖槍に変わった程度で嵐の王は止まらないはずなのだから。

そこからは死闘の幕開けだった。

解放される聖槍は強力無比で、星の聖剣にすら劣らない代物である。それを市内に向けて放たれば洒落にならない事態になるだろう。現在はテスラの生み出した階段によるロンドン上空での戦いだが、間違っても戦場を地に移してはならないのだ。

そのような地の不利に加えて、槍を扱う嵐の王もまた尋常でない使い手である。故に白兵戦に長けるセイバー二人を前に押し出して、その後ろからダビデが宝具封印を狙って石を飛ばすも当たらない。槍と馬を用いるこの王は、どこまでも難敵として立ちはだかっていた。

だからこそ、この状況を塗り替えたのはもう一人のアーサー王の決断だったと述べて良いだろう。

「モードレッド卿」

「なんだ、こんな時に。余計なこと言ってる暇なんてないだろうに」

「——卿にその剣、『燦然と輝く王剣』を正式に譲渡する」

「なっ——それはどういう意味ですか小さい方の父上！」

「言葉通りの意味だ馬鹿者！……勘違いするなよ、私はただ使えるものは全て使うというだけの事。それだけの剣をこの場でただ遊ばせておくのはあまりに惜しいから、一時的に譲るだけだ」

「本当に良いのか？ オレが、この剣を使っても」

「くどいぞ、盗んだ剣で叛逆を起こした貴様が今更何を言う」

「ああクソツ、分かった、わかりましたよアーサー王！ 御身の名に懸けて、このモードレッドが必ずや眼前の敵を討ち滅ぼすと誓いましょう！」

その誓いと共に、モードレッドの勢いが爆発的に上昇する。彼女の振るう『燦然と輝く王剣』の本領が発揮され、所持者に対する身体能力の向上が発動したのだ。これによってここまで拮抗していた嵐の王との戦いが変化を開始する。振るわれる聖槍は次第に押し込まれ、いつの間にか乗騎であった黒の巨馬すら倒される。

そして――

「これの一撃で一切合財終わらせてやるさ！ 受け取れ――」

『我が麗しき父への反逆』ツツ!!」

モードレッドの振るう王剣より放たれた赤雷が、見事嵐の王を貫き消滅させた。

後に残ったのは結局手つかずで終わった魔霧の集合体で、これも直に拡散して消えていくだろう。

故に今度こそこれで終わり、後は地下にある聖杯を回収さえすれば特異点の修復は完了するのであった。

第二十六話 魔術王、降臨

ロンドンに突如として現れた嵐の王を撃破した後、一行は聖杯を回収すべくマキリが根城としていた地下へと赴いていた。

既に先ほどまでの緊張感は無塵もない。遅れて合流して来たアンデルセンとシエイクスピアに、テスラ戦を含め飛び入りで手を貸してくれた坂田金時と玉藻の前も加わって、地下の陰湿な環境に非常に和気藹々とした空気が流れていた。

「そう言えば父上、一時的であろうとオレにこの剣を譲渡したってことはオレのモンにしちまうが、構わないよな？」

そう言っ指し示すのはモードレッドの担う『燦然と輝く王剣』であった。確かに彼女の言う通り、一時的にオルタはその所有権をモードレッドとして認めただけだが、それでも彼女の言いぐさに周囲の間も呆れ顔になってしまう。

それはオルタもまた同様であり、けれど何故だか微かに笑ったようにも見えた。

「構わん。どのみち私はその剣は振るわぬし、今回の件の褒賞として与えてしまうのもやぶさかではない。ならば剣の本懐を遂げさせるのも一興だろう。せいぜい上手く扱う事だな」

「——ああ、ならその言葉通りに扱いなしてみせるさ。貴方の背から学んだ剣技を持つこのオレが、この程度の剣を扱えない訳がないからな」

「ただし、努々忘れるなよ。私は貴様を王として認めたわけではない。そのことを勘違いして思い上がる事の無いように」

その言葉にモードレッドがどうにも形容しがたい複雑な表情を見せながら、それでも隠しきれない喜びを顔に滲ませる。凶らずもこの特異点での出来事は、彼女にとつてもわずかながらに救いとなったのだ。

それを遠くから一步離れて見ているのは、共に親としてどこかズレていたり欠けていたりする王と女王であった。

「いいですねー、ああいうの。完全に親子で認め合ったわけではなく

とも、少しばかりは王とその部下という関係から抜け出したようにも見えます。私もせめてあれくらいは親としての情愛を持てれば良かったのですが」

「へえ、僕も大概クズだっていう自覚はあるけどさ、そんなに君の育児も酷かったのかい？　とても想像がつかないのだけど」

聞かれて、マーキダが重いため息を吐いた。次いで自嘲するような笑みを浮かべる。

「だって実の息子に対する認識が、“ソロモン王の子供だから大事にしよう”程度の認識ですよ。親として本来注ぐべき愛情はほとんど無くて、あるのはただその場にはいない人への募っていく恋心だけでしたからね。これじゃあ親として失格と言えませんか」

「あー……なるほどそういう事か。どうも君はその辺を拗らせて勘違いしているのかもしれないね。それはただ優先順位が違うだけだ。君が一番に気にしていることを解決すれば、それでことは解決するはずだよ」

「？　それはどういう——」

意味深なダビデの言葉に、マーキダが問いかけたその時であった。

『——!?!　なんだこれは!?!　唐突に魔力の膨張を確認——世界に異物が入り込んできている!?!　しかもこれはレイシフトの反応だ!』

「な、どうしたんですかドクター!?!」

いきなり焦りを露わに叫び出したロマンの声に誰もが何事かと耳を澄ます。その中でマシユがロマンに聞き返すも、返ってくるのはただロマンの焦燥に駆られた声だけだ。

『ごめん、僕もさっぱり分からない!　ああクソツッ!　シバのレンズが何も映さなくなつたぞ!　気を付けてくれ、何者かがそっちに向かっているぞ——!!』

その言葉を最後に通信からの声が聞こえなくなる。

いや、それは正確な表現ではないだろう。実際は、ただ場に満ちる重圧に他の者の意識が逸れただけの事。加速度的に膨れ上がる膨大な霊基の影に、誰もが最大限に警戒をしながら固まった。

——そしてそれはロンドンの地下へと降臨した。当たり前のように

に集った面々の前に降り立つと、その強烈な瞳で睥睨する。

それは、例えるならばまさに究極。至高にして神の領域にも手を届かせる万能にして最強の存在。何者かを讃えるありとあらゆる言葉を出し尽してもまだ足りないと言わんばかりの、荘厳にして邪悪な雰囲気放つ人間である。

「魔道元帥ジル・ド・レエ。帝国神祖ロムルス。英雄先導イアソン。雷電博士ニコラ・テスラ。どいつもこいつも役に立たぬ屑ばかり。多少は使えると思えば、まさかこの程度の使いすらできないとは興醒めだ」

侮蔑と共に現したその姿は、緩く編まれた白髪 of 長髪に、それとは対極の褐色の肌。人型を取っているが、その中に渦巻いているであろう極大の魔力はもはやサーヴァントの器に収まるものではない。

誰もがこの突然に降り立った圧倒的な存在の前に言葉を失い、二の句を継げなくなる。けれどその中で一人だけ、その姿を見て即座に反応する人物がいた。

「これは驚いた、まさか今回の大事件の黒幕が本当に君だったとは。我が息子ながら恥が高いよ、いや本当に」

常と変わらぬ飄々とした空気を纏って呆れたように頭を抱えたのは、ダビデ王である。ダビデを見とがめたその男は、僅かに眉を顰めて鋭い視線を寄こした。

「ほう、我が父上がいるとは驚いた。どうやらカルデアはよほど私の興を削ぐことに余念がないと見える」

「いやいや、そう悪意があるわけでもないさ。どちらかと言えば僕が召喚されたのは君の所為でもあるというか、まあぶっちゃければ偶然の一種だね。それから、悪いけど君に父親呼ばわりされる筋合いはないよ」

「言うではないか——」

容赦のないダビデの言葉にいたりと笑ったその男は、改めて視線を戻す。その視線の先に居るのはカルデアの誇る最後のマスター、藤丸立香であった。彼は今にもくじけそうになりながら、それでも毅然として前を向いたままその男に問い返す。

「お前は何者だ。いや、ダビデ王は『我が息子』と言った。つまりお前こそレフの言っていた『王』か——」

「ああ、その通りだとも。私の成すべき事業に残った唯一にして最後の汚点、藤丸立香よ。死すべき運命さだめに抗い戦い続けるその愚かさに免じて、我が名を讃える栄誉をやろう」

そして、男は朗々と告げる。

誇るべきはずの自身の名を、あたかも唾棄して焼却すべき最悪の呪いのように。

「我が名はソロモン。七十二の魔神を従え、玉座より人類を滅ぼす者。この人理焼却の実行者にして、数多無象の英霊どもの頂点に立つ七つの冠位の一角だと知るがいい」

『ソロモン——本当にソロモンと名乗ったのか!?!』

「は、はい！ その名は間違いなく紀元前十世紀に生きた魔術王の名で間違いありません。そして——」

ここでマシユが言葉を切った。そのままちらりと背後を見やれば、そこにはソロモンと縁の深いもう一人の女王が立っている。

女王——マーキダは、ここまでの間ただ無言、そして無表情であった。片時もソロモンから目を離さず、けれどそれ以外に常と変わる要素は見受けられない。握り込んだ剣すらもそのまま、いつそ何も感じていない様にすら見えてしまう。

「シバの女王、マーキダさんとも関わりの深いあの魔術王ソロモンです！」

「ほう……シバの女王と言えば、あの女か。まさか奴までいるとは、このカルデアは本当に私の神経を逆なでするのが得意と見えるな」

マシユの言葉によって初めてマーキダの存在に気が付いたのだろう。ソロモンはそちらを見やり、隠すことのない悪意と侮辱を以てして彼女の名前を呼んだ。その姿はとてもかつてロマンスを繰り広げた者に対する態度とは思えない、冷たいを通り越して憎悪しているのではないかと思わんばかりのものだ。

いったい何がソロモンを駆り立てるのか。その事情はさっぱり分からないが、けれどその悪意の奔流は本物だ。心を侵食し抉る言葉に

よって、ようやくマーキダがゆっくりと口を開く。

「まさか……本当に貴方が黒幕だったとは思いませんでしたよ、ソロモン王。貴方を愛する者として、こんな事、信じたくは無かったのですが」

必死に絞り出して出て来た言葉が、今にも泣き出してしまいそうなほどに震えていたのは気のせいではないだろう。いつも通り、平然として見えたその姿はあくまでも虚構。実のところ、彼女の内面はもう崩壊寸前で、ただ気力でそれを押し殺しているだけ。自身が今でも愛しているはずの男の凶行と、向けられた嘘偽りない憎悪に、もはや心が碎け散る寸前となっている。

当然、そんな事はソロモンも分かり切っている。だが、その手を緩めることは無い。むしろ追いつめるために邪悪なまでの笑みを浮かべ、傷を抉り鬨って行く。

「それを貴様が言うか、シバの女王。魔術王を何一つ変えることも出ず、ただ無残に死んでいった貴様が愛を語るか。あまりに不愉快だ。どこまでも忌々しい。だからそうだな、貴様に向けるべき言葉はこうだ」

『待て、ソロモン——！』

通信の音声だけで静止をかけようとするロマン。彼が見せたささやかな勇氣にしかし、この場の誰もが注目できない。

そしてその程度の静止如きで魔術王は止まらない。ただ一人の、自身が最も嫌う愚か者を追いつめ破壊するためだけにその想いを吐露していく。

「本当に“私”がお前を愛するとも思っていたのか？ 浅はかな、そして醜い。貴様は生涯報われぬし、報いてやるつもりも無い事を思い知れ」

「——う、そ……」

「何を驚く。……まさかとは思うが、期待でもしていたのか？ “自分の信じるソロモンはそのような事は決してしない”と？ ふん、馬鹿らしい。何を理解者気取りになっているのだ。貴様程度が理解できていることなど何一つ無いのだと知るがいい」

覚悟はしていた。これまでの特異点から導かれる結論は、確かにソロモン王を示していたから。

勇気も持っていた。もし本当にソロモン王が人理焼却の黒幕でも、立ち向かうための心構えはあった。

想いだってある。誰よりも彼がそんな事をしないと信じるからこそ、この存在を偽物だと言ってやるだけの気概があった。

だからこの程度の言葉に屈しはしない。してはいけない。毅然として反論し、このソロモン王は本物ではないと否定してやらなければならぬ。それこそが自身の成すべきことだと、本能は確かにそう叫んでいる。

なのに何故だろう、身体がいつさい動かない。情けないことに理論武装のひとつすら出てこない。言葉を紡ごうにも喉は震えるばかりで、これっぽっちも音を出してすらくれない。

——だってそうだろう。覚悟も勇気も想いも何もかも、心の中の理性は今この瞬間に木端微塵に砕け散ったのだから。

最後に会ったのはそう、イスラエル王国郊外でただただだろうか。あの時に約束をして、国へと帰ってから死ぬまで、最後の瞬間まで再会することは叶わなかった。何の縁があったかは知らないがこうして召喚されても、再会することが叶うとはとても考えていなかった。

それがようやく一目見るだけでも再会できて、その巡り合わせに感謝をしたいと願って、だけど相手はこの人理焼却の黒幕だと否定することもせず。そして最後に強烈な弾劾の言葉である。

つまるところ、“愛する者は盲目である”という一言に尽きた。あまりにも一人の男への想いが強すぎた故に、少なくとも一見して本物と大差ない存在からの、容赦のない悪意と拒絶に心の方が耐えられなかったのだ。反論を重ねて心の武装を固める前に折れた心は、何を叫ぼうにもあまりに遅すぎたのである。

黒の剣が音を立てて地に落ちた。それを追うようにしてマーキダ自身も膝をついてしまう。既に何の感情も消え失せたその顔は只々無表情であり、その瞳から静かに涙が流れ落ちる。喉からは低い嗚咽の音が漏れるが、其れすらもどこか空虚に感じさせる。

もう彼女はどうしようも無かった。誰が言葉をかけたとしても、きつと届きはしないだろう。心を支える何もかもが砕かれたのだ。ここまで来てしまえば、立ち上がる可能性はゼロに等しい。

そしてソロモン自身は、そんな彼女に一切頓着することなく立香へと目線を戻した。もはや彼の眼中に、心折れた女王など存在しないと告げるかのよう。

「さて、少々話し込みすぎたな。カルデアの最後のマスターよ、これは私からの最後の忠告だ。総てを諦め放棄せよ。それをするならば今の場では見逃してやろう」

「……嫌だと言ったら？」

あくまでも強気に、怖がる足を叱咤して不敵に言って見せる立香に、ソロモンは何の感慨も見せなかった。

いや、それは少しばかり違うか。彼は微かに煩わしそうに眉を顰めて、それから再び口元を邪悪な笑みに歪める。

「ならばここで死ぬ。我が大業に貴様の存在は不要だ。どのみち、この程度で死ぬようならば人類の勝ち目など万に一つも無いのだがな」その言葉と共にソロモンの背後から巨大な霊基反応が観測され、瞬間に巨大な魔神柱——御使いが顕現する。

これまで相手をしてきた魔神柱たちを一度に四柱相手取る事の難易度は言うに及ばず。けれどそれでも、カルデアは挫けない。飛び入りの金時と玉藻の前をも作戦に組み込んで、果敢に絶望的な戦いに臨んで行く。

圧倒的なまでの不利を埋めてなお戦うその背中を見て、けれどマーキダは立ち上がれない。自分も戦うべきだというのはよく理解している。このままではただの置物にしかならないと。だけどそれなのに、やはり立ち上がれない。絶望的なまでに砕けた心を掻き集めてもなお、再起するには足りないのだ。

——この時、誰もが御使いとの戦闘に気を取られていたと言えるだろう。それは御使いの三体を既に斃されたソロモンですらそうであつたし、音声しか拾えていないカルデアにおいても誰もがこの戦闘の行く末と現れた強敵に気を取られていた。

故にこそ、誰もこの男の呟きを聞くことは無かった。ただ一人、静かに終わっていた女王を除いては。

『いや、違う。まだだ。君にはとっておきの呪文があるはずだ。今がその使い時だ、どうかその言葉を唱えて欲しい』

「……あ」

確かにそうだ。彼女には一つ、とっておきの呪文があったはず。何もかもが砕かれたその心に最後に残ったのは、あまりに華の無い魔法の呪文。唱えればきつとピンチから助けてくれるという、ドクター・ロマンのお墨付きがついたあの言葉であった。

今こそそれを唱えるべきなのだろうか。もはや言葉の意味や真意を問う必要性は無い。ただ義務感に突き動かされるように、あるいは瑕から逃避するかのよう、けれども祈りを込めてその呪文を口にした。

「……『エレタム・サーラム』」

消え入りそうなほどに小さな言葉で、確かに唱えた。

別に唱えることで希望が生まれる訳ではない。やっぱり魔法の呪文としては華が無くて、何の高揚感も逆転劇も示してくれないただの言葉だ。

けれど、明らかにその言葉に“意味”はあった。

「これ、は……」

普段から用いている『呪魔の剣』は、竜の住処から回収した為はその真名を知らないというのは揺るぎない事実である。

だから現状では真価を發揮できず、単なる魔術礼装程度の価値しかないはずのこの宝具が、何故だか目に見えて反応していた。表出する魔力は常とは比較にならない程の高まりを見せていて、手に取ってみればまるで最初からマーキダの為に詠えたかのようによく手に馴染む。

この現象の名前は確かに知っている。英霊としてあまりに普遍的な現象だ。それはすなわち――

「真名解放……？」

つまりは先の魔法の呪文、『エレタム・サーラム』こそが本来この剣

に用意されていた真名だという事。それが使い手として幾度となく振るってきたマーキダの言葉に合わせて、その価値を遂に顕したというだけのありきたりな話だ。

けれどこの名前の出どころはマーキダでは無く、それを知るはずの無い白衣の彼。どうして古い古い剣の真名を知っているのだと思いを巡らせて、けれど即座にその真意に気が付いた。

「なんだ……そういう事だったんですね。最初から今までずっと、貴方は近くにいたという訳ですか」

思わず笑みが零れた。きつとこれまでの生涯の中でも最高の笑みだと分かるほどに。

頬を新たに伝う涙は絶望によるものでは断じてない。むしろ希望を見出したからこそ流れ落ちたもの。

そしてマーキダは、しつかりと立ち上がった。その姿に先の絶望は欠片ほども見られない。想い人の助けでどうとうその真価を發揮した『呪魔の剣』——『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』を愛おしく握りしめて前を向く。

『ああ、それでこそ君だ。あの時しつこいくらいに食いついてきた君の姿を、今ここでもう一度だけ見せてくれ』

通信から聞こえてきた、どこか呆れたような物言いに苦笑する。やはりあの時の自分はちよつとばかり嫌味な存在だったかと考えて、けれどそれでいいと他ならぬ“本人”から肯定されたのだから気に病まない。

眼前に見据えるは魔術王。違う、魔術王を騙る何者かだ。もうそのことを疑いはしない。だつて当のソロモンは、ずっと人類の為に駆け抜けていたのだから。いま目の前で、御使いの四柱を打倒した英霊達すらいとも容易く殲滅して見せたあの男とは断じて違うのだ。

「そこまでですよ、魔術王。これ以上の狼藉は許しません」

堂々と宣して、立香の前へと躍り出た。既に彼を守る盾はマシユ一人しかない。非戦闘員のアンデルセンすら魔術王の真実、グラウンドキヤスターを見抜いた“褒美”として惨殺されてしまっていた。

だからこの場に残ったサーヴァントはたったの二人だけで、けれど

マーキダの心に恐れは微塵も存在しない。むしろその心を満たしているのは、ただ怒りの感情のみ。

「私の前に立ちほだかるか、シバの女王。どうやら余程死にたいと見える」

「そういう貴方こそ、私の前でよりもよつてその姿を取つて顕れるなんてふざけたことをしてくるじゃないですか。グランドキャスター？ 英霊を超えた英霊？ だから何ですか、私は絶対に貴方という偽物を許しません」

「吠えたな。ならばせいぜい足掻いてみせろ、人類一の愚か者めが」

宣言と共にさらに追加で顕現するのは、僅かに一柱だけの御使いである。ソロモン自身が手を下すまでも無いという事なのだろうか。それは確かに彼我の戦力差を鑑みても妥当な判断だし、これまでのマーキダならば一人だけで御使いを相手にするなど絶対に不可能と言えただろう。

「知ってますかね、恋に殉ずる女というのは無敵だとか言われているらしいですよ？ ええ、今ならその気持ちが良く分かりますとも。最高の心地です。だからこそ——」

けれどそれも今や過去の話だ。

さあ、括目せよ。今の彼女を止めるのに、御使い一柱だけでは決して足りない。その程度では何があろうと絶対に歩みを止めないと知るがいい。

「今の私を容易く倒せるとは思わない事だツ!!」

悍ましい外観に浮かび上がる無数の瞳より放たれる一撃が、一刀の下に衝撃ごと粉碎された。

逆に振るわれた剣の一撃からは途方もない密度の魔力が放たれ、魔神柱の身体に癒えぬ呪傷を刻み込む。

それは明らかにおかしい光景だった。不条理な光景だった。

真名解放の成された剣を介して扱われるすべての行動が、通常のマーキダとは比較にならない程に強化されている。その特性が彼女のもう一つの宝具『智慧と王冠の大禁書』による魔力ブーストと相まって、圧倒的な優位を生み出しているのだ。

それ故に本来ならば蹂躪する側であるはずの魔神柱を、ただ一人で抑え込むという奇跡を具現する。

この予期せぬ事態にはソロモンすらも瞠目するが、けれど焦る気配は微塵もない。ならば数を増やして押し潰してしまえば良いと画策したところで――

『レイシフトの準備が出来た！ あと二秒でレイシフトを開始する！』

カルデアからのレイシフト宣言が届いた。カルデアとて坐して成り行きを見ていたわけではない。必死にレイシフトの準備を進めて、ようやくそれが叶ったのだ。そしてその直後、立香たちの身体がカルデアに引っ張られ、安全圏へと引き寄せられていく。

特異点から消えて行く三人を見て、けれどソロモンはもう何をする気も無かった。もとよりこの場に足を運んだのはただの気まぐれなのだから、たかが羽虫を潰し損ねたところでどうということはない。

――ああ、だけど。しかしだ。その瞳には強烈な憎悪と憤怒、そして少しばかりの後悔が混じっていた。

「マーキダ……貴様だけは、必ずや殺してみせるぞ。ほんの僅かにでも期待してしまった我らの憤りと絶望、その身に知らしめてくれよう」

最後の瞬間に垣間見た、あの女王の射貫くような視線だけは、あまりに不愉快極まりないと感じたのだった。

第二十七話 三千年越しの運命

レイシフトを完了し、命からがらロンドンより帰還した立香たち。しかし肝心のマスター自身が、極度の緊張と疲労の為か倒れてしまった。それをマシユが介抱しつつちようどやって来たダ・ヴィンチちゃんと共に医務室までマスターを運び、レイシフトルームにはたった二人だけが残る形となった。

「……こんなところで話すのもなんだから、ひとまずボクの部屋に向かおうか」

「ええ、分かりました」

やって来たもう一人、つまりはロマンの案に頷いたマーキダの声音は意外にもいつも通りで、そこに特別な色は見受けられない。てつきりカルデアで顔を合わせた途端になにかしら言ってくると思っていたロマンだから、その反応には肩透かしを食らってばかりだ。

これまた普段と同じように、二人で肩を並べて白い廊下を歩いて行く。やけに部屋までが遠く感じる。まるで空間が引き延ばされているかのようだが、なんてことはない。ただロマンのチキンな内心が緊張感を露わにしているだけだ。

——もしや、あまりに自身の正体を告げるのが遅すぎて怒っているとか？ それともかなり情けない姿も見せてるわけだから、実は幻滅されているとか？

そのような想像をしてしまい、それも有り得そうだと内心で頷いてしまう。なのでひたすらに無言で隣を歩くマーキダをまともに見ることすらできないまま、ようやくロマンの自室へと辿りついた。

無機質な音と共に扉が開く。ひとまずマーキダを先に入れてあげてから、ロマンも部屋に入り扉を閉めた。

「さてと、いろいろと話したいことはあると思うけど——」

それ以上をロマンは言うことが出来なかった。

唐突に視界いっぱい広がるのは茶色、というよりはもう少し色の薄い亜麻色の髪である。どうやら自分の胸元に顔をうずめられているらしい。それと共に前方からは何やら豊満で柔らかい感触が伝わ

り、背中には思い切り腕を回されている。

状況から察するに自分は彼女に抱きしめられているらしい、というのを不意打ちで鈍った頭で考える。そしてこれまでの女性経験がほとんどない頭を回転させて、そのまま抱きしめ返すべきなのか、それともいったん引き剥がすべきか迷ってしまう。

けれど結局は何もせずにされるままを選んでしまうあたり、どこまでもロマニ・アーキマンらしい選択であった。

そのまましばらくマーキダは抱擁を続けて、ようやく彼を解放してくれた。先ほどまでロンドンで死闘を繰り広げていたとは思えないほどに爽やかな良い香りが辺りに広がる。女性の香りとはこんなにも良いものなのか、現実逃避じみた思考でそんなことまで考えてしまうロマンであった。

「……やっと、会えましたね」

「ああ、そうだね」

万感の想いを込められたその一言に、なんと返せば良いのか分からずに味気ない返答をしてしまう。けれどマーキダはそれすらも愛おしく感じると言わんばかりにぐいと顔を近づけた。

互いの吐息がかかるくらいに近く、マーキダの人並外れた美貌が目前に映る。そして彼女の赤い瞳には、ロマンの惚けたような顔が浮かんでいる。なのに彼女はそれすらも愛おしいと言わんばかりに、目を柔らかに細めた。

「何から言えば良いのかわかりませんが、まずは一言いいですか？」

「もちろん」

マーキダが名残惜しそうにロマンの頬を一撫でしてから、ゆっくりと離れていく。それでも両者の距離は一步あるか無いか程度であり、それだけマーキダが離れるのを嫌がったという事なのだが。

ともかく彼女はロマンと瞳を合わせて、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「助けてくれてありがとうございました。とても嬉しかったです、ソ・ロモン王」

「……まあ、そりゃバレてるよね」

「当然ですよ。むしろあそこまで核心に触れる事柄を教えてくださいましてバレないと思うのですか。というかよくあれだけの事を教えてくださいましたよ。本当は貴方らしくない行動じゃないですかね?」

しみじみと呟くマーキダに、ロマンもまた静かに言葉を重ねる。

「だってほら、ボクはいつも君の世話になりっぱなしだったから。せめて君のピンチを助けるくらいはしなないといけないと思っただけさ。うん、確かに君の言う通りボクらしくない。だけど後悔はしていないよ」

「ふふ、その言葉が聞けただけでも最高の気分ですよ」

気恥ずかし気に目を逸らしたロマンに、マーキダが満面の笑みで顔を綻ばす。

そしてもう一度強く抱きしめられて、あのいい香りが胸いっぱい広がる。再びロマンはされるままになったけれど、今度はマーキダが不満げに顔を上げてロマンを見つめていた。頬を膨らませているあたり、何やら不満があるらしい。

「むく、どうして貴方は私の事を抱きしめてくれないんですか? ここはどう考えてもそうするタイミングでしょうに。それとも私の事をきら——」

「そ、そういう意味じゃなくてだね!? ……だってボクはそういう経験が全然無いし……それにほら、今のボクはあくまでロマニ・アーキマンであって、君の愛したソロモンとは全然違う別物なんだよ? そんなボクが君を抱きしめる資格があると思うかい?」

「ありますとも」

即答は力強い肯定の言葉だった。それと同時に手持ち無沙汰であるロマンの両腕が、さりげなくマーキダの後方に誘導される。

「このまま私をギュッとしてください。貴方の体温を感じさせてほしいんです」

「……分かった」

嫌だという訳ではないが、それでも渋々といった様子でロマンが腕に力を籠めた。両腕と胸元で感じるほっそりとしたマーキダの身体はとても柔らかくて、力みすぎれば折れてしまいそうなほどだ。

ゆつくりと時間が経過していく。ひとまずロマンは遠慮してあまり力強く抱きしめようとはしない。逆にマーキダはこれでもかとかかりに密着して、スリスリと胸元に頬を当てて来る。

「とても暖かい……こうして貴方と触れ合える日が来るなんて、まるで夢のようですね」

「ボクの記憶が確かなら、いつも強制的に君の膝枕の刑に処されていたような気がするけど？」

「それはそれです。こうやって抱きしめあう事の悦びはまたひとしおなのですよ」

落ち着いた声音でそう呟いて、今度は心臓の鼓動を聞くかのように耳を当てて来る。その感触がなんともくすぐったくて、けれど別段嫌な気はしないからそのまま彼女を軽く抱き留め続けた。こんな事をする人間ではないという自覚はあるのだが、今度ばかりは逃げの一手は打たなかった。

どうしてマーキダは今の自分にも変わらずに親愛を向けて来るのか、そのことについてロマンが思考を巡らせ始めたその時、ちょうどマーキダが離れていく。上気した赤い頬が妙に艶めかしい。

「ふう、ひとまず満足できました。すみません、私の我が儘にお付き合いさせてしまって」

丁寧に頭を下げるマーキダになんて応えればいいのか分からず、その場しのぎで「別に構わないさ。取り敢えず座ろうか」などと咄嗟に言えた自分を褒めたい気分になった。

ひとまず彼女の手を引いて、普段自分が使っているベッドに腰掛けさせた。そのまま自分は椅子の方に座ろうしたところで、マーキダから白衣の裾を引かれる。何かと思って振り返れば、少しばかり潤んだ瞳でちょうどベッドの隣を指さしていた。おそらくは、隣に座ってくれというサインなのだろう。

そのいじらしい要望に従って、ロマンはマーキダの隣に腰掛けた。今度も非常に距離が近い。他人と打ち解けることが得意なロマンであつても、中々立ち入らせはしないパーソナル・スペースである。だけれどそう、他ならぬ彼女とのこの状況は、再三の通り決して嫌では無

かった。

「ソロモン王……いえ、ドクター。私からこれを聞くのはもしかしたら失礼に当たるかもしれませんが。ですがもしよろしければ、何故貴方がこの場にロマン・アーキマンとして存在しているのか教えてはもらえませんか？」

「分かった、ちよつと長い話になるけど、それで良ければ教えよう」

かつて聖杯戦争に召喚され、マスターと共に戦い勝ち抜いたこと。

自分にも聖杯で願いを叶える権利をそのマスターがくれたから、
人間になりたい”と願ったこと。

けれどその瞬間に『千里眼』によって人類の破滅が見えてしまったから、今日までいろんなことに手を出してその未来を防ぐべく行動していたこと。

そのような事を、掻い摘んでマーキダには語って聞かせた。思い返せば最初の契機から早十年も経っている。それとも、もう十年というべきなのだろうか。駆け抜けてきた人生に悔いはないが、とても早く過ぎ去ったように感じてしまうのはなんとも惜しい。これもかつてのソロモンでは一生分からなかったことだろう。

しみじみと感慨を覚えながら語り尽したロマンは、マーキダの反応を待った。今の語りでソロモンとロマン・アーキマンの違いについては良く分かったはずだ。この上で、彼女は何と言うのだろうか。もし、「やっぱり貴方のことは愛せません」と言われれば——そう考えるだけで得体のしれない不安に襲われるのは、もう自覚することにした。話を聞き終えたマーキダは、ゆっくりと目を閉じて、それから開いた。

「はあ……なんとも悔しいものですね。結局私は、貴方との約束を守りませんでした」

約束。それは確か、“貴方に心を教えましょう”というあのことか。結局はロマンは聖杯の力に頼って今のように人間らしくなれたのだから、その事をマーキダが悔しく思うのも無理はない。

だがそれを言うなら、むしろロマンの方だって思う所はある。

「違うとも、約束を守らなかったのはボクの方さ。君は確かに“私”

の内心にさざ波は立てたし、その感情に多少なりとも影響は受けた。でも、最後まで感情を真に理解することは“私”には出来なかった。君があれだけ出来ると言ってくれたのにこのざまだよ、どうか笑ってくれ」

「誰が——誰が笑うものですか。貴方は確かに人間だと私は言いました。だからこそ、貴方は願いを叶える段になって、“人間になりたい”と願うことが出来たのです。それこそがソロモン王が感情を理解できたことの、人間だという事の何よりの証じゃないですか」

先ほどと同じ、些かの迷いもない強い口調でそう言い切った。それはまるで昔初めて出会った時を焼き直しているかのようで。今この時だけイスラエル王国での一時を過ごしているような既視感に囚われて、なんとも懐かしい気分になってしまふ。きっと顔が笑みを浮かべているのだからそのせいだろう。

「でもほら、そうなるときつきも言ったようにボクと“私”はほとんど別人も同然だ。君はその……随分とボクを慕ってくれているようにだけど、本当にそれでいいのかい?」

「くだいですよドクター。さつきも言ったように、私はそれで構わないのです。だって貴方は、最初から何も変わってはいないのですから。ソロモン王であろうとDr. ロマンであろうとその本質はきつと何も変わってはいません。だから最初の出会いから貴方の事を気に掛けることが出来たのです。ほら、それなら何もおかしなことは無いでしょう?」

「……相変わらず、君は優しいね。人でなしの魔術王をまだそう言うのかい?」

「人でなし? ええ、だからどうしたと言いましよう。それに、私だってじゆうぶん人でなしなのでお互い様です」

クスクスと上品に笑うマーキダの目元が、だんだんと潤み始めていた。そして溢れた涙を一切隠そうともせず、彼女は顔を赤らめながらも正面からロマンと向き合った。

「一つ、貴方に言うべきことを約束していましたね。今ここで果たしても良いでしょうか?」

無言で頷いた。きっと彼女の言っているのは、最後の別れ際に告げたあの約束の事なのだろう。今ならどうあれそれに答えることが出来る。そのことがなにより誇らしくてたまらない。

「私は貴方の事が好きです。大好きです。愛しています。絶対に離れる気はありません。この意味、今なら分かってくれますよね？」

「……ああ、勿論だとも。ボクの方こそ——」

マーキダからのストレートな告白にどうにか応えようとしたロマンであったが、中々うまい言葉が出てこない。ちゃんと答えるべきなのか、それとも凝った言い方にするべきか。ここ一番では勇気を出せなくせに、こんなところでチキンな性根が出てしまうことにほとほと呆れてしまう。

それでもどうにか素直な言葉を舌にのせる前に、そつと彼女の人差し指をあてられた。傷だらけの白い指がいやに艶めかしい。

「それから先は、これから貴方が良い言葉を思いついた時で構いません。もう既に長い時間、再会できるかも分からない相手との再会を待ったのです。今更少し程度のお預けが何だというのでしょうか」

「すまないね、こんな時でも頼りなくて」

「それでこそドクターですよ。いいんです、隣に貴方がいるのならばそれで充分。言葉が無くとも満たされていますから」

その言葉通りに、マーキダはとても満ち足りた顔をしている。まさに幸せの絶頂期と言わんばかりのオーラを体中から放っているかのようだ。その気にあてられて、我知らずロマンもまた微笑んでしまう。

けれど次の瞬間、ロマンは人生最大の焦りと羞恥に突き落とされることになってしまった。

「そう言えば、どうして貴方は私の剣の真名を知っていたのですか？」

きつと過去をも見通す『千里眼』を用いたのでしようけど、昔のソロモン王ならばそんなこと決してしないでしょう。なのになぜ？」「そ、それを聞いてしまうのかい……!? ボクにとっても凄く恥ずかしいからちよつと言いつらいんだけど……」

予想される質問の中でも一番聞かれたくなかったことである。内

心、どころか思い切り表面に焦りを出しているロマンの姿を見ておかしそうに笑いながら、冗談めかした声でマーキダがさらに問い詰める。

「もしや、何かいかがわしい目的があったのですか？ ああ、そう言えば伝承のソロモン王は結構むっつりでしたよね。なんでしたっけ、鏡のように磨いた床の上にシバの女王を立てて、そのドレスの下を覗いたとか——」

「わーっ！ 待って、待ってくれ！ それは大いなる誤解というか捏造だから！ 本気にしないでくれって！」

その過度な反応にマーキダが大笑いしだした。つまりは予想通りという事なのだろう。してやられたと思いつつ、マーキダの述べた個所を振り返ってみる。

十年の間に様々な知識を吸収したロマンであるが、さすがにこの伝承を発見してしまった時はまず大笑いして、それから非常に恥ずかしくなったのを鮮明に覚えている。しかも他にも少し狡い罠を用いてシバの女王を強引に寝台に連れ込んだなんて逸話もあって、頭が痛くなつたほどだ。実際はダビデ王の仕業なのにとんだ濡れ衣である。

そんな捏造黒歴史をよりにもよってもう一人の当事者から指摘されてしまったのだからもうたまらない。まあさすがに彼女自身も分かかって言っているのだろうか。

期待通りのロマンに反応にひとしきり笑い続けたマーキダは、肩で息をしながら深呼吸してようやく話を元に戻した。

「そ、それで、実際のところはどのようなのですか？ 本当にそのような目的ならば私も流石に擁護できませんが」

「いいや違う、それこそ今はもうあんまり信じてない主に誓ってもいくらいに違う。……笑わないで聞いてくれるかい？」

念押しすると、マーキダは神妙な面持ちでももちろんですとばかりに頷いた。なのでロマンも仕方なしに覚悟を決めて、その時に抱いたと予想される己の感情を吐露して見せた。

「……………だつてほら、好きな人に喜んでもらいたいと思ったからさ」
もちろん、その時のソロモン自身にそんな感情が有ったかといえ

否だろう。だけど現実になにがしかの思いがあつて、それでわざわざ過去に遡つてまで剣の真名を見つけ出したわけだし、その理由をこうして現在のロマンが分析すればそういう事なのだろう。だから恥ずかしくて言いたくなかつたのだが。

ロマンにとつてみれば一世一代レベルの告白なのに、マーキダは黙りこくつたまままだ。沈黙がやけに痛く感じる。そのままたつぷり五秒は経過したと感じた時、いきなりロマンの視界が反転した。

「うわあッー」

情けない悲鳴を上げてしまう。気がつけば背中には硬くて柔らかい感触があり、つまりマーキダによってベッドに押し倒されたという事なのだろうと理解する。よく見れば目線の先には白い天井と蛍光灯が輝いていた。

白い光の眩しさに反射的に目を閉じようとしたところで、ちょうど影が差す。正確には、マーキダの顔がロマンをちょうど上から見下ろす形になっているのである。

「貴方はホントに……なんてことを言うのですか。そんな事を言われたら、下腹部がうずうずしてくるじゃないですか」

「え、えーと、つまりどういう事かなー……？」

わざと惚けたような声を出して聞き返すロマンだが、さすがにこの状況になればナニが起るかは嫌でも分かる。これはまずいと抵抗するもいつのまにやら手足を押しえられている。しかも相手はサーヴァントなのだ、これでは人間のロマンはとてども太刀打ちできそうにない。

どうにか首を捻つて足元の方を見やれば、既にマーキダのドレスの裾がかなりめくれている。そこから覗く白い太腿とガーター、それに少女らしい色合いの布切れをうっかり直視してしまったロマンは、急いで取り繕いながら目を逸らした。

ただ、肝心の本人はなんら気にしていないようだが。

「私がどれだけ貴方の事を愛しているのかを、今夜一晚でじっくりと教えてあげましょう。安心してください、私も貴方との経験以外ありませんので。……だからもう一度、貴方の体温を私にくれますか？」

「そ、そういう問題なのかい!? ほら、もっと女性らしい恥じらいだとかそういうのは!?!」

「そんなもの、媚薬を盛られて貴方に助けを求めた時点で今更じやないですか。なので諦めて私が貴方のものであるというのをしつかり覚え込んでもらいましょう」

「ぐっ、ぐぬぬ……も、もうどうにでもなれ……せめて優しくお願いします……」

諦めきった声でロマンが呟いた。まあ、良い方に考えればこれは嫌々やっている訳ではないのだ。その辺りに救いがあるだけまだマシというものだろう。

蛇に睨まれた蛙のような心情だが、これはこれでそんなに嫌では無いのだからもはや抵抗する気も失せた。なのでロマンは大人しく、そつと近づいてくるふつくらとした唇に身を委ねるのだった。

第五章 人理修復の旅

第二十八話 穏やかな日々

久方ぶりの快眠の後、ロマンは爽やかな疲労感と共に目が覚めた。時刻は午前五時を少し過ぎた頃。普通に考えればかなり早い時間だが、ロマンにとってみれば仮眠を取った後に当たり前のように起きる時間でもあった。

なのだが、なにやら妙に体がスースーして気になってしまう。いったい何があつたのかを思い出そうとして、まるで自分に抱き着くように眠っている全裸のマーキダの姿を見て即座に色々と思いついてしまった。

「まさか、ボクにあれだけ人並の欲があるなんてな……」

苦笑混じりに振り返ってみれば、昨夜の自分はまだあまりにらしくない気がする。普段の自分ならまずそういった行為をすること自体考えないだろうし、そんな時間を取るくらいなら人理焼却を防ぐために奔走する方が遥かに有意義だと切つて捨てることだろう。

なのにそう、昨夜だけはそういった諸々をすっかり忘れてしまっていた。思い起こすのも憚られるほどにいろんな行為に手を染めた挙句に、二人して裸で同衾してしまっただから言い訳のしようがない。

だけど自分の内心は、そういった行為を優先したことについてほとんど罪悪感を覚えていないのだから不思議なものだ。むしろ非常に良かったと思ってしまうあたり、相当この女性にやられてしまっているようにも思える。

「ん……」

その時、ちょうど隣で寝ているマーキダが身じろぎして、ついでゆっくりと目を開いた。覚醒直後のぼんやりとした瞳がしばし宙を彷徨い、その姿を無言で眺めていたロマンに向けられる。ちよつとだけ笑いかけると、彼女もまた微笑を浮かべた。

こういう時は何を言えば良いのだろうか？ 自問するも、答えなど

出る訳がない。なのでついつい昨夜の出来事を想い出そうとして恥ずかしくなるのを自制しながら、ロマンは努めて平静な声でありきたりな言葉を絞り出すことに成功した。

「やあ、おはようマーキダ。よく眠れたかい？」

すると彼女はゆつくりと目線を逸らして、一拍ほど意味をぽかんとした様子を見せる。それがだんだんと焦ったかのような表情に様変わりし始め、すぐに熟した林檎のようになってしまった。

「お、おはようございます。それはもうよく眠れましたとも……そ、その、激しかったですし……」

どうやら、マーキダもまた昨夜の事を思い出してしまったらしい。徐々に声を小さくして羞恥に溺れていくせいで、ロマンもまたつられて顔が熱くなっている自覚があった。

そして彼女は照れ隠しをするかのようにロマンの胸元に顔をうずめてしまった。そのせいで髪の毛の良い香りがふんわりと鼻腔に届き、部屋に満ちる饴えた臭いを打ち消してくれる。そんな彼女の頭を無意識のうちに撫でてしまうと、今度はまるで甘えた猫のように喉を鳴らして喜ぶのであった。

「まさか貴方から頭を撫でてもらえるなんて、夢のようです」

「こんなことで良いなら、時間があればまたやってあげるさ」

「ふふ、それはまた楽しみです。今度は私も存分に甘えさせてもらいましょう」

いや、もう存分に甘えているんじゃないかな？　なんて無粋なことはさしものロマンでも言わなかった。互いに少しづつ言葉をやり取りしながら、朝の穏やかな時間を共に過ごしていく。

とはいえ、何事にも終わりがくるものである。いつの間にかロマンの腕が止まっていて、やや不満げにマーキダが彼を見やると、困ったような表情をして腕を擦っている姿が目に入る。

「……ドクター？」

「あはは……さすがに三十分もやってれば腕が疲れてきちゃってね。こう見えて鍛えてる、なんてことも無いから持久力がないんだ」

「そんな……！」

思いがけずショックを受けた様子のマーキダにもう一度ごめんと謝ると、渋々ながら彼女は許してくれた。代わりに次回はいつもやっていた膝枕の約束を取り付けられてしまったのだが。

ともあれそろそろカルデアの職員達も動き出すだろうし、いい加減に自分達も色々その後始末をしなければならぬだろう。そういう結論になって、まずは交代でシャワーを浴びて身体を洗い、それから部屋の換気をしたりなど。これまた真っ赤になっていたマーキダの姿が印象に残る。

その後、なんとか誰の目にも留まらず慎重にカルデアを移動し、布団類をさりげなく洗濯用の機具に突っ込んでから再び部屋に戻った時には、既に三十分以上経過していたのだった。

「ふう、これで一安心ですか」

「そうだね。いや全く、レオナルドに見つかつたらなんてからかわれるか」

きつと大笑いしながら祝福してくれそうだが、それはそれとして恥ずかしい。そんな事をロマンが考えていると、マーキダが普段の真面目な様子を取り戻してロマンの様子をうかがっていた。

たぶん、彼女の聞きたいことは、

「貴方の正体、もしやダ・ヴィンチちゃんは……」

ロマンの予想通りであった。けれどこれは別に隠す事でもないから、正直に答えてしまう。

「知っているとも。というより、カレが唯一ボクの正体や、かつてのソロモン王^ポが見た人類焼却の未来を話した相手さ。だから他の人よりも少しばかり気安い関係なのさ」

言うまでもないが、このカルデアの職員達ともロマンの関係は非常に良好だし、大いに信頼できる相手だと今なら確信を持つことだろう。けれどかつては何が人理焼却のトリガーとなるかも分からず、故にロマンは誰にも本音を打ち明けることは無かった。それはかつてのマスターであるマリスビリーを始め、結果はどうあれ共に研鑽した友人であったレフ・ライノールや、カルデアの職員達とて決して例外ではない。

その中で、唯一あの天才にだけは多くの事を話したのだ。それはもちろんどうあれレオナルド・ダ・ヴィンチという人柄が信用に値する人物であったからだし、何よりロマンからの本当の信頼を勝ち得たからである。

「召喚されたサーヴァントだから、直接人理焼却に関与する可能性は低いと最初から考えてはいた。それでも念のために初めの内は何も話さなかったのに、向こうはどうやら勝手にボクを気に入ってしまったらしくてね。それで気が付いたら絆されて、今に至るってわけだよ」

きつとカレが居なければ、今のように多少なりとも余裕と冗談を備えた自分は出来なかったことだろう。それを思えばカレには感謝こそすれ、邪険にするなどとてもできない相談である。

そんな感慨も込められたロマンの言葉に、果たしてマーキダは合点がいったかのように手をポンと叩いた。

「そうでしたか。じゃあ、ダ・ヴィンチちゃんは私にとっても恩人な訳で……いやそれよりも、彼女だけは貴方の特別という訳なのです。……ちよつとだけ妬いちゃいます」

「まあ、今じゃ君もそうだから二人に増えたのだけどね」

あくまでも事実としてそれを告げると、途端にマーキダの表情がパツと輝いた。よほど今の言葉が嬉しかったのだろうか。頬を抑えて「特別……特別ですか……ふふふ」などとうつとり呟いている。

どう見ても恋する乙女よりもなお進んだ姿を見て、意外と女の子って単純なところがあるんだな、なんて柄でもない感想をつい抱いてしまったロマンである。

ちなみに、ダビデにロマンの正体を告げる気は特に無かった。育児放棄も甚だしいあの父親が自力で気が付くとはとても思えないし、かといって自分から言ってしまうばどれだけ弄られる羽目になるか分かったものではない。そう言う理由で、ロマンとしてもダビデに伝える気はこれっぽっちも無いのであった。

「ともかくそういう訳だから、カレ以外の前ではボクの正体に触れるような言動は避けてもらえるかと助かる。いや、まあ、本当は話しても

良かったのかもしれないが、今はそうも言っていられない状況になったからね」

「……あの“もう一人のソロモン王”の事ですか」

察したらしいマーキダに、ロマンは無言で頷く。

そして話題の転換と共に自然と顔が引き締まるのを感じた。マーキダも先ほどまでの色ボケな姿は鳴りを潜めている。なんといつてもここから先はカルデアの、ひいては人類の行く末を占う核心に触れるのだから。

「今回の件の黒幕について、君がその姿を見てソロモン王だと断定したのだから、少なくとも外観については魔術王で間違いないのだろうね。ただ、その中身が分からない。考えられる可能性はいくつかあるけれど——」

「いわゆる黒化による反転現象、こちらでいうオルタさんのようなものですか。内心はどうあれ民の為に行動をしていた魔術王が、方針を変えた結果として人類を滅ぼすことを決めた可能性がまずひとつ。後はそう、本当に皮だけを借りた別の存在である可能性が二つ目。その場合はいったい何が魔術王の皮を被っているのかということになります」

「その通りだ。話が早くて助かるよ」

説明する手間が省け、嬉しそうにロマンが頷く。

マーキダはさも当然であるというかのように朗らかに笑った。

とはいえ、オルタ化というのはあまり考え辛い話であるのだが。なにせ彼はどうあれ空っぽである。だから反転しようにも反転する土台がまず無いのだ。そうなると二つ目の可能性、魔術王の皮を被った何かという話になるのだが——

「自力で蘇ったなんて言っていたが、そんなことが可能なのか？ 聖書にいわく、神の子は三日後に甦ったなんて聞いたけど……」

「その話の真偽は難しいところです。マルタさんにも聞きづらいですし、ひとまず肉体自体がソロモン王の物であるとだけ考えておけば良いのでは？」

なるほど確かに、その結論は間違っていないだろう。ソロモンを

名乗ったナニカの発言が正しいのならば、少なくともそれだけは確実であるはず。

だからだろうか。ふとロマンの頭の中にある秘策が思いついた。その案を吟味してみるべく、いつもしている左手の手袋を取り払う。

「……いざとなれば、これの出番だね」

「? それは何?」

手袋の中から出てきた指に嵌まっているのは、真鍮で出来た鈍い輝きを放つ指輪であった。シンプルな飾りであり、強大な魔力を放っているだとかそういう事は決してない。なのだが、どこか無視することのできない、不思議な圧を発していた。

これこそは、ロマンの考えた最大の秘策。その鍵を握るもの。自身に起こる最悪の結末を度外視すれば、きっとこれ以上ない解決策となってくれる存在であった。この情報もダ・ヴィンチちゃんには話しているのだし、同じくマーキダと共有してしまっても問題ないだろう。

だけど彼の口は、この瞬間に自身でも驚くような滑らかさで本心とは違う言葉を吐き出してしまっていた。

「これはソロモンが所持するとされる十の指輪の、その一つさ。いざとなればこの指輪を用いて、本物のソロモンとして偽物の持つ残りの指輪の支配権を取り戻せるかもしれない」

「本当ですか!?!」

その言葉に、ほんの一瞬ロマンは返答に詰まった。ちゃんと真実を話すべきか、それともこのまま優しい嘘を吐くのか。どちらも正しいし、どちらも間違っているような気がしてならない。

もし真実を話したならば——きっとマーキダは止める。何がなんでも止めようとする。けれど指輪の使用と引き換えに人理焼却が阻止できるのなら、あるいはやるかもしれない。今はまだ全然そんな覚悟は無いが、その時になってどう転ぶかなど全能でない彼には何一つ分からないのだから。

——それになにより、これを話して悲しむ彼女の姿は見たくないと感じてしまっていたから。

「ああ、その通りだよ。でもこれはボクとソロモンを名乗る何者かが直接対峙した時にだけ扱える物だから、それまでは無用の長物だけだね」

笑顔の仮面を被りながら、自身を慕う最大の人物に残酷で優しい嘘をついたのだった。

◇

第四の特異点をどうにか解決に導いたカルデアは、しばしの間休息を取るようになっていた。それというのも、次の特異点の座標を正確に固定しレイシフトの準備を整えるまでの時間がこれまでよりも長くなってしまっているらしい。

なので既に十日が経過した現在でも、カルデア内部は比較的のんびりとした空気が漂っているのであった。

「ねえ、マーキダ？ あなた最近なにか良い事でもありましたか？」
「良い事ですか？」

ことりとテーブルに湯呑を置く音が、人気のない食堂に響いた。不思議そうに聞き返したマーキダの前には、これまた目の前に湯呑を置いたマルタの姿がある。

マルタは座っているマーキダをしげしげと眺めてから、ほうと息をつく。何処か釈然としない顔であった。

「いやほら、最近のあなたってやけに毎日嬉しそうというか、人生楽しんでますオーラが全開といえますか……とにかくこの前よりも雰囲気や仕草がとても艶やかになってるように見えるのよ」

「はあ、そうですか？ 私は普段通りな気がしますが」

「いいえ、絶対なにかあったわ！ 私の中の何かがそう告げています！」

ダンツ、とテーブルを叩く音が響き、湯呑の中の液体が大きく跳ねた。それを見てマズそうな顔をしたマルタであったが、中身が零れていない事を確認して安堵の色を覗かせる。

そしてマーキダと言えば、内心でかなり焦っていた。確かにここしばらくの間、傍から見て自分だけやけに浮かれていたであろう自覚はある。普段はカルデアの職員達の仕事を手伝いながらさりげなく口

マンの近くに陣取り、そして夜になると部屋でひたすら猫のように甘え続ける日々。他の者が聞けば何をしているのかと頭を抱えるだろうが、彼女にしてみれば完全無欠の毎日である。

その一方でマスターはマッシュやオルタと共にトレーニングルームで訓練、アンデルセンは面白可笑しく生きながらもロンドンから持ち帰った情報などの吟味を行い、マルタは料理を振舞ったり聖女らしく悩みのある者に説教したりと精力的に活動していた。ダビデすらこの前のソロモンを見て何か思う所があったのか、ここしばらくは何処かで大人しくしているようである。

なので端的に言って、マーキダがどこか変わったというマルタの言葉は実に正しかった。とはいえどうしてマーキダの雰囲気が変わったのかは言うことが出来ない——もちろんロマンの正体に関わるからだ——ので、ひとまず適当な言葉でお茶を濁すことにした。

「実はここ最近でドクター観察日記が結構埋まってきたものにして。そろそろ私が抱いていた妙な違和感が解明されるかと思うと楽しくなってきたのですよ」

別に嘘は言っていない。確かにこれまではロマンの動向が気になっていたのは事実だし、そのためにわざわざ『智慧と王冠の大禁書』に記録を取ってもいた。結果的には意味を失くした行いだっただが、それでも無駄とは考えないのはひとえに愛は盲目ゆえか。

けれどそれを聞いたマルタは、やや気まずそうに目を逸らした。まるで見てはいけないものを見てしまったかのような反応に、マーキダがどうしたのかと聞き返す。

「……いやだって、それって明らかに危ない香りがしますけど？ 本人の了承を得ているからまだ良いものの、それ以上踏み込んだら確実に変態の仲間入りするわよ」

「あはは、それは確かに……そのあたりのさじ加減は気を付けますとも」

最近では自分で読み返しても恥ずかしくなるような記録も一緒に付けています、などととはとても言えない空気であった。頭の中が桃色というか、夢見がちすぎる思考になっている自覚はあるが、止まらない

し止まる気もない。

だって、愛しい人のこれまで知らなかった色んな面を知りたいと願うのは、とても当たり前前の事ではないかと思うのだから。

◇

「さてと、君はこのままでいいのかな？」

雑多に物が散らばる部屋に、青年の声が響いた。どことなく気の抜けるようなのんびりとしたそれは、聞くものが聞けば巧妙に本心を悟らせないようになっていると気がつくだろう。

そしてその質問に答えたのは、何やら複雑怪奇な機械の正面に陣取っている美女であった。

「このままでいいとは何のことだい？ さっぱり意図が見えないが」

「いやいや、君ほどの人間が僕程度の思惑を見抜けない訳がないだろう？ 本当は分かってるんじゃないかい？」

青年、ダビデの言葉に部屋の主であるダ・ヴィンチは押し黙った。どう答えればいいのか言いあぐねているようなその姿に、ダビデが返答を待たずに先手を打った。

偉大なる九賢人の一人は、まるで教義に逆らう悪魔になったかのような心境で囁く。

「だってほら、このまま行けば明らかに君は押し負ける。当然の結末だ、三千年も前からあれだけ一途に想い続けた彼女に勝てる目は皆無だろうからね」

「……それがなんだと言うのかな？ 私は彼と彼女の関係を祝福こそすれ、邪魔する気なんてこれっぽっちも無い。理解したならばさっさとこの部屋から出て行きたまえ。私も暇ではないのでね」

突っぱねるようなその口調は、常に漂わせているような余裕を感じさせない、どこか他人行儀な言葉であった。もちろんその変化にダビデは気が付いているし、故にその本人でも自覚していない隠された余裕の無さを利用しない手は無かった。

本人達以外にはこのカルデアでもほとんどの者が知らない情報、その一つをここで開陳する。左手の指で二を作り、右手の指で五を示す。

「ここだけの話、シバの女王がイスラエルに滞在していたのはたった二ヶ月だけなんだ。それを踏まえれば、召喚から五年の間ずっと一緒にいた君の方が実は遥かに縁は深い。どうか、これでもまだ分からないとは言わないだろう?」

確信を持ったダビデに対して、ダ・ヴィンチは苦し気に呻いた。まるで、それだけは許されなくても言うかのように。何かを躊躇うかのような苦い表情を見せて、静かに目を伏せる。憂いを帯びたそのかんばんせはどこまでもダビデ好みであったが、敢えて茶化すことも口説くこともしなかった。

ここまで話が進めば、ダビデはもう目的を果たして満足していた。なので爽やかな笑みを浮かべてダ・ヴィンチの工房から退出すると、誰もいない廊下を一人ごちながら歩いて行く。

「まったく、二人とも君にはもったいないくらいにいい女じゃないか。それなのにこの僕がその恋路を応援してあげるんだから、どっちも上手いこと娶ってくれればいいんだけども」

今の僕には性欲ソドムも同性愛ゴモラも関係ないからね——なんて嘯きながら、彼は一人歩いて行くのであった。

第二十九話 バレンタイン

「そう言えばドクター」

「ん、なんだい？」

何気ないマーキダの問いかけに、これまた気負うことなくロマンが答える。テーブルを挟んで座っている二人の前には仄かに湯気を立てる湯呑と、どこから持ち出したのか煎餅の乗った器があった。

場所はいつも通りロマンの自室、時刻は既に深夜を過ぎたか。今日も今日とてカルデアの仕事は盛りだくさんであった。特に現状は第五の特異点へのレイシフトをする算段が整っていないのだから、余計に職員達の仕事も多岐に渡る。だから今はその小休止、明日もまた努力を続ける為に一時の休息を得る時間であった。

「バレンタインというイベントが現代にあると聞いたのですが？」

「うげっ……」

言うだけ言ってから素知らぬ顔でお茶を啜るマーキダに、ロマンがしまったという表情を見せた。慌てて近くのカレンダーに目をやれば、日付は既に二月の上旬だ。あと十ヶ月もないうちに人理焼却を防がなくてはならないという焦りも生まれるが、それ以上にこの状況をどうするべきかに頭を悩ませる。

バレンタイン、もちろんそれは女性側が好意を持った男性にチョコを渡すという行事だ。当然ながら現代に生きて実に十年目のロマンも、楽しんだかはさておき知識としては知っている。

「なんですか、そのおかしなうめき声は。普段ののんびりした貴方らしくもない」

「い、いやあだつてね……ボクは別段そういう行事に縁があったわけでもないし……」

躊躇いがちにそう告げるロマンだが、決して嘘という訳ではない。幾つかの理由があって、これらの行事には不参加だったのだ。

まず初めに、そんな事にうつつを抜かしている暇が無かったというのが一点。チョコと人類の未来のどちらが大事かといえば、迷わず後者を選ぶ。当たり前だろう。

第二に、そこまで親密になった女性がいけないというのがあげられる。今は亡きオルガマリー・アムスフィアはチョコをくれるような人物では無かったし、他の女性も義理チョコを幾つかもらう程度の関係だった。これまた普段のロマンの行動を見ていれば順当な結果である。

そして最後、第三は――

「もしや」他の人は恋人がいて羨ましいなくとか、「これだからカップルのいちやつくバレンタインは嫌なんだ」とか、そんな事を考えていたのでは？」

「ぐうっ！ それを言ったらお終いだろう！」

今度こそはつきりとロマンが吠えた。それから今が夜だという事を思い出して慌てて口を押える。そんな彼の姿を見て、マーキダはやれやれと言うかのように首を軽く振った。

「……だってほら、考えてもみてよ。ボクってこんなだからもてるとかそう言うのに縁が無くてね。この研鑽の十年の間に他者からの愛情を求めていたなんてつもりはこれっぽっちも無いけど、少しくらい羨ましいと思うのも仕方ないと思わないかい!？」

割と切実な、悲しいくらいの本音の吐露であった。この世界に生きている時点でロマンとしては間違いなく充実した人生リアルを送っているのに、それはそれとして思う所があつたらしい。

一応今の言葉の中にも世界を救うための重たい覚悟が見え隠れしているはずなのに、まるでそのように感じられないのはある意味ロマンの人徳なのか。少なくともマーキダは心外そうな目で彼を見つめている。

「……今の貴方は、私という恋人を手に入れた俗にいう“リア充”というやつなのでは？」

「……はっ！ そう言えば確かに！」

ハツとした顔でロマンが顔を上げた。

「それに考えてもみてくださいよ。もし三千年前にバレンタインというイベントがあつたらどうなつたと思います？ ……まあ、業腹ながら貴方はモテモテだつたでしょうとも。ですが――」

微かに拗ねたような口調でマーキダが言葉を切り、机の上の煎餅に手を伸ばした。そしてつられてロマンも湯呑を傾けながら、彼女の言葉の先を連想してしまう。

まず思い浮かぶのは、愛多きソロモン王というフレーズだ。その名の通りに彼はおよそ千人という莫大な人数の女性を侍らせたハーレムを築いていたというのは史実に語られる通りであり、これに関してはロマンも否定する気はない。

けれど、そうなればもしかして大変なことが起きるのでは？ 思い至ったロマンが冷汗を流し始めたところで、とどめを刺すかのようにマーキダがゆっくりと囁く。どこか楽し気で、蠱惑的な声色である。「きつと、誰も彼もがチョコを作ろうとして暴動が起きますね。王国の力カオ豆の値段は高騰、店は暴徒と化した婦女子方により恐ろしい目にあつて続々と閉鎖していく中で、後宮の中は力カオと砂糖の苦くて甘い香りで埋め尽くされる」

考えるだけで胃がキリキリしてくる光景である。だがマーキダによるイスラエル王国バレンタインは止まらない。

「そのおぞましくて暴力的なまでのチョコチョコした空間にいよいよ貴方が耐えられなくなった頃に、とどめを刺すかのように千を超えるチョコの山が――」

「うわあああああアツ！ ま、待って、やめてくれ！ 想像したらお腹痛くなってきた！」

そこまでが限度だった。思わず悲鳴を上げて耳を塞いでしまったロマンを責めることはできないだろう。誰が好き好んで千個規模のチョコレートがやってくるところを想像したがるのか。しかもそれらには悪意が一切ないのだから性質が悪い。三千年前にバレンタインというイベントが存在しなくて本当に良かったと感謝するほかない。

どうしようもなく恐ろしいチョコ地獄にロマンが呻いている隣では、なにやらマーキダが顎に手をやって思索している。最初は真面目な顔つきだったのが段々と蕩けていくような不可思議な変化に、さしものロマンも我に返った。

「ど、どうしたんだい……?」

恐る恐る訊ねたロマンに、マーキダは満面の笑みで答えた。

「いえ、考えてみればカカオの主な産出地は今でいうアフリカの方だという話じゃないですか。そして私のシバの国はアフリカの地とイスラエル王国を結ぶ懸け橋になる訳でして……やっぱり私達ってどう転んでも結ばれる仲だったのではないかと思ひまして」

これが世にいう赤い糸というものでしょうか、などと真顔で聞かれてしまい、さしものロマンも言葉につまる。確かに一人の女性からこれだけ想われて、嬉しくないと言えば嘘になるだろう。とはいえまさか聡明な彼女が、此処まで恋愛脳に堕ちるとは予想もしていなかった。これはいつそ戒めるべきなのだろうか? 一応は責任ある立場の者として考えてしまふのだが、それよりもマーキダが立ち上がる方が早かった。

「バレンタイン……まさしく女の腕と真心が試されるイベント……本気で臨むしかありませんね、これは……!」

「あ、あはは……ほどほどにね?」

力強くチョコ作りに闘志を燃やし始めたマーキダを前にしては、ロマンとしてもはや乾いた笑いしか出ないのだった。

◇

早速チョコを作ろうと画策を始めたマーキダではあるが、かといってチョコを作ったことがあるかといえは当然ない。もちろんカルデアのパソコンは現在ネットに繋がらず、そちらを使って調べることが不可能だ。なので誰かに作り方を尋ねるのがもつとも近道である。

だから、この結論に辿りつくのは当然の帰結といえた。「それで、私のところに来たってわけかい。うんうん、素直なのは良い事だ」

カルデアの厨房にて、ニコニコしながら頷いているのはカルデアの誇る万能サーヴァントであるダ・ヴィンチちゃんである。マーキダの頼みで呼ばれた彼女の手には一冊の料理本があり、また何故だか顔には眼鏡がかかっている。

「……それは?」

「うん？ この眼鏡の事かい？ ほら、人に何かを教える時は眼鏡をかける方が雰囲気出るって言うだろう？」

「そうなのですか？ いえ、似合っているとは思いますが」

「現代人にとってはそうらしいよ？ ま、そんなことよりだ。ようこそ、ダ・ヴィンチちゃんのチョコレート工場へ！」

「は、はあ……よろしくお願い致します」

結局その眼鏡は何なのかや、そもそも工場という規模でもなければ貴女のものでもないでしょうというツツコミを呑み込んで、マーキダは真面目な顔つきで目の前に揃えられた材料たちに目を向けた。元は紀元前の女であるマーキダからすれば、ここに在る材料がどうすればチョコになるのかイマイチ分かりづらいというのが本音である。

それでも、いざ作り始めてしまえばこれが中々早かった。それはダ・ヴィンチちゃんの指導の手際が良いというのもあるだろうし、これまで何だかんだとカルデアで料理を続けて来たマーキダの腕前もあるだろう。とにかく互いにテキパキとやるべきことをこなし、特に大事もなくチョコ作りは進んでいた。

「それにしても、結構な量を作るみたいだけど、こんなに作ってどうするんだい？」

ダ・ヴィンチちゃんがそう訊ねて来たのは、既に湯煎したチョコを型に流し込む段階であった。ゆっくりと零さないように型にチョコを流し終えたマーキダは、唾を飛ばさないように静かに答える。

「それはもちろん、カルデアの職員の皆さんにも配ろうかと思いましたが、ほら、職場の同僚には義理チョコというのを配る風習もあるんじゃないですか。私もそれに倣おうかと」

「へえ、てつきり私はロマニにだけ作る気なのかとばかり。これだけの量は本命のための試金石だと思ったよ」

確かに、見ればマーキダが作っているチョコはだいたい同じ形のちよつとしたものである。一つだけ明らかに造形に凝ったチョコがあるのだが、それ以外は量産品のような印象を感じさせる。

だからこそ敢えて意地悪くダ・ヴィンチちゃんが問いかければ、マーキダは心外そうな顔をしてみせた。

「ま、まあそれも否定はしませんが……他の人への贈り物に手を抜いたつもりはありませんよ。むしろ練習にこそ全力を注ぐべきでしょうから」

「うん、確かにそれも道理だ。疑って悪かったよ」

素直に謝罪したダ・ヴィンチちゃんにマーキダが無言で答え、しばし沈黙が両者の間に横たわる。その間に型にチョコを流し込む作業は終わり、テキパキと冷蔵庫の中に入れて冷やし始める。こうなれば二人にやれることはほとんど無い。

手持無沙汰になり、二人して何気なく厨房のどこかしらに寄りかかる。後片付けをしなければならぬのだが、お互いにそれをする気にはなれなかった。理由は分からない。ただ本当に、なんとなくだ。

「そう言えば」

「なんですか?」

「今度立香君がサーヴァントを新たに召喚しようか悩んでいたな。このまえロンドンのような事態が起きた時に対処できるようにするべきか、真剣に考え込んでいたよ」

「そうでしたか……それを知らなかったのはサーヴァントとして迂闊でした」

「そうだね、最近の君はちょーつとばかり色惚けすぎだ。君のこれまでを思えば無理もない気はするが、もう少し分別を持つてくれたまえ」

「……返す言葉もありません」

自覚はあったのか、しゅんと肩を落とすマーキダ。そんな彼女にダ・ヴィンチちゃんも僅かに含みのあるような、けれどいつも通りの屈託のない笑顔を向ける。

「よしよし、自覚してくれればそれでいいさ。私も別に君たちの仲を邪魔するつもりは——」

ほんの一瞬、何かを躊躇うかのような態度を見せてから、

「——これっぽっちもないからね。あの背負い込みたがり屋と、上手い事やってくれたまえ。君ならそれが出来るさ」

それは何の裏もない、ただ本心からの祝福を伝えるだけの言葉で

あつた。純粹にマーキダの行く末を祝つてくれる彼女に対して、マーキダはそれ以上に顔を綻ばせた。

「貴女にそれを言われるのはとても光榮ですね」

「ほう、それはまたどうしてだい？」

興味を惹かれてダ・ヴィンチちゃんが問いかける。

するとマーキダは、さも当たり前のように、そしてどことなく誇らしげに語りだす。

「だって、もし貴女が居なければ、きっとあの人は今のような人にはなつていなかったことでしょう。それを思えば、先駆者として、私に出来なかつた事を成し遂げた貴女にはとても感謝しているほどですよ。それこそ——」

もし私が居なければ、きっと彼を幸せに出来るのは貴女だったことでしょう——と。

真つすぐに悩める天才を貫いたその言葉は、一切の揶揄も含みもない、純粹に心からマーキダが感じている事であつたのだろう。告げられた感謝の気持ちも本物であり、共に一人の男に深く関わる仲間として誇らしげにすら感じているのがありありと分かるほど。

故にこそ、ダ・ヴィンチちゃんは困ってしまった。彼女から向けられる友情は嬉しい。だけどこれでは……

「ねえ、マーキダ。もし私が——」

正直に話すべきか。いやしかし、今更そんな事を言つて良いのか？

第一自分は本当にそうなのか？ 頭の中はまるでごちゃごちゃで、これでは天才の名折れとなつてしまう程だ。そんな中で必死にはじき出した結論は、

「いいや、なんでもない。すまないね、忘れてくれたまえ」

「ん、そうですか」

マーキダの方もそれ以上踏み込むことはなく、会話はそこで静かに途切れた。またしても穏やかな沈黙が場に横たわる中で、今度はマーキダがポツリと呟く。

「……今日は、私の我が儘に付き合つていただいてありがとうございます」

「……なに、どうってことないさ。仲の良い二人の幸福を手助けするのは、当たり前的事だろう?」

さも当然であるかのように、笑みを浮かべて万能の天才は嘯くのだった。

◇

そして来るバレンタイン当日——の深夜。ちょうど二月十四日の零時を過ぎた頃であった。

「ハッピーバレンタインですよ、ドクター!」

部屋に入って開口一番にそう叫んだマーキダに、しばしロマンが衝撃で固まった。彼女の背後ではドアが機械的に閉まり、廊下と室内を遮断する。

突然の来訪者に炬燵でパソコンと向き合っていたロマンはやはり無言であり、けれど何も言わない訳には行かなかったからマーキダへを視線をやる。

「えーと、今のは?」

「……バレンタインってこうやって祝うものだどダ・ヴィンチちゃんから聞いたのですが」

不思議そうに首を傾げるマーキダに、ロマンはがっくりとうなだれた。なんというか、最近の彼女はやっぱり昔に比べて少しばかりうっかりというか抜けている面が出来ている気がしてならない。普段の彼女ならもう少し慎重に事を進めるのではないだろうか。

「なんてこつたい、それは間違いなくカレにからかわれてるから今すぐ忘れるんだ。普通そんな風に祝うのは誕生日かクリスマスだけだよ」

「そ、そうなのですか……!」

どうやらカレの虚言を本気で信じ込んでしまっていたらしい。真っ赤になってあたふたしたマーキダは数秒ほど慌て続け、次いで深呼吸して落ち着きを取り戻した。

それからロマンの元までやって来ると、炬燵の中に足を潜り込ませた。机の上にはいつのまにやら彼女が持ってきたらしきリボンで包まれた小箱が乗っている。さすがにここまで来れば、ロマンも一度自

分の仕事を中断した。

「えーと、その、とんだ失敗をしてしまいました。本日はバレンタインなる日の当日なわけです……なのでこれを受け取ってください！」

必死な形相で差し出してきたのは、やはりというべきかりボンのついた小箱である。可愛らしくラッピングされたそれは少しばかり拙く見えるところもあるが、それが逆に手作りの初々しさを物語っているのだから責める気にはなれない。

恭しく差し出してきたそれを両手で受け取れば、開けてみて欲しいと言われる。なので慎重にリボンをほどいて中を検分してみれば――

「指輪？」

「はい、指輪です。今の貴方には一つしか指輪が無いらしいですから、それを補うための九つの指輪です」

中から出てきたのは、手のひらよりも少し小さい程度の大きさの指輪であった。正確にはチョコで作られた指輪が九つあり、黒茶色をした全長が光を反射し照り輝いている。

手に取ってしげしげと見まわしてみても、シンプルに指輪の形をしたチョコでしかない。いや、よく見れば指輪チョコの外側には何かうつつらと文字が彫り込まれている。おそらくはヘブライ語だろうか、今のロマンでは少しばかり解読には時間がかかりそうである。

「こ、このチョコは魔術礼装とかそういうのじゃないよね？ 具体的には指輪に魅入らせるとかそういうの」

「いや、そんな事をさせてどうするんですか。やるならむしろ私に魅了されるように魔術をかけますからね」

「……やってないよね？」

「やってません！」

少しばかり怒ったように頬を膨らませて、ふいとマーキダが顔を逸らした。それからやっぱり気になるのかちらりとロマンを見やり、そしてゆつくりと彼を見つめた。

「二つ、食べてみてくださいますか？ 感想が聞きたいです」

「ふう、分かったよ。それじゃいただきます」

指輪チョコを一つ手に取って、口に放り込む。ちよつと溶けたところをゆっくりと咀嚼して味わってから飲みこむ。すると口の中いっぱい甘みと苦みが広がって、ちよつとよい所で絡み合う。

「うん、これはいいね、とつても美味しいよ。だけど意外だ、君の事だからもつと甘味を増やしてくると思ったのだけど」

「あー……最初はそうするつもりだったんですけど、よくよく考えたらそれも健康に悪いと思って少しばかり控えめに……嫌でしたか？」
不安そう訊ねて来るマーキダ。もちろんロマンの答えは決まっていた。

「まさか。ボクとしてはこれくらいが一番ちよつとよいさ」

「そうですか……！ それなら良かったです。ダ・ヴィンチちゃんの意見を取り入れて正解でした」

どうやら、自分の好みはカレに筒抜けであつたらしい。そのことにちよつとばかりロマンは複雑な思いを抱きながらも、ホツと胸をなでおろしたマーキダを眺める。それからぺったりと机に寄せられたマーキダの頭をちよつとだけ撫でてあげれば、シバの女王はまるで猫のように甘えた声をあげるのだった。

第三十話 第五特異点

野營の為に建てられたテントは、この時代^{18世紀}における最新型のものだ。とは言っても現代のそれに比べれば、あいにくながら質で劣る点があるらしい。忍び寄る冷たい風に頬を撫でられ、藤丸立香は目が覚めたのだった。

まず見えたのは真つ暗な天上。次いで頭を少し横に倒すと、入り口あたりが薄ぼんやりとランプに照らされているのが見えた。きつと、アメリカ側の兵士たちが見回りをしているのだろう。なにせ明日は決戦当日、いよいよこの大陸の人理を乱す者達との決戦に挑むことになるのだから。

「少し外に出てみようかな……」

寝起きの頭は二度寝を立香に許してくれなかった。どうやら緊張のせいらしく、頭は数秒経つごとに冴えていく。仕方がないので立香は起き上がると、テントの外へと出てみた。

やはり外は騒がしい。まだ朝日を拝むには早い時間だというのに、誰も彼もがひっきりなしに戦争の為に準備をしている。その喧騒をテントの入り口で眺めて、立香はこれまでの出来事を振り返る。

人理修復をこなす彼らの現在地は第五特異点、一七八三年のアメリカ大陸である。神代を過ぎて神秘の薄れたこの大陸には、聖杯の力を用いて顕現したケルトの兵隊たちが跳梁跋扈している。彼らの首魁であるクー・フリーンとメイヴは多大な戦力を以てアメリカ大陸を征服し、そしてケルトによる王国を打ち建てることを目的として動いている。

それに対して、アメリカを守る為に戦うのが“大統王”を名乗るトーマス・アルバ・エジソン率いるアメリカ軍である。こちらは一般兵を機械によって強化し数の差を縮め、また数は少なくとも一騎当千のサーヴァントの手を借りることでケルトをよく押し留めていた。

それでもエジソン側は劣勢に立たされてのだが、ここに第三勢力としてアメリカで活動していた集団に加え、カルデアからやってきた藤丸立香たちが紆余曲折の末に合流したことで流れが変化した。よう

やく反撃の目途が立った彼らはついにケルトの軍勢と、それを率いるメイヴたちに打って出たのだ。

立香たちは戦力を二つに分けて、時間稼ぎと本命とに分かれた。現在は分かれてからしばらく経った後、まさにこれから敵陣地に殴り込みをかける直前というわけだ。

「おや、何をしているのですか？ 戦いの前に睡眠不足はあまり歓迎しません。今からでも寝付けるようにしましょうか？」

唐突に声を掛けられ、思考から引き戻される。見れば赤い軍服の女性、苛烈な意志を窺わせる瞳で立香を見つめていた。

「あ、ナイチンゲール……いや、オレは大丈夫だよ。もう十分寝させてもらったからね」

「……ふむ、確かに顔色は良好ですね。極度に緊張した様子もない。理想的な状態のようです」

どうやら近くにいたらしい。やってきたのはこの大地で最も早く遭遇したサーヴァント、バーサーカーのナイチンゲールだった。彼女は患者を救うためにありとあらゆることを——それこそ病人を救うために病人に無茶な要求をする——行うが、その心は本物だ。きつと先の言葉も、上手く納得させてかわさなければ立香を気絶させてでも寝させようとしたのだろう。

ともかくこのタイミングでナイチンゲールと会えたのは幸運だったかもしれない。

「他の皆はどこに居るの？ 起きちゃったからオレも何か手伝いたいな」

せっかくだからと提案してみれば、ナイチンゲールは柔らかく微笑んだ。それこそ普段の苛烈さからは想像もつかない、あたかも天使のように。本人が聞けばきつと笑い飛ばしてしまうのだろうか。

「いい心がけです。例えどれだけ微小な事の積み重ねであろうと、それこそが病人を救うための第一歩となるのよ。アナタもそれを分かってくれたようで何より」

「そんなに特別な事でもないと思うけどね」

照れくさくて笑いながら、二人して本営へと歩いて行く。その間に

もアメリカ軍の人間達と何度となくすれ違う。誰も彼も決死の顔つきで、そこには悲愴も恐れも浮かんでいいる。だけどそれでも諦める事だけはしない、前を向いた力強い顔だ。

これが、現地で生きる人々の底力なのだろうか。自分たちの居場所を守る為に戦う人々なのだろうか。ともすればそれは世界を救うために戦う立香よりも立派に見えて、自分自身に疑問を持ってしまう。

——自分は本当に、彼らの仲間と胸を張って言えるのだろうか、と。
「……オレは、どんな顔をしているのかな」

「ふん、論ずるまでもないだろう。汎用的で凡庸すぎるただの少年が、汎用的で凡庸だが一端の顔をする少年にはなったといったところか」
思わず漏れ出た疑問の声に答えたのは、意外なことにとどこからともなくやってきたアンデルセンであった。結局持ち前の観察眼を頼られアメリカ中を連れまわされた彼はやや不機嫌そうな表情で、けれどもどこことなく優し気な声で立香の事をそう断じた。

「えっと、それは……？」

「言葉通りの意味だ間抜け。最初はただそこに居たから選ばれた平凡な男だった。それが今は、ありきたりな人間ではあってもありきたりではない業績を成し遂げている。まったく、小説にでも書き起せば三流もいい所なチープでつまらん逆転劇だな」

呆れたように吐かれた言葉は刺々しい。けれどその言葉をよく聞けば、決して否定をしているわけではないとわかるだろう。ファースト・オーダーを終えて以来の付き合いとなる立香からすれば彼の言葉はただの励ましにしか聞こえないし、それはナイチンゲールからしても同様だったのだろう。

「アンデルセン、アナタの言葉は何故そうも回りくどいのです。それではいざという時、患者に現在の状況を伝えることが出来ません。もう少しはつきりと自身の述べたいことを告げれば良いのでは？」

「なんだ、まさかお前、俺がツンデレだとも思っているのか？ だとすればお笑い種だなあ！ 俺はただ俺の思ったままに口を動かすだけ、それしか出来ない故に一切の妥協を許さんだけだ」

アンデルセンが普段の調子でそう宣言したところで、ちょうど本営

に辿りついた。天井代わりに簡素な屋根が張られ、その下にはテーブルとランプ、それに散乱した書類や武器が多くある。周囲にはピリピリした雰囲気をつらいついた指揮官たちもいて、矢継ぎ早に指示を飛ばして落ち着かない。

これぞ野営地の本営といった様子に、改めて立香は気を引き締める。今いるここが、まさしく世界を救うための最前線なのだ。

「とはいえ、やって来たはいいけどあまりやることもなさそうだね」「そりゃあそうだろう。たかだか十代の少年が出来る事なんざたかが知れてる。ガキの俺が出来る事なんざもつとたかが知れてる。だから適度にサボることも重要だぞ、マスター。いや、是非そうしようではないか」

「では、私はこれで。一人でも多くの患者を救い、このアメリカの病巣を取り除くために。私は私に出来る最善を常に尽くしましょう。アナタ方も適度に休息を取り次第、すぐにやるべき仕事に取り掛かるように」

やはりナイチンゲールはどのような時でもぶれない。ある意味ではアンデルセンと同類なのではないか、などと考えつつも立香は彼女を見送った。そうして残ったのは立香とアンデルセンの男二人だけ。他のサーヴァント達は姿が見えないことから、きつとどこかで各々の役目を果たしているのだろう。不安要素もあるがきつと大丈夫なはずだ。

ともかく手持無沙汰の二人は、やることもないので更に野営地を歩き回る。男二人で散歩というなんとも言えない状況だが、別段居心地が悪いという事もない。そのまましばらく歩いていくうちに、どうやら野営地の端の方にやってきたらしい。人通りが少なくなり、ランプの灯りが薄れた。

そしてそのおかげだろう、物陰から微かに届いた弾んだ声にも二人は気が付くことが出来た。

「どうし……ですか、こんな時間に……私に構うよりも寝る方が……重要ですよっ！」

どうやら、弾んだ声の主はマーキダらしい。楽し気な様子を声音に

滲ませながら誰かと会話を続けている。それを遮るのもどうかと思つた立香は敢えて声を掛けるようなことはせず、むしろちよつとした好奇心で近くに潜んで耳を傾けてみた。

「ええ、そ……です。今日はまさに決戦……ですからね。大丈夫、私には……方の……た剣がありますから。これがある限りは誰……手でも決……負けませんとも」

そう言えば、と立香は思う。確かマーキダは第四特異点での最後、あの絶望的な状況で唐突に自身の剣の真名解放を行ったのだった。宝具の真名は『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』、効果は特定の感情を起爆剤として自身の強化とするシンプルな宝具だと聞いた。単純故に欠点の無いこの能力のおかげで、元から器用だった彼女がさらに強くなつたのだから笑うほかない。

しかしだ。どうしてそれまで使えなかつた宝具の真名解放が唐突に出来るようになったのか、その理由はようとして知れない。そもそも話、グラントキャスターを名乗つたソロモンが現れた時点で心が折れた彼女がどのように立ち上がったのか、それを知る人物もまたいない。最初の数日は追及もされたのだが、本人が『割り切つた』『彼は私の知るソロモン王ではない』と現実逃避にも聞こえる返事をするうちに、暗黙の内に触れないようにしたのだ。かといって彼女が安易な選択肢に逃げるのかといえればそうも言いきれず、結局微妙な違和感が残ってしまった訳だが。

そのような事を考えているうちにも、マーキダと誰かの会話は続いて行く。そして、

「ふむ、つまりこれは……なるほど、そういうことだったのか。こいつは盲点だった、まさかこんなことが起こり得るとはな。つくづく世の中とは最悪だ」

「？ アンデルセン？」

隣を見る。そこには立香と同じく好奇心を發揮させたアンデルセンが居るのだが、彼は何かに気が付いたかのようにしきりに頷いている。彼の観察眼はいつたい何を見抜いたのか、それを聞き出そうとする前にアンデルセンが歩き出した。

「あ、ちょっと……!?」

慌てて後を追いかけて止めるが、もはや遅い。物陰から出て来たアンデルセンは迷わず進み、マーキダの前に姿を現した。楽しそうに会話をしていたマーキダもいったん話を止めて、微笑を浮かべて向き直る。

「おや、どうしたのですか？ マスターとアンデルセンというのも珍しい気もしますが」

「いやなに、仕事をさぼろうとあちこちうろついていたらいつの間にかこんなところに居てな。それで興味深い話を聞いてしまったわけだが、そのせいで一つ思いついたことがある」

「……へえ、それはいったい何でしょうか？」

両者の間に横たわる空気が急速に固まる。どちらも敵対する意志など微塵もないのに、まるで今から戦いでもするかのように。片やアンデルセンは不敵に笑い、片やマーキダは静かに微笑みながらも鋭い視線を隠そうともしない。

『あー、立香君、そこにいるならその二人を止められないかな？ ちょっとこの空気はボクにも無理かな〜って』

「いやいや勘弁してくださいよドクター……というより、マーキダの話し相手はドクターだったんですね」

『ま、まあね。ちょうど暇な相手が彼女しかいなかったから付き合ってもらったんだよ。あはは……どうしようこれ』

気の抜けるようなロマンとの会話に肩を落としつつ、立香は対峙する二人へ視線を戻す。

はたして先に言葉を紡いだのは、童話作家の方であった。まるで当たり前の確認をするかのように、真摯に問う。

「なあ、シバの女王よ。お前は今でも、愛を変わず貫いているのか？」

「当たり前ですよ。例え現実がどうであれ、この愛情は本物です」

返す応えも迷いなく。はつきりと告げられたその言葉に、アンデルセンがふつと息を吐く。

「なるほど、此度は“恋”の物語ではなく“愛”の物語か。かくして

愛の前に現実には歪み、最後にどうなるかは皆目不明と来た。ならばいいさ、俺から言うことは何も無い。せいぜい上手く与えられた時間を使う事だ」

「まったく……ありがとうございます、とだけ言っておきましょう」
「そんなものは不要だ。それよりも効率的な執筆方法か、サボり方でも発明してくれた方がよっぽどありがたい」

皮肉のような照れ隠しのような、どうにもアンデルセンらしい一言を投げ捨てて彼は足早にその場を去って行った。残されたのは立香とマーキダ、それに通信が開いたままならば間接的にドクター・ロマンもということになるのだろうか。

「すみません、つまらない諍いに巻き込んでしまいましたね。こんなところで油を売っている訳にもいきませんし、私達も戻りましょう」
「あ、ああ、そうだね……」

真面目な顔でそう言われてしまい、立香は曖昧に頷く。けれども、「一個だけ聞かせてもらっても良い?」

「何でしょうか? さっきのアンデルセンの言葉が気になりますか?」

確かにそれも気になる。だけどそれよりも今、この場で聞きたいことは――

「もしかして、他に気になる人でも出来たの?」

「な――え……!」

『ちよ、いきなりどうしたんだい立香君!』

盛大なりアクションをいただいでしまった。別段当たり障りのない質問だと思っただが、まさかここまで反応されるとは。余程彼女にとっては重大な内容だったのだろうか。そしてドクターまでやけに反応が大きいのも気になるところだ。

「いや、ほら、かつての恋人が最大の敵として現れたのに意外と堪えてないから、もしかして他にいい出会いでもあったのかなって思ったんだけど……」

「あー……その話ですか。当たらずとも遠からずといえますか……うーん」

困ったように頭を抱えたマーキダに、何故だか立香の方が申し訳なく感じてしまう。そこまで酷い質問をしたわけではないのだが、さてどうしたものか。言葉を失ってしまった両者に助け舟を出したのは、唯一この場にはいない第三者だった。

『よしよし二人ともそこまでだ。いい加減に戻らないと誰かが探しに来ちゃうし、マシユ達も心配するだろう？ だからここは大人しく戻ろうじゃないか』

ロマンからの無難な提案によって微妙な空気が打ち破られた。この時ばかりはロマンに感謝したくなる立香である。ともかくその言葉に乗って本営の方へと足を向けた。

ただ、その直後に、マーキダが静かに口を開いた。

「そうですね、一つだけ言っておきましょう。私の気持ちは一切ぶれてはいません。ただしその上で、グランドキヤスターを名乗る“アレ”とは戦います。それだけは誓って真実ですよ」

その言葉と共に、遂に朝日が野営地を照らし出すのであった。

第三十一話 第六特異点

「そういえば」

と、なんでもない事のようにダ・ヴィンチちゃんは問いかける。とても、これから第六の特異点に向かう者とは思えない。どこまでも普段通りに均された声音だ。

「何でしようか？」

カレの隣を歩くマーキダは、事もなげに訊ね返した。こちらも、いつも通り。何が起きているのかすら不明の特異点に飛び込むというのに、恐れの色は微塵もない。あるのはただ、想い人と離れる事の寂しき程度だろうか。

「君に一つ問うておきたいことがあつてね。素面で言うには恥ずかしいが、どうか笑わずにきいてくれるかい？」

「もちろん構いませんよ」

「じゃあ、聞いてみよう」

カルデアの静謐な廊下に、静かな波がさざめいた。それからカレはゆっくり息を吸って、吐いた。この動作に意味があるかと言えば、きつと無い。

「君は私のこと、どう思っているのかい？」

「どう、とは？」

「そのままさ。人間性、趣味嗜好について、あるいはもつと魔術的な観点でも良いし、いつそ人間関係についてでもいい。とにかく、私について君がどう思っているのかをそのまま知りたいのさ」

「なるほど、これは確かに気恥ずかしい質問ですね」

納得したように頷き、しばしの間口を噤んだ。足音だけが廊下に響く。そして、ゆっくりと口を開いた。

「……一言では言い表せませんね。カルデアを支える優秀なサーヴァントとして、共に戦う仲間として、非常に頼りにしています。あるいは筆頭の変人として、ちよつと警戒している節もあるでしょうか」

「くくくつ、これは手厳しいね。だがまあ機嫌を損ねはしないよ、だって真実だからね。私のような人種は得てしてそういうものさ、これは

かりはどうしようもない」

笑い含みにダ・ヴィンチちゃんは告げて、目線で続きを促す。まだ奥に隠している感情もあるだろう、と。

あたかも全てを見通しているかのような態度に、今度はマーキダが苦笑した。

「流石は万能の天才、山育ちの成り上がりでは到底かありませんね」

「そう卑下することも無いさシバの女王。それで、本当は何を想っているんだい？」

「……嫉妬、ですよ」

囁くような声だった。それと同時に、常の彼女からは信じられないような暗い負の情動が微かに籠っていた。そんな自身を自嘲する笑みを浮かべて、更に続ける。

「私は貴女が羨ましい。生前、私と彼はたったの数か月程度の付き合いだった。なのに貴方は、五年もの時間をドクターロマンと過ごしている。きつとその間に私の知らない彼の面を知る機会はいくらでもあったでしょう。私はそれが妬ましい。だけど貴方がいなければ、今のような適度に緩い人になっていたかも怪しいでしょう。その意味では、感謝していると述べても過言ではありません」

紡がれる言葉はあたかも暗い闇のように嫉妬の念を醸しながら、一方で想い人を慮ってこそ相手を素直に讃えられる光もある。その情念は複雑怪奇で、聞いているダ・ヴィンチちゃんと言えども簡単に理解できることではない。

ある意味ではこれこそが、彼女の持つ女としての業なのかもしれないかった。

「そう、結論として私は貴方がとても羨ましい。本当は、彼に心を教える役割は誰にも譲る気は無かったから。だけど生前では結局成し得ず、この時代に至っては貴方の方が彼の救いとなっていた。そのことがたまたまなく惜しいのに、貴方が相手だと仕方ないかという気持ちにもなってしまうんですよ」

故に、悔しいけれど。彼を助けてくれてありがとう——最後にそう締めくくって、マーキダは口を閉じた。その表情に、先のような暗い

感情はもはや一切見られない。ただ晴れやかに爽快な面持ちだけが残るのみだ。

その言葉を受けて、ダ・ヴィンチちゃんは静かに息を吐いた。

「……君は、面白い人だよ。ある意味では寝取ったと考えてもおかしくない相手に、そんな言葉を贈るなんて」

「もし本気でそう考えているなら、間違いなく殺しに行っていますよ。だけど、結局そうではないと信じられるのは……きつと、友情を感じているからなのかもしれませんね」

言ってから、今度はマークダが照れたように「笑わないでくださいね」と念を押した。もちろん、ダ・ヴィンチちゃんに笑う気は一切ない。

互いに共通の男を見続け、そしてその果てに得た理解者同士なのでから。

「それにほら、私に直接好きだと言ってくれた訳ですし！ その言葉さえ胸にあれば、多少悔しい思いをしよう和我慢も出来ますよ！」
「なるほどね。まさしく、恋する乙女は無敵ってわけだ。うんうん、そんな君にこそ、私の後釜も任せられるってもんさ」

「……はあ。せっかく思い出している気分だったのに、それは聞き捨てなりませんね。まるで近いうちに消えるかのような物言いですが」
何気なく呟いたダ・ヴィンチの言葉に、マークダが鋭く反応した。互いの視線が交錯する。どちらも視線の圧力は相当なもので、だけど最後にはダ・ヴィンチの方が視線を逸らした。

「まあ、そうだね。最悪の事態を考えればそうかもしれない。次の特異点、十三世紀のエルサレムは不確定要素ばかりだ。故にこそ私もついて行こうっていう訳だが……ぶっちゃけリソースの関係上そこまですぐ強くないからね、今の私は。何かあれば呆気なく犠牲になる可能性も十分にある」

そしてその場合、カルデアの召喚システムを介していないカレは、座に直行で帰還してしまう。そうなればもうこのカルデアは、万能の天才の力を借りることは出来なくなってしまうのだ。

「やっぱり、今回は一緒に来る気なのですね」

「当然さ、未知の脅威には現地で対応するのが一番だからね。どうかロマンは説き伏せたし、後はドツキリ形式で立香君にも伝えれば万事良しきさ！」

「私としても今回のエルサレムは万全の態勢で臨みたいので、貴方の参入は歓迎しますけどね。よりにもよってあのエルサレムが騒動の舞台になっているなんて、とても許せる事ではありませんし」

鮮やかに蘇る思い出は山のように積もり、黄金よりもなお貴く輝く。豪華な宮殿、謎掛け、夜明けの誓い、苦心した日々、密着する鼓動、最後の別れ——「シバの女王」を形成するありとあらゆる思い出の詰まった地なのだ。それを土足で踏みこむ事など許さないとばかりに、此度のマーキダは赫怒かくどの火を熾もしていた。

「その意気やよし！ 人理修復の中で存分に奮ってくれたまえ。ただ、気を付け給えよ？ なにせ君、第五の特異点でアンデルセンに人間関係を看破されたって話じゃないか」

「うぐつ……確かにあれは私の油断でしたけども……どうせ遅かれ早かれ彼にはばれていたでしょうし、むしろ状況を察して黙ってくれただけありがたいと思ひましょう」

「違いない。それじゃ、お互いにケチなミスをしないように精一杯努力するでしょう！」

そう言つて笑うダ・ヴィンチちゃんの声が、廊下に響き渡るのであった。

◇

光すら届かない、暗い闇の底を目指して歩む。

石造りの壁は左右から迫るかのような圧迫感で、灯りに照らされ微かに揺らぐようにも見えた。

何気なしに背後を振り返れば、いつの間にか道は幾本にも増えて帰還者を惑わそうと牙を剥く。

これこそがアトラス院。巨人の穴倉とも呼ばれる広大な地下工房である。この地はあらゆる者を歓迎するが、その一方で研究成果を持ち出すあらゆる者を逃さない。そんな鉄の不文律が形を成した迷路の中を、カルデアの一行は進んでいるのであった。

「本当に……気が滅入る場所ですね」

「同感、空気が澱んでて嫌になるわ。タラスクを出してあげることができないし、やってられないっての」

そしてマーキダと隣を歩くマルタは、陰鬱そうに溜息を一つ吐いた。それでまた少し気が重くなる。とんだ悪循環である。

アトラス院の廊下はそれだけ重苦しかった。何かに例えるなら、竜のねぐらにも似たような——語ることすらない古い古い記憶を引っ張り出して、マーキダはさらに憂鬱な気分となる。

しかし無論、それだけで気持ち沈むという訳でもない。

「カルデアの最強戦力が抜けた現状、どこまでも状況は苦しいまま……いい加減に打開策の一つや二つ欲しいものですが」

この特殊が過ぎる特異点の原因となっているのは、歪みに歪んだ円卓の騎士たちの行動が所以である。それが例え止むを得ない事情があろうとも、異なる王が玉座に座していようとも、騎士としてあるまじき行為を行っているのは明白。行き場を失くした無辜の民の虐殺などその最たるものだろう。

故にこそ、かの黒き騎士王がそれら蛮行を見逃すはずも無かった。

今や円卓の騎士たちの聖都と化したエルサレム、その地より避難民たちを連れて撤退する際に、彼女は頑として殿を譲らなかつた。それはきつと、円卓の騎士たちを率いた王としての矜持なのだろう。果たして誰が、怒りも悲しみもあらゆる感情を削ぎ落した騎士王を止めることが出来たのか。きつとそれは、銀腕の騎士であろうと止められなかつたに違いない。

結果として、聖罰執行者として追い続けるランスロット相手に戦いを挑み行方不明となった。カルデアの方で靈器の存在こそ確認しているが、現在地などは不明のまま。最悪の場合は捕えられていると考えられる以上、この損失は非常に手痛い打撃であったといえよう。

状況は最悪、過去最強と呼んでも過言でない相手に刃落ちの状態で挑むことになるのだ。だがそれでも、それでも前に進まなければならぬ。明日の為に、生きるために。それこそが、カルデアの戦う本質であり全てであるのだから。

「ま、その代わりに私が居るから良いじゃないか！　どんな苦境だろうと、このダ・ヴィンチちゃんにお任せあれ、だからね！」

「ふふっ、頼りにしていますよ」

幸いなのは、騎士王以外の抜けは今のところ存在しないという点か。誰も彼も、ここまでの苦境の中を五体満足で生き抜いている。それは基本的には戦わないレオナルド・ダ・ヴィンチや、アンデルセンですら例外ではない。

「そうそう、ここまで結構な受難を乗り越えたんだ、今の僕らならいいところ行けると思うよ？」

そして茶化すことなく言い切ってみせたのは、さりげなく話題に入って来たダビデ王その人だ。先ほどまでは先頭を行く立香とマシユにアンデルセン、それにホームズ達に混じっていたはずなのに、随分と自然な参入である。

「……ダビデ王、今回は何か悪いものでも食べたのだったくらい真面目よね。どうしていつもこうしてくれないのかしら？　私の憧れ返してちょうだいよ」

「だってほら、今回は舞台が舞台だからね。余所の地でどれだけ人的物的被害が出ようと、最悪対岸の火事と割り切っていい。だけどエルサレムが戦場となれば話は別だよ。正直心労とか諸々で碌な思い出がなかったとは言え王様だったんだ、それなりに思う所はあるのさ」などと、飄々と嘯いた。彼もまた世界に名だたる偉大なる王として、今回の事態に感じる部分はあるらしい。普段はどれだけふざけていても、やはりこういつた点では間違いなく尊敬に値する。それはこの場の誰もが共通して抱く思いであった。

マーキダしかり、ダビデしかり、さらには聖女マルタまで、エルサレムに関係するサーヴァントは意外なほどに多いのだ。

「仮にあの人があの光景を見れば、どう思うでしょうかね……」
だからだろうか。マーキダがぼそりと呟いてしまうのは、半ば自明の理と言えた。

やや微妙な顔をするダ・ヴィンチちゃんとダビデ。詳しい事情は知らないとはいえ、旧約聖書にも通じるマルタも似たような表情で黙り

込んだ。しかし先にマーキダの問いに答えたのは、そのどちらでもない第三者の言葉であった。

「ふむ、それは比較的易しい質問だね。君の言うあの人とは、つまり今回の事件の首謀者の事だというのは容易に推測可能だ。そしてその男は、とても特別な感情を抱くとは思えないと予測できるがどうかかな？」

「ホームズ、ですか。言いたいことがあるならばつきり言ったらどうですか？」

先ほどのダビデと同じように、いつの間にか自然に口を挟んでいる男が居た。男はパイプをくゆらせ、いつの間にか振り向いて足を止めている。その笑みはまるでこちらの心すら覗き込んでしまいそうなもの。

この男こそ、アトラス院で出会った名探偵シャーロック・ホームズであった。

咄嗟に呟いたマーキダの声音は硬い。彼女にしては珍しく、敬称もついていない。それはすなわち、相手の事を微かに警戒しているからだろうか。

「それにしても……随分と勝手な事を言いますね」

「だが事実ではないのかね？ 現に立香君たちから訊いた限り彼の王——いや、この場でならばつきり言おう。ソロモン王は人としての在り方を超えている。例え君たちの見たそれが鏡に映されたような性質であろうとも、本質として人間を低く見ているのは変わらないだろう」

「だから、どれだけの人間が虐殺されようと何一つ気には留めないと、そう言いたいわけですか」

無言でホームズが頷いた。きつとこの名探偵の頭脳は、他にも様々な計算や論理を総合した結果として今の結論が導き出されているのだろう。だからこの言葉には、他の誰が告げるよりも克明な重みがあった。

それに対してマーキダは、

「ふんっ、くだらないですね」

むべもなく一刀両断してしまおう。

その取りつく島もない態度に、ほんの微かにダビデとダ・ヴィンチちゃんが息を吐いた。それこそ君らしいと、まるで安堵したかのよう

に。
「今のソロモン王がどうあれ、私の知るソロモン王はきつと違う。私はそう信じていますから」

「愚直なまでの信頼だね。恋は狂気とも言うけど、君はその境地に立っているように思えるよ。あるいはそれが、女としての強い情念ということなのか」

「どう捉えてもらっても結構ですよ。愛する者に正気なし——そんな言葉、非人間であったあの人に惚れてしまった時点でとつくに承知していますから」

「うんうん、ぶつちや僕としても君の男を見る目は最悪だと思うよ。いやほんと、引く手数多あまただったろうによくあんなの好きになったよねって今でもたまに思うくらいには」

「よーし、君はちよーつとばかり黙っておこうか」
「拳を一発入れられなきや分からないのかしらね」

余計な一言を笑顔で述べてしまった為にダ・ヴィンチちゃんとマルタに引つ張られるダビデの姿に、さしもの一同も呆れとも笑いともつかない難しい顔色だ。けれどそうして幸か不幸か少しばかり緊張が取れたところで、ホームズが咳ばらいをする。どうやら話を続けたいらしい。

「さてと、少しばかり話は脱線してしまっただが、そろそろ本題といこう。ああいや、今までの話も無論の事本題だよ、それは保証する。だけれど次の話は少しばかり事情が異なるんだ。何せこれからする話は、絶対にカルデア側の人間に漏らしてはいけないのだからね」

本来ならダ・ヴィンチにも聴かれたくはなかったが、そうホームズはそう付け足した。

どうにも穏やかではないその内容に、震える声でマッシュが訊き返す。だって、これではまるでカルデアに元凶が居るかのようではないか。

「それは……いったいどのようなものなのですか？　ミスター・ホームズ」

「簡単な事だよ、ミス・キリエライト。端的に告げてしまえば——私は、ロマーニ・アーキマンを信用していない」

「な——！」

さしもの立香も絶句し、マシユも驚きに目を丸くした。これまでいろんな面で支えてくれたロマンが、信用できないとはどういうことか。両者の思考はその事でいっぴいになってしまふ。

一方でこれまで珍しくも黙って話を聞いていたアンデルセンは少しばかりマズそうな顔をして、頭を抱えるような仕草を取った。

「無論の事、理由は幾つかある。ここで一つずつ挙げてもいいが、ひとまずは結論から認識してもらいたい。そう、彼は得たいが知れないのだ。この私がいくら調べようと一切の情報が出てこないというのは——」

「ちよつと待て、架空の探偵よ。一つ物書きの端くれとして良い事を教えてやろう。お前の発言はおそらく、時限爆弾のスイッチを押したに等しい行為だぞ。気を付けろよ、女の情念が強いこわというのはついさつきお前が確認したことだろう？」

ホームズの説明を半ばから遮ったのは、どこか笑い含みのアンデルセンであった。あたかも次に起きるであろう状況を楽しんでいるような笑みはしかし、何故だか少しばかり引き攣ひきこったようにも見えた。「ほう、それは一体どういった意味なのかな？」

「こういう意味ですよ、ホームズ」

ゾツとするほどに抑揚のない声であった。それと同時に、肩にそつと手が添えられる。

名探偵が軋む首をゆつくりと捻れば、そこには微笑を湛えて彼を射殺さんばかりに見つめる二人の女の姿がある。どちらも当然のように、目は笑っていないかった。

「どうやら貴方はどれだけ彼が身を粉にして努力しているかを知らない様に思えますね。仮にも名探偵が、相手の為ひととなり人を一切考慮せずに推理を進めるなんて不味いとは思いませんか？」

「そうだと、これは少しばかり公平さに欠けるのは自明だ。もう少し色々と推理に要素を足しても良いんじゃないかなと私の天才的頭脳は述べている訳だがどうだろう、うん？」

かくして友情と想いの前に一瞬で団結したシバの女王と万能の天才を相手にして、さしものホームズも天を仰いだ。

「あ、あー……なるほどそう来たか。これは墓穴を掘ったかもしれないなあ……」

仰いだ空は、これからの行く末を示すかのように黒くて堅い石造りだった。

◇

後の別れ際、ホームズはそつと立香にこう囁いたらしい。頭の回る頑固者との論戦ほど、面倒なことは無いと。それはもう、疲れ切った顔であった。

そして結局、特異点から帰還したマーキダにこつそりとホームズの登場とその顛末を訊いてしまったドクターロマン。彼の方とは言いえ、逆にホームズに対し申し訳なくなってしまったと語っていたようだ。

ただどこそこはかたなく嬉しそうな表情をたたえていたのは、マーキダだけの秘密である。

第三十二話 その日の夜

多くの特異点を越えたカルデアの、夜の食堂は伽藍として活気が無い。きつと、誰もが明日に備えて十分な休息を取っているのだろう。とりわけ藤丸立香は”第七の”特異点から帰還したばかり。だのにほとんど昨日の今日で最終決戦に挑めというのだから、それがどれだけの無茶ぶりなのかは想像を絶することに違いない。

「まあ、それでも『行ってきてくれ、人類の未来の為に』と言わないといけないのが、ボくら大人の仕事なんだけどね。まったく難儀なものだよ」

「いいですよ、それで。指揮官というのはえてしてそういうもの、大衆の為に泥を被り責任を取るのがお仕事ですから。仮にも王だった貴方ならば、自明の理ではありませんか？」

自嘲するようにロマンは嘯いて、その答えを否定するように柔らかな女性の声が覆いかぶさる。声のした方へと視線をやれば、そこにはちょうど調理室から出てくるマーキダの姿があつた。ミトンを着けた両手は小ぶりの鍋を抱えており、どうやらそれが今晚の食事——ある意味では、最後の晩餐となるようだ。

使い慣れた箸に手を伸ばして、ふと思索する。いつからだろうか。簡素な食事ともいえないような栄養摂取を繰り返していたロマンは、こうして食堂にまで足を伸ばす機会が多くなっていた。それでも他の職員と比べれば半分以下かも知れないが、かつての彼の努力を知る者からすれば、よくぞここまで習慣改善されたと喜ぶことだろう。

そのままテーブルに向かい合うように座り込んだ両者は、しばし無言で湯気の立つ鍋の中身をつつきあう。元は中東圏の二人ではあるが、既にしてよその文化にも染まりきっていた。

そして明日への緊張をほぐすかのように、取り留めもない話を繰り返す。第五の特異点の思い出話から始まり、第七の特異点における極限状態での戦いまであらゆる事を。けれどその中で最も話が弾んだのは、やはり第六特異点の話だっただろうか。互いにとつて想い出の地であるエルサレムが舞台だったのだ、思うところはたくさんあつた。

「それ以後は、名探偵さんとの出会いでしょうかね。秘密にしてくれと言われたのに速攻でばらしてしまったのは私も悪かったとは思ってますけども」

「うーん、あつちが僕のことを警戒している気持ちはわかるからね。……よく考えなくても経歴がないとかすつごい怪しいよねボク……でも疑われたのもシヨックだなあ……」

かつての経歴は不明、聖杯戦争後に唐突に出現、そして前所長直々の呼び出しでカルデアの医療部門トップに。確かにこれは怪しい。誰がどう見ても怪しすぎる。ロマン自身客観的に見てそう思えてしまう程だから、ホームズズの推理は妥当と言って当然だろう。

けれどその横でマーキダが笑顔で「私とカレで嚴重抗議しといたので大丈夫ですよ」と言っているせいで、このことは胸の裡に秘めておこうと決意したのだが。

「ですが立香君もマッシュさんも、どちらもその話を聞いたうえで貴方を信用すると仰っていましたから。ダ・ヴィンチちゃんや他の皆もそう、そして私は言わずもがな貴方が大好きです。だから、貴方は最後まで貴方のままでいてください」

「はは、ありがとう」

それに、他にもいろいろあった。第七の特異点、ウルクではギルガメッシュ王と直接対峙した。その際にマーキダの扱っている武器を見咎められて危うく処断されかけたり——これは非常時ということであろうにか賢王からお目こぼしをもらえた——マーリンに色々たちよつかいを出されて鬱陶しかったりと様々だ。

そんな他愛もない話を重ねながら、今もゆつくりと湯気を立てている鍋の中身を平らげていく。食堂で二人だけ、普段のマーキダならばそのまま何かしらせがんできそうなものだが、その素振りもなくただ静かに食事を続けている。

「……とうとう、明日が決戦の日なのですな」

その中でふと、マーキダがぼつりと言葉を零した。常の静かな調子は変わらないが、そこには隠しきれない不安と恐怖が潜んでいる。ここまで付き合っても長いのだから、それに気づかないロマンでもなかつ

た。

「やっぱり怖いかい？」　「アレ」と対決することが」

「怖くないと言えば嘘になるでしょう。とりわけあのビーストⅡ——
ティアマトを見てしまつては」

ビースト、それは先の特異点で出会つた最強最悪の敵を指す言葉だ。人類悪とも呼ばれる神霊の降臨はどこまでも破滅的で、希望の絶無な戦いだった。それでもカルデアの一行はあらゆる運を味方につけて、蜘蛛の糸よりも弱くて脆い光明の筋を辿つて、そしてどうにか勝ち抜いた。

そして本来、^{グランド}冠位のサーヴァントとはそのビーストクラスの相手をするために召喚される存在だ。少なくともウルクで共に闘つた”山の翁”はその触れ込みに恥じない強力な人物であつた。となれば、同じくグランドの称号を戴くあのソロモンがどれだけ無茶苦茶な相手か、仮にロンドンの一件がなくとも推し量れようというものだ。

「白状しましょう。私は怖いです。ただ単純に力に押しつぶされるのももちろん怖いし、私たちの肩に乗る責任を思うと目を背けたくなる。けれど何より恐ろしいのは——」

そこで一息入れた。ほうと緩く息を吐いて、それから押し出すように言葉を紡ぐ。

「好きな人と一緒に過ごせなくなる。そうなるくらいなら死んだ方が遥かにマシといえるでしょう」

「そ、そうも直球に言われると恥ずかしいけれど……うん、せつかく人理修復が終わつても心から楽しめないのは勘弁してほしいね」

最近思うが、ちよつと彼女の愛は重たくはないだろうか。別に嫌じゃないし、そこまで想われるのも悪くないのだけど、これで仮に恋に破れていたらどうなつていたのだろうか——なんてことを柄にもなく考えながらのロマンの言葉に、マーキダが静かに首肯する。

そして真つすぐに見つめて来た。まるで何かを悟っているかのよ
うな表情で。

「第六特異点でダ・ヴィンチちゃんから聞きましたよ。なんでも貴方は、死よりも恐ろしい事になるかもしれない特別な力を持っていると

か」

「それは——」

いつの間に、そんな考えが思わず過り言葉につまるロマン。確かにダ・ヴィンチちゃん言葉は真実だ。けれどそれは、マーキダは一切伝えないようにと考えていた内容でもある。それを伝えてしまえば、これからの戦いに間違いなく支障をきたすと考えたから。

そしてそんな彼の焦りを知ってから知らずか、さらにマーキダは問いを投げる。だけど確信を持ったその口調は、もはや確認としか言えないものであった。

「きつとこの力というのは、貴方に残されたソロモン王としての力とかそういう類のものなのでしょう？ だからこそ私は不安なのです。もしかすれば、貴方が私の前から消えてしまうかもしれないから」

「どうしてそんなことが——」

「私が貴方の最後を知らないで、本気で思っていますか？」

静かな、けれど気迫を感じさせる声音でそれを告げられればもはや押し黙るほかない。

やはり彼女はその可能性にまで行きついてしまったか。そんな諦観すら感じてしまう。

「ソロモン王の最後は、天に『十の指輪』を返すことでその生涯を終えたとされています。そして貴方の手には一つだけ残った本物の指輪があり、あのソロモンは自力で復活したと証言しました。ここから鑑みるにもしあのソロモンが”かつての貴方の死体”だというのなら、すべてに説明がつきます。七十二の魔神柱を役する理由も、千里眼も、私を憎悪する理由も、何もかもが。であれば、指輪の返却を利用してソロモンの力を失わせることは十分に可能でしょう」

「……参ったよ。まさかそこまでお見通しだとはね。君もあのキングウから同じ発想に辿りついちゃったか」

「ならやっぱり——」

「うん、理屈のうえでならそれは可能だ。ボクはこの世界のどこからも消える代わりに、あのグランドキャスターを名乗る存在も消失、な

いし大幅な弱体化にまでもっていけるだろう」

いつそのこと白々しいほど、普段と変わらない調子で残酷な真実を告げる。まるで世間話でもするかのような気やすさだ。

けれどマーキダの反応は劇的だった。大きな音を立てて椅子が後ろに倒れる。気がつけば、彼女は両手を机に叩いて立ちあがっていた。

「そんなこと、認めるわけにはいきません。貴方には何としても生きてもらわなければ困ります」

意識しているのかいないのか、語調も微かに荒い。

「認めるも認めないも、これはボクらだけの話じゃない。全人類とボクの命の等価交換ならばむしろ安い話じゃないか」

「嘘ばっかり。貴方はそんな恐ろしい決断をやるわけがありません。確かに貴方は根は真面目でしっかりしていますが、それでも小心者で無用の危険は極力避けたい性格でしょう。そんな貴方がそのような恐ろしいことを出来るはずがありません」

「うわあ、君にまでそんな辛辣に言われるなんて！　というか、もしかして初めてじゃないかな？」

おどけるように肩を竦めるが、さすがに理解できる。彼女のこの妙に辛辣な発言はポーズだ。本当は誰よりもそんな可能性を認めたくないからこそ、敢えて強がっているだけの話でしかない。

それにロマン本人としても、本当にそんな大それた事を出来るかといえばきつと――

「見栄を張つても仕方ないから言うけど、やっぱり出来ないだろうなあ、ボクには。御大層な事を言ったけど、本質はまさに君の言う通りだ。そりゃあここまで色々やれることはやってきたよ？　どここれだけは出来るか分からない。いや、むしろボクには出来ない事だろう」

情けない真実だが、事実である。どうやら彼女も信じてくれたようで、どこかほつとした様子でゆっくりと腰を下ろした。先ほどまでのどこか荒れたような気配はない。

「そう、ですか……不謹慎かもしれませんが、それなら良かった。最後

の大団円に貴方がいないなんて、どんな悪夢ですか」

心底安堵しているマーキダを見て、やはりロマンも内心で息を吐く。ここまで語ったことは全部本当だ。その上で、結局最後はどう転ぶか分からないのも本当だ。だって今のロマンは人間なのだ。最後の最後にどんな決断を下すのか、それは自分自身でも決して分からない。

気まずい沈黙が場に降りる。どうか話題を変えるべく、ロマンはひとまず自分でも気になっていたことを訊ねてみた。

「そうそう、一つ気になっていただけけど、ボクが名前を教えたあの剣、『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』はどういった効果の宝具なんだい？ 君が使っているところはほとんど見てないから気になってたんだ」

実は第四の特異点以降、彼女は一度もあの剣を真名解放していない。あれだけ圧倒的な力を手に入れられる宝具なら、もっと積極的に活用しても良いはずなのである。ロマンはそのことを指しているのだ。

まあこれには、どうせならもっと自分が教えた宝具を活用してほしいなというなんとも言えない欲があったりもするのだが。

「……貴方、知らなかったんですか？ 真名を調べておきながら？」
「いやあ、どうにもその辺りは忘却してしまっただけ……今のボクは昔とは全く別人なわけだし、むしろ真名を覚えていた方が奇跡だよ」

実際、色んなことを忘れてしまっているのは否めない。かろうじて大切な記憶は残っているのだが、それ以外はおおよそ霧がかかったような有様である。

なのでどうにか覚えていられた剣の効果を知っておきたいのは当然のことであつたのだが、何故だかマーキダは言葉を濁した。

「もう、そんなこと言う人には秘密です。せいぜい悩んで悩んで、次いでにもっと他の思い出も掘り起こせばいいんですよ」

「うーむ、厳しいお言葉、ありがたくいただきますよ」

どうやら教えてはくれないようだ。仕方ないのでとぼけた風に言葉を返せば、マーキダはまた笑ってくれた。伽藍とした食堂に、再び

明るい活気が灯り始める。

ちようどそんな時だった。食堂の扉が何の予兆も無しに開いた。「うーん、美味しそうな香りに釣られてやってきたら、ちよつとばかり無粋な状況だったかな？　ま、それでも自重なんてしないのが僕なんだけども」

「あつ、ダビデ王ですか……こんな時間にどうしたのですか？」

やってきた人物、ダビデは食堂をぐるりと見まわして、ここにロマンとマーキダの二人しか居ないという状況に気がついたようだ。それでも引つ込むどころかわざわざ二人のすぐ近くの椅子に腰かけるあたり、どこまでもマイペースな王様であるらしい。どことなく嫌そうな顔でダビデの名を呼ぶマーキダにもお構いなしだ。

そしてもう一人、ロマンは完全に困ってしまった。これまでもダビデと話す機会があつたが、此処まで周囲に人が居ないうえに近くで話すことは終ぞなかった。面と向かってお父さんなどと呼べるような相手でもなし、対応に困ってしまうのは明白だった。

「僕はいつも通りに夜のお相手でも探してみようかなって考えたんだけど、さすがに今日は駄目っぽくてね。仕方ないから徘徊してたら君たちとばったりってわけさ」

「いつも通りって、そんな事実が有ったらドクターが黙っていませんよ。ねえ？」

「あ、ああ。そうだね……そんな事態になってたらカルデアの風紀も一大事だ」

ロマンの困惑を受け取ってか、さりげなく話を振るマーキダ。けれどその甲斐もなく、あまり気の無い返事になってしまう。

しかしダビデはそんな不自然なロマンの態度に触れることなく、あくまで自然体に話を進めてしまう。

「まったく、息子が息子なら嫁も嫁だね。どうしてそうも僕の言葉を疑ってかかるんだかなあ。そんなに僕が信用できないかい？　これでも普段の行いは善くしているつもりなのだけど」

「どの口が言うんですかどの口が。……というより、ソロモン王も貴方に苦言を呈したことが？」

ちよつとばかり興味を引かれた調子でマーキダが食いついた。自身の想い人についての話題は何にせよ気になってしまふのだろうか。

対してその返答はといえば、意外にも否を唱えるものであった。

「いや、無かつたよ？ だけどほら、あれはけっこう腹黒というか抜け目ないところもあるからね。たぶん内心じゃ愚痴をこぼし続けてたんじやないかな？」

話し相手は脳内にいっばい憑いてただろうしね――

おどけたように言ってみせたその言葉に、マーキダもロマンもしばし言葉に困る。果たしてこの王は、ふぎけた姿の下でいったいどれだけのことを察しているのだろうか。もはや真実は彼のみぞ知るといった具合である。

「それはさておきどうも僕はお邪魔虫みたいだし、今夜はここらで退散させてもらおうかな。サーヴァントとはいえ、下手に明日に支障を出しても困るからね」

そしてダビデは椅子から立ち上がった。どこまで言ってもマイペース、ロマンもマーキダも完全に彼のペースに吞まれてしまった。あるいはそれがダビデの持つ不可思議なカリスマ性とも言うべきか。

悠々と去っていくダビデ。彼の姿が食堂を出て廊下に消える直前のことであつた。珍しく、ロマンがダビデに声をかけたのだ。

「ダビデ王、一つ聞いておきたいことがあるのだけどいいかな？」

「おや、なんだい？ というより珍しいね、君の方から声をかけてくるなんて」

心底意外といった顔のダビデに、ロマンはバツの悪そうな顔をすする。だけどすぐに取り繕って、真面目な顔になった。

「あなたは今回の一件をどう思っているのかと思つてね。せつかく黒幕らしき相手の縁者がいるんだ、最後に一つ聞いてみたいのさ」

「……また難しいことを聞いてくるね。だけどそうだね、その問いに答えを返すならば……」

試すようなロマンの言葉に、珍しく悩んでいる様子だ。どう答えたものかと顎に手をやる姿からは、普段の軽薄さはとても感じられない

い。どうやら今回は彼なりに自分の意見を模索してくれているらしい。

それから、ほとんど一分も経っただろうか。微妙な沈黙が場を支配する中で、ついにダビデは口を開いた。

「彼は完成された王であつたけど、そのせいで人としての自由がなかった。まあこれを仕向けたのは結局神に子を捧げた僕なわけだし、そのこと自体に罪悪感とか後悔なんてことは一切持つていないよ」

なんとも言えない表情でダビデを見ているマーキダを一瞥してから、彼は「だけど」と続けた。

「だけど、今は彼が彼自身の意思で一つの大事業に取り組んでいるわけだろうか？ 割と最低な状況ではあるわけだけど、それで少しは楽しめているのならそれもありませんじやないかなと僕は思うわけさ」

「まさかあなたはこれだけのことを仕出かしたソロモンを肯定するのか!？」

「それこそまさかさ。僕としても羊とか、草原とか、あと可愛い娘とかが全部無くなってしまうのは大損だから勘弁願いたいけどね。でもそれはそれとして、この特別な状況が特別な存在であつたものに変化を促しているのは事実だろう。これ自身はほら、一応は親だったわけだし歓迎してみても良いかなとは感じているよ」

つまりダビデはどっちの味方なのかと、おもわず疑ってしまうような答えである。

「それじゃあドクター・ロマン、君も最後までカルデアのトップとして走り抜けてくれ。僕はその結果を見届け、そして受け止めよう」

ほんの微かな笑みと共にそれだけ言い残して、ダビデは食堂から出て行った。後に残されたのは、呆けたような困ったような顔で向き合う男女が二名だけ。どちらも、上手い言葉が出てこなかった。

けれど、その胸に抱いた想いは同じであつたようである。

「……明日は早いですし、寝ましようか」

「そうだね、そうしよう。お休み」

「えっ、一緒に添い寝しないんですか？」

「君はホントにぶれないなあもう！」

泣いても笑っても、明日ですべての決着がつく。きっと苦しいだろうし、大変な思いも数多くするだろう。

だからせめて、その時まで今まで通りであろうと。示し合わせたわけではない。だけどその思いこそ、二人に共通するものであったのだ。

最終章 冠位時間神殿ソロモン 第三十三話 獣の玉座 I

時は来た。

これよりまさに、最後の特異点へと突入する。カルデアはこれまで幾多もの苦難を乗り切り、ようやくこの時この一瞬へと手をかけることに成功したのだ。

「そして物語をハッピーエンドに終わらせるためには、ボクらの頑張りが必要不可欠なわけだ。もちろん、こんなことは前提条件だし、もつと頑張るのは立香君に他ならないけども」

管制室に冗談とも励ましともつかないロマンの一言が響いた。当然、職員たちも苦笑顔だ。そんなこと言われるまでもないと、各々が胸に刻み込んで黙々と最終調整を行っている。

結局この人理を巡る旅において、最後の最後まで管制室は明かりが灯っていた。そうでなくては生き残れないから。そうであったからこそ、カルデアはここまで辿り着けたのだ。誰か一人でもいなければ、きっとこうはならなかったのは間違いない。

そしてそれは、傍らで見続けていたマーキダにとっても、とても尊いものに思えるのだ。

「いよいよ残りは一時間もありませんね……思えばここまで、長かった」

「その通りだ。常に現状の維持に努めて自分の仕事を全うしてくれたこのの皆に、実行役として体を張って立ち向かってくれた立香君とマシユ、それに力を貸してくれた君たちサーヴァント……そのすべてが噛み合ったからこそ、人理焼却の黒幕へ王手をかける段階にこれなんだ」

神妙に頷いて思い出を噛み締めるロマンに、すかさずヤジが飛んだ。さっきまで黙々と作業をこなしていたはずの職員たちである。

「ドクター、自分のこと入れるの忘れてますよー！」

「カルデアの司令塔として頑張ったのを忘れちゃだめでしょうに」

「不養生しまつくてまで仕事してた馬鹿はどここの誰だか思い出してみろー!」

「あーもう、そういうのいいから真面目に作業に戻ってくれ! こんなどこで凡ミスしたら人類にどんな言い訳すればいいのかわからないよー!」

茶化しつつも暖かい言葉の数々であった。あまりにも気恥ずかしくなつて、ロマンも半ば遮るように作業に戻るように促す。最後の戦い直前だというのに、やはり何も変わらない。普段通りのカルデアの在り方に、無意識に強張っていた体がほぐれたのはきつと誰もが思うところだろう。

「でもさドクター、最近はそのキャスターちゃんと良い仲つて話じゃない? そののとこどうなのよ」

「おいおいおい、シバの女王は人妻さんだぞドクターや! もうちよつと安らぎを求める相手を考えた方が……」

「いやあ、まさか草食系を極めたような人がすつごい美人を射止めるなんて思いもしなかったぜ……」

「分かった、分かったからもう好き勝手言うのは止めようか!? ほらもうこつちは顔が真っ赤になつてるし!」

さつきまで「このカルデアの終局の記録を『ケ智慧とブラ王冠のネ大禁書』に残しておくんです!」と息巻いていたはずなのに、マーキダはもう真っ赤になつて撃沈していた。これだけでもう何かしらの特別な関係にあるのだと推測するのは容易なわけだが……これ以上は職員たちもあえて追及することはしなかった。

それはすべてが終わつてからののお楽しみ、平和になつた後で存分にロマンをいじつて問い詰めてみればよいのだから。その時になれば時間なんていくらでもあるのだ。

ちようどその時、管制室の扉が開いた。

「おーおー盛り上がっているじゃないか諸君、ちよいと私も混ぜてくれないかな」

当たり前のように会話に混じつてきたのは、カルデアの誇る変人にして天才であるダ・ヴィンチちゃんだ。

こちら最後の調整を終えたのだろう、適当に空いている椅子に腰かけると、猫のように体を伸ばして一息ついた。

「こっちの準備は終えたよ。後は定刻になり次第上手いこと立香君たちをレイシフトさせて、特異点へノルマンディーをかますばかりだね」

「の、のるまんていー？　なんですかそれは？」

「要は上陸作戦だよ。今回はレイシフト事情が特殊でね、カルデア自体が直接特異点に接触してレイシフト、そのあと帰還するにも徒歩でこっちまで戻ってきてもらわないといけないんだ」

「へえ……って、それじゃあかなり大変なことになるんじゃない？」

これまでの特異点事情を思い出して、マーキダが深刻な顔をして問いたです。

「そうなんだよねー、今までだって聖杯を回収すれば特異点は消えていったけど、今回はもっとシンプルに危険だ。なにせあの特異点は実質的に小宇宙となっていて、特異点が崩壊すればいずれ揺蕩う魔力が弾けてパン！　さ」

冗談めいた笑い声が、少し静かになった管制室に響いた。

それはあまり笑い事ではないだろう、なんて目でマーキダはダ・ヴィンチちゃんを見やる。本人も白々しい笑みを浮かべているが。

「このこと、マスターたちは？」

「まだ知らせてないよ。だけどこの後すぐのブリーフィングで伝えるつもりだ。最後の最後にとんでもない負担を強いるけど、それでも達成してもらわなければオーダーの完遂とはならないからね。マーキダ、君にもやれうる限りのことはしてもらおうよ」

ロマンの言葉に、重々しく頷く。そうだ、ただ人理を守るだけでは足りないのだ。人理を守り、カルデアのメンバー全員で平穏な二〇一七年に帰還してこそ完全勝利となるのだから。

故にこそ、誰か一人でも欠けてはならない。それはこの場の誰にも共通する想いであった。

「元よりそのつもりですよ。なに、任せてください。今の私は絶好調なんですから、犠牲なんて決して出させやしませんとも」

——だから貴方も、早まった行動はしないでくださいね。

そつと耳元で囁かれる。まさかここで釘を刺してくるとは思わなくて、彼は反射的に周囲を見渡してしまふ。すると忍び笑いを漏らしているダ・ヴィンチちゃんや、やっぱり関係あるじゃないかと呆れがちな職員たちの目線に晒されているのに気づいて、さつと目を逸らした。

「あー、全くもう！ レイシフトまで時間無いんだから皆真面目にやってほしいだけだなあ！」

自棄気味に放たれた言葉に、いよいよ笑いが蔓延する。ここまできればもう、裏方たちは最後まで笑顔で行こうじゃないかと。あたかもそう告げられているかのように感じられて、やっぱり少しばかり不安の取れるロマンなのであった。

◇

休息をとっていたマスターとマシユ、そしてサーヴァントたちを集結させて、ついに最後のミーティングを開始した。

曰く、冠位時間神殿ソロモン。ソロモン王の遺体に宿る魔術回路を利用した固有結界にして、宇宙そのものをそのままスケールダウンしたかのような途方もない規模の特異点である。さらに特異なことに内部の生体反応は一つしかなく、それ故におそらくは末端を殲滅しなければ中心部には辿り着けないという予測が示された。

「なるほど、面白い。つまりは城攻めというわけか。果たして魔術王の本拠地がキヤメロットに勝る堅牢さか否かどうか見物だな」

そういつて獰猛な笑みを見せたのは黒き騎士王、セイバー・オルタだ。最後の局面であろうとも、彼女のありようは変わらない。ただマスターの剣として、一切の慈悲なく敵を打ち滅ぼすのみだ。

「まさか、あのソロモン王と拳を交える羽目になるなんて、旧約聖書を読んでいたあの頃はとても想像できないことね……本当、世の中つて不思議な話だわ」

心底から不思議そうに呟いたのは聖女マルタ、敬虔なキリスト教徒の彼女からすればそれなりに思い入れのある相手だろう。だけどそれでも、やるべきことを見失うことはない。

「まったく、ただの役立たず童話作家を世界の破滅なんぞに招き寄せるとは底抜けの阿呆だなカルデアは！ だがいいだろう、不本意であれ呼ばれたならばそれも縁だ、せいぜい似合わぬ冒険譚と、甘酸っぱい恋物語でも綴ってみるとしようじゃないか」

口調こそ嫌そうでも、どこか楽し気な雰囲気を見せているのはアンデルセンである。彼はちらりとマーキダを見やって、微かに唇の端を釣り上げた。もちろん、マーキダは少し睨み返して返事とした。

「いよいよ決戦か、僕から言うことは何もなければ……せいぜい誰も消えないように頑張ろうってくらいかな」

普段よりも言葉数が少ないのはダビデ王、自分の息子と戦うと言えどもそこに特別な感情は抱かない。

「私からも、特に言うことはないですね。しいて言えば、第四の特異点で見た醜態は二度としないとだけ誓いましょうか。あの時は心配をかけてしまい、本当にすみませんでした」

頭を下げたのはマーキダ、かつてソロモンと相対して完全に戦意を喪失してしまったのは、今にして思えばとんだ黒歴史である。結局いろんな要素のおかげで立ち直ることができたわけだが、それでも改めて謝罪をすることでけじめをつけた。

「先輩、これが最後です。たとえこの後私がどうなろうとも、先輩と共に駆けたこれまでの全てが私の誇りです。だからもう一度だけ、私と一緒に戦ってください」

「ああ、分かっているよマシユ」
盾の少女の言葉に、万感の思いを込めて返したのは藤丸立香である。

最初は、自分の真名すら知らぬサーヴァントだった。

最初は、最弱のマスターだった。

そんな二人の歩みは、多くの出会いと助けの下に進み続けた。そして次がその集大成、この人理修復の旅で身を結んだすべてを見せつけるときが来たのである。

「さあ、人類最後のマスターよ。これが最後、カルデアの司令官として発令する最後のオーダーだ。——勝ってこい。人理焼却なんて馬鹿

げた企みを破り棄ててくるんだ」

「もちろん！」

「……いい返事だね、本当に見違えたよ。よろしい、これよりカルデアは最後のオーダーに移行する。目標は魔術王の撃破、並びに藤丸立香の帰還。そしてマスターの帰還をもって、この任務の完全達成とする」

いつそ敵かなほどに響く最後のオーダー。誰もがその重責を理解して、立ち向かうときが来たのだ。

「それじゃあ最後に立香君、せつかくだし景気づけに一言もらってみようじゃないか！」

と、緊張感の中で空気をぶち壊すような発言をするダ・ヴィンチちゃん。それにほんの一瞬戸惑いとも苦笑ともつかない顔を見せた立香は、

「勝とう、みんなで！」

『ああッ!!』

◇ 最後の締めくくりを、これ以上ない形で終わらせたのだった。

獣の宙域に突入したカルデアを待ち受けていたのは、無尽蔵の魔神柱の群れであった。

出迎えとして現れたフラウロスはもはや鎧袖一触とばかりに蹴散らすも、即座に復活するフラウロスと無尽蔵に現れていく魔神柱になすすべを持たなかった。

だがここで奇跡が起きる。極点の流星雨、これまでに特異点で関りをもってきたサーヴァントたちの助力が入ったのだ。魔神柱の蘇生速度を上回る殲滅速度により、特異点の末端各所の魔神柱を一時的に封じること成功、中央部に送られる魔力は激減し、中央への道が開かれた。

そしてついに、カルデアは魔術王の玉座に辿り着くことに成功したのであった。

◇

「……よもや本当にここまでやって来るとはな。こればかりは私と

しても驚愕しているよ。なぜお行儀よく死ぬという当たり前のことができないのやら」

白い大地と、荘厳なる玉座。空には暗黒を縁取る光帯が渦巻き、辺り一面にビーストの霊器が存在する世界。

そこに、魔術王はいた。

「ここまで来たのなら、仕方あるまい。取るに足らない虫けらのように、死ぬ」

底なしの殺意の奔流、ここまでやって来た誰もが身を竦めるような重圧だ。

これが、グランドの位階を持つサーヴァントの力なのか。ロンドンで見知ったはずの絶対的な彼我の差はしかし、少しも埋まったようには感じられない。

だけどそれでも、この男には聞くべきことがあったのだ。

「答えなさい、魔術王を名乗る何者か。貴方は何者ですか？ どうして、ソロモン王の遺骸を用いてこのようなことを為そうとしているのです？」

マーキダが気丈に問う。仮にも生前を知る者として、何よりその遺骸の男を愛していた者として、彼女には知るべき権利があるのだから。

しかし返ってきたのは——身も凍るような嘲笑であった。あいも変わらず、彼は憎悪をマーキダへと向け続ける。

「クツ、ハハハハハハッ！ あいにくと私はお前のことが大嫌いな、素直に答えてやる義理などどこにもない。あの男を変えられたはずの唯一にして最後の女、だというのにその使命を果たさずに死んでいく始末。ああ全く、どこまでも忌々しい。なぜ貴様——自害を選んだのだ？」

「——え？」

魔術王から零れた意外な言葉に、誰もがほんの一瞬だけ言葉を失った。

そういえば確かに、と立香は思い返す。シバの女王の死因は全くの不明だ。そもそもマーキダ自身も一度たりとて自身の死について

語ったことがない。だからどのような最期を迎えていても決して不思議ではないのだが……。

誰もが少なくない驚愕の視線を向ける中で、当のマーキダは悪戯がバレた子供のようにバツが悪そうな顔をしている。なんで暴露してしまったのか、どう説明すればよいのか、そんな色が滲み出た顔である。

「認めたくはない、だがあえて言おう。貴様ならばあるいはと、我々^{わたし}は期待した。このままあの男と幻想女王の関係が続けば、いつかは奴も人類の嘆きに対して目を向け、対策を始めるのではないかと。だというのに！ 貴様はどこまでもつまらぬ幕引きを選んだ。そのせいであの男は逆戻り、結局なに一つとして解決せぬままに、ただ時だけが過ぎ去っていったのだ」

自分に関連することのはずなのに、まるで他人事のように語るソロモン。それはつまり、魔術王の死体を動かしているのは決して魔術王自身ではないという証左になるのだが……白状すれば、立香にとってはそれどころではなかった。

「自害って……本当なのか？」

自殺。それ自体は悲しいくらいありふれた言葉だ。だけどそれが、よく見知った相手の最期だと知れば、とても穏やかではいられなかった。ましてや、とても自害なんてするように見えない人物であれば猶更^{なほさら}である。

果たして彼女の言葉は、

「……残念ながら事実ですよマスター。私は、シバの女王マーキダは……確かに、自刃をもつてその生涯を終えたのですから」

魔術王の言葉を肯定するものであったのだ。

第三十四話 獣の玉座 II

——なぜ自殺を選んだのかと問われれば、自身に失望したからに他ならない。

恥ずかしかつたのだ。悔しかつたのだ。

耐えられなかったのだ。怖かつたのだ。

ただただ自分が嫌になった。どうしてか。決まっている、あの人にいつまで経っても心というのを教えられない自分に嫌気が差したから。

あの日、イスラエル王国からシバの国へと帰還したのち。ソロモン王と書簡のやり取りをすることは何度かあった。だけどそれは国交を第一として儀礼的かつ簡素なものであつて、とても個人的なやり取りをできるものではなかつたのだ。

そのようなことを繰り返しているうちに、一つの恐怖が沸き上がった。私は、本当に約束を守れたのだろうか。

心を教えると告げた。そのこと自体に何の後悔もない。だけどそう、私があの人にとって多少なりとも特別であつたのは、その約束があつたからこそなのだ。けれどもし、その約束を果たせないとしたら？ きつと私とあの人縁はそこで途切れてしまう。有象無象の一人となってしまう。そのことが、たまらなく怖かつた。

とはいえ、最初の内はそんなもの心配するまでもないと切つて捨てた。笑い飛ばせた。しかしそれも、年月を重ねるごとに徐々に心を蝕んでくる。それは子を産み、けれど理由もなく子を愛せなかつた自分を自覚してから、よりいっそう大きくなっていったのだ。

愛は心の中でも特に素晴らしいと私はかつて述べた。だのに自身は、常人よりも愛を注げぬ欠陥品であつたのだ。そんな女が心を教えるというのだから、馬鹿らしいにも程があるだろうに。

自分が偉そうに講釈をしたことは、もしかしたら間違つていたのではないか？ きつと今では別のちゃんとした人があの人に心を教えているのでは？ 直接会う機会は皆無であつたから確かめる術もなく、そのせいでさらに疑心暗鬼になつていく最悪の循環だ。

一度気になりだしたら耐えられなくて、夜も眠れなくなった。無力な自分が悔しくなつて、最後には本当に約束を守れたのかもわからない自分自身が恥ずかしくなつてしようがなかった。

——今から振り返れば、あの頃の自分はまともではなかった。今でこそ少しは冷静になつているから、召喚されてからも思い悩むことは無かった。だけどあの時は初めての恋に全精力を傾けて、思慕の加減もわからず一喜一憂して、少しでも好きな人の特別でありたいと願ひ続けてしまった。その果てに、心が先に潰れてしまったのだ。

きつとそう、一言書簡に記せばよかつたのだ。“貴方は私を愛してくれますか？”と。だけど、いつの間にかそれすらできない状況に勝手に追い込まれていて、返事を聞くことすら怖くなつて。

最後にはそんな自分に失望して、もう駄目だなと他人事のように諦めた。こんな風になつた自分が生きていても仕方がない。これ以上生き恥を曝すくらいなら、もう死を選んだ方がマシなのではないかと。

そうして剣を手を取つて、最後の最期にやっぱり自分は最低だと痛感した。

だつてそうでしょう？ 国も息子も、約束を交わした好きな人さえおいて死ぬなんて、そんな酷い話はないのだから——

◇

魔術王の玉座にて、相対するカルデアと魔術王を騙る何者か。

これまで語られなかった幻想女王の死因に、ほんのわずか周囲が硬直した。その中で、当の本人だけはまるで悪戯がばれた子供のように困り顔であつたのだ。

「……まったく、どうしてそれをこのタイミングで言つてしまいますかね。せっかく最後の最期まで隠し通せると踏んでいたのに」

それから、彼女はマスターへと向き直る。

「マスター、今は私の過去よりも目の前の黒幕が先です。まさか優先順位を間違えるなんてことはありませんよね？」

「……いいや、それこそまさかさ。分かつてるよ、俺たちはそのためにここに来たんだからな」

訊ねたいことはたくさんある。仮にもこれまで共に戦ってきた仲間なのだから。だけどそれは全ての事象を蹴落としてまで優先することでもない。

そしてそんなことは他の者たちにとっては当然のことだったのだろう。サーヴァントたちは既にして臨戦態勢、いつでも目の前の黒幕への用意はできていた。

「もう一度、今度は俺が訊くぞ！ お前は何者だソロモン、正体を表せ！」

「……いいだろう、ここまで来て隠し通す必要性はない。もはやグラウンドキャスターの隠れ蓑も、愚か者の名もいらぬ。我が真の姿を拝謁する譽を貴様たちにやろうではないか」

ソロモンの姿が瓦解する。光が溢れ、形が変化した。

直視できなかったのはほんの一瞬であつたはず。だがその一瞬だけで、ソロモンを名乗っていたはずの者はその姿も、本質も、何もかもが真の形を成していた。

「私はかつて七十二の悪魔と呼ばれ、今この時は人理焼却式となつたもの。讃えるがいい、我が名はゲーティア。人理焼却式、魔神王ゲーティアである！」

そうしてグラウンドキャスター・ソロモン改め、ビーストI・魔神王ゲーティアは姿を現したのであつた。

◇

ビースト——それは人類愛をもって人類を滅ぼす存在。人類が滅ぼすべき悪の兆しだ。しかしその規模は到底人類が対処できる枠に収まらず、なんとなれば超常の存在であるサーヴァントですら太刀打ちできないほどの強さと理不尽さを持つのだ。

そもそもグラウンドキャスターは、ビーストに對抗する七騎の内の一つだ。であれば、グラウンドが七騎揃つて対処に当たるべきビーストとは、どれだけ次元違いの存在なのだろうか。

カルデアは今まさに、その事実を味わっていた。

「どうした、軽いな。まさかこれが限界とは言うまいな、黒の騎士王よ」

「くっ、好き勝手に言ってくるな……!」

姿を変えたソロモン——いな、ゲーティアの姿は、どこまでも禍々しい。キヤスターらしい細身の男から一転して、筋骨隆々にして頭部に角を生やした異形の大男と化している。その姿は見かけ倒しではなく、今も複数の英霊を圧倒し続けていた。

セイバーの剣を軽々と受け止め、腕の一振りで弾き飛ばした。マルタの竜タラスクは無数の拳の乱打により黙らせた。ダビデの投石はゲーティアの体に傷一つ付けられず、マーキダの呪術は一切の効力を発揮できなかった。

「アンデルセン! なんかい打開策とかないの!」

「役割を考える俺は物書きであって軍師じゃないぞ! まず根本からして、どうして俺みたいな役立たずをこんな修羅場に連れてきた!」

「Mr. アンデルセン! 今はそのようなことを言っている場合では——」

ゲーティアの圧倒的な攻撃の余波がマスターへ届かぬよう、マシユは必死になって立ち回る。最悪アンデルセンは見捨てていいにしても、それでもなお余裕がないことには変わらないのだ。

「そら、まずは一人だ」

どういう意味だ、なんて問う前に結果が起きた。聖女マルタ、竜を失った彼女がまずはやられてしまった。

「ごめんっ、しくじった……マスター、あなたはしくじんじゃないわよ……!」

息も絶え絶えに謝意を述べて消えていくマルタ。一応はカルデアで復活は可能だが、それもすぐではない。であればこの戦いにはもう復帰できないも同義である。

故に、均衡が崩れた。ただでさえ押され気味であった戦いが、戦力を一人失ったカルデアにさらに不利に動き始める。

今度はセイバーが吹き飛ばされた。拳の一撃を剣で受け止め、それでもなお勢いを相殺しきれない。もはやボロボロとなった鎧は鎧の体を為さず、その負傷の激しさを物語っていた。

「これじゃあジリ貧だ……! 弱点、何か弱点は……!」

「あると思うか、藤丸立香よ。今の我々はまさに万能にして全知、ほんの微かな弱点すらも無いと思いきれ」

追撃。ついで爆音。気がつけば、最も頼りになる剣の英霊はその姿を消していた。また一人、減ったのだ。その事実立香は齒噛みする。

本当にまずい状況だ。確実に追い詰められて、打開策など見つからない。どうすればいいかと迷い続けている間にも、刻一刻と状況は悪化の一途を辿っていく。

「ダビデ、貴様にくれてやる言葉は何もない。せいぜい自身の息子を神に捧げた事実を悔やみながら、死ね」

「おやおや、君も素直じゃないね。僕にくれてやる言葉があるじゃないか」

そうして、さらにダビデまで仕留められた。最後まで飄々と軽口を叩いて、「僕としては少しばかり語り合ってもみたかったけど」なんて置き土産を残す始末だが、状況がより悪化したことには変わりはない。

これで残るはマシユ、アンデルセン、それにマーキダ。マシユは防御に特化し、アンデルセンは論外。そしてマーキダは弱くはないが、特別強いというほどでもないのだ。

故に――

「これで詰みだな、カルデアよ」

ゲーティアの腕から光線が迸る。無数の光条は辺り一面を無差別に絨毯爆撃のごとく焼き尽くし、終わりの光景を作り出す。爆炎と衝撃に揺さぶられた近くが戻った時には、もはや立っている者はだれ一人としていなかったのだ。

「先輩、ご無事ですか!？」

「ああ、俺は大丈夫だけど――」

「まさかこの俺が誰かの盾になるとはな……つくづく似合わん役割だ、もう少し配役を見直したらどうだ？」

マシユでも抑えきれなかった衝撃から立香を庇ったのは、戦闘能力なんて何一つないアンデルセンであった。英霊としては最弱クラスの彼は耐えきれざるもなく、当たり前のようにカルデアへと退去し

てしまう。

「いよいよどうしようもなくなった。マシユはどうにか耐えてくれたが、さすがにマーキダが今の攻撃に耐えられる道理など——」

「つつ……どういうことですか、ゲーティア？ わざわざ私だけ見逃すなどと」

「いや、違った。なぜかマーキダは立っていた。傷だらけではあるが五体満足で、まだまだ意思も折れていない。」

「だからこそこの状況は不可解だった。どうして彼女をわざわざ残したのか。マーキダはそれを訊いているのである。」

「どういうこと、か……ほんの気まぐれと言われればそれまでだ。結局最後は殺す相手に、何を無駄なこととしているのかという自覚はある」

「それは、どこまでもゲーティアらしくない物言いであった。全能である彼が無駄を承知で行動を起こすなんて、本来ならばあつてはならないはずなのに。」

「しかしそれでも、ゲーティアは訊ねたいことがあつたのだ。たとえば本当はその理由を知っていたとしても、本人の口から直接訊きたくて仕方がなかった。」

「貴様の行いは無責任だ。希望を持たせるだけ持たせて、その終わりを見届けることなく勝手に命を絶つたのだから。何が貴様をそのような愚行に走らせた？ 怒りか？ 絶望か？ それとも諦観か？」

「そのどれでもありません……生前の私は、本当に馬鹿でしたよ。恋に狂って、愛を理解せずに、勝手に絶望して死にましたからね。その点では、貴方にいくら糾弾されても仕方がありません。私の過失であるのは間違いないでしょう」

「自分は最低な女だと、いつそ清々しいほどに自身の非を認めた。」

「しかし、それでも決して心が折れることだけはない。毅然とした態度でゲーティアを正面から見据えた。」

「だけどそれでも、私にとってあの恋は鮮烈で、それを失うくらいならすべてを擲なげつても良いと思えるものでした。きつと今でも、その燃え盛る情熱だけは変わっていないでしょう」

「つまり貴様は、愛によって希望を産み、愛によって絶望を齎したということか？ 不可解だ、なぜ人というのはそれほどまでに矛盾する。これも不完全故に起こる弊害と呼ぶべきなのか」

その様はとても人類を滅ぼそうという存在に似つかわしくない、憂いを帯びた嘆息であった。ゲーティアは本気で、人の矛盾を憂い、怒っている。

「ですがゲーティア、それこそが人というものではないのですか？ 時に理解できず、時に不可思議な行動を行い、けどどういったすべてが繋がっていくのが人の生き様というのではないのですか？」

これはマシユの問いかけ、彼女もまたこの旅で得るものがあつたからこそ、臆することなくゲーティアへと問いかける。

だが、

「違うのだ。それは人という生き物が不完全だからこそ起きる不条理なのだ。その幻想女王のような矛盾の塊がいる時点で、その理屈が人間たちの中に少なからず認められる時点で、この地球は間違っている。終わっている！」

「ゲーティア……あなたの目的とはいったい……」

堪えきれず、マシユが訊ねた。

ゲーティアは、よくぞ訊いたとばかりに応えた。

「この惑星を最初からやり直す。人類史を燃やし尽くして得たエネルギーを利用して、完全なる人類を生み出すのだ」

そうして、第三宝具『誕生アルス・マテの時来たれり、其は全てを修めるもの』の展開が始まった。

◇

玉座の上に積み重ねられた光帯は、地球上に存在する全ての資源を燃やし尽くし残留霊子にしたものを、三千年分も集めて作り上げられたものである。故にこそ、この惑星に生きる者に抗うすべなどない。どのような物理的障壁を持ち出そうとも、あの熱戦を前にすればただの紙に過ぎないのは自明であった。

「マーキダさん、どうか最後まで先輩をお願いします。ゲーティアに勝って、先輩を二〇一七年まで連れて行ってください」

前に出る。あらゆる存在を焼却する一撃を前にして、さざ波程度の恐れさえ彼女の胸には存在しなかった。

「先輩、私はあなたに守られてばかりだったから——最後に一度くらいはお役に立ちたかった」

だからこそ、その一撃を防ぎ切った白亜の城とその精神は、どれだけの強固さを備えていたというのだろうか。

「我が一撃を耐えきったか、マシユ・キリエライトよ。ひとまずは見事と讃えておこう」

そうしてゲーティアは、防ぎながらも蒸発した盾の少女に賞賛を贈り、生き残った二者を見やる。人類によつてその命を弄ばれながらも、人類を否定しなかった者に守られた二人を。

「マシユ——ッ!! クソツ、こんなことが……」

「確かにその意志、もらいましたとも。結局は私の不始末ならば、最後まで私が戦うのは道理ですね」

最後のマスターと、そのサーヴァント。藤丸立香とシバの女王マーカーキダは健在であった。白亜の城は確かに守り切ったのだ。

まだ戦える。最後の最期まで、この意志が折れることはない。どちらの瞳もその想いで満たされており、もはや引くことなど一切ないと思ひ知る。

「——だが無意味だ。このような延命も、有象無象の英霊たちの奮戦も、すべては無為と化す。我らの勝利は既に決まったのだ」

幼子に諭すかのような口調。もはや彼の中でその勝ち揺るがないということなのだろう。

しかしここに、まだあきらめない者が二人もいる。

「いいや、まだ、まだだ！ お前なんか負けてやるものか！ 行くぞ、マーキダ！」

「ええッ！」

「良いだろう、弔いとして我が肉体に一撃を与えることを許そうではないか。そして、死ぬがよい」

立香が拳を振りかぶった。マーキダが剣を構えた。

もうこの二人を止めるものは何もない。たとえすべてを失つてで

も、目の前の存在を止めてみせると。蛮勇を超えた勇気を胸に、ゲイティアへ躍りかかと駆けだそうとして――

「ちよつと待った二人とも！ 玉碎なんて君たちらしくないだろうに。ここはもう少し力を溜めて、最後の詰めに備えておいてくれると嬉しいかな」

場違いなほどに明るい声が響く。思わず振り向いた先には、出発前に見た姿と寸分違わぬ白衣が翻っている。

「な――」

「うそ、そんな――どうしてここへ来たんですか!? ドクター!!」

信じられないという声と、これから先を予見してしまった故に零れた悲痛な叫びとが玉座に響く。やって来た男――ロマニ・アーキマンは、ただ笑った。

こうして、最後の役者が揃ったのだ。

第三十五話 獣の玉座 Ⅲ

最後の特異点、冠位時間神殿ソロモンで藤丸立香たちが追い詰められている中で、彼らを観測しその帰還を祈り待っているはずのカルデア管制室もまた危機に瀕していた。

カルデア本部に取りついた魔神柱の数、合計で八柱に及ぶ。ただの一つで尋常なサーヴァントなら消し飛ばして余りあるそれらを前に、カルデアは持ちこたえるだけで精一杯だ。

飛び交う怒号と悲鳴、それに対する諸々の指示の数々は、あたかも鉄火場のような有様を呈している。それでもなお誰一人逃げることなく自分たちの職務を全うし続けているのは、まがりなりにもこれまで共に戦ってきた者たちの矜持が支える意志の力なのだろう。

ここで管制室を放棄すれば、それはコフィンの停止に繋がる。そしてそれは、マッシュ・キリエライトが命を懸けてまで守った存在を見捨てることにまで及ぶのだ。

であれば、ここで管制室から逃げ出すことなどできようはずもなかった。

「よし、そっちのブロックは封鎖完了した!? よろしい、残りのリソースは全部守勢に回すんだ! ほんの少しでもいいからここを持ちこたえさせないと彼らの帰るところがなくなるぞ!」

いつにない真面目な調子で職員たちを叱咤するのは万能の天才、どうにかカレのおかげで瀬戸際で留まっているものの、果たしてこの均衡もいつまで続くか分からない。

「ほらロマーニ、君も考え込んでないでこっちを手伝ってくれ——」

威勢よく飛んだ言葉であるが、尻すぼみで消えていく。

さつきまで管制室で司令塔として行動していた彼は今、一つの大きな壁にぶつかっただかのような面持ちであった。

一つ、深呼吸。それから、覚悟を決めた。

「未来の価値か……それを言われたら仕方ないね。それに何より、彼女には言っておかなくちゃならないことがある。よくもこうまで隠し通してくれたものだよ。忘れていたボクにも非はあるとはいえね」

「……なんだ、やっぱりそうなるのかい？　せつかく想い人がいるんだ、悪足掻きでも何でもして生き残ろうとするかと思っただけだ」「そうだね、ボクだって出来ることならそうしたかったさ。だけど、ここまで来たら仕方ない。ボクはボクとしてやれるだけのことをする。状況的にも今が最適だし、覚悟を決めるならこの時がベストだ」

そして、彼は立ち上がる。そこにはもう、平時の情けなくて頼りない男の姿はなく、ただ自分のやるべきことを見据えた者の姿だけがあつたのだ。

「カルデア司令官として全職員に最後の任務だ。必ず、立香君が戻ってくるまで管制室を死守しろ。特に君は万能の天才なんだ、それくらいやれるだろうレオナルド？」

「……ふつ、私を誰だと思ってるんだい。それくらいお安い御用さ。だから君も——果たすべきことを果たすといい。お土産、少しは期待したかったのだけどね」

「はは、それはちよつと厳しいかな。悪いけどそつちは立香君からもらってくれ」

軽口と、それから微かな笑みと。それだけ残してロマンは管制室を出ようとする。

その時であつた。

「Dr. ロマン！」

「おや、なんだい？」

職員の一人だった。ロマンの出したオーダーをこなすべく必死になつて管制室のコンソールと向き直っているから、どんな顔をしているのかも分からない。今この時だって指はせわしなくタッチパネルの上を踊っている。

だけどこの一時だけは、先ほどもまでの喧騒が消えていた。誰もが次の言葉に耳を傾けて待っている。

「吉報を——心待ちにしていますー」

その声がわずかに泣きそうに感じられたのは、きつと気のせいではないだろう。

「ああ、任せてくれ。これでもボクは、勝てる戦いにだけ出陣する男だ

からね」

きつぱりと告げてから、彼は最後の戦場へと足を進めた。

◇

かくして、最後の舞台は整った。もはや風前の灯火というところまで追い詰められた立香、ならびにマーキダの前に現れたのは、本来ならばどうやっても現れることが出来ないであろうただの人間ロマンニアークマンであったのだ。

そして彼は、どのような時もつけていた白い手袋を外していた。指に嵌まり鈍く輝くのは、ただ一つの指輪だ。

「貴様、ロマンニアークマンだと。馬鹿な、なぜこの場にいる。いや待て、その指輪は——」

「そうだゲーティア、これはソロモン王が持つ十の指輪の内の、最後の一つさ。遥かな昔に、遥かな未来へと気紛れに送ったのだけ……中々どうして、運命とは分からないものだね」

「ドクター……?」

「ごめんね立香君、だいたい察したとは思うけど、ここからしばらくはボクらに任せてほしい。だから君は、君の仕事を為す時を逃さないでくれ」

訳が分からない、だけでも急速に事情が呑み込めてきた立香であったが、ロマンの念押しに敢えて口をつぐむことを選んだ。言いたい想いをぐっと我慢して、彼を信じる。

そしてもう一人は——

「嘘、駄目、どうして来たの……?」

まるで熱に浮かされたかのような定まらない表情で、あまりにも悲痛的な声を出していた。

「いやうん、確かに君には色々といったけど、やっぱり土壇場ってというのは何が起きるか分からないものさ。だから、ボクはこうしてここにいます。立香君やマシユが勇気をくれて、君はボクにたくさんの想いを注いでくれた。きつとそのおかげだろうね」

そこで言葉を切ってから、彼はゲーティアへと向き直る。

「さて、生憎とお前に長々と語ってやるつもりもないからね。手短に

済ませておこうか。マリスビリーの手によって十一年前の聖杯戦争に召喚された私は、勝った暁に聖杯に一つの願いをくべた。まあそれ自体は“人間になりたい”なんてよくあるものだったし、この際それは置いてよい」

滔々と語られるロマンの、否、ソロモンの言葉に激しい否定を示したのはゲーティアだ。先ほどまでの余裕をかなぐり捨てて、彼の口から放たれる言葉に驚愕を隠そうともしていない。

「馬鹿な——あり得ん！ 節穴かフラウロス！ 何もかも違う、貴様がああ男であるはずがない！ しかも願いを叶えただど!? それこそ絶対にありえないだろう！ 外道！ 冷酷！ 残忍！ 無情！

この私のアーキタイプとなった男が、人並みの願望など——！」

「……お前にそこまで言われると流石に傷つくなあ。というか、仮にでもそこまで言われちゃう男がどうしてここまで好かれたのやら。今でもちよつと不思議で仕方ないよ」

未だ呆然としているマーキダを一瞥してから、困ったように笑った。

それと共に彼の周囲が光で包まれ始める。仄かに輝く光はあたかも祝福のようにも見えて——

「駄目、それだけはやっちゃいけません！ せつかく貴方は人になれたんです！ これから先の人生は重荷からも解放されて、楽しく過ごして、貴方の頑張りが報われなければ嘘じゃないですか！ 貴方の人生は、ここで終わって良いものじゃありません！」

マーキダからしてみれば、呪いの光に他ならなかった。

口をついて出る言葉は彼女からしても勢いと衝動に任せたものだった。幸せになってください、報われてくださいと、心の底から願う故に必死になって思いとどまらせようと言葉を走らす。

そんな彼女の想いを受け止めた彼は、涙が出そうになりながらも、ただただ笑みを浮かべた。これに領いてしまえば、目を向けてしまえば、きつと今度こそ自分は意気地なしのまま終わってしまうと分かっていたから。

それだけは、絶対に認めるわけにはいかなかった。

「ありがとう。こんなボクの身をそこまで案じてくれるのも、きつと君くらいだろうねマーキダ。だけど、もう決めたんだ。きつと辛い思いをさせるだろう。身勝手な願いだけど、どうか理解してほしい」
そして、ほんの一瞬だけ、光が溢れた。一秒にも満たないその刹那に、

「魔術王の名はいらない、と言ったな。では改めて名乗らせてもらおうか。我が名は魔術王ソロモン。ゲーティア、お前に引導を渡す者だ」

◆ 本物の魔術王ソロモンが、この場に降誕した。

◆ ソロモン王には、三つの宝具が存在すると言われる。

そのうちの二つはゲーティアも理解し、使用しているもの。

第二宝具『戴冠アのときルたれりス、其は全てウを始リめるものナ』。

並びに、第三宝具『誕生アのときルたれりス、其は全てウを修メるものニ』だ。

どちらも魔術王ソロモンを象徴するに相応しい宝具と言えよう。

しかし最後の第一、こればかりはゲーティアには分からない。何故なら、彼から最も遠い事象こそがこの宝具の真の効果だから。故にこそその仮想第一宝具、どのようなものかは自らの推測のみが頼りとなる。

だがこの時、魔術王ソロモンその人が現れた。であれば最後の宝具、ゲーティアが仮想と定めた第一を操れるのは至極当然のことであり——それを為すことはどこまでも希望に満ち溢れた残酷な結末を呼び起こすのだ。

◆ 「それじゃあ二人とも、ちよつと行ってくるね。なに、用件はすぐに終わるさ。そのあとは君たちにバトンタッチだよ」

まるで買い物にでも出かけるかのような気安さで、彼はゲーティアへと向かっていく。その後ろ姿を立香は止めることなく見送ったが

「待って！ お願い、行かないで……！」

その背に追い継る影があった。マーキダはほとんど抱き着くよう

に後ろから引き留めるが、しかしソロモンは止まらない。止まるつもりもなかった。回された腕を優しく振りほどいて、後ろを振り返らずに一歩進んだ。

「離してくれないか。これ以上は未練ができるからね」

「でも……貴方の最期は……！」

「そうそう、最後ついでに君にも一つ言っておかないとね。自殺なんて終わりは良くないよ。頼むからもうそんなことはしないで、ボクの方までできるだけこの世界を楽しんでおいて欲しいかな」

「そんなこと言われても……貴方が居なければ生きていく意味なんて……私だけ置いてかないでよ、ねえ……」

ほとんど泣き崩れそうになっているのに、それでもどうにか両の足で立っているのは最後の矜持なのだろう。代わりに消え入りそうな声で呼び止められてしまい、心が揺れ動く。

今まで散々助けられたり慰められたりしたのだ、すぐにでも戻ってあげたい気持ちは山々だった。それでも、決意を翻さない。振り返ることだけは決してしない。

「私の最期は、そうだ、幸いにも最期だけは人間らしい逸話となったからね。お前の持つ九つの指輪と、私の持つ一つの指輪。これがあれば、あの時を再現できる」

「——まさか、貴様！ 止めろ、止めろ止めろ止めろ止めろ！ なぜそのようなことができる！ 全能を手放すなどと、そのような真似できるはずが——」

「できるのさ、今の私にならね。全能のくせに、案外と認めたくないことから目を背けてしまうのはお前の悪い癖だ。さあ、ゲーティア。お前に最後の魔術を教えよう」

——伝承に曰く。ソロモン王は指輪を用いたことは一度しかなく、またその最期は神に指輪を返却することにより遂げられたという。それはつまり自身に与えられた恩寵を完全に放棄する事と同義であり、死を意味する事となる。

「神よ、あなたからの天恵をお返しします。……全能は人には遠すぎる。私の仕事は、私の心は、私の幸せは……人の範囲に収まるもので

十分すぎたんだ」

そのようなことを、一度死んだ身であるサーヴァントが宝具として用いられるようになるのか。

指輪を返して天命を果たした逸話の再現、それはつまり——

「第一宝具、再演。——『訣別の時きたれり、其は世界を手放すもの』」
自身の存在全ての放棄。魔神柱も、時間神殿ソロモンも、そして己すら巻き込んだ消滅に他ならない。

瞬間、崩れ始めるゲーティアの肉体。あれだけ凶悪な強さを誇った獣の肉体はいつも簡単に綻びを産み始める。それは一秒毎に増えて、増えて、増えて——

「馬鹿な、認められん！ 認められるはずがない！ 英霊としての放棄だと！ 命だけでなく、全ての存在の放棄だと！ 貴様、何をしたの分かっているのか!？」

「もちろん分かっているとも。これでボクはもう終わり、英霊の座からも消えて完全消滅と相成るわけさ。まあうん、その道連れにお前にも消えてもらうんだから、やるだけの価値はあったとボクは思うよ」
まるで気にしていないとばかりに、あっけからんと告げるソロモン。いや、その姿はいつの間にか見慣れたロマニ・アーキマンのものに戻っているのだが、

「ドクター、身体が……」

彼の身体は消えかけていた。これまでの旅路で何度となく見てきたサーヴァントの消滅間際のそれはしかし、此度ばかりはあまりにその意味が違う。違いすぎる。

「残念だけど、今言った通りさ。直にボクは完全に、英霊の座からすら消え去る。正直に言えば君たちと一緒に二〇一七年を迎えられないのは悲しいし辛いところだけど……これでいいんだ。この選択を、君たちがボクに教えてくれた。だからほら、そんなに悲痛な顔をしないでくれマーキダ。せっかく珍しいボクの見せ場なんだから、せめて笑ってくれると嬉しいな」

振り向いた先には、ひたすら涙を流し続けているシバの女王の姿があった。

「誰が……笑えるものですか……。貴方は……。本当に、ずるいですよ。私の気持ちはどこに行けばいいというのですか!? 永遠に叶わぬ恋を抱えていると!」

「残酷なことを言っているのは百も承知さ。だけどひとまず、君も思い詰めすぎて自殺してしまったって事であいこにしないかい? 私だって、かつてそれを知ったときは衝撃でしばらく何も手につかなかったのだから……。なんていうのは、ちよつと意地悪過ぎたかな」
「つつ、ドクターー!」

マーキダが駆け寄る。もはや彼以外は何も見えない聞こえないとばかりに、わき目も振らずにその身体を抱き留め繋ごうとして……。触れることなくすり抜けた。

咄嗟にバランスを取れず、無様に地面に転がる。その姿はまるで、恋に破れた手弱女のように。ほんの微か手に握りしめた光の粒子を見つめて、こらえ切れず嗚咽を漏らす。

「……参ったね、これじゃ最後に握手で終わるなんてこともできないみたいだ。中々もどかしいものがあるけど、でもボクはたくさん君と触れ合えた。昔できなかったことをたくさん出来た。なら、それで十分だろう」

「十分なんかじゃ、ない……。貴方は幸せにならなきゃ駄目なのに……。だって、こんなの酷すぎます! 貴方の人生の中には幸せも救いも、自由すら欠片たりともなかったのに!!」

夢を叶え、人間になれた。それはいい。けれどそのあとは? いつ起こるかも分からない事象に向けてひたすら備え続ける日々、気を休められる時なんてどこにもない。それは自由の名を冠した牢獄だ。実質的には、彼の在り方はソロモン王と何一つ変わっていないのだから。

「いいや、それは違うさ。ボクは確かに自由だった」
「だけどロマンは、自分の幸せを願ってくれる叫びを毅然として否定した。」

立ち上がろうとするマーキダに手を差し伸べかけて、自分の身体を思い出してゆつくりとひっこめた。けれど彼女の手は伸びてきたか

ら、それに合わせてエスコートでもするかのように手を重ねる。

「ボクは自分の意志でこれを為した。昔とは違う、だから不満なんてなかったさ。何でもないようなことで笑って、怒って、悲しんで、そんな当たり前のことをたくさん知ることができた。立香君にマシユ、カルデア職員の皆やレオナルドには助けられない日はなかったほどだよ。そして極め付けに、君が傍に居てくれた。それだけで、ボクには十分な人生だった。胸を張ってそう言える」

その言葉に込められた想いには、本当に微塵たりとも後悔なんて存在しない。彼は本当に、心の底から善き人生だったと感じているのだ。

そして、段々とロマンの声が小さくなり始める。消滅へのカウントダウンはもはや一刻の猶予も残されていなかった。

「さて立香君、これが本当に最後の命令だ。魔術王はこれで消え去るが、獣にはまだ僅かの猶予がある。だからこそ、ゲーティアを完膚なきまでに倒してこい。人間の生と死の愛おしさを、愛と希望の物語を君の手で見せつけてくるんだ」

「ドクター……わかりました。貴方に最大の敬意を……！」

「ははは、君にそう言われるのは恥ずかしいなあ。でも、嬉しいよ」
気恥ずかし気に後頭部を搔く、ような仕草をしてから、今度はマーカーキダに向き直る。

正面から、視線が交わった。その赤い瞳を見つめていると走馬灯のように想い出が蘇ってきて——だけど振り返る暇はない。最後に一つ、伝えるべき想いがあるのだから。

「いつか君は言ったね。千里眼だけじゃ見えないものが見えた時こそ、今の気持ちを思い出せ」と。そうだ、ボクは本当に楽しかった。あの頃にはまだ理解できなかったことを理解できた。だから最後に、恥ずかしいけど——今度はボクから言わせてくれ」

それはいつかの、大切な記憶。魔術王と幻想女王が再会を誓った最後の日に交わした約束。もうその約束は再会の時に果たされたけど、新たにもう一つ約束ができたのだ。

自分の言葉で想いを伝えてくれる時を待つと、彼女は言ってくれ

た。だから今度こそ、自分から伝えておきたかったのだ。それさえできれば、後はもう満足して消えていけるから。

彼女は泣きながら、目を拭った。それから、精一杯に笑う。涙でぐしゃぐしゃの笑みは不格好かもしれないけど、なにより綺麗に思えた。

「さようなら、マーキダ、愛しき幻想の女王よ。君と出会えたことが、この生涯で何よりの宝だよ」

「私も——貴方を愛しています。どれだけ時が経とうと、決してこの想いを絶やしはしません。だから、ありがとう。貴方と出会えたことが、私の誇りです」

納得なんて出来ていないだろう。こんな終わりは認めたくない。魂は吼えているだろう。その気持ちはとても抑えがたいほどだけど、それでも彼女は耐えた。彼の言う通り、せめて最後は笑顔で見送ろうと鋼の意志で抑えてみせた。それこそが、彼の人生に報いる一番の方法だと理解したから。

彼は、満足げに笑ってくれた。それでもう、マーキダにとっては十分だった。

そうして、ソロモン王は、ロマニ・アーキマンは、人としての生涯を終えた。光の粒子は解れ、そこには既に何も無い。ほんの十年ほどの人生を、彼は最大限に活用して、楽しんで、愛し愛されて——この世界から去っていったのだった。

第三十六話 獣の玉座 IV

かくして、魔術王は逝った。最後の希望を託して、自身の想いを貫いて。鮮烈にその生涯を駆け抜けた一人の人間の遺志を継いで、各々は決意を新たにしている。

残された者たちに共通する想いはもはやただ一つだ。

「笑わせるなよ、この程度の崩壊がなんだという。まだ私には、武器が残っている。光帯が残されている。貴様らを殺し、英霊を退去させ、時間跳躍を行うには十分すぎる力がある！」

今にも崩壊しそうな身体を意地と気合だけで押しとどめて、ゲーティアは一步前に出る。その先に、殺すべき相手が存在する。目の前の男女こそ、何よりもまず自分の手で排除すべき最大の怨敵に他ならないのだから。例え秒刻みで存在が弱体していようとも、必ずや殺してみせると物語る。

「いいや、それはさせない。オレたちは、カルデアは——絶対にお前の企みを打ち破って見せるからだ！」

その様を見て、人類最後のマスターもまた気合を入れなおす。非力の身で多くの特異点を駆け抜けた。様々な相手を目の当たりにし、だけども打ち砕いてきた。なればこそ、目の前の相手はその集大成だ。生きるために、ロマニ・アーキマンに報いるために、絶対に乗り越えなければならぬ最後の敵だ。

「そうです、ここで貴方を倒さなければ、何のためにあの人は勇気を出したというのですか。たいそうなお題目も、因縁だつて必要ない。私は私の愛しい人のためだけに、貴方を止めます。例え何を犠牲にしようとも」

目の前で想い人を失い、悲嘆に暮れていた姿はもはや過去のもの。立ち上がり剣を取ったその姿は、常の様相を取り戻していて——否だ。その瞳の奥に灯された意志の炎は、限界など知らぬとばかりに燃え盛り続ける。恋慕を燃やし、故人を悼みながらも決して曲がらず、折れない、不屈の心を照らし出す。

——故に、ここに三者の思惑は一致した。ただ眼前の相手を打ち滅

ぼすこと。それだけが、この場に集った全ての者が胸に抱いた決意であつた。

◇

幕開けた最終決戦、まず動いたのはマーキダだつた。

「ごめんなさいドクター、貴方からいただいた魔法の呪文、使わせてもらいますね——『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』」

短い言葉に万感の感謝と惜別の念を込めて、祈りの言葉を口にする。それはかつて、ロマンからもらつた魔法の呪文であり——彼女が持つ『無銘：呪魔の剣』の真名を意味する言葉であつた。

真名解放と共に、マーキダの能力値が飛躍的に上昇する。それこそ、ステータスだけ見れば大英雄にも劣りはしないほどに。不可思議なほどの強化能力は、ゲーティアにとつても見覚えのあるものだつた。

飛躍的に上昇した俊足で瞬きの間にゲーティアの懐へとマーキダが潜り込む。放たれる剣の閃きはあまりに速く、鋭く、巧妙で、一撃でも受ければビーストの霊器であろうとただでは済まない。

故にゲーティアは剣の軌跡を先読みし、肉を切らせてでも、直撃はさせない。返礼とばかりに拳を乱打し、両者は超近接戦へと突入した。

「その剣は……なるほど、ロンドンで見せた強さの一端はこれか。感情を糧に持ち主を強化するなど、まさしく“不滅の呪い”とはよく言つたもの、魔剣に相応しい邪悪さだ。いかにも貴様の悪辣さに詠えたかのような」

互いに一撃でももらえば決着が着く。そんな剣と拳を交えながら、ゲーティアの思考はひたすら加速を続けた。

あの時、絶望に叩き落されたマーキダは異様な実力と共に戦線復帰を果たした。その時は憎悪のあまりに絡繰りまで頭を巡らす気すら起きなかったが、今ならばつきりとわかる。

マーキダの振るう剣、『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』は魔剣の一種だ。それも、ある意味では飛び切り最悪に近い代物。

「……確かにそうでしょうね。人の感情を代償に能力の強化を図るな

んで、正気の沙汰じゃない。最低な終わり方をしてしまった私にとっては皮肉にすらならない代物でしょう」

人の感情は心から無限に湧き出るものだ。想いある限り枯れることは無く、例え心の灯火が消えかけようとも起爆剤さえあれば何度だって蘇り燃え広がる。

だからこそ、この『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』は魔剣と呼ぶに相応しいのだ。だってこの剣は、枯れるはずのない心の泉を容赦なく吸いあげて、怒りも悲しみも喜びも何もかもを燃やし尽くした暁に、無へと均してしまふのだから。捧げられた感情の強さと等価の力を与える、悪魔の宝具。それこそが、彼女の愛剣の本当の姿であった。

「ドクターに真実を告げれば、きっと私に真名を教えたことを後悔してしまうでしょうね。なんてことをしてしまったのだと。だけど、私はそうは思いません。そのおかげで助けられた。そのおかげで彼と再び出会えた。私にとってはそれで十分すぎるから……この剣ですら、愛しく感じるのです」

ロンドンでは訳も分からず真名を解放し、次いで湧き上がる歓喜のままに剣を振るった。その時も剣は喜びの感情を吸っていたけれど、いくらか何でも数秒程度で増え続ける歓喜の念を吸いつくすことは叶わない。しかしそれだけで御使いを退けるだけの強化を施すのだから、その強大さは推して知るべしだ。

逆に考えれば、意図的に長い時間を用いて剣に感情を捧げればどれほどの強さを手に出来てしまうのか。あまりにおぞましい対価を支払った結論は、既にこの場に顕現していた。

「今こそこの魔剣を最大限に用いるとき。私は私の意志で、最も大切な感情を燃やし続けてみせましょう。ゲートティア、貴方を止めるためならば私はなんだって出来るのだから」

「貴様、まさか——！　ふざけているのか、貴様のような愛に狂った女がそのような世迷いごとをッ！」

その言葉の為す意味を悟り、ゲートティアが声を荒げる。その間にも剣と拳の応酬は幾度となく重ねられるのだが……徐々に、しかし確実に

に天秤が傾いてきている。ゲーティアが、圧され始めていた。

理由は二つ。一つはゲーティアの身体の崩壊がさらに進んできていること。もはや拳を振るうだけで身体が崩壊するだろうに、限界を超えて意志の力一つで戦っているのだ。

そしてもう一つは――

「愛に狂ったからこそ、ですよ。愛を知らぬ悲しい獣、貴方に見せつけてやりましょう。愛の力がどれほどのものか、その最果てを」

ほんの一滴、堪えきれない涙が落ちた。

マーキダは、『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』に自身の想いへの愛情を捧げていた。莫大ともいえる愛慕の想いを魔剣は慈悲なく吸い上げ蹂躪して、ここに前人未到の超強化を実現させる。

好きな人の願いを叶えるために、好きな人への気持ちを捨て去るという矛盾。溢れんばかりであったはずの愛は一秒ごとに薄れていつて、その事実泣きたくなるほど恐怖した。当たり前前に未練はある。忘れたくなんてない。魔剣などに捧げてよいものでは断じてない。

それでも、ロマニ・アーキマンという男はやって見せた。自身の完全な消滅を恐れずに、勇気をもって旅立っていったのだ。であれば、やるしかないだろう。この喪失の恐怖に打ち勝った先にこそ、きつと本当の愛はあると信じている。だから今この時、最も大切な想いを糧にして、目の前の存在を打倒すると誓ってみせた。

「貴方はここで、必ず斃す！それが私の、彼に捧げる愛だから！」

裂帛の叫びが空に響くと同時、ゲーティアの崩れかけた右腕が宙を舞った。高らかに愛を謳う魔剣の一閃がついにゲーティアを斬り裂いたのである。

そしてこの一撃を皮切りに、ここにきていよいよ互いの力関係が逆転の様相を呈し始める。命よりも大事な気持ちを犠牲にした最低最強の強化は、着実にゲーティアへ牙を突き立てて離さないのだ。

獣の玉体には加速度的に傷がつけられ、このままいけば間違いなく引導を渡されることになる。それも自身が最も嫌い、憎む人間に。仮にも全能であったゲーティアだからこそその事実を過たず認識出来て――

「ふ、ぎ、けるなアツ！ 愛だと！ そんなものについて何の価値がある!? 愛があるから、人は不完全なのだ！ 貴様のような矛盾を産みだし、行き過ぎた愛情は人を苦しめ、果ては博愛の教えは虐殺の歴史にまで発展した！ このようなふぎけた代物が存在して良いはずがない！ 百害あろうと一利すらない！ そんな愛情は、人間には不要だ！ この私の手で焼却してみせる！」

そんな理屈知ったことかと、かき集めた意志の力を爆発させた。駆動する魔術式、握りしめた拳の感触はいまなお固く。なら、自分はまだ戦える。こんなところで終わるわけにはいかないのだ。人という不完全な存在をこのままにして良いはずがないのだ。その想いをもう一度強く焼き付けて、倒れかけた魔神王は再起を果たす。

「ぐつ……まだ戦いますか、ゲーティア！」

「無論だ！ 私にはまだ為すべきことが数多く残っている、道半ばで倒れるわけにはいかないだけの使命がある！ なればこそ、貴様に討たれるわけにはいくものか！ 刻み込め、勝つのは私だ！」

後方へと一気に跳躍して距離を取る。その行為だけで足がさらに崩壊したが、構うものか。道理も何も吹き飛ばして、ただ目の前の敵への意地だけでその身を保つ。

「我が偉業！ 我が理想！ 我が誕生の真意を知れ！ この星は転生する！ あらゆる生命は過去になる！ 讃えるがいい——我が名は、ゲーティア！ 人理焼却式、魔神王ゲーティアである！」

ソロモン王の手によって崩壊したのは、何もゲーティアだけでない。この特異点そのものである『時間神殿ソロモン』こと『戴冠のときたれり、其は全てを始めるもの』と、空を覆う人理の熱量を持つ光帯『誕生のときたれり、其は全てを修めるもの』もまた崩壊を始めている。そのためゲーティアが第三宝具でマーキダを焼き払おうにも、マシユすら蒸発させた一撃を放つことはもはや不可能である。

そのようなことはゲーティアとて百も承知だ。しかしそれでも、もはやこれしか手立てがない。そしていくらか弱体化してると言えども、その一撃はサーヴァントを芥のごとく焼き払う程度造作もないのだ。

今この時、ゲーティアは目の前の女を消し飛ばすことだけに死力を尽くす。自身の全てを賭けてでも、この女だけは否定しなくてはならないと理解したから。

「消え失せるがいい！」

『誕生のときたれり、其は全てを修めるもの』ッ！』

王の宣言と共に放たれるは、遍く存在を焼却せしめる死の光だ。天空から降り注ぐ一条の光帯は、地球上のあらゆる物質を上回る熱量を内包する。故に防御は絶対に不可能、それこそマシユのように強固な精神を盾にでも出来ない限りは――

「私には貴女のような素晴らしい宝具も心ありませんからね。悔しいなあ、あと一步で愛は必ず勝つて示すことが出来たのに」

そして当たり前のように、マーキダにはそのような手段をとることはできない。

破滅の光を前にして、シバの女王は寂しそうに呟いた。愛という彼女の根幹を成す感情を対価に捧げて、それでもなお自らの手で因縁に決着をつけるには足りなかった。よって、マーキダはここで倒されるほかに術はない。

しかし、どうか忘れるなかれ。

「だから……後は任せましたよマスター。私たちの分まで、頼みます」この戦いは、決して一人だけのものではないのだ。

「ああ……任せろッ！」

そうしてマーキダは最後の詰めを、想い人が信じた藤丸立香に託したのであった。

莫大な熱量が直撃したのはマーキダただ一人だけだ。その効果範囲に、これまで敢えて黙して戦いを見守っていた立香は入っていない。

だってそう、今この時だけはゲーティアの視界にはマーキダしか映っていないからだ。本当は何にもまして殺すべき相手を、刹那の間だけ忘却してしまうくらいに感情的になっていた。

故にここが最後にして最大の好機となる。くしくもロマニ・アーキマンは最初に述べていた。「君は、君の仕事を為す時を逃さないでく

れ」と。

きつと彼はここまで予見をしていたわけではないだろう。特攻しかけた立香を留めるための方便だったはず。けれど、立香はその言葉を信じていた。だからここまでひたすらに耐え忍んで、最後の詰めを打つ機会を待っていた。

そしてその努力は、愛をもってロマニ・アーキマンの言葉を信じぬいたマーキダの手で成就する。

「ゲーティア——ッ！」

気合一喝、いまだ光帯の熱量も冷めやらぬ爆煙の中へ飛び込んだ。肺が焼かれてしまうから呼吸はしない。全身が火傷しそうなほどに熱いけれど、最後の最後にマーキダが残してくれた防護の魔術が瀬戸際に致命傷を防いでくれた。

もどかしい。ほんの少しの距離が永遠にも感じられる。それでも走って走って駆け抜けて、ついに立香は煙を抜けてゲーティアの前に躍り出た。

「なッ——藤丸、立香——ッ!!」

ほんの少しの間によつて虚を突かれたゲーティアは、それでも反射的に反撃をしようと身体が動く。しかし崩れかかった玉体は思うように動かず、拳の一撃は咄嗟に身体を屈めて避けられた。

「これで、終わりだッ！」

手の甲の赤い輝きはくすんでいた。令呪を三画すべて使用した身体強化。普通ならあまりに非効率的であろうとも、この瞬間は値千金の効果を発揮する。

振るわれた人間の拳は、崩れかかったゲーティアの肉体を確かに捉えて。胸元に存在する禍々しい瞳に直撃し、その霊器をあやまたず撃ち碎いたのだった。

第三十七話 失恋

その日、カルデアは運命に打ち勝った。

崩壊する冠位時間神殿ソロモンからどうにか藤丸立香が帰還し、そしてどのような理屈かマシユ・キリエライトが蘇ったそのあとで。とうとうカルデアは元の時間軸、二〇一七年の一月一日に戻ってこれたのだ。その時の管制室の沸き立ちようと言えば、疲弊しきった状態とは思えない勢いを生み出したほど。

ようやく取り戻した平穏な世界は美しく、また鮮やかであった。きつとこれから魔術協会への釈明やら、未だコフィンで冷凍保存中のマスターの扱いで追い掛け回される日々となるのだろうか、それでも今だけは守りきれたという感慨に誰もが浸ることを許されたのだ。

無論のこと、人理修復を成し遂げた裏には悲しい犠牲もまたあった。最初から最後まで精いっぱいカルデアを支え続けた男は、もういない。その身を賭して人類の未来を守るべく戦い抜いた彼は、特異点から帰還することなく終わってしまったのだから。

そのため、今夜だけはいなくなってしまった者たちを偲ぶべくしめやかに過ごす——なんてことはしなかった。むしろ人理修復を成し遂げた今夜だからこそ、派手に祝って平和と楽しさを享受すべきだと誰もが思ったのだ。きつとドクターも平穏な世界で皆が笑っている方が嬉しいだろう、と。

「さあ、そういうわけだから今日だけはしめっぽいのはなしだよ！ どうせ明日からはまた事後処理が山積みなんだ、せいぜい楽しんでおくとうようじゃないか！」

よって食堂に集まった面々は、ダ・ヴィンチちゃんの音頭に合わせ、て早速祝勝会となっていた。戦い抜いたマスターを讃え、どうにか乗り切れた自分たちを褒めあい、ここまで手を貸してくれた英霊たちに感謝を示し、マシユの帰還と成長を喜んだり。あらゆることに理由をつけて祝いの言葉が飛び交って、熱狂した会場にはありったけの食べ物やら酒やらが持ち込まれた。

しかも気が付けば聖杯としか思えない盃まで鎮座していて、さらに

大量の食べ物を出してもらおう始末である。魔術協会が見たら卒倒しかねない状況ではあるのだが、今更これを悪用しようと思う人間なんて一人もいない。それ故に今日だけは黙認されたのだった。

◇

夜も深まった来た頃、祝勝会は宴もたけなわといった様子を見せていた。酒に気持ちよく酔って、これまでの旅を語り合って話のタネとしているのだ。

その最中で、そつと食堂から抜け出す影が一人いた。他の誰にも気づかれないようにするりと廊下に出ると、別世界のように静かで人気がない廊下を歩きだす。

コツコツと、足音が廊下に響く。どこか覚束ない足取りで進むその先には、とある一室があった。扉に手をかけてみれば、鍵はかかかっていない。これ幸いとばかりに入り込む。

そうして一人祝勝会を抜け出したマーキダは、どきりとベッドに倒れこんだ。枕を胸に抱いて、この部屋の主のぬくもりをほんの少しでも感じ取ろうと身をよじる。

だけどそんなことをしようとも、空っぽになった心には何一つ波立ものはなかった。さつきまで出ていた祝勝会と同じ、祝う気持ちも楽しむ心もあるのに一向に晴れないのだ。

「ドクター、私は……一番大切なものを失ってしまいましたよ」

誰に言うでもなく、見慣れた天井を見上げて一人呟いた。ここはカルデアの司令官であった者、ロマニ・アーキマンの自室である。最初は本当に散らかっていてどうしようもなかったのだけど、マーキダがよく訪ねてくるようになってからは少しずつ整理整頓が進んでいたのだ。

今となつては懐かしい思い出、もしロマンが居ればきつと笑い話にでも出来たのだろう。けれどそれは夢物語、現実には故人の残滓を求めて記憶の海を彷徨うほかに行き場がないのだ。

「知らなかった、これが喪失というものなのですね……なんて恐ろしいものなのでしょう。貴方は、こんなものに耐えたのですね」

ゲーティアに打ち勝つために、自身の魔剣に自身の愛情を惜しみな

くくべて燃やし尽くさせた。それはすなわちマーキダの燃え盛る愛慕の情の喪失であり、かつては思いつめた挙句に自殺を選んだことを思い返せばとんでもない決断だったといえるだろう。

自身の心の大部分を埋め尽くす感情の喪失は、彼女の想像以上に辛いものであった。絶対に忘れない、好きだと言い切った相手のことを想っても、心が何一つ動かない。暖かくなってくれない。

彼の死を悼もうとしても、ただ仲間が死んで悲しい程度の気持ちしか起きないのだ。それが悪いとは言わないが、けれどマーキダにとつてはとても考えられない事態である。できることなら、無様にみつともなく泣いても惜しみたかつたのに。それすらできない。する資格を失ってしまったから。

かつてマーキダの自害を知ったソロモンも同じような気持ちだったのだろうか。自分の全てを擲ったロマニ・アーキマンはこれに耐えたのだろうか。だとすれば自分はどれだけ罪深いのかと、今更ながら自覚してしまう。

ならばこれは罰なのか。愛を知って、愛に溺れて、愛に狂って、そして愛を失った。なるほど、最低な自分にはこれ以上ない末路だとマーキダは小さく自嘲した。

「これから、どうしようかなあ……」

このまま現世に残ったところで、喪失の痛みといつまでも向き合い続けるだけだろう。そんなのにはきつと耐えられない。

かといって、後追い自殺なんて真似は決してしない。例えこの身がサーヴァントであろうとも、ロマンはきつとそんなことは望まないだろうし、かつての自分を恥じ入る以上それだけは出来ない相談だ。

であれば残された道はただ一つ、カルデアの職員と共に事後処理の手伝いをする事だろう。ある程度カルデアのごたごたが片付いたら、自分の気持ちに区切りをつけて、未練なくマスターと契約を終えて座に帰還する。おそらくこれが一番好ましい選択だ。

「そんなの……できるわけ、ないよ……」

口から零れたのはどうしようもない否定の言葉。分かっている、どうせ自分は耐えられなくなると。頭は彼のことを愛していると信じ

続けるのに、心が段々と離れて行つて繋ぎ留められない。最後には愛しているのに冷めているという矛盾に耐えかねて、どうしようもなくなってしまうのだ。

故にマーキダは終わっていた。これからどう生きようと救いなどあるわけがない。それこそ、世界から消え去ったロマニ・アーキマンという男が戻つてこない限りは――

「……誰、ですか」

ちやうどその時、扉をノックする音が聞こえた。マーキダは誰何の声にほんの少し期待が混じつたのに気づいて、そんなわけないと思ひ直した。都合の良い夢を見ることはできないのだから。

「やっぱりここにいたか。期待させて申し訳ないけど僕さ」

そうして普段通り飄々とした態度でやって来たダビデは、ベッドに腰かけていたマーキダの隣に座つた。反射的にマーキダは少し距離を取つたが、特に咎めたりはしない。

「……何の用で来たのですか？ 申し訳ないのですが、今の私はあまり人と話したい気分ではないので」

「うん、それは見ればわかるとも。だから単刀直入に話をしたいと思つてるのだけど」

ダビデの様子はあまりに普段と遜色ない。ともすれば日常の延長にあるのではないかと勘繰つてしまうほど。

だからマーキダは、何ら堪えたように見えないダビデに訊きたいことがあつたのだ。

「どうして貴方は……それだけ平静でいられるのですか？ いえ、そもそもドクターの正体を承知していたのですか？ だとすればいつから？」

「質問が多いけど、そうだね、まずは二つ目から答えようか。結論から言えば、僕はロマニ・アーキマンの正体がソロモンだと知っていたよ。オケアノスで通信越しに話した時に“まさか、もしかして？”なんて感じたのだけど、そのあとの君の態度や彼の言動で確信したよ」

「ほとんど初対面からじゃないですか……それで、最初の質問についてですが」

「ああ、それは簡単なことさ。僕は彼の選択を見届けるといった。それがどのようなことを引き起こすかまではさすがに推測できなかったけど……彼は彼自身の選択で成すべきことを成せたんだ。それはソロモンとして生きた頃からは考えられないことで——だから僕は、その意志を尊重する。多少惜しむ気持ちがあるのは嘘じゃないけど、それよりもよくやったという方が大きいのかな」

「そうでしたか……私も、貴方のように思えたならばどれだけ良かったか。私は、貴方のように達観することはできないみたいです。きつとこれから先ずつと、例え座に戻ろうとも、この喪失感と痛みにつき合う羽目になるでしょう」

これから先を見据えてしまえば、とてもじゃないが正気を保てるとは思えない。故に重すぎるため息を吐いたマーキダに、唐突にダビデは懐から輝く何かを取り出した。

「それって……うそ、なんでこんなところに……」

「どうしても何も僕が持ってきたからに決まってるだろう？ もちろん、今のところ聖杯に捧げる願いなんてない以上、僕には無用の長物だけだね」

無造作に机に置かれたのは、黄金に輝く聖杯であった。器に充溢する魔力の渦が肌で感じられて、それが余計にこの聖杯が偽物ではない本物の願望機だと証明している。

普段ならば特異点で回収された聖杯は嚴重に保管されており、誰一人使用することはおろか取り出すことすらできない。唯一それが可能なのはダ・ヴィンチちゃんのだが、カレとて出すつもりはないはず。例外的に今日だけは一つ食堂に引っ張り出されているが、それとて用が済めば再び嚴重な封印を成されることだろう。

ただ、それを聖杯というには少しばかり違和感もあって——

「ちよつと欠けてないですか、これ？ しかも少し小さいような……」「気づいたかい？ 実はこれ、嚴密には聖杯そっくりの別物なんだよ。覚えてるかな、これはマスターがハロウィンパーティーに招かれた時に見つけた聖杯なんだよ」

「あー……あの切り札として残しておくと言っていたアレですか」

結局、立香は聖杯に追従するだけの魔力貯蔵庫という切り札を温存しきったまま人理修復を終えてしまったらしい。強力な切り札だけに容易に使用することもできず、大切に温存し続けた結果使うことなく終わってしまったということだろう。

「どうやらダビデは、そんなものをマスターからもらってきたらしい。どうせ使わないなら有効活用させてくれと。」

「で、結局貴方はこれを見せてどうしたいというのですか？ 例え聖杯を使おうともあの人は——」

「召喚することはできない。それは承知の上だ。第一、その検証は既に技術部のトップが責任をもって果たしていたよ」

「……なるほど、そうでしたか……」

考えてみれば、万能の天才がその発想に至らないわけがない。きつと短時間でやれるだけのシミュレーションをこなして、全てが無駄という結論を提示されて——その時のカレの気持ちだが、マーキダにはありありと理解できた。

「先に言っておくけど、僕にはこれを使った華々しい大逆転なんて構想は見えてない。これを持ってきたのはちよつとした気遣いで、せめてもの励ましだよ」

「なら……こんなモノは必要ありません。これがあつたところで、ソロモン王が座の記録からすら消えた現状では——」

そこまで言ったところで、マーキダは不意に言葉を切った。

記録。確かに自分は今そのように言った。本当に何気ない事実確認であつたはずなのに、どうしてかこの単語が頭に引つかかつてしようがない。

何だ、自分は今何に気がつこうとしているのだ？ 記録。それは記憶であり、事実確認であり、過去を振り返る手段であり、覆しようのない出来事の断片であり……智慧を保持する手段でもある。

「あ……」

「おや、何か思うところがあるのかな？ それなら良かった、君の愛はこんな程度なのかと失望せずに済んだからね」

満足そうに笑うダビデの言葉が耳に入らない。それよりもマーキ

ダは今、できるかもしれないという己の思考に取りつかれ始めていた。

ほとんど反射的に己の宝具である『智慧と王冠の大禁書』を取り出して、嵐のような勢いで頁をめくる。始まりはシバ王国の成り立ちの歴史から詳細な記録、中盤ではソロモン王と過ごした二か月間にまとめた内容が並んでいる。どれもマーキダにとっては大切な記述であるのだが、用があるのはそこではない。

「……見つけた」

頁をめぐる指の動きが止まる。開かれた箇所は『智慧と王冠の大禁書』の最後の方、カルデアに召喚されてから書き足した人理修復の足跡だ。

元々、記録を取り出したのは単なる気紛れだった。ロマンが何となくソロモンと似ているような気がして、ちようど暇もあつて観察を始めたのだ。それからは仕事を手伝いながらも記録を続け、特にロマンの正体が判明してからはより一層細かく描写がなされている。

つまりこの書物にはロマン・アーキマンという男の人生が可能な限り記されているのであり、もつと言えばその前世ともとれるソロモン王時代の記録も当然残っている。

そして何より、この宝具は書物に残されたシバの王国を現世に映し出すための“召喚宝具”でもあるのだ。であれば――

「できるの……かな？　本当に？　これでもし駄目ならその時は本当に……でも、もしかしたら……」

「ふう、どうやら方針は固まったみたいだね。ならここで僕はいったん退散とさせてもらおうかな。後は君の思うまま、やれるだけを尽くすといい」

ダビデが部屋から去っていき、残されたのはマーキダ一人だ。彼女はダビデに声を掛ける余裕すらなく、自分の思い至った考えに頭を巡らせていた。

理屈の上ではきつとできる。思わぬところから差してきた光明に一も二もなく飛びついて縋ってしまいたい。けれどもしこれで失敗したら……儂い希望すら打ち砕かれて、立ち直れなくなるのは間違

ない。

「いいえ、それでも……絶対に失いたくないものをもう二つも失ったんだから。今更躊躇う必要なんてありませんよね」

——消えかけた愛の種火が、燃焼を再開する。

自分を納得させたマーキダは弾かれたように立ち上がった。もうその瞳に迷いはない。机の上の聖杯を勢いよく掴んで思い出の部屋から飛び出すと、未だ祝勝会の続いている食堂へと駆け込んだのだった。

最終話 智慧と王冠の大禁書（ケブラ・ネガスト）

食堂はいまだ盛り上がりの中の真っ最中であつた。未成年の藤丸立香やマシユは酒を飲めない分まだまだ元気、カルデアの職員たちは酒を片手にこれまでの思い出話に花を咲かせている。どうやらまだまだ解散する気など微塵もないらしい。

これなら自分の目的を達成できる。そう確信したマーキダは途中で追いついたダビデと共に食堂へ足を踏み入れると、一路マスターの下へと向かつた。

「マスター、少々よろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、別に構わないけれど……大丈夫なの？」

彼の気遣いは間違はなく時間神殿ソロモンでのことに起因しているだろう。祝勝会に参加していた間はできるだけ普段通りに振舞っていたマーキダであるが、やはり皆にはそれとなく気を使わせてしまっていたらしい。

だけど今の彼女は、成すべきことを見つけた強い輝きを瞳に宿している。その変化を周囲も感じとつたのか、それ以上のことは何も言わなかつた。

「大丈夫かといえばそうでもないのですが……でも、やるべきことがあるので落ち込んでもらえません。それで一つ、お願いがあるのですよ——」

その内容を聞いたマスターは、驚いたような表情をしつつも二つ返事で了承してくれたのだった。

◇

「さてさて、君はいったい何をするつもりなんだい？ 立香君を始めとしてマシユやサーヴァントたち、それに職員全員にまでロマニのことを聴いてまわるなんてさ。せつかく彼の為にもしんみりした空気はなくそうと思つたのに、これじゃ台無しだよ」

「まだ私が何をするつもりなのかは言えませんが……できれば、後悔させないだけ言っておきますよ」

冗談っぽく笑いながら苦言を呈してきたダ・ヴィンチちゃんに、

『智慧と王冠の大禁書』を広げて筆を執っているマーキダは静かに答えた。今はまだ、答えるべきではない。できる確証なんて一つもないのだから、無為に期待させてしまうのはしたくないのだ。

ともかく一時間ほどかけてその場にいたマスターら全員からロマンについて聞いてまわったマーキダは、場所を移して管制室にやってきていた。その背後には面白かったダ・ヴィンチちゃんも着いてきていたが、マーキダは何も言わずさせるがままにしている。

「ふうん、それだけ言うなら私は見守らせてもらおうか。それで、その宝具に書いているのはさつき聞いてきたことなのかい？」

「そうですよ。きっかけは偶然であったのですが、この宝具にはロマン・アーキマンという男の記録が私を通して書き綴られています。ですがそれはあくまで私の主観がほとんどですから、補強するためには彼をよく知る他の方の力を借りるべきだと結論付けました」

「記録に、補強ね……いや、まさか君は——」

何かを察したような姿に、シバの女王は無言で首を横に振った。それ以上はまだ言わないでくれと、暗に示している。

その間にもマーキダはさらにさらにと文字を書き進めた。聞きまわった情報をまとめて、分かりやすく簡潔に、そして主観性を排除しつつも言葉に乗った熱意を損ねはしないように。次第に書き上げられていくそれは、あたかも一人の男の歴史書とでもいうべき内容だろうか。

おおよそ二時間も書き続けていただろうか。食堂の方は少しづつ喧騒が小さくなり、人気ひとけが小さくなっていく。さすがに職員たちもお開きとしたらしい。それでもなお、マーキダとダ・ヴィンチちゃんちゃんは管制室にいた。

そして、

「出来た……後はこれを基に上手くやれば、おそらくはできるはず……！」

マーキダが『智慧と王冠の大禁書』に記すべき最後の結びがつけられた。それと共に勢いよく立ち上がると、そのまま管制室から出ていこうとして——

「待ちたまえ、シバの女王よ。君に言うべき言葉がある」

万能の天才によって止められた。無論、無視などしない。できるわけがない。

「君がしようとしていることは理解しているつもりさ。だからこそ、今のうちにはつきりさせておきたいことがある。その宝具は確か——シバの王国の管理下にあるものを召喚するのだろうか？」

「……ええ、そうですよ。それが何か問題でも？」

問いに返した女王の言葉は、驚くほどに無表情だった。まるで能面のよう。けれどダ・ヴィンチは臆さずに言葉を重ねる。

「問題大有りさ。君の大切な彼は生前もその後も含めて、一切がシバの王国の所有物ではない。その事実から目を背けている限りは駄目だ、決して成功なんてするわけない」

「そんなこと……そんなこと、分かっていますよ！」

思いがけず女王の口から漏れ出た言葉は、もはや絶叫に近いものだった。さつきまでの無表情は幻のように消え去って、激情を剥き出しにした女の素顔がそこにはある。

「ええそうです、確かにあの人がシバの王国の所有物なんて口が裂けても言えないことでしょうとも。でも、それ以外にどのような手があるというのですか!? 今の私はもう、これに縋るしかないというのに……！」

「それがよくないと言っているんだ。今の君はもう、彼を愛しているなんて言えないのだろうか？ ああいや、言葉で言うのは簡単かもしれないがね。だけどそこには心がない。所有物なんて傲岸に言い切れるだけの熱情がない。実がない言葉で吼える程度じゃあ、やらない方がずっとマシというものさ」

一種の諦観と呼称して良いのだろうか。万能の天才に不可能は無いとばかりに八面六臂の活躍を続けてきた者による不可能の宣言に、マーキダがたじろいだ。

実際カレの言葉は真実だ。今のマーキダはもう、愛がない。どれだけ愛している、慕っていると口が告げようとも、そこに心が伴われないのだ。故にこそ、いつそ傲慢ともとれるだけの想いを抱くこともま

たできない。ともすればそれはどこまでも残酷で、救いようなない事実と言えた。

「だから私から君に伝えるべき言葉はただ一つ。止めておきたまえ。君は希望を夢見て、そして絶望する。例え聖杯に祈ったところで、おそらくその心は元には戻らない。いいや、出来るとしてもこの私がさせない。ただ一人でも願いを叶えてしまったなんて前提は、決して作ってはいけないのだから」

一つ願いを叶えれば二つ目の願いが、二つ願いを叶えれば次は四つ、八つ、増えて増えて増え続ける。人の欲望に際限などない。例えば今日の祝勝会で使った聖杯を日常的に用いてしまえば、必ずや誰かの心に魔が差す。今日はまだ、誰一人として欲望に振り回されなかった。だけど明日は？ 一週間後は？ 自身の願いを叶える奇跡の前に耐え忍ぶことなど、例え英霊であつても不可能なのだ。

この事実を理解できないマーキダではない。だけど、おとなしく聞き分けることが出来る彼女でもまたなかった。

「それでも、私は……諦められません。失ったからなんだというのですか？ 心に際限なんてない、一度消えたつて種火さえあれば無限に蘇り炎を灯すものなのです」

「理想論だ。気合と根性だけですべてがまかり通つてしまうなら、とうにこの世界は終わつているとも。頼むから、これ以上は踏み込まないべきだ。きつと後悔する羽目になる」

「なら逆に訊きますけど——貴方は、彼に会いたくないのですか？」

「……！ それ、は……」

理路整然と言葉を弄してきた天才が、初めて心の綻びを覗かせた。マーキダの問いに咄嗟に応えることが出来ず、ほんの一瞬だけ動揺を露わにしてしまう。

そうだ、本当はカレもまた再会を望んでいるのだ。けれどカレはリアリストでもあるから、余計な希望には継らない。ある意味ではロマニ・アーキマンという男ととても近い性質であり、それ故に夢を抱いて進むマーキダとはどこまでも相容れることは無いはずなのだ。

だけど、幸か不幸か両者は同じ夢を願つてしまった。だからこそ見

えた地金はカレもまた同じ、共に歩んだ仲間の再会を信じたいのである。

「愛を失った今の私はもう空っぽかもしれませんが、それならそれで構いません。だって、どうなるうとも私は同じ人だけを好きになれると信じているから。たかが一度の失恋程度で、私は諦めない。諦めたくなんて、ない」

一度は迷った、もう自分は駄目だろうと確信までしてしまった。けれど、それは違うのだと気が付けたのだ。例えこの試みが失敗しようとも、上手く成功しようとも、もう一度恋して愛せばよいだけの話なのだから。愛を失っていようとも、彼とならそれが出来るとマーキダは信じている。

それはなんて夢と浪漫に溢れた、ちっぽけで頼りない理想なのだろうか。心という不確かな情動を信じ、愛という儂くも力強い情熱に全てを捧げるその姿は例えようもなく愚かに思えて――

「……そうか、そうなのか。はあ、全く君は頑固で強いね。認めよう、私もロマニと再会したい。私の心を狂おしくさせるこの感情の昂ぶりをどうにかしてしまいたいんだ。だからもう、君を止めようとは言わない。好きなようにするといい」

どこか眩しく感じられる姿でもあったのだ。

ついにレオナルド・ダ・ヴィンチは折れた。諦観交じりの苦笑を浮かべて、されどもどこか晴れやかな表情を見せている。

「ああ、でも一つ言っておきたいことがあるんだ。君の持っている聖杯は大昔に私が改造しちやつたからね。本当に魔力炉程度にしか期待できないよ。これだけはくれぐれも忘れないように」

「承知していますよそれくらい。じゃあ、後は私に任せてくださいな」
微かな笑みと共に管制室を去っていくマーキダを、今度こそカレは見送った。

願わくば、奇跡を見せてほしいと。万能の天才でも届かない最後の一手を指してくれと、心から祈りながら。

◇

再び戻ってきたその部屋の空いた空間と向き合うようにマーキダ

は立っていた。手元には既に『智慧と王冠の大禁書』が携えられていて、その出番を待ちかねているかのように魔力を迸らせている。

そしていよいよ目的を果たそうと宝具を開いて、彼女は自身の身体が震えていることに気が付いた。あれだけの啖呵を切ったというのに、やはり内心ではどうしても失敗を恐れてしまっている。

「……いまさら何を考えているのやら。さあ、最後の戦いを始めましょう」

小さく自嘲の笑みを浮かべて、躊躇いなく『智慧と王冠の大禁書』に魔力を注ぎ込んだ。

その途端やって来るのは膨大な情報量。シバの王国全てを記したただ一つの歴史書は、吹き荒ぶ暴風のようにマーキダの頭の中に流れ込んで離さない。

かつて乗った銀の舟があった。太陽を祀った神殿があった。月を招く神殿があった。他にも他にも、いくらでも見渡せるシバの王国に関する情報を渡り歩いて――

「……ない」

求める男の姿は全く見つからない。皆の協力を得て、あれだけ事細かに記したはずの男だけは影も形も見当たらない。それはすなわち彼女の宝具の管轄外、召喚など出来る余地は無いと明白に告げられた。

「いいえ、それでも……!」

零れた言葉は足掻きを続ける者のそれだ。こんなところで終われない。心はそう叫び続けている。

無理は最初から承知だった。そのうえでやると決めたのだ。なればこそ、たかが熱が消えた程度で止まるわけにはいかない。いくら消えてしまおうとも、何度でも恋して愛せればすむ話だ。そう易々と芯の種火は掻き消えないのだから。

だってそれこそ、

「私の愛を見くびるな……! 貴方は私のモノですよ、ロマニ・アーキマン!」

彼女の奉じる愛の形に他ならないのだから。

真つすぐで大胆な告白に呼応するかのよう
に、『智慧と王冠の大禁書』は大きく頁をはためかせた。室内はまるで小
さな嵐でも起こっているかのように暴風が渦巻いている。

その最中で、ついにマーキダは捉えた。宝具からやって来る情報の中
に求める男の形を垣間見た。ならばもう、一心不乱にその影を手繰り
寄せるのみ。聖杯からのバックアップまで総動員して、吹き飛ばされ
れそうなくらい小さな縁を逃がさない。

そして——光が弾けた。

咄嗟に目を閉じたマーキダであるが、それでも強烈な光は目を灼い
てしまう。

召喚は成功したのか、それとも失敗したのか。それすら判別できな
い白い闇の中を一步進んで……誰かの手に、支えられた。

「あ……」

——その手の感触を覚えている。心が忘れようとも、触れ合った時
間は無かったことにはならない。

「えーつと、これはどういう状況なんだい？ おつかしいなあ、あれだ
けカツコつけて出てったのに出戻りなんて恥ずかしすぎるんだけど
……」

——その声の響きを覚えている。愛が枯れようとも、語り合った時
間は大切な宝物なのだから。

「ねえ、貴方は私のことが分かりますか……？」

目を開く。開かれた視界に映るのは見慣れた白衣と、どこか情けな
い笑みを浮かべた男の姿だ。

彼は驚いたようにマーキダを見つめて、それから当然のように言葉
を紡いだ。

「それはもちろん、君みたいな困った恋人を忘れるわけにはいかない
だろう マーキダ」

「……っ！ ドクターー！」

「わ、ちよっと！ いきなり抱きしめないでよ苦しいって！」

かくしてここに、ロマニ・アーキマンという男は再誕を果たしたの
であった。

感極まって腕を回してくるマーキダに目を白黒させているロマンは、ひとまず彼女の特徴的な亜麻色の髪を撫でて落ち着かせる。すると彼女は猫のように喉を鳴らして喜んで、胸板に頬を擦り付けてくるのだからどうしようもない。

そうしてしばらく経過した頃によく彼女は冷静さを取り戻して、名残惜しそうにしながらも抱擁を解いてくれたのだった。

「夢じゃ、ないんですね……」

「それはどっちかっていうとボクの方が言いたい台詞だけど……でもそっか、つまり君のおかげでボクはまたここに立っていられるということなんだね、ありがとう」

まだまだ事情は呑み込めないけど、それでも目の前の彼女がこの状況を作り上げてくれたということは理解できた。だから感謝の言葉を告げれば、何故だかマーキダの表情は曇ってしまった。

「どうしたんだい？ 訊きたいことは山ほどあるんだけど……何かあったかな？」

「……！ それは、その……」

途端に口ごもるマーキダ。しばしのあいだ目を泳がせて、どう繕うべきか考える。

「だけど良い言い訳など思いつくはずもなく、断罪を待つかのように俯いてから小さく口を開いた。

「もし私が、貴方への愛を失ったと言ったら、どうしますか……？」

「失ったってつまり、ボクに愛想を尽かしたってことかい？」

「そんなわけありません！ ただ、その、詳しい事情はおいおい説明しますけど、戦いの後遺症で愛情をすっぱり失ってしまいました……」

心底申し訳なきように話している態度を見るに、彼女の言葉は本当だとロマンは理解した。

けれど、それがなんだというのか。どうしてその程度のことを負い目のごとく感じているのか。それだけが疑問であった。

「今の私にはもう、これまで持っていたはずの貴方への愛がありません。今はただかつての情動に沿って動いているだけの、愛の残骸です。それでも貴方は、私を愛してくれますか？」

故に、答えなど論じる前から分かっていた。

「何を言うかと思えば、そんなの決まってるだろう?」

思い出すのは、イスラエル王国で初めて出会った時のこと。愛について質問を放ってきた彼女は、愛を教えるとソロモン王に告げた。“貴方に心を教えましょう”と、夜明けの下で約束を交わしたのだ。

あの時の自分はただ教えてもらおう立場だった。だけど今の自分ならば、絶対に出来ると思っているから。

「君はボクに心を教えてくれたんだ。なら、今度はボクが返す番だね。どれだけの時間がかかろうとも、必ず君に愛を教えると約束する。それこそ、三千年かかったってね」

最後はやや冗談らしく付け足した言葉であったが、それでもその不器用な告白に込められた想いは本物である。発言した自分が恥ずかしくなるような台詞を受けたマーキダは、すすり泣きながら俯いていた顔を上げた。赤い双眸には、煌く宝石のように大粒の涙が浮かんでいる。

「貴方に恋して、本当に良かった……!　今の私はきつと、世界中の誰よりも幸せです……!」

「ボクの方こそ、あの日やって来た女王が君で良かった。心からそう思うよ」

感謝の言葉は涙と共に。泣き笑うマーキダはちよつとだけ背伸びして、唇をそつと重ねた。柔らかい感触が残って、すぐに離れる。

向き直った彼女はもう泣いてはいなかった。代わりに涙の跡が残る、輝くような笑顔がそこにはあったのだから。

「それじゃあドクター、早速ですが皆さんのところに行きましょう!　きつと驚きますよ、あのダ・ヴィンチちゃんが寂しがってるんですから!」

「え、いや、まだ心の準備が……というかあれからどれくらい経ったの!?!　あのレオナルドが寂しがってるなんて想像もつかないんだけど!?!　あとここっつてもしかしてボクの部屋かい!?!　すっごい滅茶苦茶になっつてない!?!」

早速混乱しだしたロマンを他所に、マーキダはグイグイと手を引い

て引つ張っていく。そんなことは後にすれば良いと言わんばかりの態度だ。

そう、これからは時間なんていくらでもあるのだ。足りなかった時間を埋めあい、喜びも悲しみも分かち合うことだって好きなだけ出来るのだから。

「本当はもつともつと独り占めしていたいんですけど、やっぱりこの喜びは皆で分かち合うべきでしょうからね。でも、その代わりにこれだけは、先に言わせてもらう我が儘を許してください」

燃え上がる心を知らぬときがあつた。恋に悩んだこともあつた。破滅したこともあつた。お互いに言うべきことを言えず、すれ違ひのまま永遠の別離となつてしまう可能性だつていくらでもあり得たけれど。

あらゆる道程を乗り越えて、ここに二人は二度目の再会を果たせた。それはきつと、ちつぽけな偶然の連続だつただろう。そうしたあらゆる偶然が積み重なつて、今という必然を成したのだ。

なればこそそうした運命に万感の想いを馳せて、マーキダは喜びを噛み締める。言いたいことは山ほどあれど、この場において相応しいのはこれだけだと決まっているから。

「おかえりなさい、私の大好きなドクター！」

「——ああ、ただいま！」

〈 F i n . 〉

後日談

番外編 あの日の続き

ソロモン王の消失と共に消えたはずのロマニ・アーキマン。そんな彼がシバの女王に手を引かれ、どこまでも気まずそうな面持ちで祝勝会に沸き立つ食堂へ現れた時は、職員たちどころか英霊達すら度肝を抜かれたものだ。

「ど、ドクター!? なぜここに……!?」

「馬鹿な、死んだはずじゃなかったのか……!?」

「いや、あれは全てトリックだった……?」

「ビーストすら巻き込んだトリックとか前代未聞すぎませんか……?」

酒の勢いもあつたのだろう。口々にふざけたような言葉を口にする職員たちに、さしものロマンも苦笑いを隠せなかった。あれだけ大見栄を切って特攻をしかけたというのに、その日のうちにしれっとカルデアに戻ってきてしまったのだ。これはきつと、気の詰まる毎日でネタと冗談に飢えていた職員たちのカモにされると予想していた。

「ただどそれは、結局考えすぎでもあつたわけで。」

「色々と言つてやりたいことはあるけど、まずはこれを言わなきゃ始まらない。そうだろう?」

「ええ、そうですね。理屈も理由も知らないけど、ドクターは帰つてきたんだ。なら言うべきことはこれしかないでしょ」

ダ・ヴィンチちゃんの一声を聞いた立香が頷いた。既に夜も遅く、そろそろお暇しようとしたところであつたのだが、こうなつてはそれどころではない。もっとやるべきことが出来たからだ。

そんな立香の言葉に絆されるように、ふざけていた職員たちも一斉に神妙な顔つきとなつた。互いに顔を見合わせ頷いてから、ロマンの方へと向き直る。

場の空気が妙に張り詰めた。それを受けて立香がやや緊張した面持ちで、だけど声音には隠し切れない喜びを滲ませながら音頭を取つ

た。

「えーと、それでは、ドクターに向けてまずは一言——カルデアに戻ってきてくれてありがとう！ お帰り！」

『お帰り、ロマーニ・アーキマン！』

「みんな……！」

掛けられた祝いの言葉に、ロマンは言葉を失ってしまう。陳腐な言葉ではあるかもしれない。けどだからこそ想いはこれ以上なく伝わってきて、誰もが自分を歓迎しているのだと分かってしまう。

それがどうにも気恥ずかしくて、けども嬉しくて、彼は誤魔化すようにダ・ヴィンチちゃんを見た。カレは、ただ頷いた。それから、ロマンをこの場に呼び戻した立役者でもあるマーキダを見た。彼女は、泣き笑いながら微笑んでくれていた。

そこまでが、彼の限界であったのだ。

「……ありがとう……！」

自分の紡いだ感謝は、ちゃんと言葉として成立していただろうか。そればかりが心配だった。だって、彼もまた零れ出る涙を抑える事なんて出来そうもなかったのだから。

◇

そんな感動的な再会から二日ほど。

既にDr. ロマーニはカルデア指令代理として、馬車馬のごとく働かされていたのである。

「いくら何でもこの扱いは酷すぎないかい……!? これじゃ人理修復をしていた頃と何一つ変わらないじゃないか！」

山積みになされた電子書類のファイル群を前に、ロマンはついに吼えた。そこには先日の感動的な再会の余韻など欠片も感じられない。ただただ仕事に行き詰った青年の末路がそこにはあった。

だってそうだろう。せつかく人理修復も終わって一息つけるかと思いきや、むしろ仕事が山積みになれたのである。やっとの想いで二〇一七年を取り返したというのに、これじゃ近い内に過労死するのではないかと思わんばかりだ。

「まあまあドクター。そうも怒ってはいけませんよ？ これも貴方の

仕事内容が信用されているからこそです。むしろ誇りに思いましようよ」

「とは言ってもねえ……」

穏やかな調子でロマンを窘めたのは、ちようど彼の私室に入ってきたマーキダであった。手にはお茶とお茶請けの乗ったお盆がある。どうやら、差し入れを持ってきてくれたらしい。女性からのこのような細やかな気遣いは、いわゆる『リア充』になれた者の特権だろう。こんな自分には絶対に縁がないと思っていたのに、いつの間にかあの“シバの女王”をゲットしていたのだから恐れ多い話である。

机の上に載せられたお茶をありがたく啜っている内に、マーキダは後ろのベッドに腰かけていた。文句を言いつつもしっかりと働いてしまうロマンが、ちゃんと休憩を取っているのか見張っているのだろう。それがなんとも嬉しくて、つい彼は愚痴をこぼしてしまう。

「魔術協会からは空白の一年間についての資料提出を命じられたし、カルデアとしても必要な報告書をしたためなきゃいけない。他にも各地に点在するカルデア所有の施設へ事情を説明して、これからの金銭勘定もしたりしないとだし課題は山積みだよ……ほんと、ボクのと殺す気なんじゃないかな？ いや、これじゃいつそ殺してくれっくらいいさ」

「……ドークター？」

「いや、ははは、冗談だよ。君がこの世界に残ってる限りは、死んでも死にきれないからね」

——文字通り色んな意味で。不満そうに口を尖らせたマーキダを前にして、口には出さずそう付け足した。

あの祝勝会の後の話である。ロマンは早速ダ・ヴィンチちゃんに連れ出されて、諸々の検査を受ける羽目になってしまった。もちろん彼を“召喚”した本人であるマーキダも一緒にだ。

それで判明したのは、今やロマンとマーキダは運命共同体という事である。もっと正確に言えば、マーキダからロマンに一方通行ではあるのだが。

この理由というのも、確かに座からすら消滅したはずのロマン——

正確にはソロモンだが——がこの世に存在しているのは、マーキダの所有する『智慧と王冠の大禁書』によるものだからだ。本来ならばシバの国に由来するものを召喚するはずのこの宝具を、彼女は聖杯の欠片によるバックアップと、何より“彼は自分のモノである”という強い心を注ぎ込むことで無理を押し通したのだ。

そういう訳だから、今のロマンはマーキダの召喚術によって呼び出された存在という扱いになる。それでも肉体自体は人間と変わりないから、三大欲求は存在するわ疲労もするわで利点など全くない。贅沢にもちよつと損した気分になってしまうのは、人間としての適応力がなせる技だろうか。

ともあれ、ロマンの存在がマーキダに依存する以上は死んだところで再び呼び戻されるのがオチである。逆にマーキダがこの世から消失してしまえば連鎖的にロマンも消え去ることになるだろうが、そのような事態はそうそう起きる事ではないだろう。なにせ彼女は魔術王と同じ時代の人間、現代の魔術師が敵う道理など何一つないのだから。

「それにほら、約束だってあるからね」

マーキダには聞こえないように呟いて、自分の意志を再確認した。こちらに戻ってこれてからすぐに、彼は誓ったのだ。今度は、自分が彼女に愛を教えてみせると。

こうして献身的に支えてくれるマーキダではあるが、実はそこに愛情はないのだ。いや、これだけだと冷めた関係に聞こえるかもしれないが、それは違うのだ。互いに真実相手を慮っているはずなのに、マーキダの方は心がそうと認識してくれていないのだから。

その理由は非常に単純で、『呪魔の剣』改め『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』の副作用によるものだ。使用者に莫大な力を与えるこの宝具は、その代償に人の感情を喰らってしまう。しかも喰らう感情が強ければ強いほど、もたらす効力は強くなるという悪辣さだ。まさしく不滅の呪い、あらゆる感情を幻想にってしまう宝具といえよう。

こんな代物をマーキダは最後の最後に使用したのだ。冠位時間神

殿ソロモンで、冠位のサーヴァントで初めて対抗できるような獣を相手取る為に力を欲した。その果てに彼女は恋心を吸わせてしまい、結果として燃え盛る愛情がすっかり枯れ果ててしまったのである。もとより此度の事件はソロモンが原因なのだから、いっそう負い目が出るばかりだ。

だからこそ、今度は自分の番だと思ったのだ。かつては自らが心を教えると言われ、彼女はあらゆる手を尽くした。例え徒労に終わろうとそれで構わないと、確かに笑いかけてくれたのだ。

ならば、自分もまたそれを見習うまで。どれだけの時間をかけようと、彼女がその大切な恋を取り戻すまで付き合おうではないか。惚れた弱みだ、異論はないとも。

ただ、しいて不満というか、腑に落ちないことがあると言うのなら

「ね、ドクター？」

「おや、どうしたんだい？」

「いいえ、ふふつ、ただ呼んでみたかっただけです」

「そ、そうかい……？」

これである。頬を上気させて意味もなく名前を呼んでくる様は、「君本当に恋心失ったんだよね？」と聞きたくなってしまうが、実は構ってほしくて嘘を吐いているのではないかと、昨夜は割と本気で悩んだものである。

まあそれも、たぶん彼女なりの努力ではあるのだろう。失ったものを取り戻すべく、少しでもかつての自分を再現しているに違いない。……ここまで露骨だったかといえ、間違いなく否だが。まだ人理修復が終わってから二日足らずというのに、もう彼女の籬が外れてきているのは気のせいではないだろう。

それ自体は嬉しく思う。形はどうあれ、一人の女性にこうまで強く思われて悪く想うはずもないのだから。

「これからのボクらはもっと忙しくなるだろう。魔術協会とのしげらみもそうだし、カルデアを運営していく上でこなさなきゃならないことだつて山積みだ。国連の相手や、立香君やマシユの今後だつて上手

い事取り計らわれないといけない。きつと君にとっては面白くない毎日の連続になるはずだ」

だからせめて謝罪させてくれ——そう続けようとしたロマンは、それ以上言葉にすることが出来なかった。

いつの間にか、すぐ近くにマーキダはいた。白魚のように細い人差し指が、ロマンの唇に押し当てられる。それはゆっくりと唇をなぞつてから、名残惜し気に離れていった。

「貴方の言いたいことは分かりますよ。だけど、私に不満なんて無いのですよ。いつか言ったことでしょうか？ 私は、こうしてお話しているだけで楽しいのです。貴方と共にいるだけで、とても嬉しいのです。例えば私がどのようなふうとも、この気持ちに嘘偽りなど有りません」

力強い言葉だった。勇気づけられる一言だった。そうだ、何も惚れた弱みを持っているのはロマンだけの話ではない。マーキダもまた、惚れていた弱みを持っているのだ。そして彼女は、仮初のはずの恋心を本物にしようとしている。

なんともはや、強い心だ。普通ならばその時点で折れていてもおかしくないのに。きっぱりと諦めたりせず、むしろいつまでだって喰らいついて見せるのは、彼女だけの我慢強さといえるだろう。

「なら今は、君の厚意に甘えさせてもらおうよ。ああは約束したけど、まだまだ時間はかかりそうだからね。本当に、元はといえばボクのせいなのに情けないばかりさ」

「そんなこと気にはしませんよ。だって貴方は三千年かけたって教えてくれると言ってくれたのですから。あんなことを言われて落ちない私じゃありません」

「そこ、そんなに自慢げに言う事なのかなあ……？」

「いいんですよーだ」

女王としての威厳をかなぐり捨てた調子には、どうにも苦笑してしまうばかりだ。けれどそれは決して品がない訳ではなく、むしろ可愛らしく映るのだから是非もない。

なのだが、マーキダは不意に黙り込んでから、「そうですね、ならば

……」と呟いた。

「もし貴方が私に負い目を感じてしまっているというなら、少しばかり問いを投げかけてもよろしいでしょうか。ええ、そんなに難しいものではないですから、そんな渋い顔をなさらないでください」

そんな顔をしていただろうか？ 反射的に顔をムニムニと触ってしまった、マーキダがコロコロと笑った。どうやら、ちよつと間抜けなロマンの様子が愉快であつたらしい。

コホン、一つ咳ばらいをすれば、マーキダは笑みを収めた。それからいつになく真面目な表情になると、三つの指を立てたのだ。

「三つです。これから私は、貴方に三つの質問をします。これに応えてくださればそれで結構です」

「……わかった、受けて立とうじやないか」

「そう堅苦しくならないでくださいな。大丈夫、貴方ならきつと答えは分かりますよ」

静謐な空気が場を満たす。張り詰めた糸のような緊張感は、かつても味わったことがある感触だ。

かくして、伝承に謳われるシバの女王の謎掛けがここに始まったのである。

「まず一つ目と参りましょう。地から湧くでも、天から降るでもない雨はなんでございませうか？」

「えーっと……そう、それは汗だったはず。どんな生物でも、自分の代謝を司る汗は大切だからね。よし、次の問いだ」

「それでは二つ目、彼はあらゆる全てを破壊します。人も、心も、土地も、建物も、星々すら喰らう魔性の存在。しかし彼は見えず、万物は彼に囚われ、また彼を追い越せない」

「それは時間だね。七つの特異点を巡る中で学んだ通り、時間とは有限で平等なものだ。これを上手く扱えてこそ、成功を手にすることができるのだらうね」

「お見事でございませう」

このやり取りも、どこか懐かしい。思えば、ソロモン王とシバの女王の知恵比べを夢見たのは人理修復の始まったあの日だった。なん

とも不思議な因果だ、まるで定められた運命のよう。

そして、彼女が意図的にかつての謎掛けをなぞらえているのも理解している。ここまでは前座だ、幸いにして答えは覚えていたが、これらはまったく重要などではない。

肝心なのは、最後の問いなのだから。

「では、これが最後の問いです。ロマニ・アーキマン、貴方の思う愛とは何でしょうか？」

そうだろう。最後はこの問いだと分かっていた。かつての自分はこの問いに答えることが出来ず、マーキダの機転で答えずにすんだのだ。であれば、今こそあの過去を清算するとき。人間となって学んだ答えを、彼女に披露する時なのだ。

「答えよう。愛とは、あらゆる想いの積み重ねである。生と死を繰り返す人間たちは、その刹那に様々な感情を育ませ、想いを交わし合う。その中で最も美しいのが愛情だ。複雑な情念が重なり、絡み合い、一つの大きな物語を生み出す。きつとそれこそ、愛と呼べるものだろう」

緊張しつつも、自身の探し出した答えを提示した。これこそは人間として多くの感情を学び、成長した一人の男の総決算に他ならないのだ。

「——素晴らしい答えです。感服いたしましたよ、ロマニ・アーキマン」

果たして、シバの女王はこの答えを気に入ってくれたらしい。

その嬉しそうな笑みを見て、ホツと胸を撫でおろす。今度こそ、自分彼女の問いに答えきることが出来たのだ。それが思っていた以上に喜ばしくて、自然とロマンの表情も緩んでしまう。

「かつて、ソロモン王が答えに詰まってしまった時、実を言えば内心でがっかりしてしまったものです。音にきく賢者といえども、このような曖昧なものには答えを用意できないのかと。仕方のない事だとは思いますが、けれどどうしようもなく残念だったのも確かなのです」

ここにきて明かされた衝撃の真実に、開いた口が塞がらないロマンである。

ですが、とロマンの様子を見て困ったようにはに cand 彼女は続けた。

「今の貴方はこの曖昧な謎掛けに見事に答えを用意してみせました。それは私にとつて何よりも満たされる答えであり、また貴方がかつての自分を乗り越えた証明ともいえるものです。私が惚れている男は誰よりも素晴らしいと知れて、胸がすくような想いです」

「そ、そんなに褒められると逆に照れ臭いな……いやあ、うん、ボクは適度に貶されている方が性に合うね！」

「……ドクター、それはちよつとどうかと思います。私、そういう性癖はありませんので」

「いや、ちよつと待つてー！ 今のは冗談、冗談だからね！」

真面目に白い眼を向け始めてきたので、慌てて否定する。そんな様子を見て、マーキダは笑った。今この瞬間が楽しくて楽しくて仕方がないとばかりに、心の底から笑ったのだ。

そんな様子につられて、焦っていたはずのロマンさえ笑い声が零れてしまう。それは不思議なもので、さつきまでの静謐な空気すらも押し流して、いつも通りの明るい空気に戻してくれる。そうだ、これこそいつもの自分たちなのだと実感させてくれるのだ。

ひとしきり笑い終えてから、その残滓が顔に残ったままにパソコンへと向き直った。まだまだ、やるべき事など山積みだ。今の間にも、三つほど仕事が増えている有様である。

「よーし、それじゃあ仕事を頑張ろうか！ もしボクが寝落ちしてたら叩き起こしてくれると助かるかな！」

「ええ、考えておきますよ。きつい一撃をお見舞いしてあげましょう」
こりやあオチオチ寝てもいられないな、なんてことを考えながら、ロマンは仕事へと戻って行ったのである。

——でも、こうも思うのだ。もし寝落ちして目が覚めたら、きつと彼女は膝枕でもしているのではないかと。根拠はないがたぶんそうになると、不思議な確信が持てたのだった。

マテリアル

【真名】“シバの女王”マーキダ

【クラス】キャスター

【身長／体重】164センチ／体重52キロ

【出典】旧約聖書（列王記）、新約聖書

【地域】エチオピア／イエメン

【スリーサイズ】B86（E）／W62／H85

【属性】秩序／善

【カテゴリ】人

【性別】女性

【イメージカラー】桃色混じりの赤

【特技】夢見がちな思考、家事全般

【好きな物】愛情、浪漫、賢い人

【嫌いな物】無関心、現実主義、怠惰な人

【天敵】ダ・ヴィンチちゃん

【ステータス】

【筋力】D【耐久】E【敏捷】A―【魔力】A＋【幸運】B【宝具】E

X

【クラススキル】

高速詠唱：C

たまに噛むのでこのランクに。

道具作成：B

陣地作成：B＋

【保有スキル】

魔力放出：C

魔力による身体能力の向上。良くも悪くもランクはさほど高くない為、地味な代わりに魔力消費も比較的控えめ。近接戦闘をよく行う彼女にとっては要となるスキルであり、応用性も非常に高い。

黄金律（富&体）：B

伝承に謳われる絶世の美女であり、特に足が美しいらしい。またイ

スラエル王国への莫大な贈り物に代表されるその財力は目を見張るものがある。

ただし、この伝承は実は正確ではない。本当は彼女の足は傷だらけで、それを見られることを避ける為に過剰なまでに足を隠していたのだ。それがいつの間にかシバの女王の曖昧な伝承と絡み合い、美脚を持つなどという話にまで膨らんでしまったのである。

もしも彼女が自らこの真実を打ち明けることがあるならば、それはシバの女王からの最大限の信頼の証と取って間違いないだろう。

呪術：A+

中東くアフリカ圏に伝わる古い呪術を用いる。直接的な攻撃手段から相手の妨害まで幅広いが、血を媒介に用いるのでやや血腥いのが難点。ほとんどの場合指を切ることで血を調達するので、彼女の指はいつも傷だらけである。

幻想女王：EX

幻想王国シバの真なる支配者としてのスキル。“シバの女王が確認されるからシバ王国は存在した”という理屈に則った領土展開。マーキダを中心とした極小範囲（およそ半径二メートル程度）がシバ王国として彼女の領域となる。この陣地内ではマーキダを対象に少量の戦闘ボーナスが発生する（その影響で筋力がDランクに、敏捷がAーランクとなっている）。

時間をかけて地脈の確保や大魔術を行使すればさらに広範囲を覆い尽くす事もできるらしい。これが宝具と連動し、最大の切り札を扱う布石となる。

【宝具】

『無銘：呪魔の剣』

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

由来：竜退治の際に手に入れた黒の剣。元は英雄王の蔵から流れた物とされる。

詳細：マーキダが扱う黒の長剣。随所に魔力を通しやすくする為の文言が刻まれており、装飾に黄金や宝石が使われているので華美な印象を与える。実はマーキダはこれの真名を知らないため、真名解放が出来ずランクも落ちている。そのため正確には宝具ではなく、武器扱いされている。代わりに魔術礼装として地味ながら優秀であり、魔術と呪術の行使の際にボーナス判定を得る。

『幻想を此処に、其は不滅の呪いなり』

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

由来：『無銘：呪魔の剣』を真名解放した際のもの。

詳細：本来ならば、シバの女王はこの剣の由来を知る由など無く、そもそも本当に真名があるか否かすら不確かなものである。だが何の因果かただ一人この剣の真名を知り得る者がいたおかげで、彼女はついにその真の効力を知ったのだ。

その効果は各種能力のブースト。発動すれば絶大な恩恵を与え、遙か格上にすら食らいつけるほど。しかし代償もまた大きく、使用者の心に対価として食い尽くす。故にこそ不滅の呪いであり、感情という不確かなものを幻想へと追いやる魔剣となるのだ。

『求めよ、さらば与えられん』

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1～5

最大捕捉：1人

由来：シバの女王の有名な逸話、魔術王を試す謎掛けが宝具となったもの。

詳細：心理型時限爆弾とも称される。一人につき一問ずつ謎掛けを出し、解かせることに気を逸らせる。謎掛けを出されてから時間が経てば経つほど相手はその答えに気を取られ、果ては戦闘中の僅かな隙にすら考えてしまう。地味だが、けれど無視できない致命的なミ

スを誘発する宝具。

しかしその真の効果は謎を解かれてこそ発揮する。謎解きを讃え互いに贈り物を送り合った逸話の宝具的再現。自身と、謎を解いた相手のスキルをマーキダが一つずつ指定し、互いに付与する。この効果は最大で3日持続し、その間は付与されたスキルを互いにいくらでも十全に活用できる。使い方次第では味方の強化も可能。

その性質上、賢者と呼ばれる相手には後者の効果が効きやすい。反面理性の無い相手には一切の効果を発揮しない。

“イーナ・アメカーヤ”とはヘブライ語であり、おおよそ『祝福を授ける』といった意味になる。

『智慧と王冠の大禁書』

ランク：EX

種別：記録／証明宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1～1000人

由来：シバの女王が自ら編纂した王国の歴史書。魔術礼装としての一面も秘めている。

詳細：記録型魔道書。移動する幻想王国への扉。この世ならざる国を証明する唯一の書。裏側より映された王国の影。呼び名は数多くあるが、その機能はシンプルに言えば『魔力炉心及び記録再生宝具』である。

だがその真の効果は伝承に無い国とされるシバ王国の再現、姿形が不明な幻想の国を示す唯一の証拠としての宝具である。まずスキル『幻想女王』によって仮初のシバの領土を展開し、それをもってシバの王国の存在を証明、そして記録された王国の所有物を召喚する。

理論上は宝具として様々な効果を持った建築物や武具を召喚出来るのだが、その代償に非常に魔力消費が激しく、建築物の召喚に至っては聖剣二発分に匹敵するという莫大な消費量になる。

他にいくら武具を破壊されても本物と呼び出すわけではないので何度でも再召喚することができ、後から歴史書を書き足せば雀の涙程度に強化することも可能らしい。

本編最後ではこの宝具を応用することで、本来ならば消え去ったはずの人物との再会を果たしている。

『幻想太陽神殿』
マハラム・ベルキス

ランク：A+

種別：対軍宝具

レンジ：『幻想女王』範囲内

最大補足：700人

由来：シバの女王の聖域とも呼ばれる太陽の神殿。防衛用要塞神殿ともされる『幻想月天神殿』アルシユ・ベルキスの対となっているらしい。

詳細：本来ならばただの神殿だったものが、いつの間にか対外敵用の砲台設備となっていた。砲台はかつて竜の財宝から得た魔力砲を参照にして独自に改造しているらしい。その威力は凄まじく、聖剣並みの一点突破の火力でなければまず拮抗する事は不可能。ただし魔力消費もそれに見合っつて非常に大きく、この建物を召喚する労力も含めれば実用性はかなり下がる事となる。また、『幻想女王』範囲内の敵ならばどこに居ようと狙えるが、一步でも領土の外にいる相手には当たらないという致命的な弱点が存在する。

なお、労力とは別に本人はこの神殿をあまり使いたがらない。(別説の名とはいえ)自身の名を冠した宝具など、恥ずかしくて仕方がないからだ。

『銀の舟』

詳細：竜のねぐらより見つけた飛行舟であり、インドに伝わるヴィマーナの型落ち品でもある。こちらは召喚してからおよそ一日程度なら維持することができ、型落ちとはいえど驚異的な速度と合わせればかなりの移動範囲を誇る。更に攻撃機能も幾つかついているらしく、小回りの利く便利な舟。

【人物】

伝承に語られるシバの女王。幻想ともされる王国の主であることから、幻想女王と呼ばれることも。元は親も知らぬ捨て子であったのだが、やがて心ある村人に拾われ、村を襲う竜を退治し、それを切っ掛けにわずか数年足らずでシバの国を富めさせたという伝説の女王

である。

真面目で丁寧、聡明な女王ではあるのだが、惚れた相手にはとことん弱い。女王らしい高圧的な振る舞いはほとんど見せないこともあって、普段の彼女は恋する乙女もかくやといった有様。あるいは幻想女王の名の通り、ちよつと夢見がちな部分も。

最も有名な逸話はソロモン王を試すべく自らイスラエル王国へと赴き、かの王へと謎掛けを行ったこと。ここで彼女はソロモン王にはとんど一目惚れに近い感情を抱き、また彼にとっては唯一自身の内面を見破った者として、王国の滞在中に非常に親密な仲となる。最後には事情もあるが契りを交わしたことで、彼の子を宿すまでになるほど。

ただし、彼女には致命的な欠点があった。それは、自らの息子を愛せなかつたこと。もとより幼少期を人とは違う過ごし方をしたため、彼女は自身の心に懐疑的な一面も持っていた。結論から言えばそれはほとんど杞憂であつたのだが、何故か自らの息子を愛せなかつたという一点がシバの女王に影を落とすこととなってしまう。

——本当に自分は彼を愛していたのか。心を教えると言つたあの言葉は嘘だつたのか。恋に落ちて、恋に生きて、そして愛に感つた彼女は、悩み悩んだその果てに、最後には恋に暴走して自害を選ぶ事となつたのだ。

結果として女王の死を契機としてシバの国は歴史の表舞台より消え去り、その存在は口伝や書物に残るのみとなつてしまった。ただし、おそらくは唯一の“特別な存在”であつた者に先立たれたソロモン王の胸中は、どのような伝承にも語られることは無い。それを語るのほただ一人、王その人しかないのだから。

カルデアに召喚された際の彼女は、死したことで少々頭が冷えたのか死の直前のような狂おしい想いは抱いていない。だが一人の対象へと向けられる恋慕の大きさは何も変わっておらず、女王としての責務もない事から自らの恋心にどこまでも忠実な存在となっている。

【人間関係】

・ソロモン／ロマニ・アーキマン

ある意味では全ての元凶であり、どこまで行ってもぞつこんな相手。実はカルデアに召喚された理由も、ロマンがおふぎけで供えた饅頭による縁召喚だったりする。か細すぎる縁だが、それで召喚されてしまうくらい好きで好きでたまらないようだ。最初から最後までデレデレだった。

実は今の彼は宝具によって召喚されている存在であるため、マーキダと一定以上の距離は空けられないという制約がある。ただ、大抵は一緒にいるのでほとんどデメリットにはなっていないのが実情。本人たちもまったく気にしていない。

・ダビデ

王の中の王と尊敬しているが、一方で屑の中の屑と考えていたりもする。でもやっぱり偉大なるダビデ王だから、なんだかんだ邪険に扱うことは無い。目下の彼女の悩みは、いつか彼のことも『お義父さん』と呼ぶ必要があるかどうか。できれば遠慮したい。

・ダヴィンチちゃん

肉体的には元男にして、ある意味ではマーキダにとって最大のライバル。ロマンとカレが親し気に話しているのをみると無性に不安になる。それくらい強い信頼関係があることを認めているのだが、そのせいで好きな人を取られないか心配らしい。ある意味でダークホース。

・ゲイティア

非常に強い憎悪を向けられている。だって彼女は、ただ一人ソロモンを変えられたかもしれない人間だったのに。人の悲劇をみて何もしない愚王が、ついに戒められると思っていたのに。結果としてもたらされたのは虚無であり、魔術王は何一つ変わることもなく死んでいった。

——許せるものか。勝手に希望を与えたくせに、我が儘にも奪い去っていく無知蒙昧。貴様だけは何があらうと許しはしない。逆恨み？ 知った事かよ。これこそ、我ら七十二柱の総意と知るがいい。